

太宰府・佐野地区遺跡群 21

| 京ノ尾遺跡第1～7次調査・畑中遺跡第1・2次調査

平成 18年

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群 21

京ノ尾遺跡第1～7次調査・畑中遺跡第1・2次調査

平成 18年

太宰府市教育委員会

序

昭和62年度から始まった佐野区画整理事業は終わりに近づき、佐野地区遺跡群として行われた発掘調査も終盤を迎えようとしております。この事業によって、ほとんどの遺跡は消滅しましたが、その発掘調査は古代大宰府の奥津城であった宮ノ本遺跡や官道が見つかった前田遺跡をはじめ、太宰府市の歴史はもちろん日本の歴史では欠かせない多くの発見を私たちにもたらしました。

今回の報告書は平成9年から16年にかけて、大佐野字京ノ尾・畑中で行われた発掘調査成果をまとめたものです。発掘調査では6世紀を中心とする古墳時代の集落が確認され、多くの竪穴住居が見つかりました。また、集落内を蛇行する流路からは、歴史教科書で見るとようなネズミ返しや鎌など多くの木製品が出土し、古墳時代の太宰府を知る上で重要な発見となりました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成18年3月
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

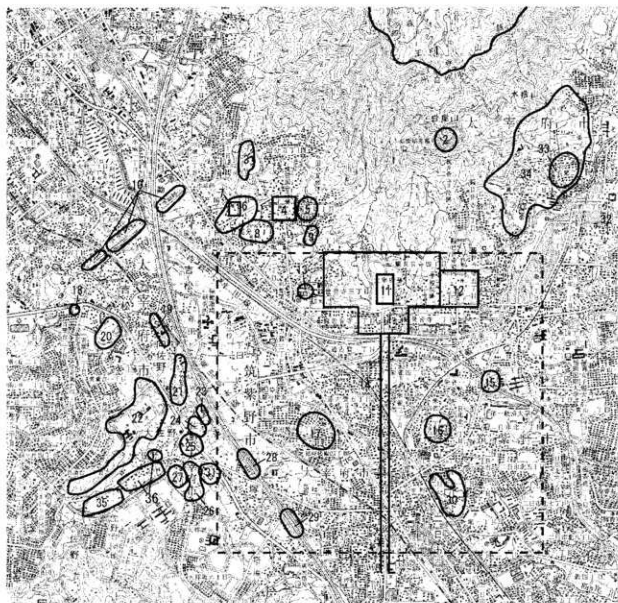
例言

- 1 本書は太宰府市大字大佐野で行われた京ノ尾遺跡、畑中遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺構の実測には、国土調査法第I座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りGN（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
- 3 遺構の実測及び写真撮影は各担当者および坂本雄介、森若知子が行い、第4次調査の一部を株 埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 4 全体図作成にあたっては、航空測量による図化を行い、京ノ尾遺跡第1・2次調査を株 東亜建設技術、第3・4次調査を株 写測エンジニアリング、第6次調査を株 アジア航測に委託した。
- 5 遺構の空中写真撮影は有 空中写真企画（代表増睦夫）が行った。
- 6 出土品の科学分析は財 元興寺文化財研究所、株 バリノ・サーヴェイ、財 地域地盤環境研究所に委託した。
- 7 出土した鉄製品の保存処理は下川可容子、安藝朋江、鈴木弘江が行った。
- 8 遺物の実測は各担当者のほか、柳智子、森若知子、森部順子、松本理栄子、久味木理恵、久家春美、大隈郁美が行い、第3次調査分を株 埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 9 遺物の写真撮影は有 文化財写真工房（代表岡紀久夫）が行った。
- 10 図の浄書は各担当者および森若知子、松本理栄子が行った。
- 11 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須恵器・・・小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁器全集2 日本古代』1979
 - 舟山良一「須恵器の編年 九州」『古墳時代の研究 6』雄山閣 1991
 - 『宮ノ本遺跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第10集）1992
 - 陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV』（太宰府市の文化財第49集）2000
 - 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究NO 2』日本貿易陶磁研究会 1982
 - 土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第7集）1983
- 12 本書の執筆担当は目次のとおりである。
- 13 編集は、宮崎が担当した。

目次

I 遺跡の位置と歴史	・ 2
II 調査体制	・ 3
III 調査および整理方法	・ 5
IV 調査報告	
京ノ尾遺跡	
1 第1次調査	(宮崎亮一) ・ 9
(1) 調査に至る経過	・ 9
(2) 基本層位	・ 9
(3) 検出遺構	・ 10
(4) 出土遺物	・ 25
(5) 小結	・ 51
2 第2次調査	(宮崎亮一) ・ 62
(1) 調査に至る経過	・ 62
(2) 基本層位	・ 62
(3) 検出遺構	・ 62
(4) 出土遺物	・ 65
(5) 小結	・ 69
3 第3次調査	(中島恒次郎) ・ 72
(1) 調査に至る経過	・ 72
(2) 基本層位	・ 72
(3) 検出遺構	・ 72
(4) 出土遺物	83
(5) 小結	・ 114
4 第4次調査	(宮崎亮一) ・ 136
(1) 調査に至る経過	・ 136
(2) 基本層位	・ 136
(3) 検出遺構	・ 136
(4) 出土遺物	・ 157
(5) 小結	・ 205
5 第5次調査	(宮崎亮一) ・ 221
(1) 調査に至る経過	・ 221
(2) 基本層位	・ 221
(3) 検出遺構	・ 221
(4) 出土遺物	・ 221
(5) 小結	・ 223
6 第6次調査	(宮崎亮一) ・ 227
(1) 調査に至る経過	・ 227

(2) 基本層位	・ 227
(3) 検出遺構	・ 227
(4) 出土遺物	・ 229
(5) 小結	・ 247
7 第7次調査	(長直信) ・ 251
(1) 調査に至る経過	・ 251
(2) 基本層位	・ 251
(3) 検出遺構	251
(4) 出土遺物	・ 260
(5) 小結	・ 270
畑中遺跡	
1 第1次調査	(宮崎亮一) ・ 276
(1) 調査に至る経過	・ 276
(2) 基本層位	・ 276
(3) 検出遺構	・ 276
(4) 出土遺物	・ 276
(5) 小結	・ 287
2 第2次調査	(山村信榮) ・ 288
(1) 調査に至る経過	・ 288
(2) 基本層位	・ 288
(3) 検出遺構	・ 288
(4) 出土遺物	・ 291
(5) 小結	・ 294
V、自然科学分析	
1 京ノ尾遺跡第3次調査出土漆器の樹種鑑定	(元興寺文化財研究所) ・ 296
2 京ノ尾遺跡出土漆器の塗膜分析	(下川可容子) ・ 298
3 京ノ尾遺跡第7次調査出土白色物質の鑑定	(バリノ・サーヴェイ) ・ 302
VI まとめ	(宮崎亮一) ・ 306



- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|--------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 劍塚遺跡 |
| 2. 岩城城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠板遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯遺跡 |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀團印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. わくど城跡 |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府桑坊跡(破線内) | 23. 鎌川遺跡 | 32. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 浦城跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 原遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠團印出土地 | 18. 神ノ前塚跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 京ノ尾・畑中遺跡(報告地点) |

Fig 1 太宰府市およびその周辺遺跡位置図(130000)

I 遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に背振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がり、その二つの平野に挟まれた狭い平地を古代には官道が、現代では鉄道や高速道路が通り抜け、今も昔も交通の要衝となっている。

旧石器時代の遺物は、市内各所で散発的に出土し、市西部の大佐野地区脳道遺跡で約1500点の剥片がまとまって出土している。縄文時代の遺構は多くはないが、京ノ尾遺跡の西隣に位置するカヤノ遺跡では押型文土器が多く出土するなど低丘陵を中心に居住していた可能性を窺わせる。

弥生時代から古墳時代にかけての集落は、狭い太宰府盆地の中を100～200年ごとに移動しているような状況が窺える。弥生時代の墓地として園分松本遺跡や高雄地区の吉ヶ浦遺跡では弥生時代中～後期の覆棺墓群が確認されている。

古墳時代では、殿城戸遺跡で古墳時代初頭の方形区画溝が見つかり、集落と区別するために造られた公共的な広場とみられる。宮ノ本遺跡の丘陵では内部主体が割竹形木棺で鏡を副葬する古墳をはじめ、前期を中心とした古墳群が営まれている。5世紀後半頃には太宰府市唯一の前方後円墳（帆立貝形）である成屋形古墳が築造されているが、立地からすると福岡平野の御空川沿岸の豪族の墓とみられる。逆に6世紀には市境に近い筑紫野市杉塚に全長42mの剱塚古墳があり、4世紀の古墳群とその上に築造された6世紀中頃～7世紀にかけての前方後円墳は6世紀代の太宰府地域を知る上で欠かせない存在である。そのほか6世紀後半には陣ノ尾古墳や君畑古墳群などが後期古墳群に築かれているが、周辺地域に比べるとこの太宰府地域は造墓活動が少ない。

古代にはこの狭い平野の北端に太宰府政庁を置き、前面にいゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。その規模は南北2条、東西1坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。この大佐野地区は条坊の外側に位置するが、牛頭窟跡群に抜ける谷筋に位置し、すぐ東側を官道が通る要衝である。

中世になると観世音寺や太宰府天満宮などかつての条坊域の東部へと遺構は広がり、宝満山を含め寺社を中心にその周辺一帯は高い密度で遺構が展開している。また、周辺の山々には岩屋城や有智山城など九州の戦国史に名を残す山城が築造され、激しい戦いが繰り広げられている。特に岩屋城の戦いは高橋紹運が760名余りの軍勢で岩屋城に陣取り、九州統一を目指す島津軍を迎え撃ち、1日に渡って激戦を繰り広げたことは有名である。このような情勢に伴い、太宰府周辺では岩屋城や有智山城に関連した中世山城が多く築造されている。本格的な発掘調査はほとんど行われていないが、周辺の山中各所に段造成を見ることができる。今回報告する大佐野地区周辺でも、隣接する筑紫野市杉塚にわくど城（和久堂城、脳道城）があったと伝えられている。古野添遺跡では堀切や段造成が確認され、それに隣接する現在の福岡農業高校やその周辺の住宅街にも同様の造成があった可能性が指摘されているが、確認する術がない。

近世の太宰府は太宰府天満宮を中心に宰府や五条の町ができ、街道筋の集落として通古賀が形成されているが、その周縁に位置する他の集落は都市近郊型の農村集落で、稲作や麦作のほか野菜や果物の栽培も多く行なわれた。今回報告する大佐野地区も、区画整理が行われる前は田圃と山林に囲まれた静かな農村集落であったが、現在住宅街になり、かつての面影を全く残していない。

Ⅱ 調査体制

(平成 9/ 1999年度)・・・畑中遺跡第 1 次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一(9年 10月 1日～)
	主任技師	狭川真一(～9年 9月 30日)
	技 師	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
		高橋 学
		宮崎亮一(調査担当)
	技師(囑託)	下川可容子 森田レイ子

(平成 11 1999年度)・・・京ノ尾遺跡第 1 次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白石純一
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	野寄美希
	囑託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技師	高橋 学
		宮崎亮一(調査担当)
	技師(囑託)	下川可容子 森田レイ子

(平成 12/ 2000年度)・・・畑中遺跡第 2 次調査

総括	教育長	長野治己(～12月 24日)
		關 敏治(12月 25日～)
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	津田秀司(～3月 31日)
		木村和美(4月 1日～)
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫(～10月 23日)
		神原 稔(1月 1日～)
	事務主査	藤井泰人

	主任主事	野寄美希
	囑託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮(調査担当)
		中島恒次郎 井上信正 高橋 学 宮崎亮一
	技師(囑託)	下川可容子 森田レイ子 佐藤道文

(平成 13/ 2002年度)・・・京ノ尾遺跡第 3 次調査

総括	教育長	關 敬治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敬信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮
		中島恒次郎(調査担当) 井上信正
		高橋 学(調査担当) 宮崎亮一
	技師(囑託)	下川可容子 森田レイ子
		佐藤道文(調査担当)

(平成 14/ 2002年度)・・・京ノ尾遺跡第 4・5 次調査

総括	教育長	關 敬治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敬信
	文化財調査係長	神原 稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮 中島恒次郎
	主任技師	井上信正
		高橋 学 宮崎亮一(調査担当)

(平成 15/ 2003年度)・・・京ノ尾遺跡第 6 次調査

総括	教育長	關 敬治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敬信(～6月 30日)
		久保山元信(7月 1日～)
	文化財調査係長	神原 稔(～9月 30日)
	事務主査	藤井泰人

	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮 中島恒次郎
	主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一（調査担当）
	技師（囑託）	下川可容子 森田レイ子 柳 智子 渡邊 仁

（平成 16/ 2004年度）・・・京ノ尾遺跡第 2次調査

総括	教育長	関 敬治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月 30日） 齋藤実貴男（7月 1日～）
	主任主事	大石敬介
	主任主査	城戸康利
調査	技術主査	山村信榮 中島恒次郎
	主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子 森田レイ子 柳 智子 渡邊 仁 長 直信（調査担当） 松浦 智（7月 1日～）

（平成 17/ 2005年度）・・・報告書発行

総括	教育長	関 敬治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美（～6月 30日） 齋藤廣之（7月 1日～）
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
	事務主査	大石敬介
	主任主査	城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
調査	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学 宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子 柳 智子 長 直信 松浦 智

III 調査および整理方法

京ノ尾遺跡第 2次調査は調査区の北半分が平坦で、南半分が丘陵地であったため、南側に関してはグリッドを設定せずに、段造成ごとに番号を付し遺物の取り上げなどを行った。北側は座標振込みの手違いから任意にグリッドを設定し地区番号を付し調査を行った。畑中遺跡第 2次調査は面積が狭く流路のみの遺構であったため、グリッドも地区番号も設定せずに土層によって遺物の取り上げを行った。畑中遺跡第 2次調査は調査地の形状から、任意にグリッドと設定し調査を行った。その他の調査については

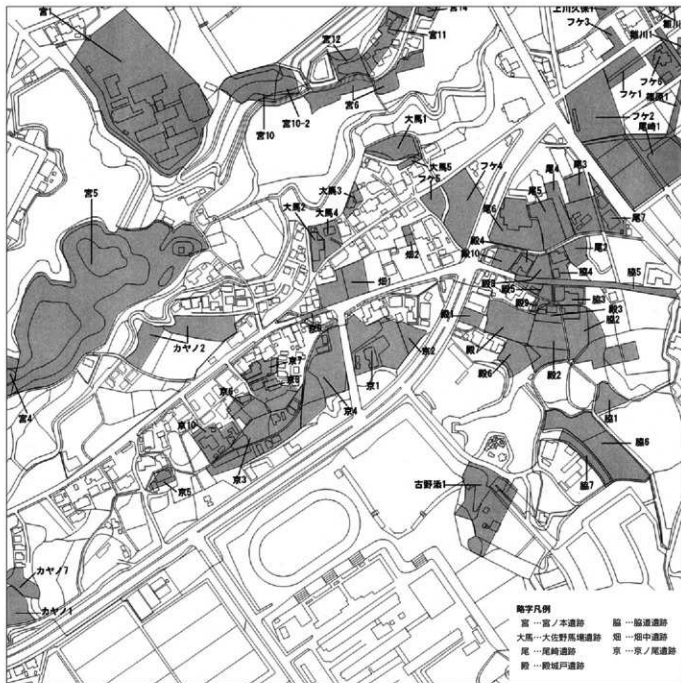


Fig2 報告地点およびその周辺調査位置図

国土座標を基準に地区番号を付し調査を行った。

略測図は1/100で作成し、遺構個別図および土層図は1/20もしくは1/10で実測を行った。全体図は航空測量によって図化を行った。よって、豪雨に見舞われた第6次調査は遺構に形状が当初より若干大きくなっていることは否めない。なお、京ノ尾遺跡第4次調査は傾斜地を平板測量で略測図を作成したため、報告時は遺構全体図をもとに誤差修正を行った。

畑中遺跡第4次調査については須恵器の坏身・坏蓋が多量に出土したため、形状が明瞭なものを中心に実測している。また、京ノ尾遺跡第4次調査では木材が多量に出土し、加工が行われているものについて現場より持ち帰り、その中でも二次加工を行っているものを中心に実測報告を行った。

なお、調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14巻 1989）『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2009年9月改訂）に基づいている。

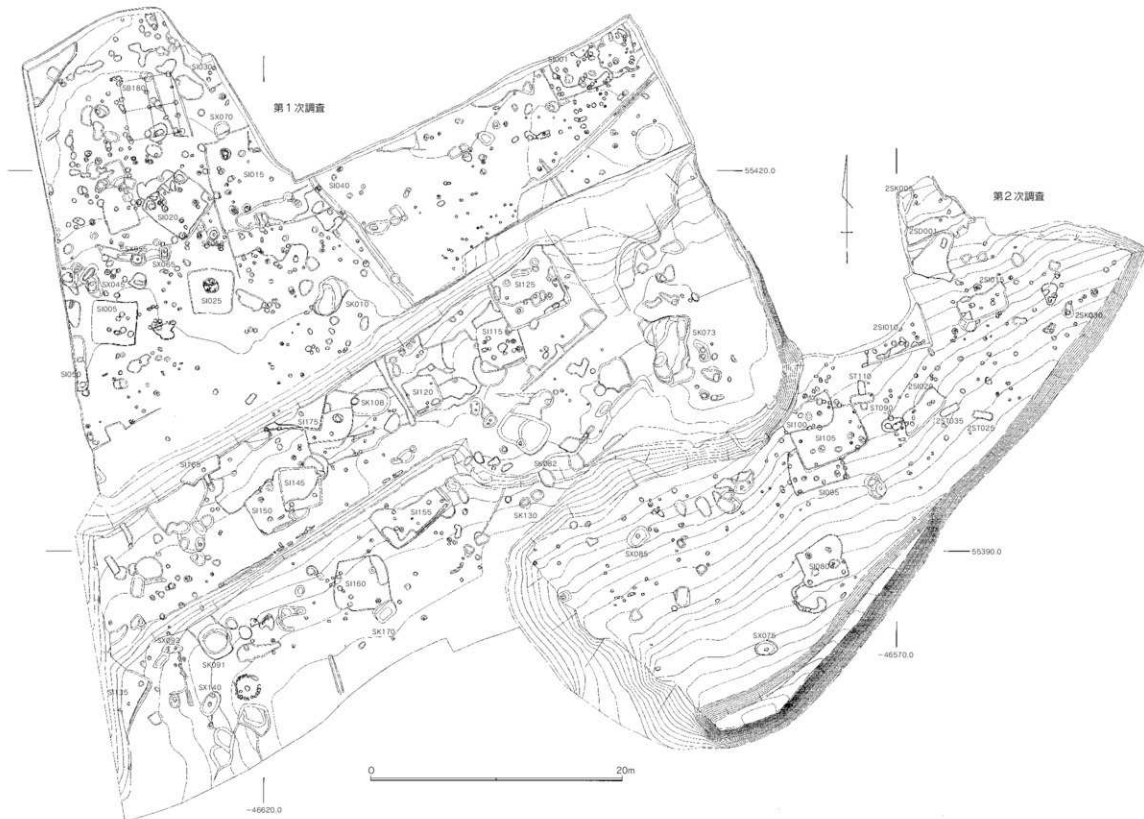


Fig 3 京ノ尾遺跡第1・次調査 遺構全体図(1300)

IV、調査報告

1. 京ノ尾遺跡 第 1 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は、太宰府市大字大佐野 320 1、323 1、323 6、324 1、325 1、325 3、326、328 1、335 に位置する。

調査は佐野土地区画整理事業に伴う事前調査で、今回の調査地は調査終了後、道路が新設され、その周辺は宅地造成が行われた。試掘調査は 1998 年 8 月 21 日に行い遺構が確認されたため、発掘調査を 1999 年 8 月 21 日から 2000 年 1 月 11 日にかけて実施した。調査対象面積 3753m²、調査面積 2780m²を測る。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位 (Fig 5)

調査直前の現場状況は、調査地の北側には畑地で、南西側には建設事務所、南東側は雑木林になっていた。地権者である島一雄氏によると、それ以前の状況は、昭和初期頃はミカン畑で、その後には養鶏が行われたという。しかし、鶏が殆ど死んでしまったため養鶏はやめたが、その鶏はこの調査区の南側にあった防空壕に埋めたという。調査でも防空壕とみられる日常雑貨が充滿した横穴が確認された。また、調査地の真ん中付近 (SD19 付近) の畑には段差があって、その東側の土地の中央付近から農作業中によく土器が出ていたという。現在県道板付牛頭筑紫野線によって寸断されている丘陵は、福岡農業高校に向かって続いていて、現在の道路付近にはやや平坦面があったという。また、無縁仏のような自然石がいくつか立っていたという。

遺構が掘りこまれている地山のうち、調査区南半分は丘陵地で、以前から阿蘇 4 火砕流の堆積物によって形成された台地であることが知られていた (太宰府市史 環境資料編)。阿蘇 4 火砕流は約 9 万年前の阿蘇山の大噴火に伴うもので、全国で火山灰が確認される程の大噴火であった。今回の調査でも、上面の発掘調査終了後に重機によって丘陵を掘削し堆積状況の観察を行った。堆積層の厚さは最大 3.4m あり、黄褐色土に灰白色粘質土が波打つように混じり、その灰白色粘質土の上面を中心に炭化物が確認され、この堆積状況は、当時の火砕流の凄まじさを物語るには十分な資料と言える。堆積土中に包含されている炭化物は、分析の結果広葉樹であることは判明したが、保存状態が悪く、

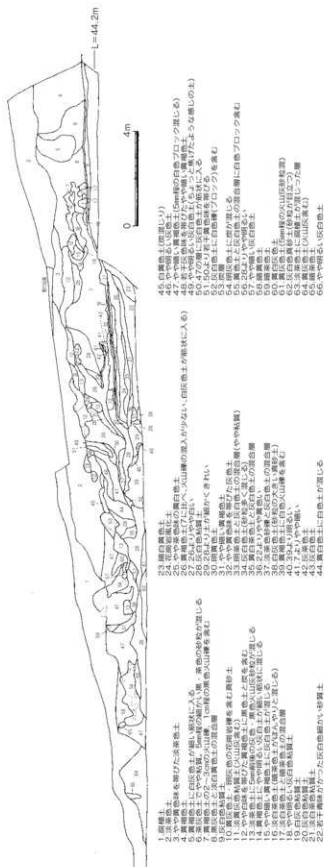


Fig 4 京ノ尾遺跡第 1 次調査
地盤堆積状況実測図 (1/160)

細かい樹種同定には至らなかった。

(3) 検出遺構

竪穴住居

1S1001 (Fig 6)

北辺は調査区外で、東辺は削平が目立ちやや不明瞭である。大きさは東西約4.7m、南北3.5m以上、深さ0.25m、床面積推定21.6m²の方形の竪穴住居である。北側に向かって傾斜しているため南側の残りが良い。遺物も南側が多く出土する。東西埋土の上位には炭が少量混じっている。南側の床面は一段低くなっているが、貼り床のような固くしめた土ではないため、その用途はわからない。また、1個だけ深さがしっかりした柱穴が確認されたが、それに相対するピットは確認されていない。

1S1005 (Fig 8)

大きさは東西3.5m、南北3.4m、深さ0.07m、床面積11.5m²の方形の竪穴住居である。削平が著しく、僅かに茶灰色土が薄く残っていた。西側に向かって削平され低くなっているため、西壁の立ち上がりが確認できない。また、地山との境が明瞭でなく、黒灰色砂質土に凹凸状に茶灰色土が入り込んでいるが、地固め的な感じではない。浅いピットは確認できたが、主柱穴と認識できるものはなかった。

1S1015 (Fig 7)

東側はS104Qによって切られている。大きさは東西約7.4m、南北8.0m、深さ0.2m、床面積推定57.7m²の方形の竪穴住居である。表土直下に8世紀代の堆積層があり、その下に薄く5m程の古墳時代の堆積層がある(S24で取り上げ) によって、S1015の南側はその堆積分一段下がった状態になっている。この部分に黄褐色土が堆積した部分が検出された。遺物は全く含んでいない。

南辺中央付近にカマドが確認された。カマド壁と考えられる部分の上面に黄白色粘土が見られるが、その下は若干焼土を含んでいるため、カマドを修復もしくは作り直したりしたのではないかと推測される。カマド前面には焼土が厚く堆積し、それに混じって土器片が検出された。また、カマドのある南辺壁付近は溝状に掘り込まれている。

床面には柱間4.5mで4本の主柱穴(1個は調査区外)が立っていたと推測されるが、それとは若干ずれた位置で3つの大きな柱穴(アーウ)が4.0~4.3mの柱間で確認されているが、方位は住居壁に対しやや傾いている。この2種類の主柱穴の新旧は不明だが、建て直しもしくは住居が重複していた可能性が考えられる。

また、埋土全面で遺物が散在していたが床面よりやや浮いた状態で検出された。

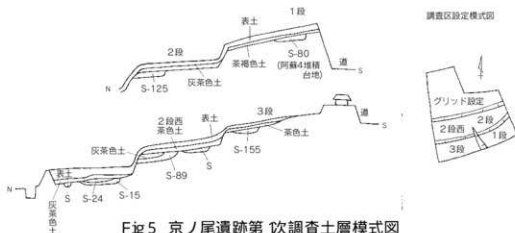


Fig 5 京ノ尾遺跡第 2 次調査土層模式図

1SI020 (F 図6)

大きさは東西3.8～4.6m、南北4.5m、深さ0.3m、床面積17.4m²の方形の竪穴住居である。東端でSI015と微妙な位置で切り合っている。北西辺中央付近に焼土が円形状に検出され、焼土の両側に黄灰色土が確認できるためカマド壁と考えられる。カマド内は炭や焼土が堆積しているが、壁に焼け焦げた痕跡は確認できない。4本の主柱穴が1.5～1.9mの柱間で検出された。床面に張り床等の痕跡は確認できなかった。

1SI025 (F 図8)

大きさは東西2.8～3.6m、南北3.4m、深さ0.15m、床面積10.9m²の方形の竪穴住居である。埋土には殆ど遺物は含まれていない。床面には柱穴ほかピットも確認されず、中央付近に1.1～1.25mの円形で、炭と焼土の堆積層がやや盛り上がった状態で確認された。炭を除去するとその床面には炭を含む小さなピットが多数検出された。この焼土は炉と推測される。

1SI030

調査区際のため明確には言いがたいが、西辺に焼土の堆積が見られるため、西側にカマドを備えた竪穴住居と考えられる。地山は淡灰白色細砂である。

1SI040 (F 図8)

大半は削平され、西側の立ち上がりと柱穴が残っていただけである。大きさは一辺推定4.5m、深さ0.12m、床面積推定20.25m²の方形の竪穴住居である。SI015を切る形で検出された。主柱穴は4つで、カマドや焼土は確認できなかった。

1SI050 (F 図9)

調査区西端で検出され、西側は削平されている。大きさは南北4.4m、深さ0.2m、床面積推定17.6m²の方形の竪穴住居である。

1SI080 (F 図9)

地形に沿って北側ほど削平されている。大きさは東西3.7m、南北2.8～3.6m、深さ0.1m、床面積10.6m²の方形の竪穴住居である。西側に赤褐色の焼土が堆積していたが、カマドという状態ではない。4本の柱穴が確認されている。

1SI095 (F 図9)

SI050の埋土に切り込む形で確認された。大きさは東西4.5m、南北3.6m、深さ0.25m、床面積14.1m²の方形の竪穴住居で、地形に沿って北側ほど削平されている。西側に焼土の塊が検出されたが、西壁に接してなくやや離れて検出された。床面には幾つかピットが確認されたが、主柱穴と認識できるものはなかった。

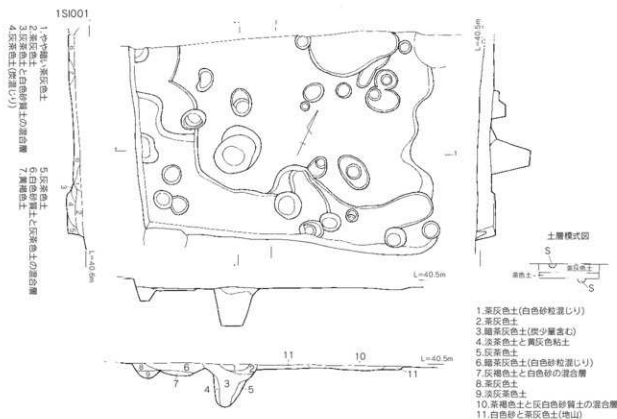
1SI100 (F 図10)

北側は地形に沿って削平され、北西側は段造成によって削平されている。大きさは東西4.2m、南北2.7m以上、深さ0.2m、床面積推定16.8m²の方形の竪穴住居である。ピットが幾つか検出されたが、主柱穴と確定できていない。

1SI105 (F 図10)

大きさは東西5.7m、南北4.5m以上、深さ0.45m、床面積推定32.5m²の方形の竪穴住居である。主柱穴はSI050の埋土の下から2個、その埋土が途切れた北側に2個検出された。

南辺中央付近に焼土を含む浅いピットが検出された。東南隅に把手付きの甕と土師器がまとめて検出され、中央付近では須恵器坏身が3個水平を保って検出したが、床面よりかなり浮いた状態で検出された。坏身周囲がやや埋土が異なった感じを受けたためピット状に置かれたものを誤った可能性も考え



0 2m

1S1020

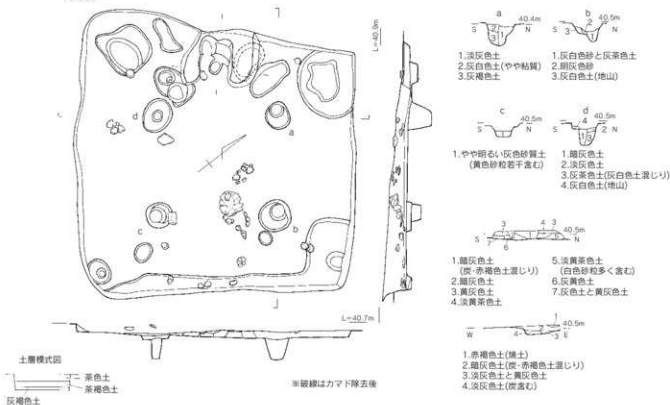


Fig 6 京ノ尾遺跡第 2 調査 S1001・020 遺構実測図 (160)

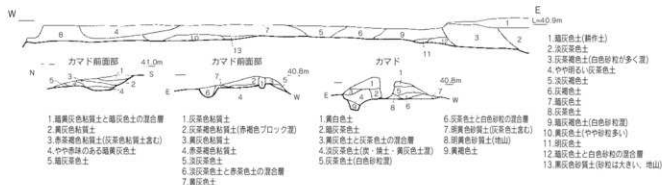
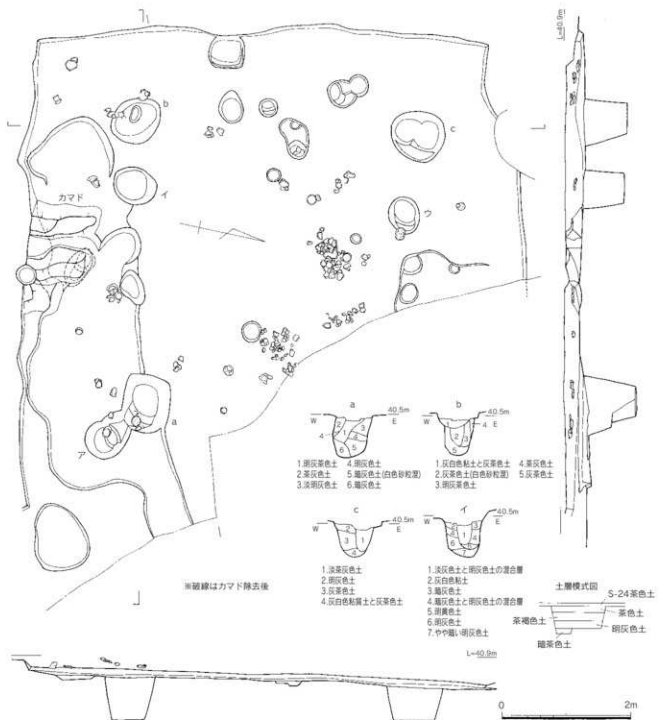
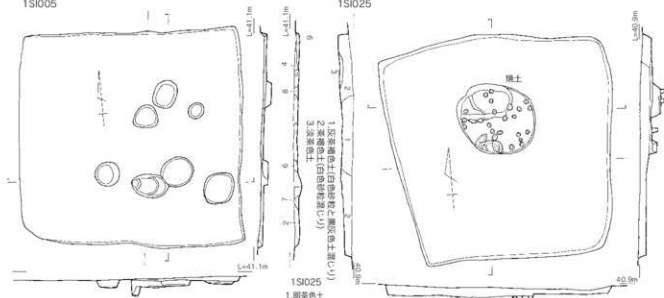


Fig.7 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S1D15遺構実測図 (160)

1S1005

1S1025



南北土層

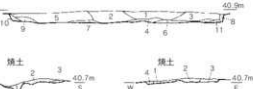
1. 淡茶灰色土
2. 暗黄茶色土
3. 黄茶色土
4. 淡灰色土と明灰色土の混層
5. 淡灰色土(白色砂粒混じり)
6. 淡灰茶色土
7. 暗灰茶色土(白色砂粒混じり)
8. 明白灰色土
9. 明灰色土(やや砂質)

東西土層

1. 茶灰色土と灰茶色土の混層(白色砂粒混じり)

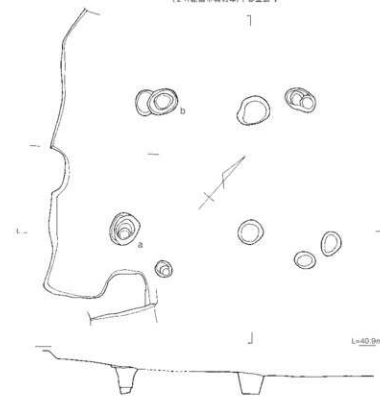
1S1025

1. 暗茶色土
2. 灰茶色土(灰茶土と白色砂粒混じり)
3. 茶灰色土(白色砂粒混じり)
4. やや暗い茶灰色土
5. 3と同じ
6. 灰白色土と灰茶色土
7. 淡灰茶色土
8. やや暗い灰茶色土
9. 茶灰色土
10. 淡茶色土
11. 明灰白色粘質土(地山)



1S1040

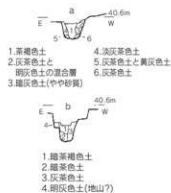
(G1-S) 平寄室 G
 (G1-S) 平寄室 F
 (G1-S) 平寄室 E
 (G1-S) 平寄室 D
 (G1-S) 平寄室 C
 (G1-S) 平寄室 B
 (G1-S) 平寄室 A



土層模式図

茶色土

灰茶色土



1. 茶褐色土
2. 灰茶色土
3. 明灰色土の混層
4. 淡灰茶色土
5. 灰茶色土と黄灰色土
6. 灰茶色土

明灰色土の混層

3. 暗灰色土(やや砂質)

4. 明灰色土(地山?)

5. 暗茶褐色土

6. 暗茶色土

7. 灰茶色土

8. 明灰色土(地山?)

Fig 8 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S1005・025・040 遺構実測図 (1/60)

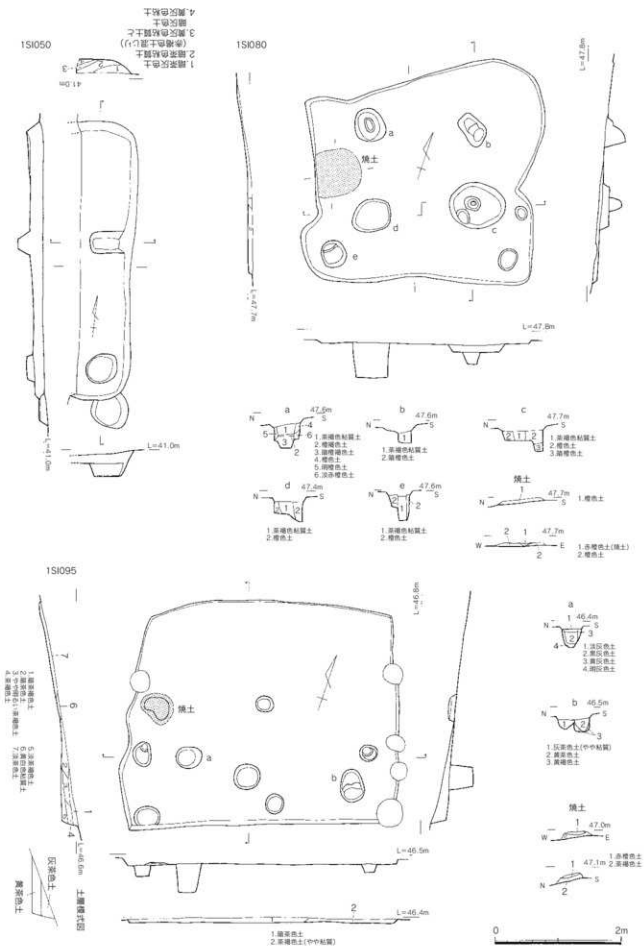
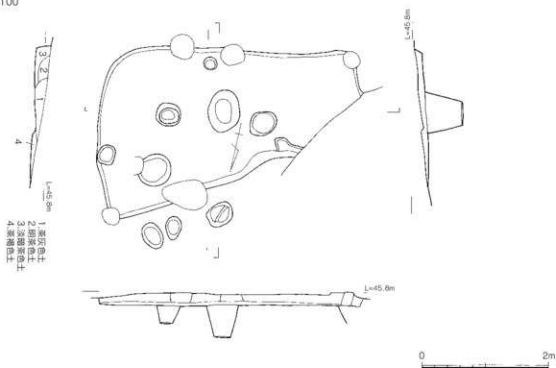


Fig9 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI050・080・095遺構実測図 (160)

1S1100



1S1105

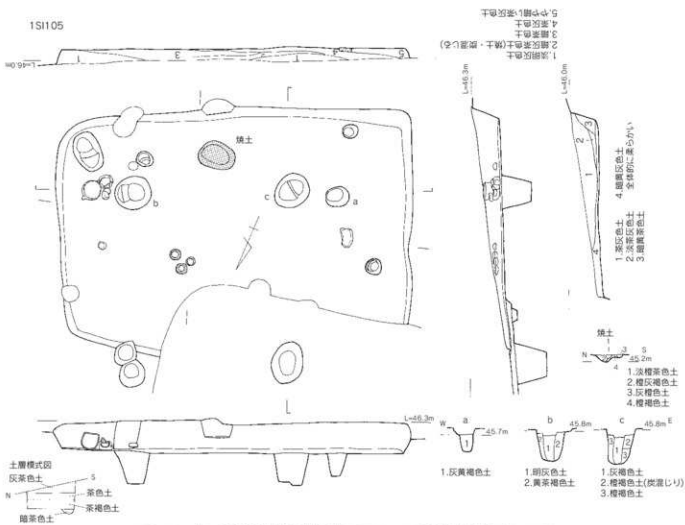
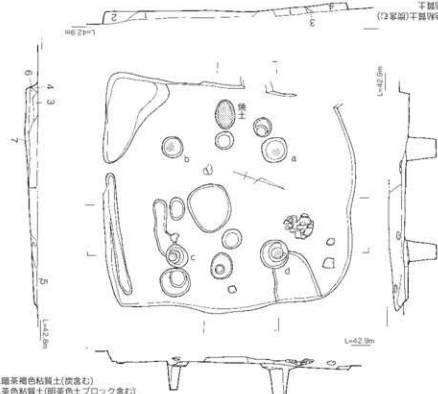


Fig 10 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S1100・105遺構実測図 (160)

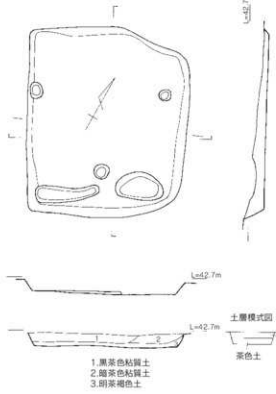
1. 黒茶褐色粘質土(炭灰む)
 2. 茶褐色粘質土
 3. 黒茶褐色粘質土
 4. 灰茶色粘質土



- a 42.6m
 1. 黒灰色粘質土
 2. 茶褐色粘質土
- b 42.6m
 1. 黒灰色粘質土
 2. 茶褐色粘質土
 3. 黒灰色粘質土
 4. 茶褐色土(白色砂粘灰む)
- c 42.7m
 1. 黒灰色粘質土
 2. 茶褐色粘質土(石含む)
- d 42.7m
 1. 黒灰色粘質土
 2. 茶褐色粘質土(石含む)
- 横土
 42.6m
 1. やや赤味を帯びた茶褐色土(横土)
 2. 地山

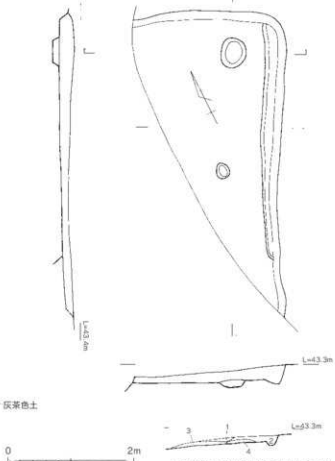
1. 黒茶褐色粘質土(炭灰む)
 2. 茶色粘質土(明茶色土ブロック含む)
 3. 茶褐色粘質土(茶黄色土ブロック含む)
 4. 灰茶色粘質土
 5. 明茶色粘質土(石含む、地山)
 6. 茶褐色粘質土
 7. 明茶色粘質土(地山)

1S120



1. 黒茶褐色粘質土
 2. 黒茶褐色粘質土
 3. 明茶褐色土

1S135



1. 黒灰色土と茶褐色土の混合層(カクラン)
 2. 茶褐色土
 3. 淡茶色土(少量真砂土含む)
 4. 茶褐色土と花崗岩礫の混合層

Fig 11 京ノ尾遺跡第 2 次調査 1S115・120・135 遺構実測図 (1/60)

られる。埋土の茶色土中からは尖頭器が 1 点検出した。調査途中では北側の柱穴は SI100 の床面に検出してはいたが、SI105 のものと判断できなかったため、掘り抜いてしまったが、全体を掘り下げた時点で SI105 のものとわかった。しかし、その柱穴の西北のものとの土層観察では SI100 の埋土の上位から切り込んだ痕跡が確認できたこと、切り合っている付近が地形に沿って削平されていたため、埋土が薄くなっていたことなどから SI100 より新しいと判断できる。

1SI115 (F 図 11)

大きさは東西 3.7m、南北 4.0m、深さ 0.25m、床面積 12.5m² の方形の竪穴住居である。4 本の主柱穴が 1.65m 間隔で明瞭に確認でき、柱痕から柱径は 0.15m と推測される。西側の中央付近に焼土を含むピットが確認されたが、その直上の埋土にはカマドのような痕跡や焼土も確認できなかった。そして、その南北の柱の中間にはピットが並んでいて、その 1 個は焼土の目の前であることから、併存していたとは考え難く、建て替えの可能性が考えられる。また、南辺際には壁溝が掘られていた。南西隅は調査直前に横の木を取り除いたため、攪乱されていたが、僅かに住居端の痕跡は確認できた。

1SI120 (F 図 11)

大きさは東西 2.5m、南北 3.0m、深さ 0.3m、床面積 6.0m² の方形の竪穴住居と推測される。主柱穴は未検出である。遺構検出時に遺物が多く検出されたが、底面近くではそれに比べ少ない。

1SI125 (F 図 12)

北辺が僅かに削平されている。大きさは東西 5.5m、南北 5.4m 以上、深さ 0.4m、床面積 27.0m² の方形の竪穴住居である。2.5 ~ 2.7m の間隔で 4 本の主柱穴を持ち、南側と東側に壁溝が僅かに残る。西側の壁よりやや離れた位置に焼土が薄く堆積している所が検出されたが、カマドの状態を示していない。

また、西側と北側は貼り床になっていて、床面よりさらに浅い掘り込みが認められ、中央よりやや北側付近では黒色土と赤褐色土が薄く堆積していた。

1SI135 (F 図 11)

調査区の西端で、道路によって 2 ほど削平されている。東辺の床面には壁溝が掘られている。残存部分も床面に近く、周囲の地山は礫で埋土にも礫が多くみられる。

1SI145 (F 図 12)

大きさは東西 3.1m、南北 3.0~3.4m、深さ 0.33m、床面積 8.9m² の方形の竪穴住居である。上層は炭混じりの堆積がみられる。遺物は北半分に多くみられる。焼土が北東隅付近で検出され、土師器甕が焼土に深く入り込んでいた。また、この焼土に混じる土器類は住居の西側に土坑状にはみ出している。これらは、カマドと煙道の可能性も考えられる。主柱穴は検出されなかった。また、床面は一部貼り床のようになっていた。

1SI150 (F 図 13)

大きさは東西 4.4m、南北 3.9m、深さ 0.05m、床面積 14.3m² の方形の竪穴住居である。東端には土坑がある。SI43 の南西床面に SI150 の住居の主柱穴と思われるピットがあり、4 本の柱と推測される。また、主柱穴は検出時に柱痕のみ確認され、掘り方は不明瞭であったが、若干下げると確認できる状況であった。北辺には焼土が楕円形で堆積していた。

1SI155 (F 図 13)

大きさは東西 6.0m、南北 3.6m 以上、深さ 0.45m、床面積推定 32.5m² の方形の竪穴住居である。北側は削平されている。焼土やカマドは検出されていない。床面周囲には壁溝が巡っている。南側の主柱穴 2 本は検出しているが、北側の 2 本は削平され未検出である。

1SI160 (F 図 14)

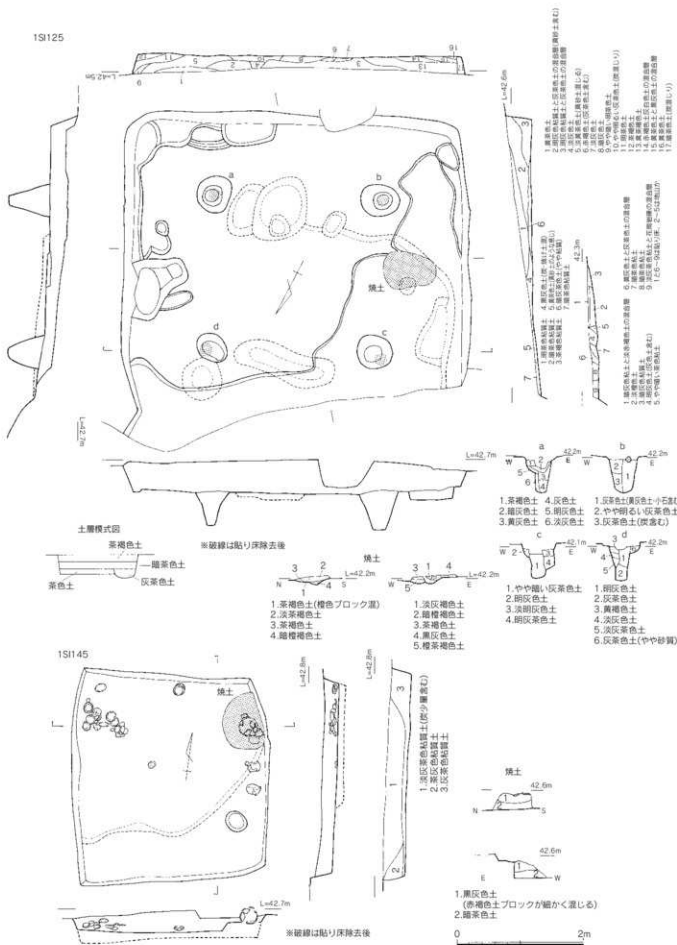
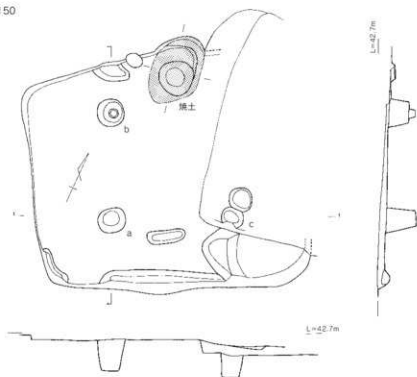


Fig 12 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI125・145 遺構実測図 (160)

1S150

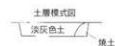


1. 暗灰色土
2. 黄灰色土
3. やや暗い灰茶色土

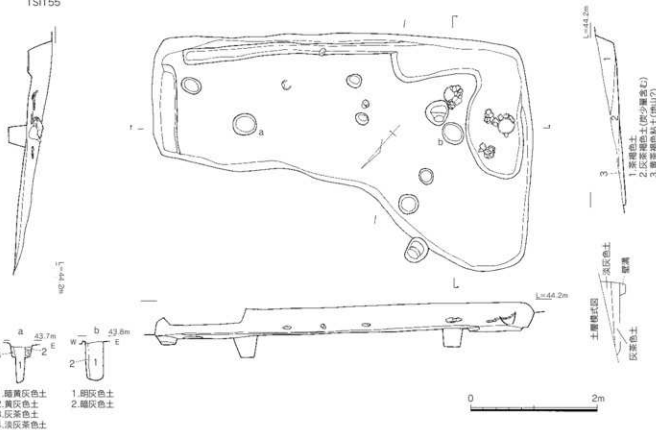
1. 暗灰色土
2. 黄灰色土
3. 明灰色土
4. やや明るい暗灰色土

- 焼土
1. 黒灰色土(赤褐色土ブロックが顔かく混じる) 3. 暗茶色土
2. 赤褐色土(黒灰色土含む、焼土) 4. やや明るい暗茶色土

1. 黒灰色土(赤褐色土・黄色ブロックが顔かく混じる)
2. 淡灰茶色土
3. 灰茶色土
4. 赤褐色土(黒灰色土・灰含む)
5. 僅かに赤味を帯びた灰茶色土



1S155



1. 灰褐色土(赤少量含む)
2. 赤褐色土
3. 黄赤褐色土(地山?)

1. 暗黄灰色土
2. 黄灰色土
3. 灰茶色土
4. 淡灰茶色土

1. 明灰色土
2. 暗灰色土

0 2m

Fig 13 京ノ尾遺跡第 次調査 1S150・155遺構実測図 (160)

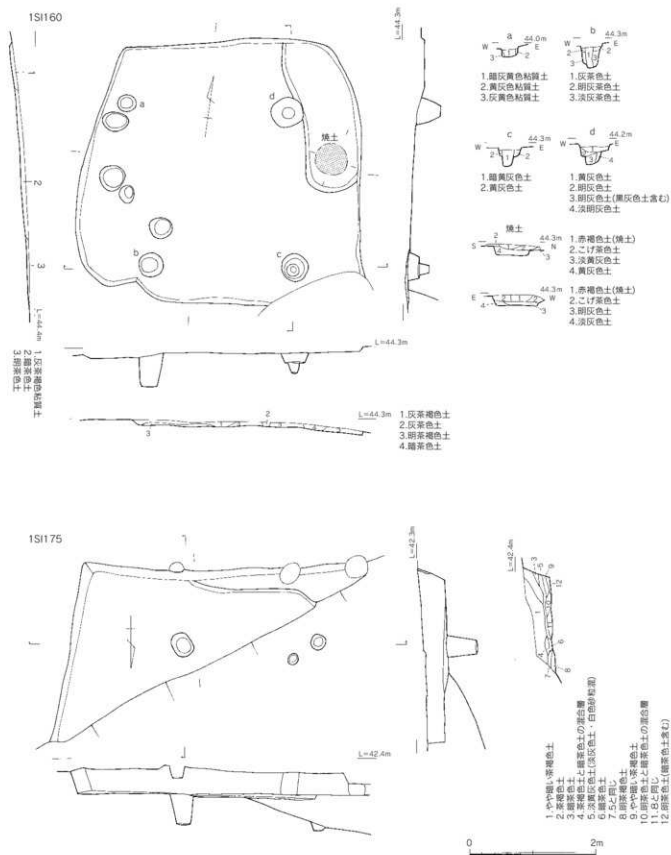


Fig 14 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI160・175遺構実測図 (160)

大きさは東西4.5m 南北4.2m 深さ0.05m 床面積15.2m²の方形の竪穴住居である。南側は削平によって変形したプランで検出された。主柱穴は4本検出された。東側中央付近で焼土が検出された。SK170との切り合いについては未確認である。

1SI165

北側の段によって削平され、殆ど残っていないが、焼土が南辺壁際で検出されたため、竪穴住居の可能性が高い。焼土付近から土師器がまとまって検出された。

1SI175 (Fig 14)

北側は段によって大きく削平されている。大きさは東西4.6m 南北2.9m以上、深さ0.4m 床面積推定27.0m²の方形の竪穴住居である。柱穴は2本確認され、全体で4本柱の住居と推測される。

掘立柱建物

1SB180 (Fig 15)

2 2間の縦柱建物である。柱間は南北2.35m 東西は2.0m 振れはN 10 30 Wである。柱の掘り方は円形で、大きさは0.33~1.0mと不揃いだ。深さは0.4m前後である。一部で径0.2m程の柱痕を確認している。南北の柱の間には柱穴が確認されており、束柱の可能性が考えられる。遺物は殆どなく建築時期

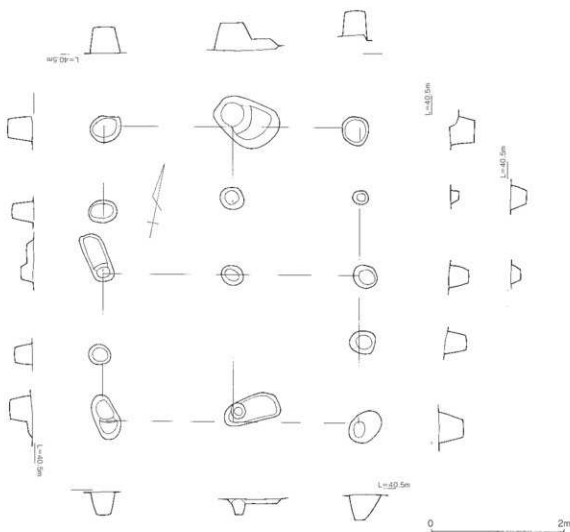


Fig 15 京ノ尾遺跡第 次調査SB180遺構実測図 (160)

は不明。

木棺墓

1ST090 (Fig 16)

主軸をE 77 Nにとり、墓壇の平面形は隅丸の長方形で、長さ192m、幅0.7~0.77m、深さ0.32mを測る。中央付近から黒色土器皿が1点、土師器杯が4点出土した。埋土中に鉄釘片が僅かに確認されたため木棺墓と推測される。

土壇墓

1ST110 (Fig 16)

主軸をN 77 Wにとり、墓壇の平面形は隅丸の長方形で、長さ2.45m、幅0.55m、深さ0.27mを測る。遺物は全く検出されないことや形状から土壇墓と考えられる。

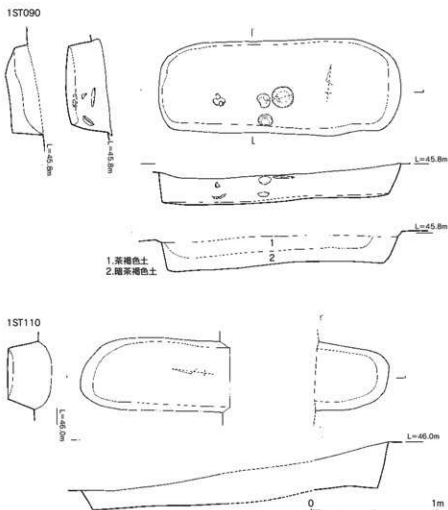


Fig 16 京ノ尾遺跡第 2 次調査 ST090・110遺構実測図 (130)

土坑

1SK010

大きさは2.15 x 3.25m、深さ0.35mの不定形土坑で、東側に中段があって、西半分が最も深くなっている。埋土全体が粘土でかなり固く、上層に土器や炭を多く含んでいる。

1SK073

東西3.0m、南北5.5m、深さ0.77mの隅丸方形の土坑で、埋土は柔らかい。

1SK091

若干窪んだ所で円形土坑を確認した。円形土坑の大きさは2.25~2.35m、深さ2.0mを測り、上層の低い位置では奈良時代の須恵器の環が出土したが、この遺物は土坑の最終的な窪みに溜まったものだろう。それ以下は殆ど遺物がなく、深さ約1m付近で黒曜石の剥片が出土した。埋土は明瞭に分層できるところはない。人為的な埋め戻しというより自然堆積のように思える。底面に近いほど周囲の真砂土の混入が目立ち、床面と誤認してしまうような堆積を示す。

1SK108

上面にS 89・9の堆積層があり、その下から検出された。東西3.15m、南北2.05m、深さ0.35mのきれいな長楕円形を呈する。底面の西端からはビットが検出された。

1SK170 (Fig 17)

大きさ1.9m x 1.4m、深さ1.1mの隅丸長方形で当初は落とし穴と考えていたが、杭などの痕跡は確認できなかった。一段が付いているため、この段を棺の埋葬時の作業場とみると墓の可能性も考えられ

る。SI160との切り合いについては未確認である。

焼土坑

1SK082

北側は削平され、東西0.92m、南北1.25m以上、深さ0.4mを測る。土坑周囲はやや硬化した黒色壁があり、その背後の地山は赤褐色に変色している。土坑内には0.15m前後の石が入っていて、その間に粘土状の焼土塊も出土した。南壁中央に半円状に焼壁が入り込んだ部分があり、煙道の可能性も考えられる。

埋甕

1SK130 (Fig 17)

東西0.98m、南北0.94m、深さ0.32mの土坑中央に土師質土器の鉢が置かれていた。鉢は底部しか残ってなく、埋土中にもそれ以外の破片は少ない。また、残存している土器の保存状態が非常に悪く、土坑底に付着し表面が剥がれてしまう。埋土はやや明るい淡灰色土である。

落とし穴

1SX045 (Fig 18)

東西1.2m、南北1.45m以上、深さ1.05mで、さらに南側の中段を含めると南北1.85m以上を測る。平面形は隅丸長方形を呈する。底面中央付近にはさらに径0.3m、深さ0.4mのピットが確認された。埋土は比較的柔らかい黄色に近い茶灰色土であった。

1SX055 (Fig 18)

東西1.2m、南北1.0m、深さ0.95mで、平面形は隅丸方形を呈する。底面中央付近にはさらに径0.3m、深さ0.3mのピットが確認された。埋土は比較的柔らかい黄色に近い茶灰色土であった。

1SX060 (Fig 18)

東西0.92m、南北1.05m、深さ0.85mで、平面形は円形を呈する。底面中央付近にはさらに径0.3m、深さ0.35mのピットが確認された。埋土は比較的柔らかい黄色に近い茶灰色土であった。

1SX065 (Fig 18)

東西0.85m、南北1.3m、深さ0.9mで、平面形は隅丸長方形を呈する。底面中央付近にはさらに径0.2m、深さ0.15mのピットが確認された。埋土は比較的柔らかい黄色に近い茶灰色土であった。

1SX070 (Fig 18)

東西1.2m、南北1.45m、深さ0.95mで、平面形は楕円形を呈する。底面中央付近にはさらに径0.24m、深さ0.4mのピットが確認された。黄灰色土の比較的柔らかい埋土であった。遺構検出段階ではSI015の

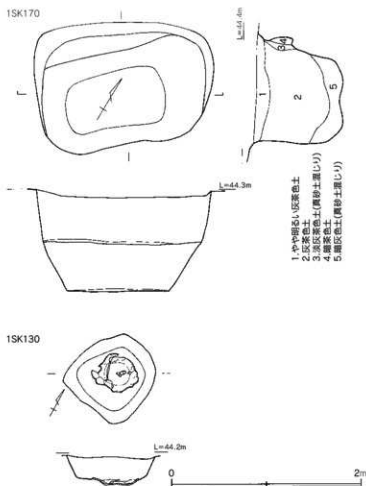


Fig 17 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SK130・170
遺構実測図 (140)

竪穴住居を切った状態で確認されたが、土坑の周壁は若干不規則に挟られていたため、埋土の陥没によってプランが検出できた可能性が高い。

1SX075 (Fig 18)

東西 1.8m 南北 1.2m 深さ 0.55mで、平面形は楕円形を呈する。底面中央付近にはさらに径 0.25~0.35m 深さ 0.3mのピットが確認された。埋土は柔らかい。

1SX085 (Fig 18)

東西 1.3m 南北 1.9m 深さ 0.75mで、平面形は楕円形を呈する。底面中央付近にはさらに径 0.35m 深さ 0.4mのピットが確認された。黄色に近い茶灰色土の比較的柔らかい埋土であった。

1SX092

東西 1.67m 南北 0.7m 深さ 0.9mで、平面形は長楕円形を呈する。さらに底面中央付近にはやや不明瞭ではあるが径 0.45m 深さ 0.15mのピットが確認された。埋土は比較的柔らかい茶灰色土であった。

1SX140 (Fig 18)

上位に工場があったため、かなり削平を受けている。東西 1.2m 南北 2.1m 深さ 0.28mで、平面形は長楕円形を呈する。さらに底面中央付近に径 0.35m 深さ 0.2mのピットが確認された。茶灰色土の比較的柔らかい埋土で、床面近くに花崗岩礫が転がっていた。

焼土

1SX111

大きさは 0.3 0.6m 厚さ 0.1mで、焼土の東側が黒褐色土、その周囲が赤褐色土である。住居に伴うものと考え、慎重に周囲を検出したが、明確に竪穴住居を確認することはできなかった。この遺構が段造成の横に位置するため、住居部分は北側に存在し段造成によって削平された可能性も考えられる。

1SX112

大きさは 0.64 1.1m 厚さ 0.14mで、焼土の北側が赤褐色土、その周囲が暗茶色土である。SI175の東隣に位置するが、この竪穴住居よりレベルが高く、住居の外に位置する。その他周囲に住居は検出されなかった。

(4) 出土遺物

竪穴住居

1SI001 茶灰色土出土遺物 (Fig 19)

須恵器

坏蓋 (1) 口縁部はやや斜めに仕上げ浅い段を付ける。体部中位には明瞭な突帯と沈線が巡る。外面上部の平坦部分が回転ヘラ削り。復元口径 12.4cm。

土師器

坏 (2) 小片で器面も摩滅している。

甕 甕 (3) 口縁端部を平坦に仕上げ、体部は直線的である。器形から甕の可能性が考えられる。内面ヘラ削りで、0.2~0.3cmの白色砂粒が大きく動いているが、ケズリの単位の確認は困難である。外面は摩滅が目立つがタテハケが確認できる。

手捏ね土器 (4) 丸味のある小鉢で、口縁部は斜めになっている。内面はナデ。口径 3.6cm 器高 2.3cm。

1SI001 茶色土出土遺物 (Fig 19)

土師器

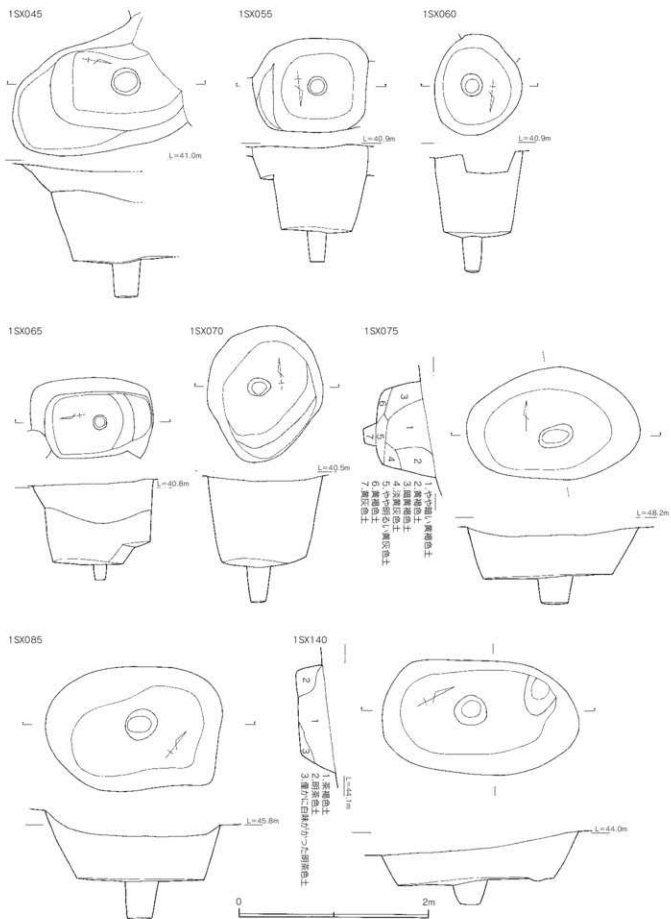


Fig 18 京ノ尾遺跡第 2 次調査落とし穴遺構実測図 (140)

坏(5) 小片で器面も摩滅している。

小甕(6) 復元口径13.0cm、内外面とも摩滅し調整不明。胎土は精製された褐黄色土である。

手捏ね土器(7-10) 7・8は小鉢で、7は復元口径7.6cm、器高4.6cm、底径4.1cm、底部外面に土器製作時の敷物とみられる葉脈痕が明瞭に残る。8は口径8.0cm、器高5.2cm、底径4.4cm、内面は強いナデ、外面は雑なナデである。9・10は小型でそれぞれ口径3.7cm、器高2.4cm、口径3.2cm、器高2.6cm。

石製品

石鎌(11) 緑色片岩製で、両側面を荒く打ち揃っている。縦10.2cm、横4.5cm、厚さ1.4cm、直接遺構に伴うものではないとみられ、混入の可能性が考えられる。

1S1015茶色土出土遺物(Fig 20)

須恵器

坏蓋(1・2) 1は口縁端部に浅い段を有し、外面中位には沈線が巡る。内面天井部は当て具の後ナデ。復元口径14.8cm。2は口縁端部に明瞭な段を有し、外面中位には浅い沈線が巡る。

甕(3) 口縁部は折り曲げて肥厚させている。内外面とも回転ナデ。復元口径18.0cm。

土師器

坏(4-6) 4は内外面ともヘラミガキ、内面には工具の当たり痕のみ残る。復元口径12.4cm。5は口縁部が内側に僅かに屈曲している。内面は細かいヘラミガキ、外面はヘラ削りとみられる。復元口径11.4cm。6は外面ヘラ削り、内面はミガキのような痕跡がみられる。

小鉢(7) 外面はナデ、内面はミガキで工具の当たり痕が明瞭に残る。復元口径10.1cm、器高5.2cm、底径4.7cm。

小甕(8) 体部外面はヘラミガキのような痕跡がみられる。その他内外面はヨコナデ。

石製品

軽石(9) 大きさは3.4cm 3.4cm 3.15cmである。使用によるためか、面ほど面ができています。

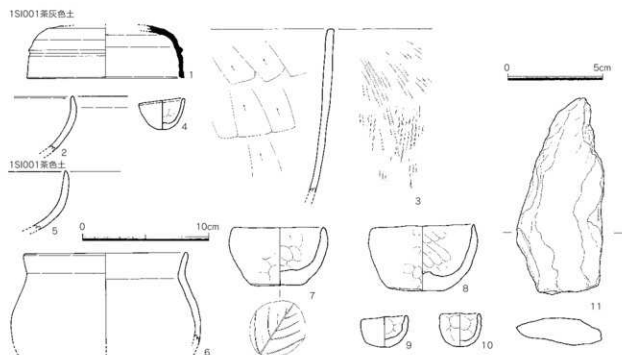
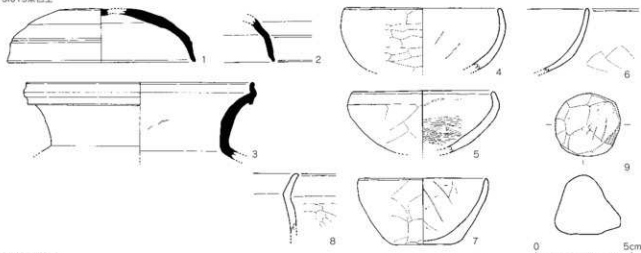
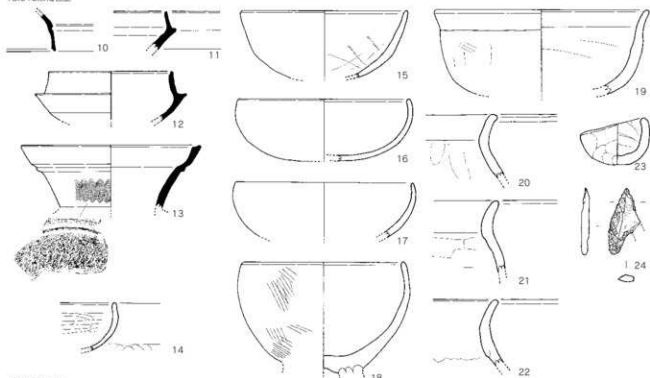


Fig 19 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S100 出土遺物実測図 (1・3・11は 1/2)

1S1015茶色土



1S1015茶褐色土



1S1015カマド

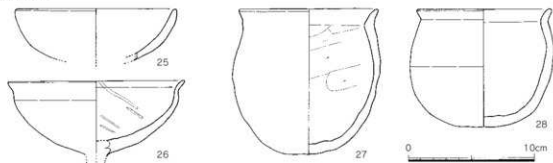


Fig 20 京ノ尾遺跡第 1次調査 1S1015出土遺物実測図 1(13 9・ 24は 12)

1S1015茶褐色土出土遺物 (Fig 20)

須恵器

坏蓋 (10) 口縁端部内面と外面中位に段を有する。

坏身 (11・ 12) 11は口縁端部を僅かに斜めに作る。12は復元口径98cm、立ち上がりは高く、口縁

端部には沈線が巡る。

甌(13) 復元口径14.2cm 頸部には波状文が巡り、頸部径は大きい。口縁部内面に明瞭な段を付ける。

土師器

坏(14-17) 14は外面底部がヘラ削り、内面はミガキで黒色の漆が塗られている。15は内湾することなく外開きのまま口縁部に至る。内面にヘラミガキの当たり痕が残る。復元口径13.2cm、16は内外面とも黒色の漆が塗られている。内面には僅かにミガキが残る。18は摩滅が目立つが内面はナデ。復元口径14.0cm。

脚付鉢(18) 脚部は欠損している。胎土は赤茶色で精製されている。摩滅が著しいが、外面はハケ、内面は不定方向のナデがみられる。復元口径12.6cm。

鉢(19) 口縁部が僅かに外反する。摩滅が著しいが、外面はハケ、内面は不定方向のナデがみられる。口縁部はヨコナデ。復元口径17.0cm。

甕(20-22) 20は内面不定方向のナデ。21は内面ヘラ削り。22は頸部の屈曲度合いが甘い。内面には粘土紐接合痕が残る。

手捏ね土器(23) 小型の小鉢で、口縁部は斜めに仕上がる。内外面ともナデ。口径5.2cm 器高3.7cm。

石製品

石鏃(24) 大きさは縦3.5cm、現存幅1.6cm、厚さ0.4cm、黒曜石製。

1S1015カマド出土遺物(Fig.20)

土師器

坏(25) 復元口径12.8cm 内外面ともナデ調整。

高坏(26) 口縁部は屈曲し外反している。内面には工具の当たり痕が残る。口縁部はヨコナデ、外面下半の調整は不明瞭。復元口径14.0cm。

小甕(27-28) 27は口縁部と体部の境は明瞭で、内外面とも摩滅しているが、内面は斜め上方へのヘラ削り。外面が赤褐色に変色する。復元口径11.0cm、28は内面が不定方向のナデ。底部付近に黒斑がある。復元口径10.6cm。

1S1015出土遺物(Fig.21-22)

須恵器

坏身(29) 口縁部内面に浅い沈線が巡る。復元口径10.2cm。

甕(30) 復元口径19.0cm、口縁部は肥厚させる。内外面とも回転ナデ。

土師器

坏(31-39) 口径11.0-13.6cm、器高は4.9-5.2cm、摩滅しているものもあるが、31-33・39の外面下半の調整は手持ちヘラ削り、34-36の内外面はミガキで黒色漆が塗られている。33・34・39の内面はヘラ削りの工具の当り痕が残る。38は口縁部をやや内湾させる。39の外面底部にはヘラ記号がみられる。

小鉢(40-41) 40は口縁部に向かってほぼ直線的に外開きし、薄く仕上げる。内面は強いナデ、外面は粗いナデ。口径8.6cm、器高5.6cm、底径3.6cm、41は丸味のある器形で、摩滅が目立つが内外面ナデ。口径8.4cm、器高5.4cm。

鉢(42-43) 42は丸味のある器形で、内面は口縁付近に指頭圧痕、その他は不定方向のナデ。外面は摩滅しているがハケ目が確認できる。復元口径12.2cm、器高7.5cm、43は口縁部が外反し、外面底部

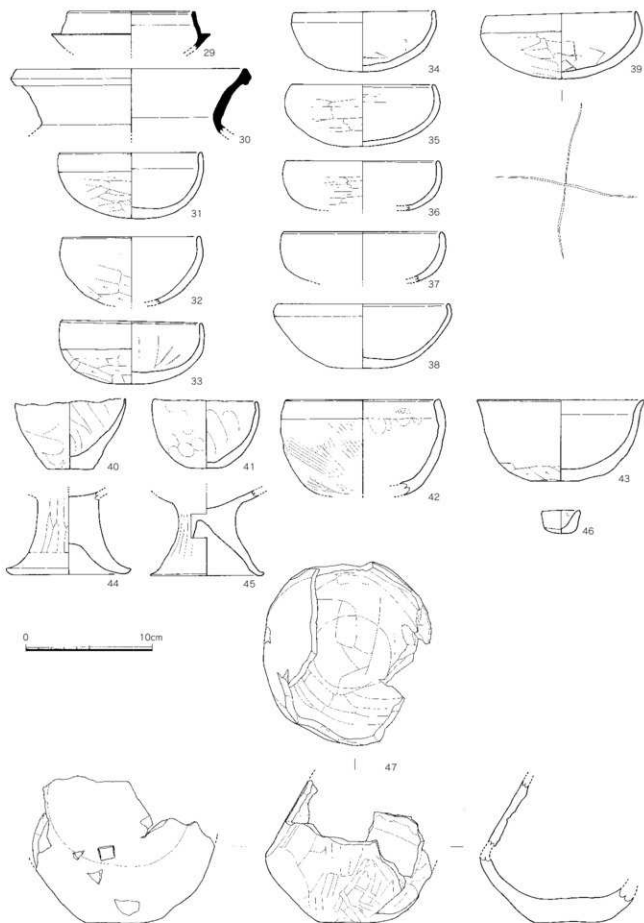


Fig 21 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SID1 出土遺物実測図 2(13)

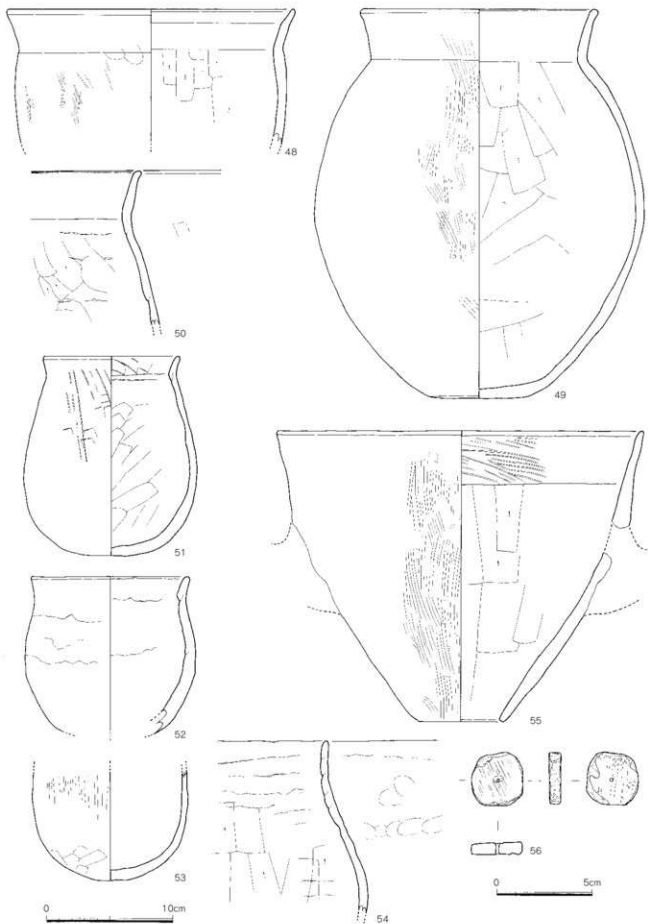


Fig 22 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S101出土遺物実測図 3(13 56は 12)

がヘラ削りである。復元口径 13.2cm 器高 6.4cm

高坏 (44・45) 2点とも坏部を欠損する。44は脚部底径 9.9cm 外面は縦方向のミガキで、内面は半分までしか中空でなく重い。49は脚部底径 9.0cm 外面は縦方向のミガキの後ナデ。内面はナデ。

手捏ね土器 (46) 復元口径 2.8cm 器高 1.8cm

器種不明製品 (47) 球体をなしているが、底部とは別にもうひとつ平坦面を作っている。色調は淡灰橙色で、内面はナデ調整で、部分的に粘土を貼り付けた痕跡は確認できる。外面は粗いミガキと小刻みなミガキを行い、全体的に光沢がある。ミガキの単位まで確認し難い。欠損もしているため全形や用途が想像できない。

甕 (48~54) 48は体部内面が上方向のヘラ削り、外面にはハケ目が僅かに残る。復元口径 22.6cm、49は体部内面がヘラ削り、外面にはハケ目が僅かに残る。口縁部はヨコナデ。復元口径 18.8cm 器高 30.7cm 復元底径 7.6cm、50は内面には上方向へのナデで、部分的に粘土紐の繋ぎ目痕跡が残っている。51は胴部下半に最大径があり、口縁径より胴部径が上回っている。内面ヘラ削り、くびれ付近にタテハケが僅かにみられる。復元口径 10.7cm 器高 15.7cm、52は口縁部が僅かに外反し、口縁径と胴部径がほぼ同じである。内外面に粘土繋ぎ目が確認でき、外面ナデ。復元口径 12.4cm、53は底部がヘラ削り、胴部に僅かにタテハケ。丸く仕上げる。54は胴部から口縁に向かい内湾しながら立ち上がっている。口縁部内面は粘土紐の繋ぎ目痕跡が4層ほど確認できる。その下半はナデの後粗いケズリ、外面はナデ。

甕 (55) 口縁部は直口縁で、口縁部内面はヨコハケ、その直下は縦方向のヘラ削り、外面はタテハケ。把手は欠損しているが、把手を接合するための穴が開いている。復元口径 29.0cm 器高 22.9cm 底径 6.6cm

石製品

紡錘車 (56) 滑石製で、中央に径 0.2cm程の小さな穴が開けられている。2.75 2.7cm、厚さ 0.6cm

1S1020茶色土出土遺物 (Fig 23)

須恵器

坏蓋 (1~3) 口縁付近の破片である。1は外面中位に沈線、口縁部は僅かに外反させ、端部の平坦面に沈線を巡らす。2は外面中位に段、口縁部内面に明瞭な沈線を巡らす。3は外面中位に沈線、口縁部内面に浅い沈線を巡らす。

土師器

高坏 (4) 脚部で、調整は内面ナデ、外面ヨコナデ。外面に黒色漆のような痕跡が残る。

甕 (5) 胴部最大径が下半にあり、緩やかにくびれて口縁に向かって外反する。器形はやや歪んでいて、磨滅も目立つ。外面はタテハケ、内面はヘラ削りが確認できる。外面は赤褐色に変色する。口径 13.4cm 器高 22.5cm

甕 甕 (6) 胴部から殆ど外反することなく口縁に達する。内面ヘラ削り、外面ハケ、口縁部はヨコナデである。

石製品

砥石 (7) 両面研磨されている。研磨面の端部には刃先によって付いたとみられる傷が残っている。縦 18.9cm 6.7 7.1cmの長方形である。細かい砂岩製。

1S1020茶褐色土出土遺物 (Fig 23)

須恵器

坏蓋(8) 外面中位に段と口縁端部内面は斜めに作られ沈線を巡らす。復元口径12.1cm、器高3.6cm。

坏身(9) 口縁端部内面は、僅かに斜めに作られ、浅い沈線が巡る。

土師器

坏(10-12) 10は口縁部の破片で磨滅著しい。11は外面が粗いヨコハケ、内面はミガキで、工具の当たり痕が残る。復元口径11.7cm、12は胎土に0.1cm程の砂粒を僅かに含む。外面横方向の手持ちヘラ削り、内面ミガキ調整。口径11.2cm、器高5.2cm。

小甕(13) 口縁部が若干外反する。胎土は精製され赤茶色を呈する。外面および口縁部内面がハケ調整である。復元口径9.8cm。

甕(14) 底部付近で外面ハケ、内面ナデ調整。

1S1020出土遺物(Fig.23)

須恵器

坏身(15) 口縁端部内面は斜めに作られ、浅い沈線が巡る。復元口径13.6cm。

土師器

坏(16-19) 口径11.0-13.6cm、器高4.8-6.4cm、胎土は精製されている。16はやや厚みのある器形。内外面ともミガキ調整。17は外面底部にヘラ記号が残る。内面コテ当て、外面ヘラ削り。18・19は外面手持ちヘラ削り、内面ミガキでコテの当たり痕が残る。

壺(20) 体部外面は磨滅が著しいが部分的にハケ目が確認できる。内面は横方向のヘラ削りで砂粒の動きは顕著に確認できる。復元口径18.0cm、器高28.0cm。

鉢(21) 外面は磨滅しているが、上半はタテハケ、下半はケズリのような痕跡がみられる。内面は上方向のヘラ削りである。復元口径14.0cm、器高約7.9cm。

甕(22) 口縁部から底部まで残っているが残存部は小さい。口縁部はヨコナデ。外面はナデ整形後にタテハケ、内面は磨滅しているが上方向にヘラ削り、底部付近は横方向にケズリ端部を整えている。

土製品

勾玉(23) 大きさは縦2.7cm、径1.1-1.2cm、0.2cm程の孔が穿たれている。カマドより出土。

1S1025出土遺物(Fig.24)

弥生土器

鉢(1) 口縁部で、M形の突帯が2条巡る。突帯付近と内面が赤色をなしている。丹塗り痕か。

1S1030出土遺物(Fig.24)

土師器

坏(2) やや浅いタイプの坏で、口縁端部はヨコナデで、僅かに外反させる。復元口径13.5cm。

1S1040茶色土出土遺物(Fig.24)

土師器

坏(3) 内外面とも磨滅している。

1S1050出土遺物(Fig.24)

須恵器

坏蓋(4) 外面中位に僅かに段が付き、口縁端部は丸く仕上げる。復元口径14.0cm。

1S1095出土遺物(Fig.24)

須恵器

甕(5) 口縁部の破片で端部は内側に僅かな段が付けられ、外面には波状文が施されている。

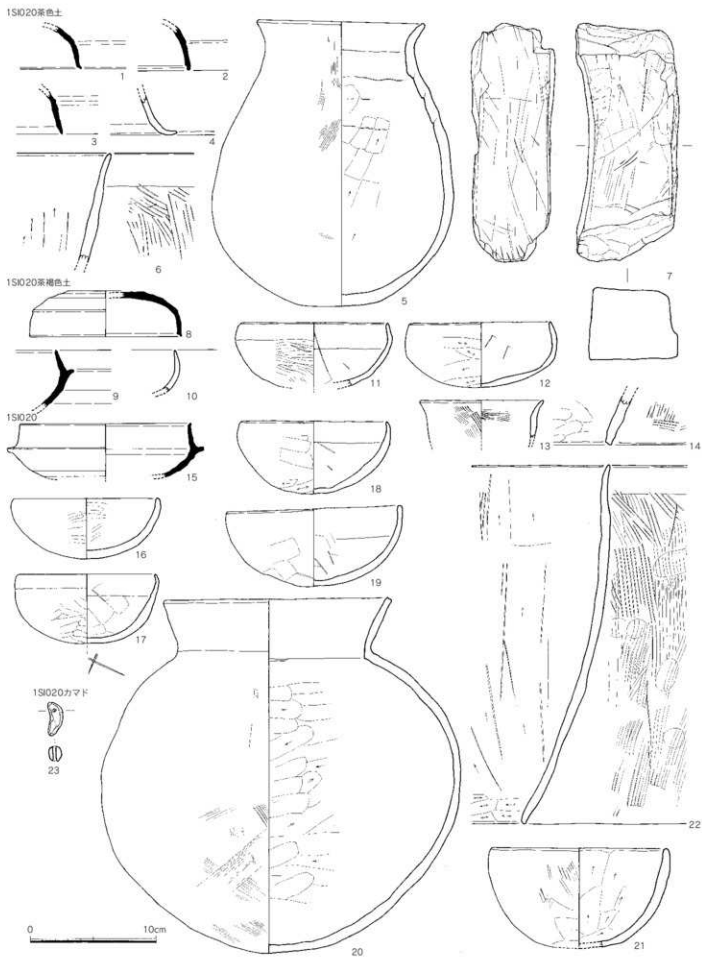


Fig.23 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SK020出土遺物実測図 (13 7は 12)

土師器

坏(6) 内外面とも磨滅している。

1S1100出土遺物(Fig 24)

須恵器

坏蓋(7) 外面中位に沈線が巡り、口縁端部に明瞭な段を有する。外面上部が回転ヘラ削り以外は回転ナデ調整。復元口径14.1cm、器高4.4cm。

坏身(8・9) 口縁端部は丸く仕上げる。8は復元口径12.2cm、器高3.8cm、立ち上がりは短く太い。内面底部ナデ、外面底部回転ヘラ削り。9は復元口径11.2cm、全体的に薄い。

土師器

甕(11・12) 11は磨滅し調整不明。12は口縁端部のみ外反させる。胴部はあまり張らないタイプと推測される。内面ヘラ削り、外面タテハケ。口縁部ヨコナデ。

甕 甕(10) 胴部が張っていて、底部は欠損する。内面は斜め方向のヘラ削り。外面はタテハケ。把手は欠落しているが、その接合部には周りと同じくタテハケがみられる。胎土は0.2~0.3cmの白色砂粒を多く含む。

甕(13) 底部で内面ヘラ削り、外面ナデ。

1S1105灰茶色土出土遺物(Fig 25)

須恵器

坏蓋(1・2) 2点とも復元口径14.4cm、口縁端部内面と外面中位に明瞭な沈線を巡らす。外面中位まで回転ヘラ削りで、その他の内外面は回転ナデ。1は器高4.8cm、2は器高4.9cm。

1S1105茶褐色土出土遺物(Fig 25)

須恵器

坏身(3) 立ち上がりは短く低い。

土師器

坏(4) 口縁部はヨコナデによって薄く仕上げる。外面にはヘラ削りのような痕跡がみられる。

手捏ね土器(5) 口径4.0cm、器高3.7cm、底径2.4cm、端部は薄く仕上げられ、全体にナデ痕跡がみられる。底部は平坦で安定している。

1S1105茶色土出土遺物(Fig 25)

須恵器

坏蓋(6) 外面中位に僅かに沈線が巡る。口縁端部は丸く仕上げる。

土師器

甕(7・8) 7は短い頸部を屈曲させ、端部に向かってやや薄く仕上げる。体部内面はヘラ削り、その他はヨコナデ。8は丸底の底部で内面ヘラ削り、外面はナデで指頭圧痕が残る。

石製品

紡錘車(9) 径3.3~3.5cm、厚さ1.2cmでやや断面台形を成している。中央には径0.7cm程の孔が穿たれている。滑石製。

三稜尖頭器(10) 縦8.7cm、横2.5cm、厚さ1.7cm、両端部を僅かに欠損するものの保存状態は良好である。背部加工を丁寧に行っている。安山岩製。

1S1105出土遺物(Fig 25)

須恵器

坏身(11~13) 口径10.7~11.9cm、器高4.5cm、3点とも体部外面下半は回転ヘラ削り。11・12は口

縁端部内面に明瞭な段を巡らす。11は内面底部に同心円の当て具痕が残る。12は内面回転ナデ。13は口縁端部内面に沈線を巡らす。内面底部が不定方向のナデ。

土師器

坏(14-16) 口径11-12.4cm 器高5.5-5.8cm。3点とも磨減が目立つが、外面下半にケズリのような痕跡がみられる。胎土には0.1cm前後の白色砂粒が混じる。

甕(17-18) 17は復元口径14.5cm 器高16.7cm。体部内面は砂粒が上方に動いているがヘラ削りの単位は確認できない。外面には僅かにハケ目が確認できる。18は口縁の一部が片口状に作られている。口縁部はヨコハケ、その下は上方向のヘラ削りで、内面下半は横方向のヘラ削り、外面はタテハケ調整。復元口径27.5cm 器高22.5cm。

1S1105柱穴出土遺物(Fig.25)

須恵器

坏身(19) 口縁部の小片で、受け部が短い。口縁端部は丸く仕上げる。

1S1115出土遺物(Fig.24)

須恵器

坏蓋(14-16) 3点とも外面中位と口縁端部内面にも沈線を巡らす。復元口径12.0-13.2cm 器高4.2-4.85cm。14は外面上部を回転ヘラ削り後にハケ状工具によってナデ。そのハケ状工具によって内面天井部を刺突している。復元口径13.2cm 器高4.85cm。19は内面天井部に当て具痕が僅かに残る。16は外面頂部が回転ヘラ削りで平坦をなす。

坏身(17-18) 復元口径はそれぞれ10.5cm 12.6cm。口縁端部内面を斜めに作り浅い段を巡らす。

土師器

坏(19) 全体的に磨減しているが、外面に横方向のヘラ削りもしくはミガキのような痕跡が確認できる。復元口径12.0cm 器高5.6cm。

甕(20) 口縁部は僅かに外反し、底部は若干平坦に仕上げる。全面やや磨減しているが、内面はヘラ削りの後ナデ、口縁部はハケ、外面はタテハケが確認できる。把手はナデで、工具の当たり痕跡がみられる。下端に一次焼成の黒斑がある。復元口径は29.2cm 器高23.7cm。

甕(21) 口縁部に向かって僅かに内湾しながら立ち上げる。把手は貼付されていない。胎土は精製されている。内面は上方向のナデ、外面もナデ調整のような痕跡がみられる。復元口径は17.2cm 器高13.0cm 底径5.2cm。

1S1115黒灰色土出土遺物(Fig.24)

須恵器

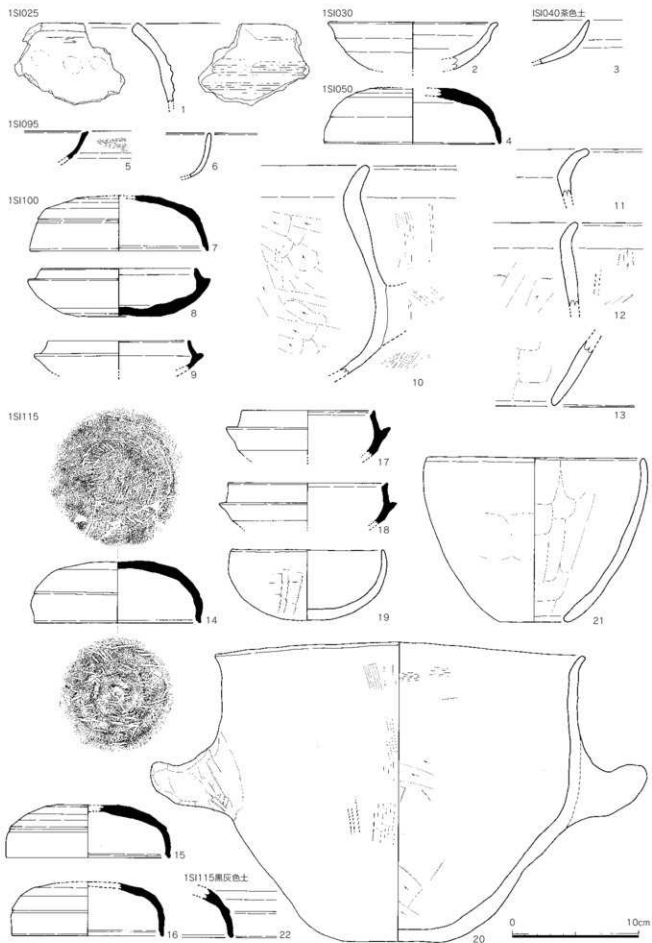
坏蓋(22) 外面中位に段、口縁端部に浅い沈線を巡らす。外面上部は回転ヘラ削り。その他は回転ナデ。

1S1120灰茶色土出土遺物(Fig.26)

坏蓋(1) 口縁端部内面に僅かに段が巡る。外面上部は回転ヘラ削りで、一部カキ目がある。復元口径12.6cm。

坏身(2-8) 復元口径10.6-12.8cm 器高3.2-4.5cm。内面底部は当て具痕をナデ消している。2・3は底部の狭い範囲のみ雑な回転ヘラ削り、9は雑なヘラ削り、6は雑なヘラ削りが一部あり、底部付近は未調整である。立ち上がりが全体的に短く低い。特に4・5・8はその高さが1cmにも満たない。8は外面にヘラ記号が施されている。

提瓶(9) 頸部は欠損する。焼成と還元は悪く、黄白色で磨減も目立つ。肩部にはカキ目が残る、



F 図 24 京ノ尾遺跡第 2 次調査 S.D.25・030・040・050・095・100・115出土遺物実測図 (13)

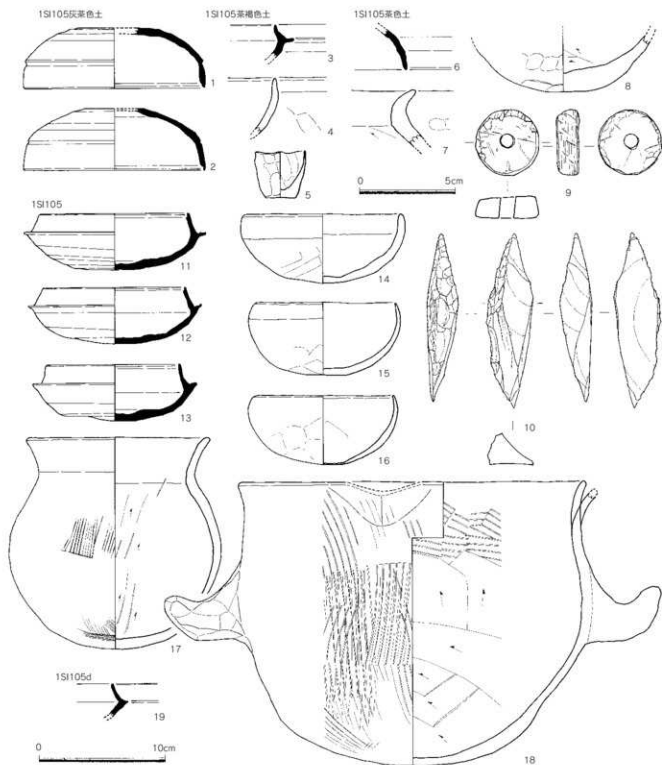


Fig 25 京ノ尾遺跡第 2 調査 SI10出土遺物実測図 (13・9・10は12)

輪状の把手が貼付される。胴部の片面は平坦でカキ目が残る。その片面は丸味があり、その中央付近は器面が薄く、製作時にこの部分だけ穴を開けておき、その後塞いだことによるものと推測される。

土師器

甕 (10~13) 10は復元口径 10.2cmでやや小型だが頸部が長く壺のような形状である。11は内面ナデ、その他はヨコナデ。復元口径 12.8cm。12は口縁部を僅かに外反させ、胴部は殆ど張らない器形である。口縁部はヨコナデ、その他は磨減し調整不明。復元口径 23.9cm。13は口縁部を僅かに外反させる。口縁

部ヨコナデ、内面は不定方向のナデ調整。

鉢(14) 上部を欠損するため、形状が推測しがたいが、底部は比較的平坦に仕上げるため、鉢状のものと同推測される。内面はヘラ削り、外面には残りは良くないがハケ目が確認できる。

1S1120茶色土出土遺物(Fig.26)

須恵器

坏蓋(15) 口縁部はやや内側に曲がっているなど全体的に形が歪んでいる。口径13.1cm、器高4.1cm、外面上半は回転ヘラ削り。内面天井部不定方向のナデ。

坏身(16-18) 16は口径10.1cm、器高4.2cm、17は口縁端部片で、残存範囲は全て回転ナデ調整。18は復元口径11.1cm、器高5.0cm、焼成・還元が悪く黄灰白色を呈する。外面の回転ヘラ削りは底部の僅かな範囲のみである。

土師器

手捏ね土器(19) 扁平に作られている。口径3.2cm、器高1.4cm。

甕(20) 体部中位に最大径とする丸味のある器形で、口縁部は若干肥厚させている。外面はタテハケ、内面はヘラ削り調整である。復元口径11.8cm、器高16.0cm。

1S1125茶褐色土出土遺物(Fig.27)

須恵器

無蓋高坏(1) 体部中位に奈の突帯を巡らし、その下に部分的に櫛描き波状文を施す。外面下半は回転ヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。復元口径18.0cm。

土師器

坏(2・3) 2点とも磨滅が目立つ。2は復元口径12.0cm、3はやや小さく復元口径8.2cm、器高5.8cm。

高坏(8) 低い脚を持つタイプで、外面は縦方向のナデ、内面は横方向のナデ調整で、内外面とも部分的に黒色漆が残っている。復元高台径9.6cm。

甕(4) 底部付近の破片で、器面は砂粒が浮き出るほど磨滅している。

甕 甕(5・6) 9は胴部の最大径付近にやや小振りの把手を貼付する。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はヘラ削りで砂粒が上方向に動いているが、磨滅しケズリ単位は不明瞭。復元口径21.8cm。9は口縁部に向かって薄く仕上げる。体部内面はヘラ削り、外面はタテハケ。

手捏ね土器(7) 口径2.8cm、器高2.0cmで口縁部は傾いている。

1S1125暗茶色土出土遺物(Fig.27)

土師器

坏(9-11) 9は復元口径11.8cm、器高4.6cm、外面底部は手持ちヘラ削り。10は口径9.8cm、器高6.2cm、外面底部は手持ちヘラ削り、内面にヘラの当たり痕跡が残る。11は復元口径11.8cm。

甕(12・13) 12はくびれ部で明瞭に屈曲している。内面ヘラ削り。13は底部で外面に僅かにハケ目が残る。底部内外面は使用によりやや磨滅している。

甕 甕(14) 口縁は僅かに外反する。外面は磨滅しているが、タテハケのような痕跡がみられる。内面はヘラ削り。復元口径19.8cm。

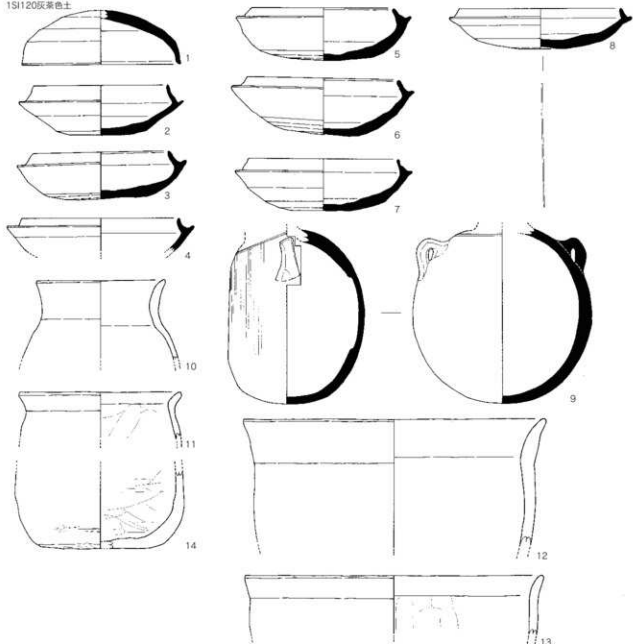
手捏ね土器(15・16) 15は口径4.0cm、器高2.8cm、16は口径3.6cm、器高2.3cm。

1S1125灰茶色土出土遺物(Fig.27)

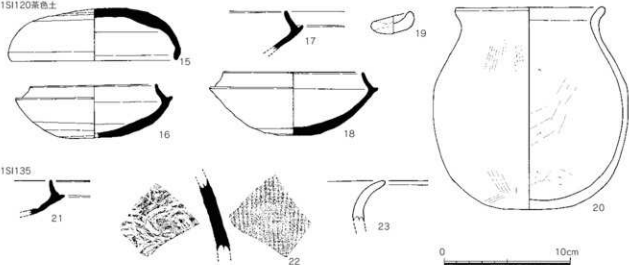
土師器

坏(17・18) 17は外面下半にハケ目が確認できる。口縁部は微妙に残っていて、復元口径7.8cm。

1S1120灰青色土



1S1120黒色土



1S1135

Fig 26 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI120・135出土遺物実測図 (13)

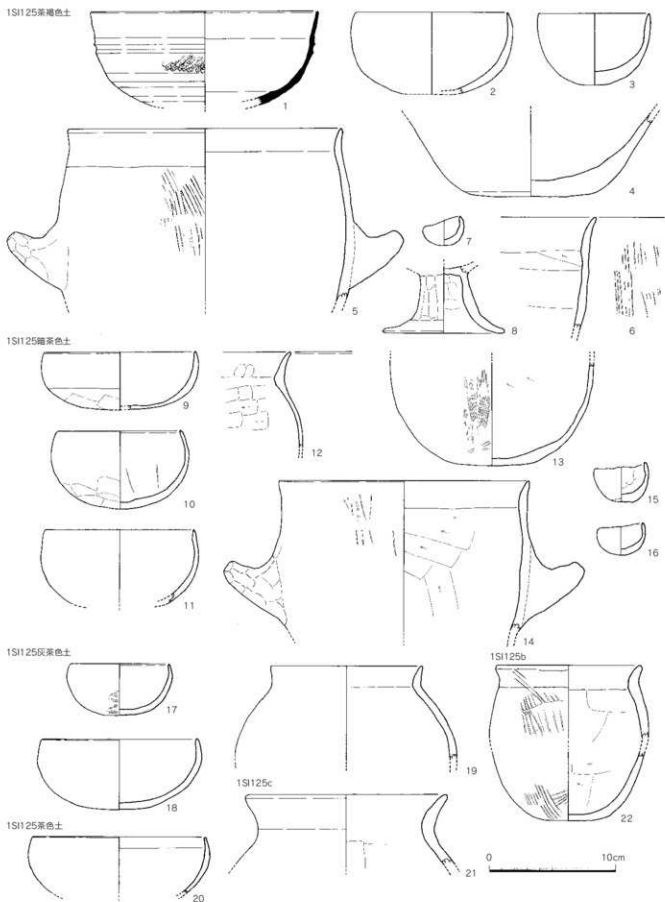


Fig 27 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI125出土遺物実測図 (13)

器高41cm、18は口径12.3cm、器高5.6cm、

甕(19) 頸部が短く、胴部が張っている。復元口径12.0cm、

1S1125茶色土出土遺物(Fig 27)

土師器

坏(20) 復元口径13.6cm、内外面磨滅している。

1S1125柱穴出土遺物(Fig 27)

土師器

甕(21) 口縁部内外面がヨコナデ、体部内面はヘラ削り。柱穴から出土。

小甕(22) 外面タテハケ、内面ヘラ削り、底部外面は使用により磨滅している。柱穴から出土。

1S1135出土遺物(Fig 26)

須恵器

坏身(21) 立ち上がりは短く低い。口縁端部は丸く仕上げる。残存範囲は全て回転ナデ調整。

甕(22) 胴部の一部で内面に同心円の当て具痕、外面には叩き痕が残る。

土師器

甕(23) 口縁部で調整は磨滅し不明。

1S1145茶灰色土出土遺物(Fig 28)

土師器

甕(1) 口縁部の破片。復元口径14.5cm、

1S1145淡茶色土出土遺物(Fig 28)

須恵器

坏蓋(2) 体部中位で明瞭に屈曲し、僅かな段を巡らし、口縁部はやや直線的に開く。口縁端部は若干平坦にする。復元口径12.4cm、

坏身(3-5) 口径10.7-11.2cm、口縁端部は丸く仕上げる。内面底部はナデ。5の器高4.2cm、

土師器

甕(6) 全体的に磨滅しているが、体部内面は砂粒が動いた痕跡がありヘラ削りか。外面も僅かにタテハケのような痕跡がみられる。

1S1145灰茶色土出土遺物(Fig 28)

須恵器

坏蓋(7-8) 7は復元口径12.8cm、器高4.3cm、外面上部は雑な回転ヘラ削りで、きれいな円を描いていない。8は外面上部に回転ヘラ削りで、その下半に浅い沈線が巡る。復元口径15.6cm、器高4.6cm、

坏身(9-13) 口径12.2-14.4cm、器高3.4-4.0cm、口縁部は低く端部は丸く仕上げる。9・10・12の立ち上がりは短く真っ直ぐ立ち上がる。11・13の内面底部は同心円の当て具をナデている。11は外面に須恵器片が付く。12は還元があまく、薄い茶灰色を呈する。

土師器

甕(14) 肩部が張らない器形で、体部内面はヘラ削り、その他は磨滅し不明。

手捏ね土器(15-19) 全て内外面ナデで、16・17以外は丸味のある器形。15は口径3.0cm、器高2.4cm、16は浅く安定した器形。口径3.6cm、器高1.8cm、17は口径4.3cm、器高3.0cm、18は口径3.1cm、器高3.1cm、19は口径4.2cm、器高3.5cm、

石製品

砥石(20) 4面とも研磨されている。縦9.9cm、2.5-4.6cm、花崗岩製。

1S1145出土遺物 (Fig 28・ 29)

須恵器

坏蓋 (21~ 27) 口径 13.5~ 15.2cm 器高 4.0~ 4.8cm。外面上部は回転ヘラ削り。21~ 24・ 26は外面中位に浅い沈線が巡る。21は口縁端部が僅かに外反し、内面に沈線を巡らす。内面上部は不定方向のナデ。22~ 25は口縁端部内面が斜めに仕上げられ沈線の名残りをみせる。22は内面上部の当て具痕をナデ消している。23はやや歪んでいる。内面上部の当て具痕を一部だけナデ消している。24は焼成が悪く土師質状態で、外面頂部が荒れて剥落している。ツマミが欠落している可能性がある。25は焼成・還元が不良。内面上部の当て具痕を残す。26は内面上部が雑なナデ。外面にはヘラ記号がある。27は残存部分が内外面とも回転ナデ。

坏身 (28~ 31) 口径 11.5~ 13.2cm 器高 3.8~ 4.2cm。内面底部には当て具痕が残る。外面底部は回転ヘラ削り。口縁部を丸く仕上げる。30・ 31は立ち上がりやや短く低い。31はかなり歪んでいる。図化していないが、この遺構では坏身・坏蓋で歪んでいるものが多い。

土師器

小鉢 (32) 口径 8.2cm 器高 5.0cm 底径 4.7cm。胎土は 0.2~ 0.3cmの白色砂粒を多く含む。内面はナデ、外面は摩滅し調整不明。

甕 (33~ 37) 33は肩が張らない器形で、復元口径 14.0cm。内面横方向にヘラ削り、外面磨滅しているが僅かにタテハケ。外面が赤褐色に変色する。34は体部が張らず口縁部も僅かに外反するのみで寸胴の器形を示す。内面はヘラ削りの砂粒の動きは確認でき、外面は僅かにハケ目が確認できる。外面が熱を受けて赤褐色に変色する。復元口径 14.6cm 器高 14.6cm。35は肩部がやや張っていて、頸部が厚く、口縁部に向かって短く細く仕上げる。内面は上下左右に雑なナデ、外面タテハケ。36は全体的に磨滅しているが、外面タテハケ、内面ヘラ削り。復元口径 17.0cm 器高 28.8cm。37は全面磨滅が目立つ。復元口径 9.7cmと小型ながら長さ 3.7cmの把手を付ける。胎土は赤茶色で、0.2~ 0.3cmの白色砂粒を含む。

甎 (38) 底部に 5.6cmの孔があるが、体部に把手がない甎である。復元口径 14.6cm 器高 18.0cm。外面には僅かにタテハケが残り、内面は上方向へのヘラ削り調整。外面には一次焼成の黒斑が目立つ。

1S1150淡灰色土出土遺物 (Fig 30)

土師器

坏 (1~ 3) 1は復元口径 12.4cm 器高 6.7cm。器面は磨滅し調整不明。胎土は精製されている。2の器面も磨滅し調整不明。3は底部やや平坦に作られ、葉脈痕跡が残る。鉢に近い器形である。体部外面下半はナデ。全体的に器面が剥離している。復元口径 11.6cm 器高 5.7~ 6.1cm 底径 6.7cm。

石製品

紡錘車 (4) 大きく欠損し、残る部分も片になっている。中央に 0.3cm程の穿孔がある。復元径 4.7cm 厚さは 0.4cm 滑石製。

1S1150焼土出土遺物 (Fig 30)

土師器

坏 (5) 復元口径 11.8cm 器高 5.2cm 胎土には 0.1cm程の白色砂粒を少量含む。全面磨滅しているが、外面はヘラ削り、内面にはミガキ痕跡が僅かに残る。

1S1155灰茶色土出土遺物 (Fig 30)

土師器

坏 (6・ 7) 2点とも磨滅し調整不明。

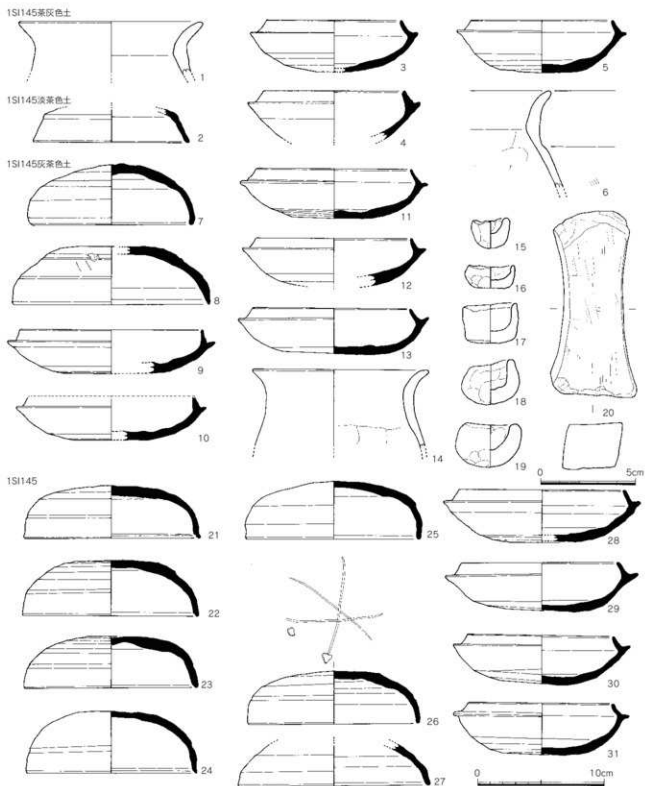


Fig 28 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI145出土遺物実測図 1(13 20は 12)

甕(8) 復元口径 19.6cm、体部内面は粘土紐の繋ぎ目が明瞭に残り、ナデの後部分的にヘラ削りを施している。

1SI155出土遺物(Fig 30)

土師器

坏(9・10) 9は口径 12.4cm、僅かにヘラ削りのような痕跡が残る。10は底部が厚いがその他は薄い。

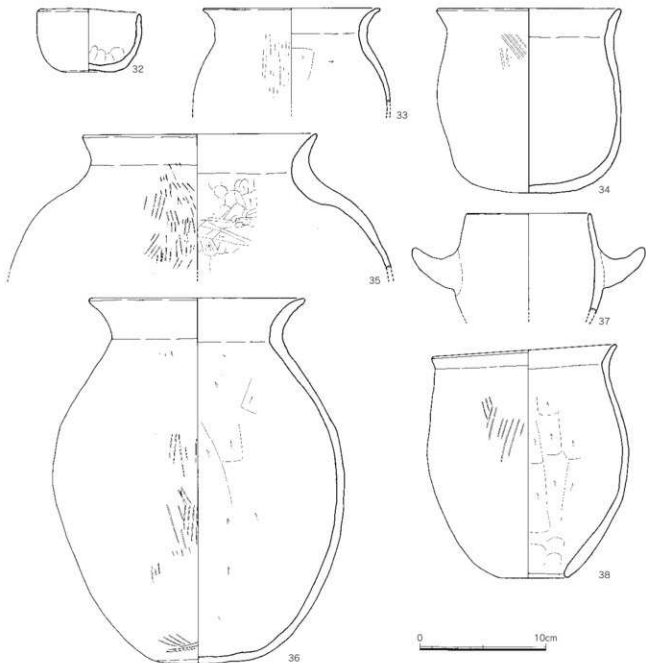


Fig 29 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI145出土遺物実測図2(13)

外面下半はヘラ削り。復元口径 12.2cm、器高 5.2cm。

甕 (11) 胴部下半で、底部は若干平たく作られ、やや使用によって磨滅している。外面は工具によるナデにより粗い条痕が残る。内面は上方向のヘラ削り。

甕 (12) 全体的に調整痕も良好に残り、口縁部内面は横方向のヨコハケ、体部は上方向のヘラ削り、外面は口縁部ヨコナデ、体部中位はタテハケ、下半は斜めの方向のハケ、把手部分もナデの後にハケ調整を施す。器面には一次調整の大きな黒斑が付いている。復元口径 26.4cm、器高 24.7cm、底径 8.6cm。

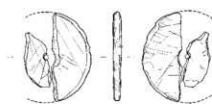
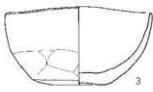
石製品

叩き石 (13) 全体的に敲打痕があり、端部は叩くことによる若干平坦になっている。大きさは縦 10.4cm、横 4.75cm、玄武岩製。

1S1160焼土出土遺物 (Fig 30)

須恵器

1SI150淡灰色土



1SI150焼土

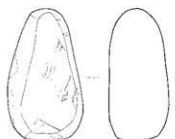


0 5cm

1SI155灰青色土



1SI155



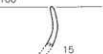
13

1SI160焼土

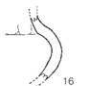


14

1SI160



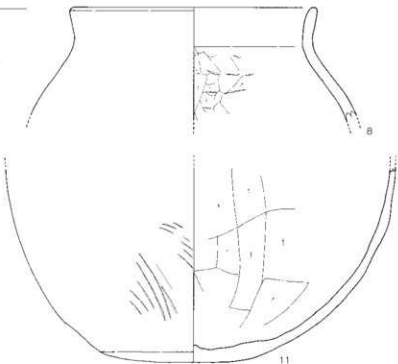
15



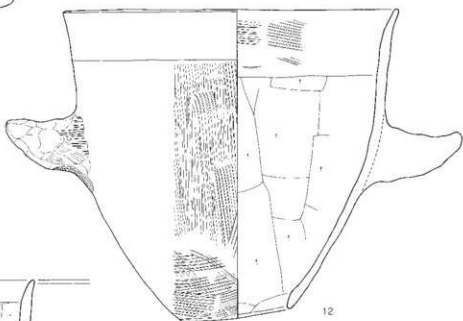
16



17



11



12

0 10cm

F 30 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI150・155・160出土遺物実測図 (13 4・13は 12)

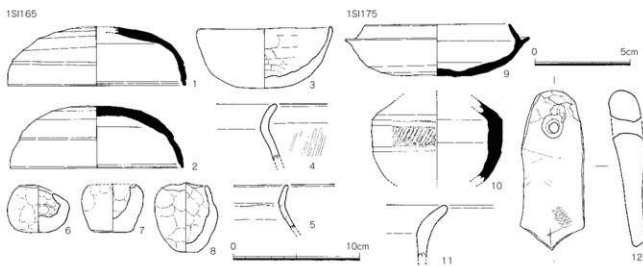


Fig 31 京ノ尾遺跡第 2 次調査 SI165・17出土遺物実測図 (13 12は 12)

坏蓋 (14) 口縁端部は丸く仕上げる。外面上部が僅かに回転ヘラ削り、その内面がナデ調整。

1S1160出土遺物 (Fig 30)

土師器

坏 (15) 胎土は精製された橙茶色土である。内外面とも磨滅している。

壺 (16) 小壺の胴部とみられ、内面ナデ調整。胎土には白色砂粒を多く含む。

甕 (17) 体部内面はヘラ削り。その上の口縁部は直線的で端部に向かって細く仕上げる。

1S1165出土遺物 (Fig 31)

須恵器

坏蓋 (1・2) 2点とも体部上半部回転ヘラ削り。1は復元口径 141mm、器高 47mm、内面天井部は当て具痕を粗くナデている。体部外面中位に沈線が、口縁端部内面に浅い沈線が巡る。2は復元口径 137mm、器高 49mm、体部外面中位に段が巡り、口縁端部内面に明瞭な沈線が巡る。内面天井部には同心円の当て具痕残る

土師器

坏 (3) 内面は強いナデ。外面は磨滅している。胎土は粗く、0.2~0.3mmの白色砂粒を多く含む。口径 106mm、器高 47mm、

甕 (4・5) 4は外面粗いハケ、内面ナデ。5は内面に粘土紐の繋ぎ目痕跡が残る。

手捏ね土器 (6~8) 全ての内外面にナデ痕跡が残る。胎土は0.2~0.3mmの白色砂粒を多く含む。6はかなり歪んでいる。口径 26mm、器高 37mm。7は口縁部の一部を欠損する。8は口径 34mm、器高 55mm、

1S1175出土遺物 (Fig 31)

須恵器

坏身 (9) 外面底部は回転ヘラ削り、内面底部はナデ。その他は回転ナデ。口縁端部は丸く仕上げる。口径 115mm、器高 42mm、

壺 甕 (10) 口縁部を欠損しているため、器種は判別できない。体部中位には 奈の沈線を挟んでハケ状工具による刺突文が巡らされている。

土師器

甕 (11) 口縁部の破片で、全面磨滅している。

石製品

砥石(12) 細長く縦84cm 横34cm 厚さ17cm 上部に径11cm程の穿孔があり、砥石として使用していた時に紐を通していたのか、もしくは二次加工なのかもしれない。その反対端もV字状に加工されている。両面とも研磨されている。

木棺墓

1ST090出土遺物 (Fig 32)

土師器

坏 a(1-4) 1-4の外底部は全て回転

ヘラ切りで、底部と体部の境は丸味があり、体部は口縁部に向かって僅かに外反する。1は口径11.7cm 器高3.2cm 底径7.3cm。2は口径11.8cm 器高2.7-3.7cm 底径8.1cm 外底部には板状圧痕が残る。3は口径12.0cm 器高3.2cm 底径8.2cm。4は器高2.8cm。

黒色土器

皿 c(5) 内外面ともミガキ c 外底部は回転ヘラ切りの後ナデ。口径16.6cm 器高3.5cm 高台径7.8cm。

土坑

1SK010茶色土出土遺物 (Fig 33)

須恵器

小甕(1) 体部下半は叩きを施す。その他はナデもしくはヨコナデ。内面には粘土紐接合痕跡が確認できる。口径12.4cm 器高12.7cm。

土師器

坏(2) 磨滅している。9は僅かにミガキが確認できる。

甕(3・4) 3は肩部で内面に粘土紐接合痕跡が確認できる。4は口縁部の小片。

1SK010茶褐色土出土遺物 (Fig 33)

坏(5) 僅かにミガキが確認できる。

鉢(6) 小片のため全形は推測しがたいが、僅かに内湾するものの直線的な体部である。

甕(7) 体部で全体的に磨滅しているが、外面に僅かにハケ目が確認できる。

1SK073灰茶色土出土遺物 (Fig 33)

肥前系磁器

皿(8) 口縁部を屈曲させ外反させる。内面には鮮やかな呉須で文様を描く。

碗(9) 内面底部には薄い藍色で圏線と文様を施す。

国産陶器

甕(10・11) 10は口縁部で端部を肥厚させ、内外面とも回転ナデのあと黒褐色と茶褐色釉を全面に施す。一部白色釉が混じる。11は底部端を斜めにカットし、そこから底部は露胎である。胎土は淡茶褐色土、内面は暗褐色と黄灰色釉を施す。復元底径15.6cm。

1SK073茶色土出土遺物 (Fig 33)

土師質土器

鉢(12) 口縁部は磨滅しているが、その下半は内外面ともハケ目が確認できる。

肥前系磁器

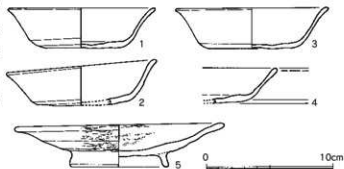


Fig 32 京ノ尾遺跡第 次 ST090
出土遺物実測図 (13)

椀(13-16) 13は外面に薄い紺色で文様を施す。復元高台径5.6m、14は内外面とも白色化粧土を施し、内面底部に「壽」と圏線を施す。復元高台径3.8m、15は内面に白色釉、外面に緑灰色釉を施す。内面底部に五弁花文を施す。復元高台径3.7m、16は外面に暗紺色で文様を施す。高台は断面方形で、壘付けは露胎。復元口径7.0m、器高5.3m、高台径3.6m。

皿(17) 内面底部に五弁花文、高台付近に圏線を巡らす。高台壘付けは露胎。復元高台径8.8m、
国産陶器

皿(18) 胎土は黄褐色土で、内面底部は黄褐色釉を掻き取っている。復元口径12.8m、器高4.8m、
復元高台径5.2m。

火入(19) 高台壘付けには重ね焼き痕が残る。暗茶褐色釉に白色化粧土が塗られている。高台径6.4m。

鉢(20) 外面は高台壘付けが露胎で、その他は淡黄灰色の釉を施す。内面は露胎で回転ナデ。復元高台径9.6m。

襠鉢(21) 茶褐色の胎土で、底部外面は回転ナデのような痕跡を残す。

1SK130出土遺物(Fig.33)

土師質土器

鉢(22) 内面底部はハケ状工具による回転ナデが施され、条痕が同心円状に残る。外面は磨滅し、器面がポコポコに荒れている。底径29.5m。

その他の遺構出土遺物(Fig.34)

石製品

石包丁(1) 2つの孔が穿たれた中央部分を残し、両側は欠損する。残存長7.0m、幅5.1m、厚さ0.5m、輝緑凝灰岩製。S5より出土。

石匙(2) 片側を欠損する。縦5.3m、横6.4m、厚さ1.2m、安山岩製。S7より出土。

石核(3) 6.0m、4.5m、厚さ2.5m、安山岩製。裏面には自然面が残る。S9より出土。

灰茶色土出土遺物(Fig.35)

須恵器

蓋c(1) 扁平なボタン状のツマミを付ける。

蓋3(2) 内外面とも回転ナデ。

坏a(3) 復元口径14.4m、器高3.3m、底径10.8m、外面底部はヘラ切り未調整。

坏c(4-8) 4・5はやや小型のもので、4は高台が底部外側に付く。復元口径10.8m、器高3.7m、復元高台径7.2m、5は復元口径12.0m、器高3.8m、復元高台径8.3m、6-8はやや大きく、内面底部不定方向のナデ。6は復元高台径9.0m、7は復元口径14.0m、8は復元口径14.8m。

土師器

小皿a(9) 底部は回転糸切り。内面底部は不定方向のナデ。復元底径5.6m。

肥前系磁器

蓋(10) 外面には呉須で梅花文様が描かれ、ツマミは欠損する。口縁端部の露胎部分には溶着を防ぐ細かい砂が付着している。口径14.0m。

皿(11-13) 11は高台外面に圏線を5壘に施し、内面にはやや暗い呉須で文様を施す。高台壘付けは露胎で細かい砂粒が付着している。復元高台径8.8m。12は外面が露胎、内面は暗緑色の釉で底部付近を輪状に釉を掻き取っている。復元高台径4.4m。13は高台外面に圏線を4壘に施し、内面には呉須で文様を施す。高台壘付けは露胎。復元高台径9.6m。

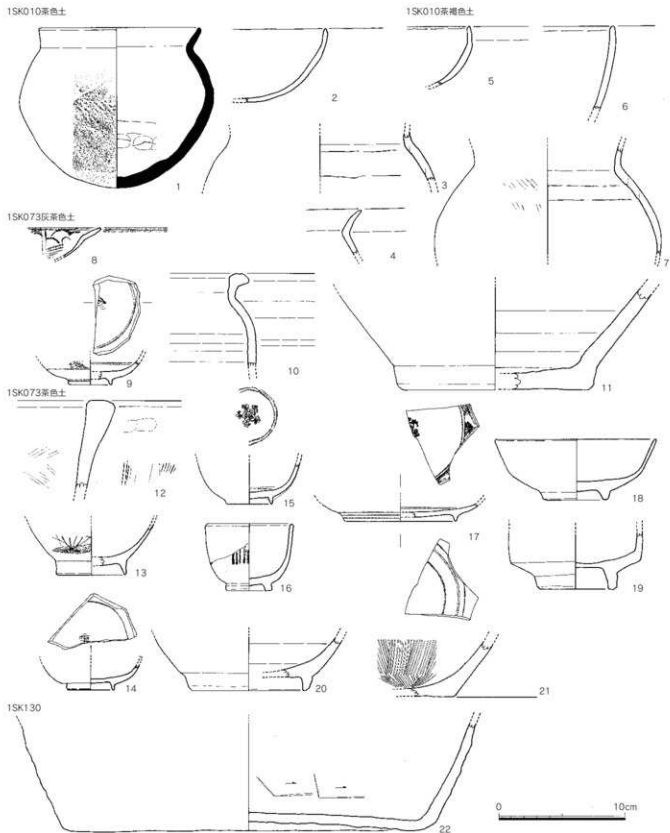


Fig 33 京ノ尾遺跡第 次調査SK010・073・130出土遺物実測図(13)

碗(14・15) 14はいわゆる広東碗で、高台と体部の境目に圈線を施し、外面に薄い青色で文様を施す。内面にも圈線を施す。復元高台径6.5cm、15の内面底部は輪状に釉を掻き取り、高台畳付けは露胎で砂粒が付着する。外面には淡い呉須で文様を施す。復元高台径4.4cm

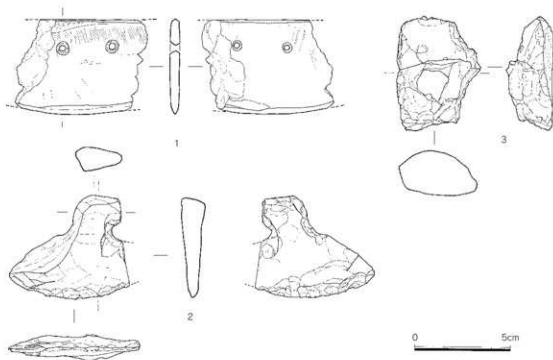


Fig 34 京ノ尾遺跡第 2 調査その他の遺構出土石製品実測図 (12)

石製品

紡錘車 (16) 径 34 36mm 厚さ 0.6mm の滑石製で、中央に径 0.2cm 程の小さな穿孔がある。表裏とも細かい研磨痕が明瞭に残る。

管玉 (17) 長さ 1.65m 径 0.6~0.7m の淡緑色の泥岩製。穿孔は先細り状態。

茶色土出土遺物 (Fig 35)

須恵器

蓋 3 (18) 外面上部は回転ヘラ削り、内面天井部はナデ。その他は回転ナデ。復元口径 14.1cm。

坏 c (19・20) 低い断面方形の高台を貼付する。20は復元高台径 9.2cm、21は全面回転ナデ。復元口径 11.0cm、器高 3.1cm、底径 7.6cm。

表土出土遺物 (Fig 35)

金属製品

銭 (21) 寛永通宝。

(5) 小結

今回の調査でわかったことは主に以下のとおりである。

- ・大佐野川の南岸丘陵北斜面を利用した 6 世紀代の竪穴住居 (2 棟) を中心とした集落の確認。
- ・奈良時代の包含層の確認。
- ・落とし穴を列状に確認。
- ・阿蘇 4 火砕流の堆積物台地の再確認。

調査地は現状では 4 段の段造成があり、標高差が約 8m あり、それぞれで竪穴住居が検出されていることから、当時から段造成し、合計 2 棟の竪穴住居を建築したことになる。道路建設などによって削平されているが、南側の丘陵にも集落が広がっていた可能性は十分考えられる。

また、奈良時代の包含層が 6 世紀代の遺構面を一部覆っており、付近に奈良時代の遺構の存在を窺わ

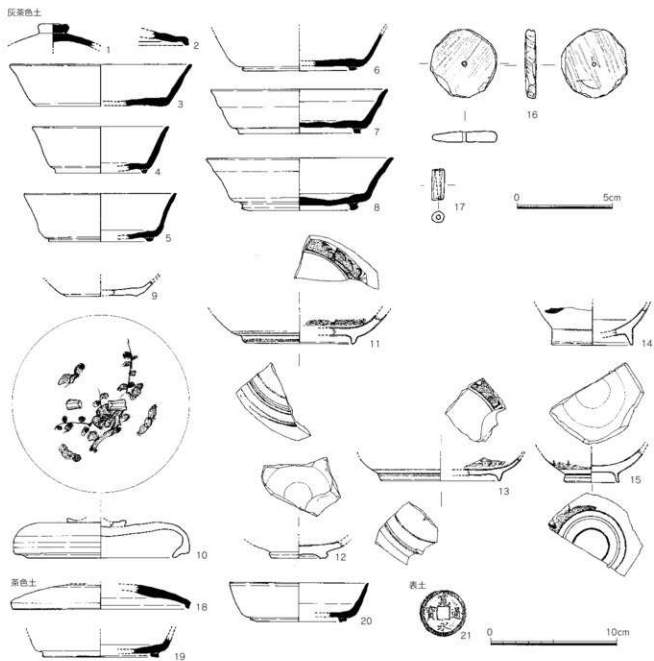


Fig 35 京ノ尾遺跡第 1 次調査灰茶色土・茶色土・表土出土遺物実測図 (13 16 17は 12) せる。第 1 次調査では明確な遺構は確認できていないが、時期不明の掘立柱建物 (SB180) が奈良時代の可能性も考えられる。

古墳時代と奈良時代以外の遺構としては、明確な時期は不明であるが、形状から落とし穴と考えられる土坑が列状に検出され、当時の獣道に掘削されたものと推測される。



Fig 36 京ノ尾遺跡第 2 次調査遺構略測図 (1 400)

Tab 11 京ノ尾遺跡第 1 次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	IS1001	竪穴住居 茶灰色土 炭泥じり	6世紀前半(11期)	Y18
2		ピット群		Y16
3		ピット群		W19
4		ピット		V20
5	IS1005	竪穴住居 浅い	古墳時代	Q29
6		ピット		V20
7		ピット群 S-1→7		Y18
8		溝 土管理設備	近現代	X16
9		土坑 増+は染らかく現代の腐葉土坑。未完埋	近現代	W15
10	ISK010	土坑	6世紀	R23
11		土坑		T22
12		ピット群		T22
13		溝 溝の段差部分に掘られた溝?	近現代	T23
14		たまり		X19
15	IS1015	竪穴住居	6世紀前半(11期)	U25・26
16		ピット S-1の床面のピット	古墳	X18
17		窪み S-1の床面		X17
18		ピット群 S-1の床面のピット		Y17
19		ピット群 S-1の床面のピット		X18
20	IS1020	竪穴住居	6世紀中頃(111A期)	U18
21		ピット群		Y16
22		ピット群 S-8の延長上の柱列(支柱?)		T20
23		ピット群		S25
24		堆積層 S-15の上層面	6世紀中頃(111A期)	U25
25	IS1025	竪穴住居	弥生時代中頃?	R27
26		ピット群		S27
27		土坑	8世紀前～中	S28
28		ピット群	古墳時代	R25
29		ピット群 S-6の床面のピット	古墳時代	Q29
30	IS1030	竪穴住居	6世紀	X27
31		土坑 竪穴住居の残骸か?		T29
32		土坑	8世紀前～中	W27
33		ピット群		W29
34		ピット群		Y29
35	ISB180	掘立柱建物の一部		W28
36		ピット群		V29
37		土坑 近世溝?	6世紀	R30
38		ピット群		F28
39		ピット群	6世紀～現代	S30
40	IS1040	竪穴住居 S-15→40	6c中～後(111A～B期)	U24
41		ピット群		S29
42		土坑		R25
43		土坑 S-15の床面		V26
44		ピット S-15の柱穴(S-15c)		V26
45	ISX045	落とし穴		R30
46	IS1015c	ピット 柱穴(S-15c)		T26
47	IS1015b	ピット 柱穴(S-15b)		T26
48	IS1015-I	ピット 柱穴(S-15-I)	6世紀	Q28
49		土坑		R30
50	IS1050	竪穴住居	6世紀後半(111B期)	P30
51		段落ち		W31
52		ピット群 S-30内のピット	古墳	X27
53		ピット群 S-40内のピット(柱穴)		U23
54	IS1015a	ピット S-15内の柱穴(S-15a)	6世紀	U25
55	ISX055	落とし穴		S29
56	IS1015ア	ピット S-15内の柱穴(S-15ア)		U24
57		ピット		T29
58		ピット群		S25
59		ピット S-15内のピット	古代	U25
60	ISX060	落とし穴		T27
61		ピット群		1段
62		ピット群		1段
63		ピット群		1段
64		土坑 S-90の最上面		1段
65	ISX065	落とし穴 黄褐色土		S28
66		ピット群		1段

Tab 12 京ノ尾遺跡第 次調査遺構一覧表

67		土坑	段掘り		1段
68		ピット群			1段
69		ピット群			1段
70	1SX070	落とし穴	黄褐色土		V27
71		ピット群			1段
72		ピット群			1段
73	1SK073	土坑		江戸時代後期～近代	2段
74		土坑			1段
75	1SX075	落とし穴			1段
76		ピット		6世紀前半(II期)	2段
77		埋瓦		近代	2段
78		埋瓦	榎木修植跡	平成	2段
79		段落ち			2段
80	1S1080	竪穴住居	灰茶色土	古墳時代	1段
81		ピット群		奈良時代	2段
82	1SK082	埴土		近現代	2段
83		溝	2段部分が削平される以前の丘陵根の溝か		2段
84		ピット群			2段
85	1SX085	落とし穴			1段
86		ピット群			1段
87		同心円溝			3段
88		溝			2段内
89		埴積層			2段西
90	1ST090	木棺墓	上層はS-64	VII期(9世紀中頃)	1段
91	1SX091	土坑		奈良時代	3段
92	1SX092	土坑			3段
93		土坑			2段西
94		土坑	検出時は墓と思ったが、埋土差しい。	近現代	2段西
95	1S1095	竪穴住居	検出時に埴土が2つに分かれていた。	6c中～末(IIIB～IV期)	1段
96		土坑		現代	3段
97		埴積層	S-87・97	8世紀中	2段西
98		埴み		奈良時代～	2段西
99		溝		6世紀後半	2段西
100	1S1100	竪穴住居	土層観察ではS-100→106、平面では逆	6c中～後(IIIA～B期)	1段
101		ピット群		奈良時代	2段西
102		上埴群		奈良時代?	2段西
103		上埴群			3段
104		土坑		奈良時代?	3段
105	1S1105	竪穴住居	II期の遺物が多いが下層にIIIB期の遺物あり。	6c前～後(II～IIIB期)	1段
106		埴積層			2段西
107		土坑			2段西
108	1SX108	土坑	S-89のド	6世紀	2段西
109		土坑	S-150と同一致		2段西
110	1S1110	土坑墓	S-110→S-90	9世紀前半以前	1段
111	1SX111	埴土			2段西
112	1SX112	埴土			2段西
113		土坑	S-89のド		2段西
114		土坑	S-89のド		2段西
115	1S1115	竪穴住居	S-125→115	6世紀前半(II期)	2段
116		ピット群		奈良時代	2段西
117		ピット			2段西
119		ピット群			2段西
120	1S1120	竪穴住居	遺物が多い。	6世紀末(IV期)	2段
121		ピット群			028
125	1S1125	竪穴住居	S-125→115	6世紀前半(II期)?	2段
130	1SX130	埋瓦		中世～近世	2段
135	1S1135	竪穴住居	茶色土 雑多く含む	古墳時代	3段
140	1SX140	落とし穴			3段
145	1S1145	竪穴住居	S-150→S-145	6世紀後半(IIIB期)	2段西
150	1S1150	竪穴住居	S-150→S-145	6c前～中(II～IIIA期)	2段西
155	1S1155	竪穴住居		6世紀	3段
160	1S1160	竪穴住居		6世紀後半(IIIB期)	3段
165	1S1165	竪穴住居		6世紀中頃(IIIA期)	2段西
170	1SX170	落とし穴	S-180との切り合い未確認。		3段
175	1S1175	竪穴住居		6世紀後半(IIIB期)	2段西
180	1SB180	竪立柱遺物		奈良時代か?	V28・29

Tab 21 京ノ尾遺跡第 2 次調査出土遺物一覧表

S-1 黒色土		S-15(1)	
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪, 燧石, 破片	須 東 割 高坪, 燧石, 破片	須 東 割 高坪, 燧石, 破片
土 形 割 坪, 鉢, 半環状土器, 小壺, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 鉢, 半環状土器, 小壺, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 燧石, 半環状土器, 小壺, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 燧石, 半環状土器, 小壺, 貯蔵具片
石 製 品 打製石器?		金 属 品 銅線	金 属 品 銅線
S-1 茶褐色土		S-15(2)	
須 東 割 坪, 環溝	須 東 割 坪	須 東 割 坪	須 東 割 坪
土 形 割 坪, 高坪, 鉢, 壺, 貯蔵具片, 半環状土器	土 形 割 坪, 高坪, 鉢, 壺, 貯蔵具片, 半環状土器	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石
須 東 割 割産(溝入小?)	須 東 割 割産(溝入小?)	土 形 割 高坪	土 形 割 高坪
石 製 品 割産	石 製 品 割産	S-15(3)	
S-2		S-15(4)	
須 東 割 高坪, 燧石	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪
土 形 割 破片	土 形 割 破片	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石
S-3		S-15(5)	
土 形 割 破片	土 形 割 破片	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪
須 東 割 高坪, 燧石	須 東 割 高坪, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石
S-4		S-15(6)	
須 東 割 割産?, 破片	須 東 割 割産?, 破片	土 形 割 坪, 小壺	土 形 割 坪, 小壺
土 形 割 破片	土 形 割 破片	S-15(7)	
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	土 形 割 坪, 鉢, 燧石	土 形 割 坪, 鉢, 燧石
金 属 品 銅製陶器片手合?	金 属 品 銅製陶器片手合?	S-15(8)	
石 製 品 石製	石 製 品 石製	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪
S-5		S-15(9)	
土 形 割 坪, 破片	土 形 割 坪, 破片	土 形 割 坪, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 貯蔵具片
S-6		S-15(10)	
須 東 割 土器破片	須 東 割 土器破片	土 形 割 破片, 破片	土 形 割 破片, 破片
須 東 割 土器破片	須 東 割 土器破片	S-15(11)	
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	土 形 割 高坪, 燧石?	土 形 割 高坪, 燧石?
石 製 品 磁石	石 製 品 磁石	S-15(12)	
S-7		S-15(13)	
須 東 割 坪	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石
土 形 割 坪, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 高坪, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 高坪, 貯蔵具片
S-8		S-15(14)	
土 形 割 破片	土 形 割 破片	石 製 品 割産, 燧石, 燧石	石 製 品 割産, 燧石, 燧石
須 東 割 坪, 燧石, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石, 燧石	S-15(15)	
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	土 形 割 坪, 半環状土器, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 半環状土器, 貯蔵具片
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	S-15(16)	
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	S-15(17)	
石 製 品 磁石	石 製 品 磁石	S-15(18)	
S-9		S-15(19)	
須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石
土 形 割 土器破片, 破片	土 形 割 土器破片, 破片	土 形 割 坪, 燧石, 燧石, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 燧石, 燧石, 貯蔵具片
須 東 割 高坪, 燧石, 燧石, 燧石, 燧石	須 東 割 高坪, 燧石, 燧石, 燧石, 燧石	金 属 品 銅製	金 属 品 銅製
須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪	須 東 割 高坪
金 属 品 銅製土具, 割産	金 属 品 銅製土具, 割産	土 形 割 高坪, 燧石(燧石), 燧石, 燧石	土 形 割 高坪, 燧石(燧石), 燧石, 燧石
石 製 品 石製	石 製 品 石製	S-15(20)	
S-10茶褐色土		S-15(21)	
土 形 割 坪, 高坪, 燧石, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 高坪, 燧石, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 貯蔵具片
石 製 品 打製(現代小), 燧石	石 製 品 打製(現代小), 燧石	S-15(22)	
金 属 品 点割	金 属 品 点割	土 形 割 坪, 燧石	土 形 割 坪, 燧石
土 形 割 土器	土 形 割 土器	S-15(23)	
S-10茶色土		S-15(24)	
須 東 割 坪, 燧石	須 東 割 坪, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石
土 形 割 坪, 燧石, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 燧石, 貯蔵具片	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石
S-11		S-15(25)	
須 東 割 坪	須 東 割 坪	須 東 割 坪, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石
土 形 割 貯蔵具片, 破片	土 形 割 貯蔵具片, 破片	土 形 割 坪, 燧石, 燧石	土 形 割 坪, 燧石, 燧石
土 形 割 下割産?	土 形 割 下割産?	S-15(26)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	須 東 割 坪, 燧石, 燧石, 燧石	須 東 割 坪, 燧石, 燧石, 燧石
金 属 品 点割	金 属 品 点割	金 属 品 点割	金 属 品 点割
S-12		S-15(27)	
土 形 割 貯蔵具片, 破片	土 形 割 貯蔵具片, 破片	石 製 品 打製(燧石), 燧石, 燧石, 燧石	石 製 品 打製(燧石), 燧石, 燧石, 燧石
須 東 割 割産	須 東 割 割産	土 形 割 土器	土 形 割 土器
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(28)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(29)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(30)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(31)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(32)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(33)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(34)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(35)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(36)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(37)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(38)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(39)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(40)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(41)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(42)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(43)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(44)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(45)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(46)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(47)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(48)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(49)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(50)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(51)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(52)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(53)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(54)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(55)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(56)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(57)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(58)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(59)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(60)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(61)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(62)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(63)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(64)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(65)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(66)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(67)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(68)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(69)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(70)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(71)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(72)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(73)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(74)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(75)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(76)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(77)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(78)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(79)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(80)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(81)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(82)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(83)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(84)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(85)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(86)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(87)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(88)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(89)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(90)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(91)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(92)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(93)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(94)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(95)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(96)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(97)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(98)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(99)	
須 東 割 割産	須 東 割 割産	S-15(100)	

Tab 24 京ノ尾遺跡第 次調査出土遺物一覧表

S-90①	須 恵 銅鍍片
S-91 赤色土	土 師 銅鍍片、鍍片
	石 製 品(石環)
S-91	須 恵 銅片、牙籤、鏃、鏃?
	土 師 銅片、鏃
S-93	須 恵 銅片、鏃
	土 師 銅鍍片
	輸入品 東京 羽根形石製鏃片
S-94	須 恵 銅片、鏃、鍍片
	土 師 銅鍍片
	瓦 壱塚土瓦
S-95	須 恵 銅片鏃、環身、鏃?、鏃
	土 師 銅片、貯蔵具片
	石 製 品(瓦)
	土 製 品(粘土塊)
S-95 赤色土	土 師 銅貯蔵具片
S-96	須 恵 銅片
	土 師 銅貯蔵具片
S-96	須 恵 銅片、環身、鏃
	土 師 銅鍍片
	須 恵 銅 銅鍍
	板 前 三 輪 銅鍍
S-97	須 恵 銅片、環、環身、環身、環身、環、鏃、鏃
	土 師 銅片、鏃
	石 製 品(石鏃)
S-98	須 恵 銅片鏃、鏃?、鏃、鍍片
	土 師 銅片、貯蔵具片、鏃、鍍片
S-99	須 恵 銅片鏃、環身、鏃、鏃、鏃
	土 師 銅片鏃、環身、鏃、鏃、手取粘土器、貯蔵具片
S-100	須 恵 銅片鏃、環身
	土 師 銅片鏃、鏃
	瓦 瓦 製 品(鏃、刀、刀子)
S-100E	須 恵 銅片鏃
S-100②	土 師 銅鏃
S-100③	須 恵 銅片鏃
	土 師 銅貯蔵具片
S-100④	須 恵 銅鍍片
	土 師 銅鏃、貯蔵具片
S-101	須 恵 銅片鏃、環、鏃
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-102	須 恵 銅鏃
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-103	土 師 銅貯蔵具片
	石 製 品(石鏃)
S-104	須 恵 銅鏃
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-104 赤色土	土 師 銅貯蔵具片
S-105 赤色土	須 恵 銅片、環身
	土 師 銅片、手取粘土器、貯蔵具片
	石 製 品(瓦)

S-105 赤色土	須 恵 銅片鏃、環身、鍍片
	土 師 銅片、貯蔵具片、鏃
	石 製 品(手取粘土器、埋石製の鏃、瓦)
	土 製 品(粘土塊)
S-105 赤色土	須 恵 銅片鏃
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-105①	須 恵 銅片鏃
S-105②	須 恵 銅片鏃
S-105③	須 恵 銅片鏃
S-105④	須 恵 銅片鏃
S-105⑤	土 師 銅片
S-105⑥	土 師 銅片
S-105⑦	土 師 銅片
S-105⑧	土 師 銅片
S-105⑨	土 師 銅片
S-105⑩	土 師 銅片
S-105⑪	土 師 銅貯蔵具片
S-105⑫	須 恵 銅片鏃、鍍片
	土 師 銅貯蔵具片
S-106	土 師 銅貯蔵具片
S-107	須 恵 銅片
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-108	須 恵 銅片鏃、鍍片
	土 師 銅片、貯蔵具片
S-109	土 師 銅片、貯蔵具片
S-110	須 恵 銅片鏃
S-111	土 師 銅貯蔵具片
	石 製 品(鏃)
S-112	土 師 銅貯蔵具片
S-113	土 師 銅片、貯蔵具片
S-114	土 師 銅片、貯蔵具片
	石 製 品(瓦)
S-114 赤土	土 師 銅片
S-115a	土 師 銅片
S-115b	土 師 銅片
S-115c	土 師 銅片、貯蔵具片
S-115d	土 師 銅貯蔵具片
S-115 赤色土	須 恵 銅片鏃
	土 師 銅貯蔵具片
S-115 赤色土	須 恵 銅片鏃、環身、鏃
	土 師 銅片
S-115①	須 恵 銅片鏃、環身、鏃
	土 師 銅片、鏃、貯蔵具片
	土 製 品(粘土塊)
S-115②	土 師 銅片
S-115③	須 恵 銅片鏃
S-115④	須 恵 銅片鏃

2. 京ノ尾遺跡 第2次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野 329 丁で、京ノ尾遺跡第 1 次調査の東隣に位置する丘陵上である。調査原因は佐野土地区画整理事業で、丘陵が削平されることによるもので、発掘調査は 1999年 12月 20日から 2000年 1月 11日にかけて、京ノ尾遺跡第 1 次調査と平行して行った。調査対象面積 586㎡、調査面積 250㎡を測る。調査は宮崎亮一が担当した。

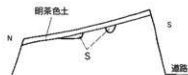


Fig.37 京ノ尾遺跡第2次調査
土層模式図

(2) 基本層位 (Fig.37)

調査前はモウソウ竹林で、南側は県道によって寸断されているが、道路が開通する前は南側の福岡農業高校が存在する丘陵とひと続きであった。北側も住宅等で大きく削平されている。

表土は腐葉土と明茶色土の堆積層で、それらを除去すると遺構面に達する。比較的高い位置にあるため、近現代の攪乱もなく、住宅地の裏山として認識されていたことがわかる。

(3) 検出遺構

竪穴住居

2SI010 (Fig.38)

東西 5.4m、南北 3.7m以上、推定床面積 26.0㎡の方形の竪穴住居である。調査区の北西隅に位置し、西端は第 1 次調査で確認され、北側は大きく削平されている。上面は地形と同様に北側ほど削平され、南辺が最も残りが良く、深さ 0.6mほど遺存する。主柱穴は南側の 2本は確認され、そのほかにも床面にはピットが見られるが、そのピットの並びから大佐野馬場遺跡第 2 次調査の SI10や京ノ尾遺跡第 1 次調査の SI15と同様に 4本柱間にさらに 2本の柱穴が存在する住居になるのかも知れない。これが作り替えによるものか同時に存在したものかは今回解明できていない。

2SI015 (Fig.38)

東西 4.0m、南北 2.2m以上、推定床面積 14.0㎡の方形の竪穴住居とみられる。柱穴とみられるピットが 2個遺存するが、北側は丘陵の傾斜に沿って削平され、残っていない。南側については深さ 0.45mほど残存する。床面には不明確であるが僅かに壁溝らしき痕跡もみられた。

2SI020 (Fig.38)

東西 4.25m、南北 1.85m以上、推定床面積 16.8㎡の方形の竪穴住居とみられる。北側は丘陵の傾斜に沿って削平され、残っていないが、南側は深さ 0.35mほど残存する。床面にピットが 7個確認されたが、どのピットが主柱穴になるかは不明瞭である。

土壇墓

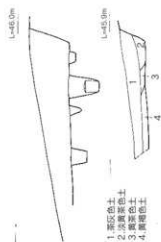
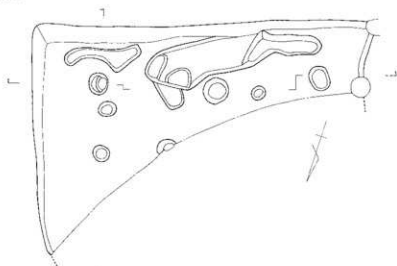
2ST025 (Fig.39)

長さ 1.6m、幅 0.63m、深さ 0.3mの長方形をしている。遺物は古代のものではなく、古墳時代の土師器片が出土しているが、供献したようなものではなく、形状以外に墓と判断できるものはない。

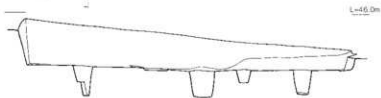
2ST035 (Fig.39)

長さ 1.68m、幅 0.65m、深さ 0.3mの長方形をしている。供献したような遺物はなく、形状以外に墓と

25I010



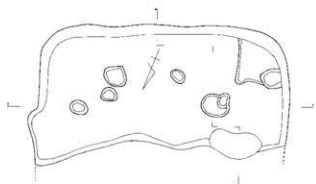
1 褐色土
2 赤褐色土
3 黄褐色土
4 黒褐色土



土層模式図

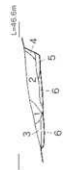
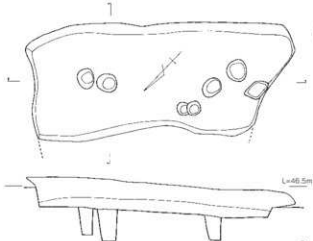


25I015



1 赤色土
2 黒褐色土
3 明茶色土

25I020



1 褐色土と赤褐色土の混和層
2 赤褐色土
3 赤色土
4 やや強い黄褐色土
5 暗灰色土
6 明灰褐色土(やや粗い)

0 2m

Fig 38 京ノ尾遺跡第 2 次調査竪穴住実測図 (160)

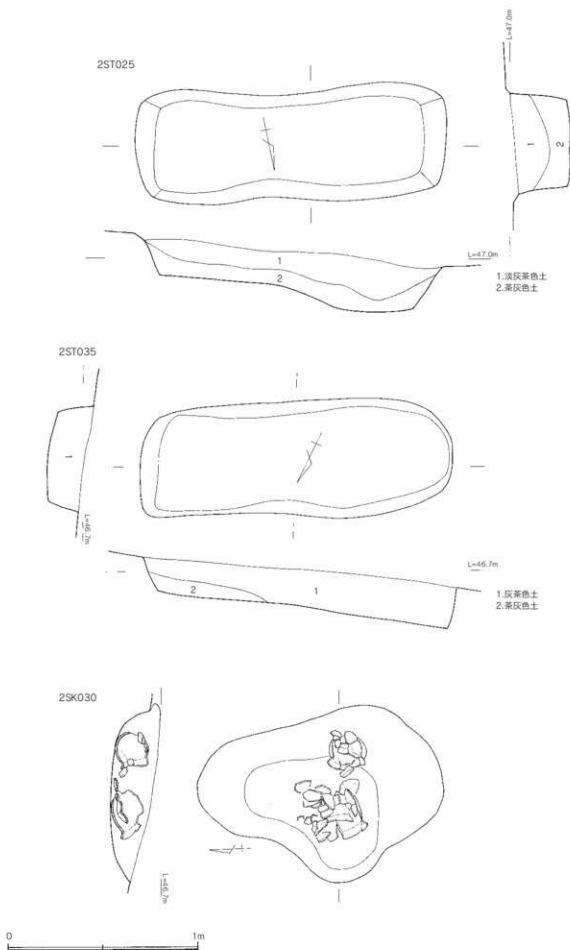


Fig 39 京ノ尾遺跡第2次調査墓および土坑遺構実測図(1/20)

判断できるものはない。

土坑

2SK005

調査区北端にあり、殆ど調査区外である。深さは0.4mで、直線的な検出状況から竪穴住居の可能性も考えられる。

2SK030 (Fig 39)

東西0.93m、南北1.3m、深さ0.3mの不定形な土坑で、土師器の甕が2個分検出された。土坑の規模や埋土状況からは廃棄土坑という感じは受けない。口縁部が2個とも北側を向いていることから、意図的に置いたものかもしくは置いていたものが傾き埋没した可能性は考えられる。

溝

2SD001

検出長5.8m、幅1.5m、深さ0.3~0.5mを測る。埋土はやや明るい灰色土で、土器は全体的に出土する。北側は削平され、立ち上がりは殆ど検出できなかったが、南側はU字形ではなく、垂直に立ち上がる。

(4) 出土遺物

竪穴住居

2SI010 淡灰色土出土遺物 (Fig 40)

須恵器

坏蓋(1) 復元口径15.0cm、外面天井部が回転ヘラ削り、その他は回転ナデ。ヘラ削りと回転ナデとの境は段が付いている。

椀(2) 小破片だが、復元口径8.2cm、外面は中位に2本の沈線がめぐり、下部に横方向のヘラ削りを施す。内部は回転ナデ。

石製品

砥石(3) 長さ9.4cm、幅3.5~2.4cmと細長い。使用面は3面。黒灰色の泥岩製。

紡錘車(4) 全面細かく削ることに作られ、ケズリ痕跡や細かい傷が残されている。大きさは直径4.9cm、厚さ1.1cm、中央に0.8cmの穿孔がある。やや青味がかった白灰色の滑石で作られている。

丸石(5) 大きさは3.8~3.0cm、厚さ1.5cm。人工的に球体に仕上げたかは明確でない。泥岩製。

2SI010 明茶色土出土遺物 (Fig 40)

須恵器

坏蓋(6) 口縁部で、端部は段もなく丸く仕上げる。内外面回転ナデ。

坏身(7) 小破片で、長い立ち上がり部は真っ直ぐ立ち上がっている。内外面とも回転ナデ。

土師器

坏(8) 赤茶色の精製された胎土で、口縁部が丸味を持って内湾する。

甕(9) 外面ヘラ削り、内面ナデ。

2SI015 出土遺物 (Fig 40)

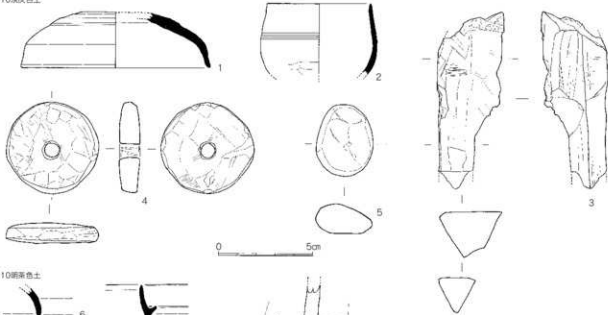
須恵器

坏身(10) 低く内傾した立ち上がりを持つ。受け部に重ね焼き時の蓋の一部が癒着している。柱穴より出土。

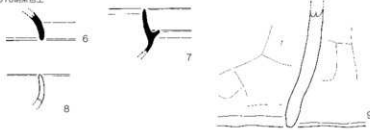
土師器

坏(11) 胎土は精製された橙茶色土で、口縁端部が僅かに外反する。調整は摩滅し不明。

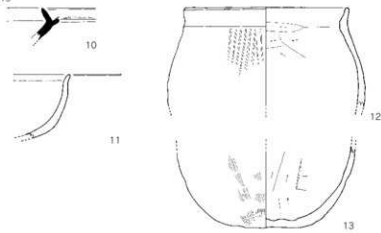
29010淡灰色土



29010暗褐色土



29015



29020

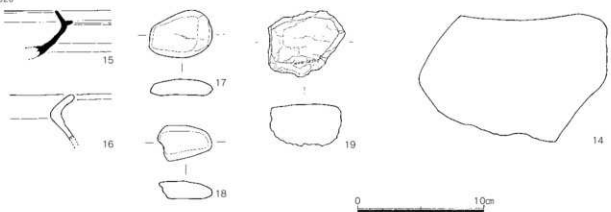


Fig 40 京ノ尾遺跡第2次調査竪穴住居出土遺物実測図 (13 3~5・14・17~19は12)

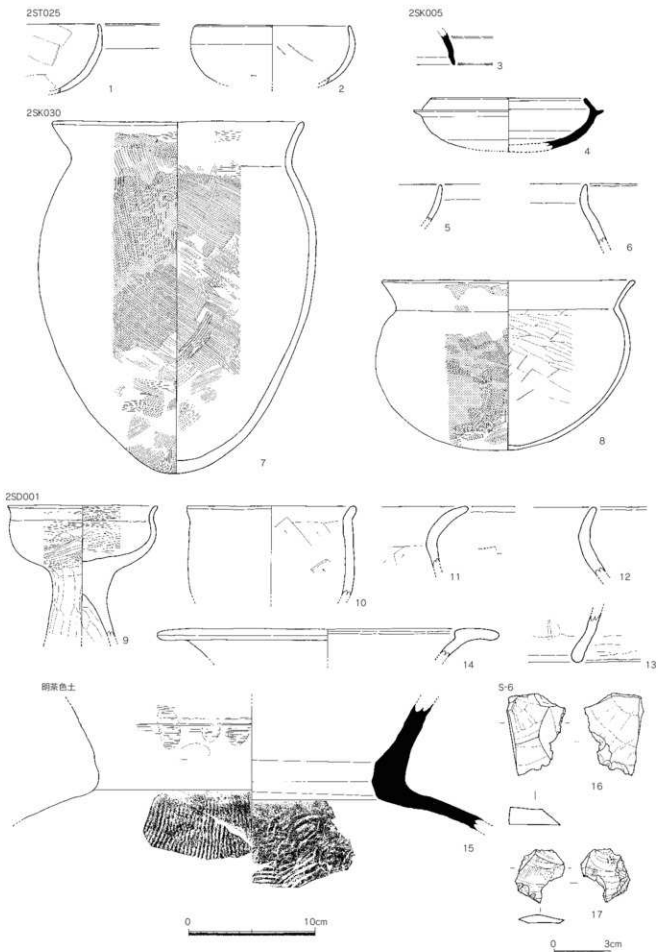


Fig 41 京ノ尾遺跡第 2 次調査土坑・溝出土遺物実測図 (13・16・17は 12)

甕 (12・13) 外面赤茶色の胎土から 12・13で一個体である可能性が高い。両方とも内面ヘラ削り、外面タテハケ。口縁部は僅かに外反する。復元口径 13.0cm。

石製品

砥石 (14) 大きさは 16.5 10.9cm 厚さ 6.7cm。粗い砂岩製で、研磨痕跡が 2面確認できる。

2S1020出土遺物 (Fig.40)

須恵器

坏身 (15) 立ち上がりは低く内傾し、受け部は水平に付く。現存している範囲では内外面とも回転ナデ。

土師器

甕 (16) 口縁部で調整は摩滅し不明。

石製品

丸石 (17・18) 大きさは 1が 2.5 3.3 0.85cm、18が 2.5 3.3 0.85cm。人工的に球体に仕上げたかは明確でない。泥岩製。

土製品

焼土塊 (19) 赤茶色で白色砂粒やスサを含む。大きさは 3.5 4.1 2.2cm。

土墳墓

2ST025出土遺物 (Fig.41)

土師器

坏 (1・2) 2点とも口縁部は内湾しながら立ち上がる。1は内外面とも摩滅しているが、内面にミガキのような痕跡がみられる。2は復元口径 12.4cm。内外面とも摩滅しているが、内面に工具痕と外面底部にヘラ削りのような痕跡がみられる。

土坑

2SK005出土遺物 (Fig.41)

須恵器

坏蓋 (3) 口縁端部内面に僅かに段差が付いている。

坏身 (4) 復元口径 12.4cm。立ち上がりは低く内傾する。体部下半部は回転ヘラ削り、その他の内外面は回転ナデ。

土師器

坏 (5) 体部外面はナデ、内面は摩滅し不明。

甕 甕 (6) 口縁部は僅かに屈曲し、直立している。内面はヘラ削りか。

2SK030出土遺物 (Fig.41)

土師器

甕 (7) 深い甕で、口径 19.9cm 器高 27.8cm。内外面とも細かいハケ調整をしている。煤が口縁部と体部外面上部に付着している。底部は丸底で煤はないが摩滅が目立つ。内面底部に黒茶色の付着物がみられる。

鉢 (8) 浅い甕で、口径 20.0cm 器高 13.4cm。外面は細かいハケを施し、広い範囲で煤が付着する。内面は工具によってナデられ、工具の当たり始めの痕跡が細かく残っている。外面底部は使用によってやや摩滅している。口縁部は内外面ともヨコナデで、外面に煤が付着している。

溝

2SD001出土遺物 (Fig.41)

土師器

高坏 (9) 口縁端部は外反する。坏部は内外面とも細かいミガキが施され、脚部はヘラ削りのあと縦方向のミガキを施し、脚部内面は強くナデられている。胎土は精製された明茶色土である。

小甕 (10) 胴部は張らず口縁部のみ僅かに外反する。内面はヘラ削り。復元口径 13.4cm。

甕 (11・12) 11の体部はヘラ削り、外面はハケ目。口縁部はヨコナデで、外反する。12の調整は摩滅し不明で、滑らかに外反する。

甕 (13) 内面ヘラ削り、外面はナデによって粘土にシワが寄っている。

弥生土器

高坏 壺 (14) 口縁部のみで全形を確定しがたいが、いわゆる鐏形の口縁部である。胎土は白色砂粒を含むが比較的精製された赤茶色土で、内外面ともヨコナデ。復元口径 27.0cm。

その他の遺構出土遺物 (Fig.41)

須恵器

甕 (15) 頸部はヨコハケのあと指頭圧痕が部分的に残され、その部分のみヨコハケが残り、ほかは残っていない。体部外面は叩き、内面は同心円の当て具痕が残る。明茶色土より出土。

石製品

剥片 (16・17) 16は安山岩。17は黒曜石。共に56より出土。

(5) 小結

今回の調査でわかったことは以下のとおりである。

- ・ 竪穴住居 3棟確認。
- ・ 土墳墓 2基確認

以上のように第 2 次調査と同様の成果が得られた。竪穴住居の残存状況からかなり削平されていることがうかがえる。北側斜面に位置することは大佐野川を意識したものと考えられる。

また、以前南側丘陵の古野添遺跡で堀切が確認され、中世山城の存在が指摘されているが、その北側斜面に位置する今回の調査区では遺構、遺物共にそれを窺わせるものは確認できなかった。

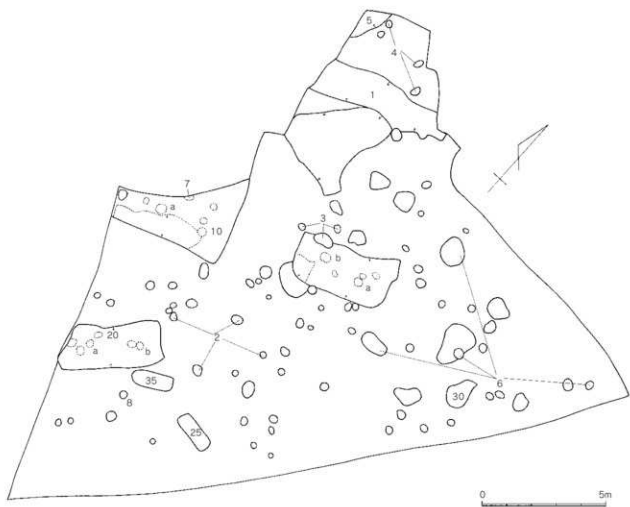


Fig 42 京ノ尾遺跡第2次調査遺構略測図(1/150)

Tab 3 京ノ尾遺跡第2次調査遺構一覧表

S. 番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	2SP001	溝	6世紀	
2		ピット群		
3		ピット群		
4		ピット群		
5	2SK005	土坑	6世紀末(IV期)	
6		ピット群	古墳時代	
7		ピット		
8		ピット		
10	2SI010	竪穴住居	6c後～末(IIIb～IV期)	
15	2SI015	竪穴住居	6世紀末(IV期)	
20	2SI020	竪穴住居	6世紀末(IV期)	
25	2ST025	土壇墓	6世紀	
30	2SK030	土坑	3世紀末	
35	2ST035	土壇墓	古墳時代	

Tab4 京ノ尾遺跡第2次調査出土遺物一覧表

S-1

土 師 銅 器、高杯、把巾、鏡、鏃
灰 生 土 器(漆器×高、磁石?)

S-2

漆 器 銅 環 釦
土 師 銅 器、貯藏具片

S-3

漆 器 銅 環 釦
土 師 銅 器、把、貯藏具片

S-4

漆 器 銅 環 釦、把釦
土 師 銅 貯 藏 具 片

S-5

漆 器 銅 環 釦、把釦、鏃
土 師 銅 器、把、鏃、貯藏具片

S-6

漆 器 銅 環 釦
土 師 銅 破 片
灰 生 土 器(漆?)
石 器 高 形 片(磁石、安山岩)、磁石
土 器 高 形 十 進

S-7

土 師 銅 破 片

S-8

漆 器 銅 破 片
土 師 銅 器、貯藏具片

S-10(漆器上)

漆 器 銅 環 釦、把釦、鏃
土 師 銅 器、貯藏具片、鏃

S-10(磁石上)

漆 器 銅 環 釦、鏃
土 師 銅 器、貯藏具片
石 器 高 形 鏃、磁石、磁石

S-10a

土 師 銅 器、破片

S-15

土 師 銅 器、鏃、高形?、貯藏具片
石 器 高 形 片

S-15a

漆 器 銅 環 釦

S-20a

土 師 銅 貯 藏 具 片、破 片

S-20b

土 師 銅 貯 藏 具 片、破 片

S-20

漆 器 銅 環 釦、把釦、鏃
土 師 銅 器、鏃、貯藏具片
石 器 高 形 片、磁石
土 器 高 形 十 進

S-25

漆 器 銅 環 釦
土 師 銅 器、把巾、貯藏具片

S-30

土 師 銅 器、破 片

S-30a

土 師 銅 器

S-30b

土 師 銅 器

S-35

漆 器 銅 環 釦?
土 師 銅 貯 藏 具 片

明器上

漆 器 銅 環 釦、把釦、鏃
土 師 銅 器、把巾、鏃×高、貯藏具片

表上

漆 器 銅 環 釦
土 師 銅 器

3. 京ノ尾遺跡 第3次調査

(1) 調査に至る経過

佐野区画整理事業は昭和6年度に事業計画決定がなされ、翌年度から埋蔵文化財の記録保存措置として佐野地区遺跡群の発掘調査が開始されてきた。佐野地区の一角、大字大佐野地区に所在する京ノ尾遺跡は、古墳期の集落跡として調査が進められ、一定の情報が収集されてきた。区画整理事業も後半に入り平成13年度において、大佐野地区の現集落内における事業計画が起こされたため、区画整理課ならびに文化財課で協議を行った結果、平成13年6月より調査を開始することで合意した。

開発対象面積3509.36㎡、調査面積2763㎡を測り、調査は平成13年6月1日から平成14年8月2日の期間実施した。調査は中島恒次郎、高橋学、佐藤道文で行った。

【保護法関係文書】

文化財保護法第57条の3届出	: 文書番号13教文第3号	平成13年4月12日付
文化財保護法第58条進達文書	: 文書番号13教文第11号	平成13年6月18日付
埋蔵物発見届進達文書	: 文書番号14教文第18号	平成14年8月2日付
保管証進達文書	: 文書番号14教文第19号	平成14年8月2日付
終了届進達文書	: 文書番号14教文第19号	平成14年8月2日付

(2) 基本層位

現福岡県立福岡農業高校がのる丘陵が当該現場へ北進するようにのび、その丘陵端部を削り取るように平坦面を形成している。旧宅地面を形成しごく最近まで宅地として利用されていたこともあり、調査時に「撈乱」として処理した各種土坑、溝が確認できた。旧地表面から約0.3m内外に暗灰色土が堆積し、その下位に遺物を包含する茶灰色土が薄く堆積していた。遺構検出時の遺物は全て「茶灰色土」として取り上げている。この茶灰色土の下位に遺構が確認できる。

(3) 検出遺構

北東から南西に細長く伸びる当該調査区を長く二分するように北東から南西へ旧道が通り、これを境として南調査区と北調査区に分けている。遺構の多くは北調査区、それも北東側に集中しており、隣接する京ノ尾遺跡第4次調査区へと広がる古墳時代の集落へとつながっていく。当該調査区の南調査区では、主に近世から現代にかけての遺構で、特に現代の「撈乱」として処理したゴミ穴などの遺構が顕著に観察された。加えて、現代の削平と考えられる基盤層露出状況も観察でき、丘陵北端部の宅地化に伴う掘削行為により遺跡が消失した可能性も残る。そのような中、古墳時代の土坑が基礎確認できており、帰属時期が当該調査区北東部に広がる集落と同一時期であるなど、集落内の人々の行動範囲ないしは、集落範囲がこの部分まで広がる可能性を残している。

竪穴住居

調査区北東側に集中して確認でき、建物主軸方向ならびに空間地の存在から大きく群にまとめることが可能ではないかと考えられる。また当該調査区内での最も占有面積が広いものは3SⅡD80で、34.01㎡(約10.3坪)を測る。

A群: 3SⅡD3Q 3SⅡD55

B群: 3SⅡD45

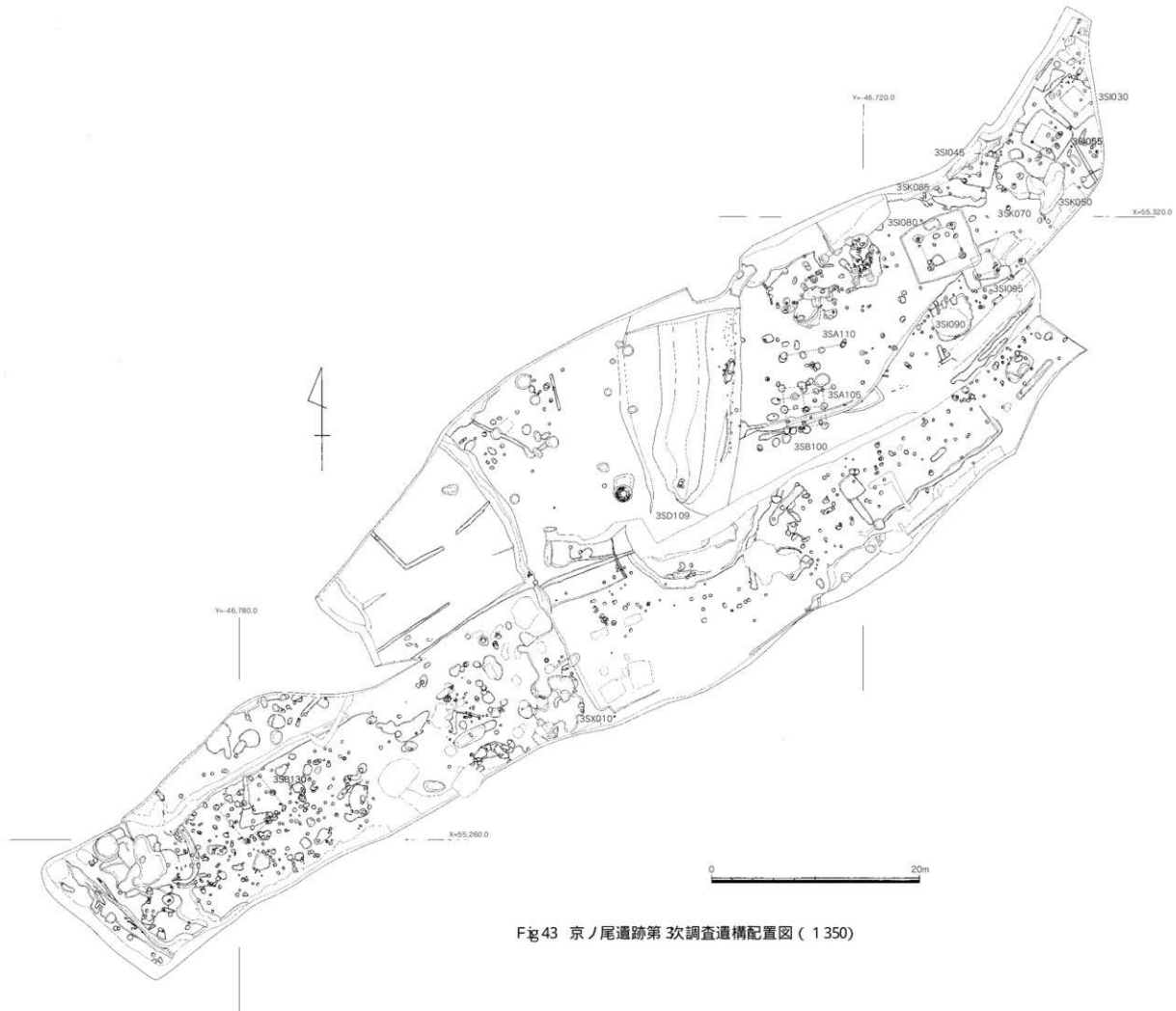


Fig 43 京ノ尾遺跡第3次調査遺構配置図(1/350)

C群：3SD8Q 3SD9Q 3SD95

3SI030 (4SD70) (Fig 44)

調査区東端部に検出した竪穴住居跡で、正方形の遺構形状に対し、南東部は京ノ尾遺跡第4次調査地として調査を実施しており、4SD70として第4次調査において報告している。北西辺に竈を有するので、建物規模は4.40mの正方形を呈しているものと考えられる。北西辺に検出した竈には土器が置き去りにされており、竈自体は袖部分を残すのみで大半は欠失していた。主柱穴は住居中央部に3本確認しており、やや柱間が狭いため確証はないが、3SD30どした穴が柱穴であれば長方形の柱間形状を呈することになる。ただし竈として確認した住居内施設の位置が主柱穴の至近にあり、屋内施設の位置と主柱の位置から火災になる可能性が高くなり検討を要する。推定占有面積は、19.36㎡を測る。

3SI045 (Fig 44)

調査区東寄りに確認したもので、遺構の大半を調査区外にのばす。主柱穴についても2基は想定できるものの、調査所見から4本主柱を想定することにはやや無理がある。遺構形状は南北3.40m、東西3.33mを測り、残存する深さは約0.15mと浅く、残存度合いは極めて悪い。主柱状況から考えると竪穴住居とするには情報不足といえる。推定占有面積は、11.32㎡を測る。

3SI055 (Fig 45)

調査区東寄りに確認したもので、先の3SD3dに近接して西側に建つ。北西辺側に竈が築かれており、4本主柱穴を有する。建物規模は北西→南東が4.16m、北東→南西が3.32mを測り、やや長方形に近い形状を呈している。残存状況は0.01mから0.15mと極めて悪く、遺構情報のほとんどは欠失している可能性が高い。推定占有面積は13.81㎡を測る。

3SI080 (Fig 46)

調査区東寄りに確認したもので、第3次調査区内で検出した竪穴住居の中で最も大きなものになる。北東→南西方向は6.24m、北西→南東方向は5.45mと長方形を呈し、残存する深さは0.35mほどであった。北西辺において造りつけ竈痕跡が確認できており、住居中央部を4本の柱によって支持する建物である。住居跡南東辺において土器が出土している。推定占有面積は、34.0㎡を測る。

3SI090

調査区東寄りに検出したもので、攪乱坑によって遺構の大半を失っている。遺構規模は北西側で測ることができ、1辺が3.75m程度の長方形ないしは正方形の形状を有しているものと推定できる。

3SI095 (Fig 45)

調査区東寄りにて3SD80および攪乱坑にて切られる状況で確認した。4本主柱と考えられるものの、3SD8dによって欠失する箇所があり、明らかにしきれていない。なお南西辺から南東辺にかけてベッド状遺構が確認できている。遺構規模は北東→南西方向が4.24m、北西→南東方向が3.46mを測り長方形の遺構形状を呈している。残存する深さは0.22m～0.56mを測る。なお竈内に土器が置かれた状態で出土している。推定占有面積は、14.67㎡を測る。

掘立柱建物

掘立柱建物は、調査区の東と西で各棟ずつ確認している。調査区中央やや東寄りに2間2間の総柱建物を棟、調査区南西寄りに2間2間の側柱建物棟を確認している。なお調査区南西寄りに検出した後者の建物は、整理途中で想定したものであり、遺構単独の遺物取り上げならびに柱間計測を行っていない。

3SB100 (Fig 47)

調査区中央部東寄りに検出した掘立柱建物で、2間2間の総柱建物である。3SD109に近接して検出

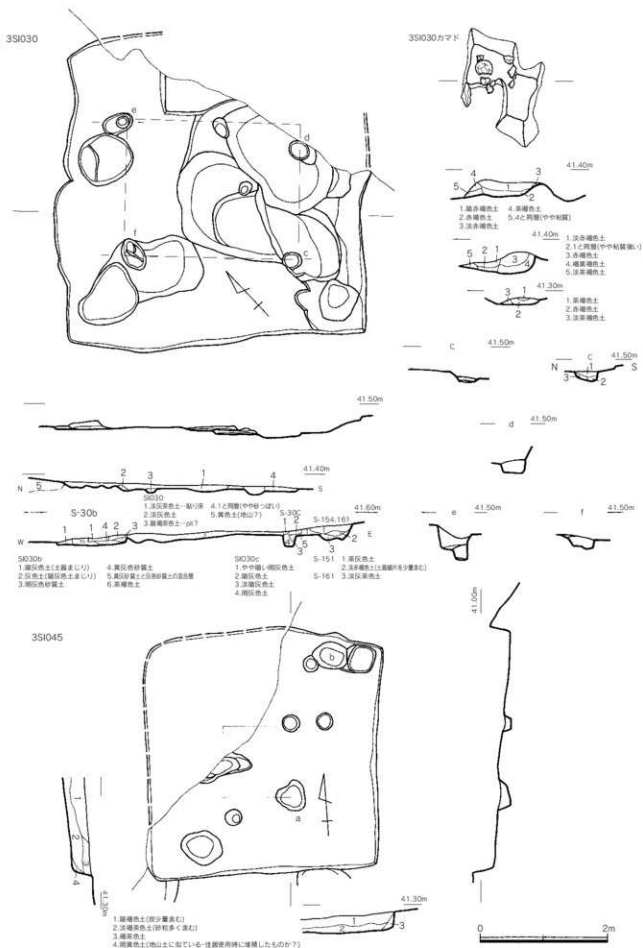


Fig 44 京ノ尾遺跡第3次調査竈穴住居跡遺構実測図1(160)

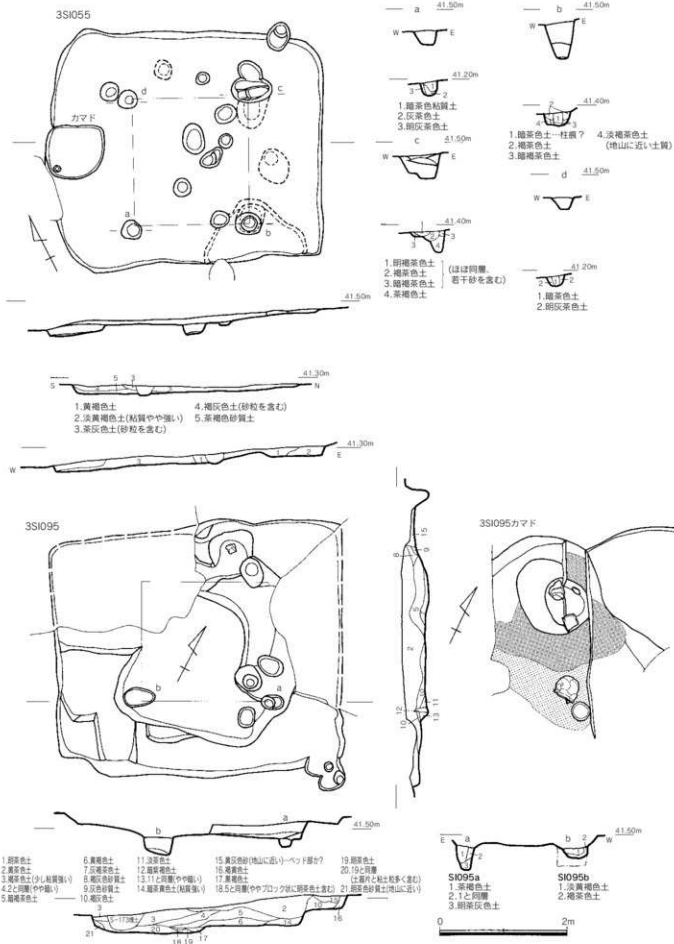


Fig 45 京ノ尾遺跡第3次調査竈穴住居跡遺構実測図2(160)

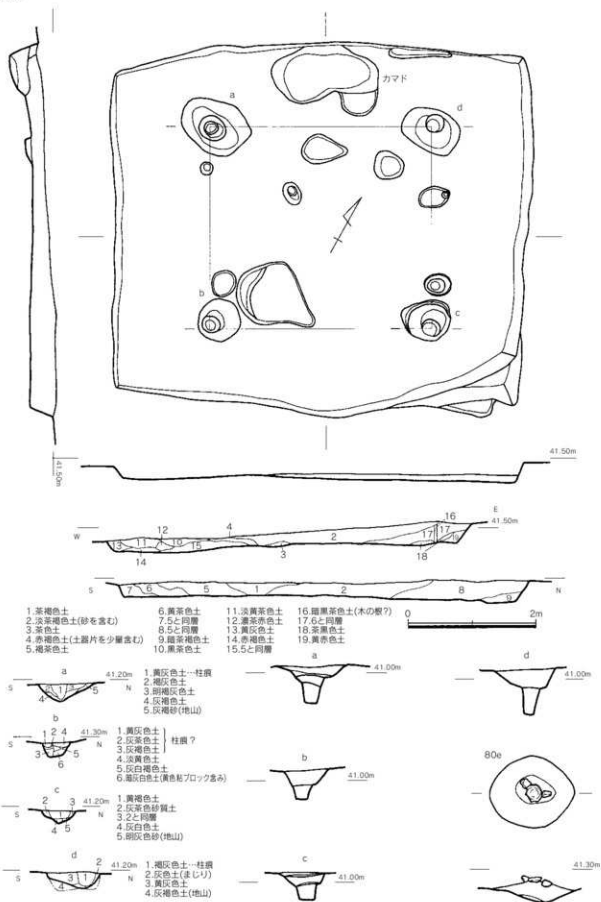
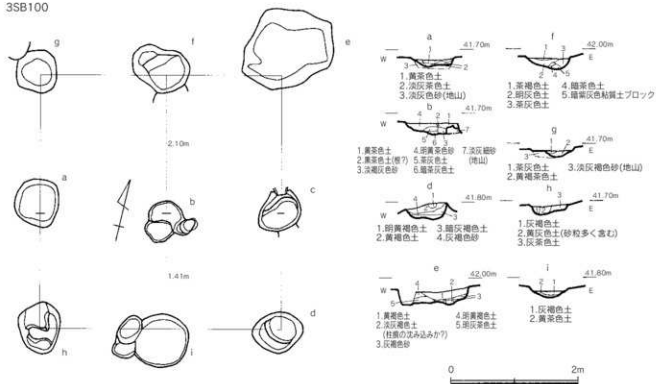


Fig 46 京ノ尾遺跡第3次調査竪穴住居跡遺構実測図3(160)

3SB100



3SD109

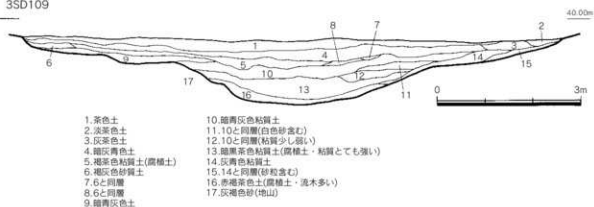
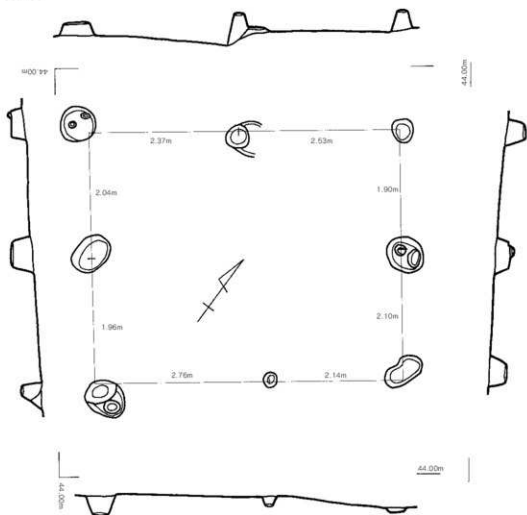


Fig 47 京ノ尾遺跡第3次調査SB100遺構実測図(160)、SD109土層実測図(180)

3SB130



3SK025

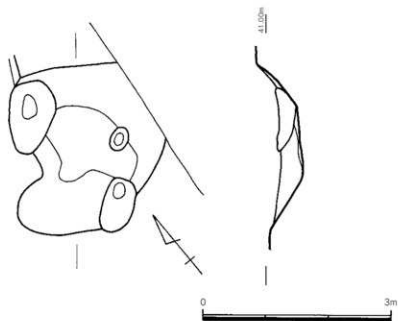
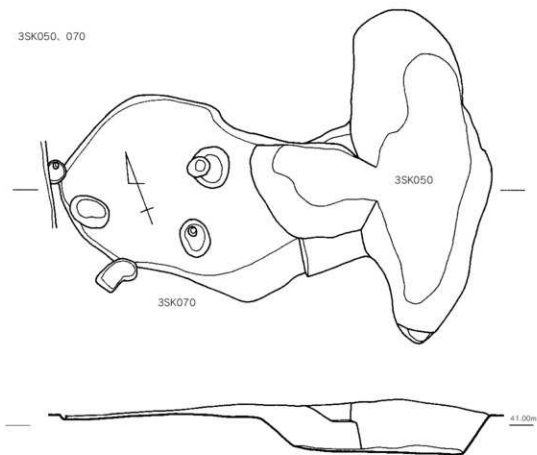


Fig 48 京ノ尾遺跡第3次調査掘立柱建物・土坑遺構実測図 (1/60)

3SK050, 070



3SK085

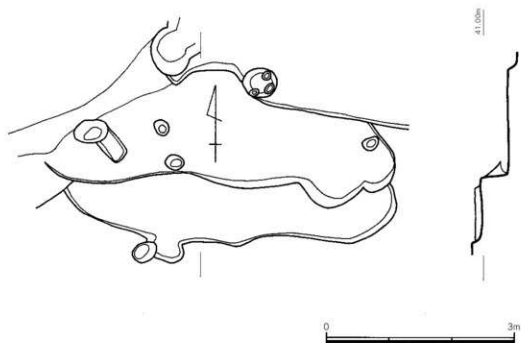


Fig 49 京ノ尾遺跡第3次調査土坑遺構実測図(160)

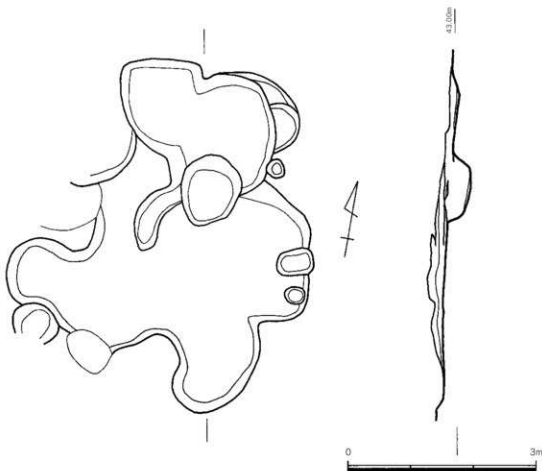


Fig.50 京ノ尾遺跡第3次調査SX010遺構実測図 180)

しているが、柱穴内から出土した遺物から導かれる建造時期は近世以降に位置づけられる。総柱建物であるが、柱間は北側が広く2.10mを測り、南側は1.4mと狭い。建物規模は南北柱長が4.0m、東西柱長は3.4mを測り、僅かに南北に長いことから桁方向は南北と推定する。なお土層からは柱痕跡を明確には確認しきれていない。占有面積は13.6㎡(408坪)であった。

3SB130 (Fig.48)

調査区東寄りに確認した掘立柱建物で、整理途中において確認した。したがって調査時の情報収集を行えていない。遺物についてもS 48・53・56・63の4遺構から抽出しており、遺構の帰属時期については明らかにしきれていない。これら4遺構から出土した遺物で最も新規のものは中世後期に位置づけられ、当該期建造の可能性を残すが確認は得られていない。建物規模は、2間 2間の東西棟で、桁行4.90m、梁行4.0m、占有面積は19.6㎡(589坪)を測る。

柵

3SA105・3SA110

調査区中央やや東寄りに確認したもので、建物として展開しなかったため、柵として報告する。出土遺物からはその建造時期は近世以降と考えられ、詳細な時期については決し難い。両者とも3間の直線的なもので、用途についても明らかにし難い。

土坑

3SK025 (Fig.48)

調査区東端部に検出した土坑で、調査途中においては住居として情報収集を行った。しかし、住居

認定のための諸条件、支柱穴、遺構形状などが整わなかったことからここでは土坑とした。遺構規模は、調査区範囲の制限もあり、詳細は明らかにできない。残存長軸長 2.60m、短軸長 2.40mを測る。検出した深さは 0.50mを測る。

3SK050・3SK070 (Fig 49)

調査区東部にて検出した土坑群で、3SK050と3SK070は連結するような状況であった。ただし3SK070は残存する深さが 0.1mと浅く、包含層の取り残しである可能性が高いため、土坑としては3SK050のみが存在していたものと考えられる。それぞれの計測値は、3SK050が長軸長 5.32m、短軸長 2.05m、検出された深さは 0.85mを測る。3SK070は長軸長 3.10m、短軸長 2.85m、検出された深さは先述したように 0.10mを測る。

3SK085 (Fig 49)

調査区東部にて検出した土坑で、3SK070の西に確認し、3SD49に切られ、調査区外へ遺構が展開することから、遺構規模の詳細については明らかにし難い。遺構北側へむけて階段状になっているが、浅い方は、包含層の取り残しと考えられる。計測される遺構規模は長軸長 5.25m、短軸長 2.75mを測り、検出された深さは 0.55mであった。

谷

3SD109 (Fig 47)

調査区中央で確認したもので、調査区自体が後世の宅地造成により掘削されていることから、本来は調査区南より下降する谷である可能性がある。

遺構規模は溝幅約 20mを測り、残存する深さは 1.32mを測り、最下層には流木を含む腐植土が、その上位には暗黒茶色粘質土が堆積しており、流路というよりはしばし開口する谷地形であったと考えられる。その後も同様に土が堆積していることを考慮すると、谷地形が次第に埋積し最終的には平坦地になったものと考えられる。土層の上下関係は、Tab 9にて記載。

その他の遺構

3SX010 (Fig 50)

調査区中央やや西寄りに検出した不整形な土坑で、地形凹みに堆積した包含層の可能性もある。土坑内に散在的に遺物が含まれているものの、単一時期であったことから、土坑としてここでは報告する。遺構規模は長軸長 5.65m、短軸長 4.75mを測り、残存する遺構の深さは僅かに 0.10mを測る。

(4) 出土遺物

竪穴住居

3SI030

3SI030出土遺物 (Fig 51)

須恵器

坏蓋 (1-5) 口径復原が困難なもので、天井部から口縁部への境界に沈線ないしは稜を有するものである。口縁端部内面には沈線ないしは内傾するもので、全て古い属性を残している。9以外は全て還元良好。

坏身 (6) 蓋同様に口径復原が困難なもので、口縁端部内面に沈線を有している。底部外面には、回転へラ削り痕跡が観察できる。

土師器

椀 (7) 口径復原が困難なもので、内湾する体部および口縁部形状を呈し、体部から底部外面には、

工具によるナデ痕跡が観察できる。

甕(8) 口縁部から頸部の破片資料で、「く」字形に屈曲する頸部形状を呈し、やや内湾気味に湾曲する口縁部形状を呈する。頸部外面に指頭圧痕をとどめる。

甕(9) 底部付近の破片資料で、内面に削り痕跡が観察できる。

3SI030茶灰色土出土遺物(Fig 51)

須恵器

坏蓋(10) 口径復原が困難な小破片資料で、口縁端部内面に内傾する面を形成している。

坏身(11) 口径復原が困難で、かつ口縁端部を欠損する破片資料であるが、僅かに口縁端部内面に沈線が観察できる。

3SI030灰茶色土出土遺物(Fig 51)

土師器

甕(12) 無頸の甕で、外面を粗く叩き、その後粗いナデによって内外面を調整している。そのため粗製の印象を受ける。外面において底部から口縁部にかけて縦方向に黒斑が残る。

3SI030黄茶色土出土遺物(Fig 51)

須恵器

坏身(13) 口径復原が困難な小破片資料で、口縁端部は丸く仕上げている。底部外面には回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

土師器

碗(14~16) 14は口縁端部だけの破片であることから、形態についての詳細は不明。他の15・16は内湾気味に立ち上がる体部形態を有し、体部外面に工具によるナデ痕跡が観察できる。

甕(17) 底部付近の破片資料で、内面に粘土細痕跡が明瞭に残り、底部外面下位から上位にかけて煤状炭化物が付着している。外面には工具による横方向のナデ痕跡が観察できる。

3SI030竈出土遺物(Fig 51)

土師器

碗(18~24) 全て、全形が判明する2に近似した形態を有するものと考えられ、底部外面をヘラ削りないしは、工具によるナデによって仕上げている。この場合の削りと工具によるナデの違いは、文字通り器壁を薄くする行為が想定できるものを削り、ハケのように規則性のある平行線ではないものの、器壁に固めの工具の当たりが想定でき、かつ器壁を薄くする行為が想定できないものについては、工具によるナデとして記載している。

甕(25) 内面に粘土細痕跡を明瞭にとどめるもので、外面に煤状炭化物が付着し、縦方向にハケ調整している。

3SI045

3SI045褐色土出土遺物(Fig 51)

須恵器

坏蓋(26~28) 口径復原が困難な小破片で、口縁端部形状が明らかな2および28は、いずれも丸くおさめている。28については、外面において天井部と体部境界においてカキ目痕跡が観察でき、天井部には焼成の際に付着した付着物がある。なお、ツマミが貼付されているものと考えられる回転ナデ痕跡が天井部中央付近に観察できることから、28は壺蓋の可能性もある。

坏身(29~35) 35を除き、口径復原が困難な小破片である。35の復原口径は11.0cm、かえり径14.0cmを測る。口縁端部内面に沈線を有するもの3点、丸くおさめるもの4点である。

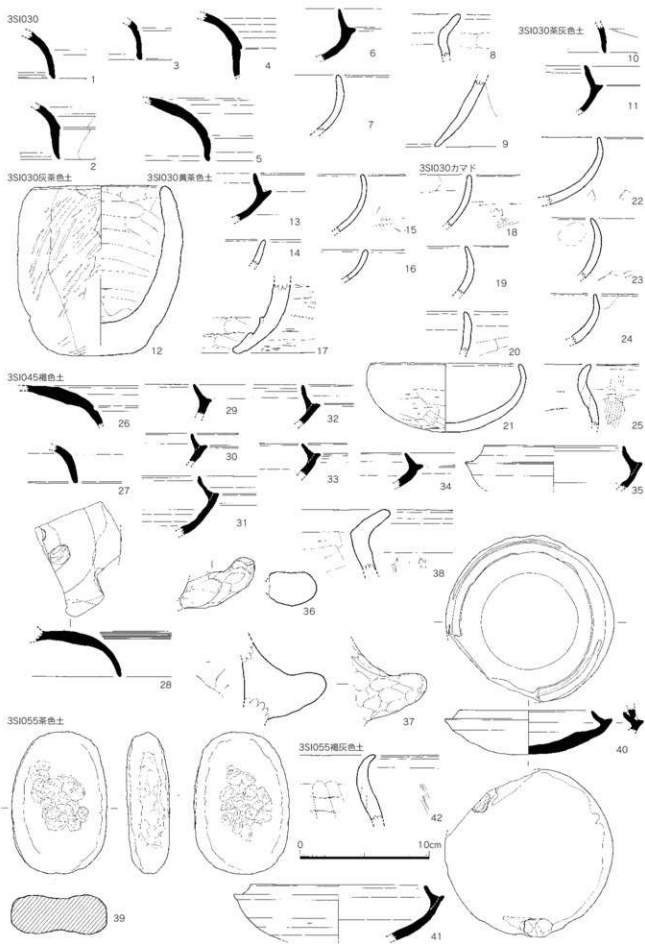


Fig 51 京ノ尾遺跡第3次調査竪穴住居跡出土遺物実測図 13 SI030・045・055)

土師器

把手(36・37) 裏ないしは甑に貼付される把手の破片で、37は差込式のものであることが分かる。いずれも指頭圧痕が顕著に観察できる。

甑(38) 頸部形状「く」の字を呈し、体部内面を横方向の削り、体部外面を縦方向のハケにて調整している。

3SI055

3SI055茶色土出土遺物(Fig 51)

石製品

叩き石(39) 花崗岩礫を利用した叩き石で、扁平な礫の面に叩打痕跡が観察できる。

3SI055褐色土出土遺物(Fig 51)

須恵器

坏身(40・41) 40の口径10.5cm、41は14.0cmと幅があり、住居使用時期を確定するには躊躇する遺物である。いずれの口縁端部形状も丸くおさめるもので、40には重ね焼状態を推定できるように、蓋口縁部の破片が付着している。底部外面にも粘土塊が付着しており、焼成時に丸底を安定化させる行為が想定できる。なお41は底部外面を回転ヘラ削りしているが、40については焼成時の灰被りによって観察できない。

土師器

甑(42) やや胴張りのする体部から外反する口縁部へ続くもので、体部内面は縦方向にナデ上げ、体部外面にはハケ痕跡が観察できる。

3SI080

3SI080茶灰色土出土遺物(Fig 52)

須恵器

坏身(1) 復原口径13.1cmを測り、口縁端部を丸くおさめている。底部外面は丁寧な回転ヘラ削りにより仕上げている。

3SI080茶褐色土出土遺物(Fig 52)

須恵器

坏蓋(2-13) 復原口径13.15cm-15.0cmを測り、口縁端部内面に沈線を形成するもの(2-7、11-12)と丸く仕上げるもの(8-10、13)の二者があり、前者が卓越している。天井部外面が観察できるものは、いずれも回転ヘラ削りによって仕上げている。9については、口縁端部外面をハケにより仕上げ、12は焼成時に著しく歪みが生じている。

坏身(14-18) いずれも底部を欠損するもので、復原口径10.7cm-12.2cmを測る。口縁端部内面に沈線を形成するもの(14)と丸く仕上げるもの(15-18)の二者があり、後者が卓越している。

甕(19) 口縁部だけの破片資料であり、全形が判然としないものの、口縁端部が内傾する平坦面を形成する点、口縁部外面下位に段を形成する点から甕と推定した。

高杯(20) 脚部の破片資料で、透かしが観察されない点、脚部径が大きくない点などから短脚高杯と推定する。

土師器

椀(21-24) いずれも内湾する体部形態を有し、2および22は体部内面に器面調整のための当て具痕跡をとどめ、底部外面を手持ちヘラ削りによって仕上げている。23は底部内面をナデによって調整する。

3SIO80茶灰色土



3SIO80茶褐色土

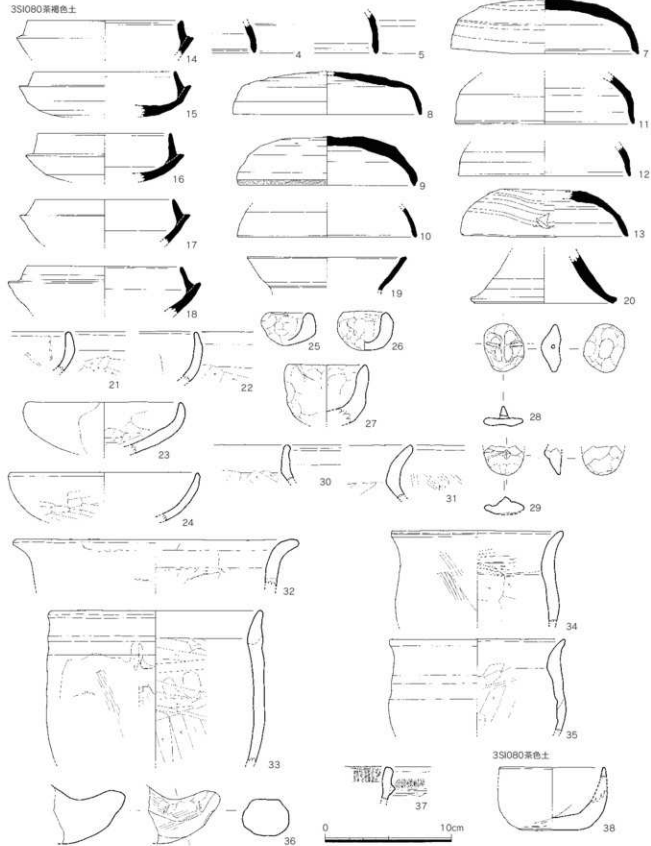


Fig 52 京ノ尾遺跡第3次調査竪穴住居跡出土遺物実測図 13 SIO80)

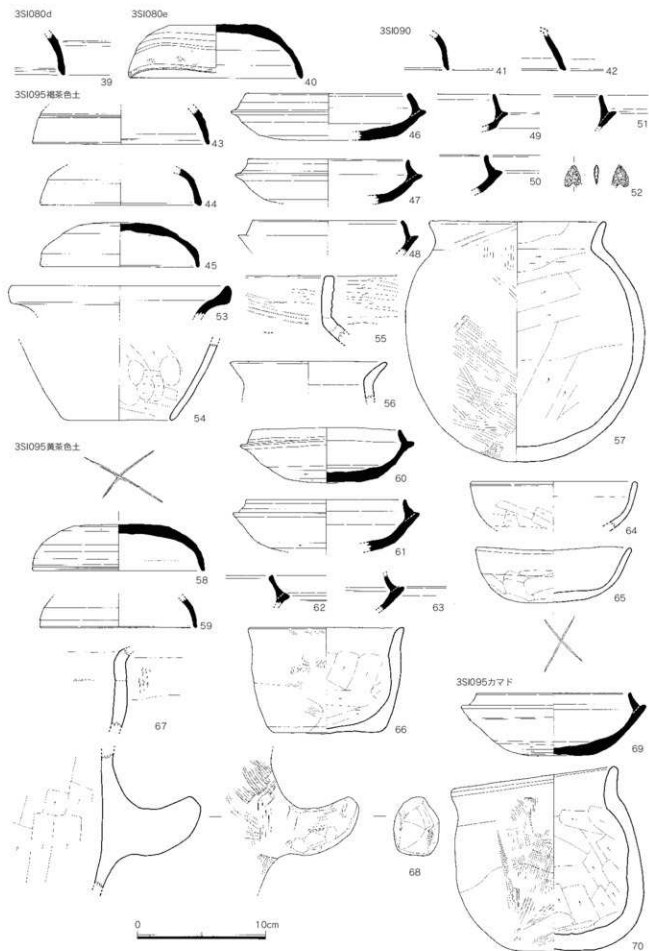


Fig 53 京ノ尾遺跡第3次調査竪穴住居跡出土遺物実測図 13 SI080・090・095)

小椀（25～27） いずれも手づくねによって成形しており、内外面に指頭圧痕を明瞭に残す。25・26が小形で、27はやや大きめのものである。

甕（30～35） 頸部を「く」字状に屈曲させるものと体部から直線的に立ち上がるものの二者があり、前者が卓越している。体部内面はいずれもヘラ削りによって調整しており、口縁部は内外面ともに横ナデにより仕上げている。

把手（36） 襷ないしは甕に貼付されている把手と考えられ、成形のための指頭圧痕の後、ハケによる調整痕跡が観察できる。把手部分の破片であることから、本体への装着状況については明らかにし難い。

用途不明（37） 口縁部と推定できる部分の小破片資料であり、器種について明らかにできなかった。口縁部内外面にハケ状工具による刺突痕跡が多数観察でき、装飾的な意味が想定できる。外面には一条の突帯が貼付され、装飾性から壺であるとも推定できる。

土製品

鏡模倣品（28・29） 粘土板から「紐」部分をつまみ出したもので、すべて指頭圧によって成形している。3SI080茶色土出土遺物（Fig 52）

土師器

椀（38） 小形の椀で、内外面ともに横ナデにより調整している。底部外面に「木葉文」をとどめている。

3SI080d出土遺物（Fig 53）

須恵器

坏蓋（39） 口径復原が困難なもので、口縁端部内面に沈線を形成する。

3SI080e出土遺物（Fig 53）

須恵器

坏蓋（40） 歪みが著しいもので、口縁端部内面を内傾するような平坦面を形成し、天井部外面は回転ヘラ削りする。

3SI090

3SI090出土遺物（Fig 53）

須恵器

坏蓋（41・42） 口径復原できないもので、口縁部のみ的小破片資料である。口縁端部内面は両者とも沈線を形成している。

3SI095

3SI095褐茶色土出土遺物（Fig 53）

須恵器

坏蓋（43～45） 復原口径 12.6cm～14.0cmを測り、口縁端部内面を内傾するもの（44）、沈線を形成するもの（43）、丸く仕上げるもの（45）の三者がある。全形が明らかな43は、天井部外面を粗く回転ヘラ削りし、天井部と口縁部との境界が不明瞭となっている。

坏身（46～51） いずれも口縁端部を丸く仕上げているもので、底部外面が観察できるものは全て回転ヘラ削りが確認できる。46のみ口縁端部内面がやや内傾している。

甕（53） 口縁部のみ破片で、焼成不良のため調整痕跡が観察できない。

土師器

甕（54） 底部付近の破片資料で調整痕跡が明らかでないものの、外面にハケ痕跡が、内面にはヘラ

削りならびに指頭圧痕が僅かに観察できる。

甕(55~57) 直口の口縁形態を有するもの(55)、頸部「く」字形に成形するもの(56・57)があり、59は破片資料のため口径が明らかにし難いもの大形のものであると考えられる。外面には粗い叩き痕跡をとどめ、内面には横方向のハケ調整によって仕上げている。58は焼成不良のため調整不明。59は丸底の底部形状を示し、体部内面は削り、外面はハケによって調整している。

石製品

鏝(52) 安山岩製の鏝で、残存長170cm、幅125cm、厚さ0.30cmを測り、重量は0.6gである。

3SI095黄茶色土出土遺物(Fig.53)

須恵器

坏蓋(58・59) 復原口径12.4cm・13.6cmを測り、いずれも口縁端部を丸く仕上げている。天井部が残る58は、天井部外面に「」印のヘラ記号が残り、回転ヘラ削りによって仕上げている。

坏身(60~63) 口径が明らかな60および61は、10.6cm、12.5cmをそれぞれ測り、口縁端部形状は丸く仕上げたもの(60・61)と内傾する端部形態をとるもの(62)の二者がある。

土師器

椀(64・65) 丸底の底部からやや外傾するように直線的に外方へ開く体部形態を有し、底部外面をヘラ削りによって仕上げている。65は底部外面に「」印のヘラ記号を描いている。

鉢(66) 平底の底部形状を呈し、頸部をやや「く」字形に外反させる。体部内面はヘラ削り、外面にはハケによる調整を施す。底部外面は調整痕跡が観察できない。

甕(67) 体部上位から頸部が残存する破片資料で、全形を推定することができない。内面には粘土紐痕跡が観察でき、外面に僅かにハケ調整の痕跡が残る。

把手付甕 甕(68) 甕ないしは甕に貼付される把手と考えられ、体部内面には縦方向のヘラ削り、把手本体は指頭圧による成形の後、ハケによって器面調整がなされている。おそらくは本体へのめ込み式の把手と考えられるが、体部内面のヘラ削りが丁寧なため、明らかにし難い。

3SI095甕出土遺物(Fig.53)

須恵器

坏身(69) 口径14.6cmを測り、口縁端部を丸く仕上げている。底部外面は回転ヘラ削りし、焼成・還元ともに良好である。

土師器

甕(70) やや歪むもので、頸部を「く」字形に屈曲させる。体部内面はヘラ削り、外面はハケによって調整している。体部中位から上が外面において淡茶灰色に変色している。また底部内面は茶黒色に変色している。

掘立柱建物

3SB100

3SB100e出土遺物(Fig.54)

染付磁器

椀(1) 3SB100e茶灰色土から出土したもので、疊付部分の釉薬を削り取る以外は全面施釉。体部外面には呉須を用いて草文を描いている。素地は白灰茶色を呈し、微細な砂粒を多く含んでいる。

3SB130

調査時の確認でないことから、遺構単独の遺物取り上げを実施していない。関連する遺構は、S 48 S 53 S 56 S 63で、これら4基の小穴として取り上げている。

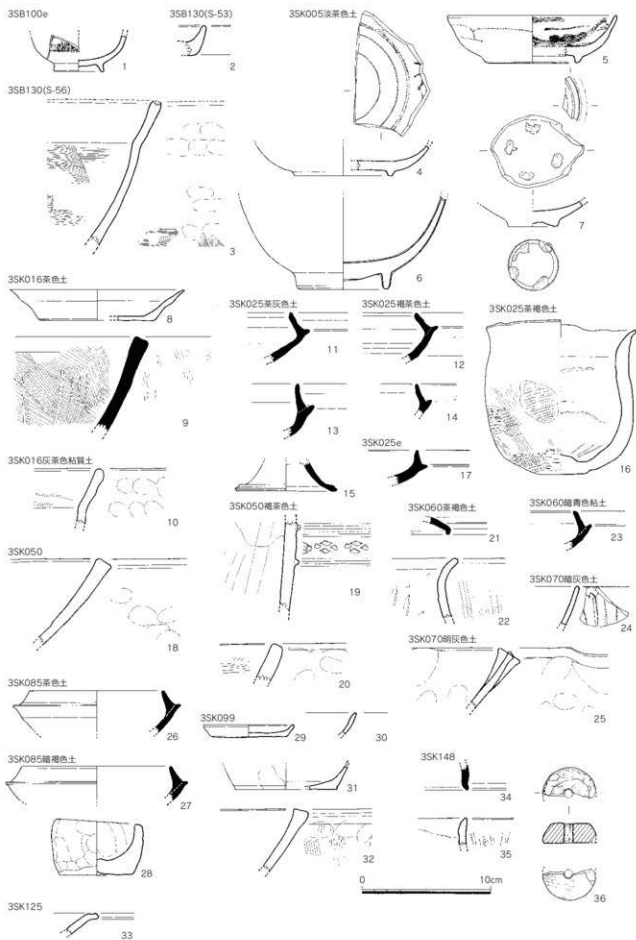


Fig 54 京ノ尾遺跡第3次調査掘立柱建物・土坑出土遺物実測図 13)

3SB130 (S-53) 出土遺物 (F 図 54)

土師器

皿 (2) 小破片のため、全形が不明。外面は磨耗し調整痕跡が観察し難いが、内面には指頭圧痕が観察でき、古墳期の手づくね土器の可能性が高い。

3SB130 (S-56) 出土遺物 (F 図 54)

土師器

鍋 (3) 鉄鍋模倣と考えられる鍋で、丸みを有しつつ口縁部付近で屈曲するもの。内外面ともにハケ調整し、外面には顕著に指頭圧痕が観察できる。特筆すべき点として、胎土中に角閃石を多く含み、花崗岩を基盤岩とする太宰府市域において特異な胎土組成を有している。ただし当該調査区の西方には花崗閃緑岩が僅かに分布しており、胎土組成と製品との関係については資料増加を待って、「在地」「非在地」の認定を含めて検討したい。

土坑

3SK005

3SK005 淡茶色土出土遺物 (F 図 54)

染付磁器

椀 (4・5) 浅めの器高を有するもので、4は見込み部分を輪状に釉割ぎし体部内面に呉須にて施文する、5は体部内外面に呉須で施文する。呉須の色調は両者とも粗製で、やや濁った色合いを呈している。

青磁

椀 (6) 深めの椀と考えられ、暗青緑色の釉調で大小の貫入が内外面に観察できる。素地特徴は、明青灰色から明褐白色を呈し、微細な黒色粒子を極少量含んでいる。龍泉窯系青磁椀 工類と考えられる。

白磁

椀 (7) 見込みおよび置付部分に砂目による目跡が観察でき、暗緑白色で細かい貫入が入る釉調を有している。素地特徴は暗黄白色で微細な黒色粒子ならびに気泡を僅かに含んでいる。

3SK016

3SK016 茶色土出土遺物 (F 図 54)

土師器

坏 a (8) 復原口径 13.8cm を測り、体部中位で屈曲気味に外反する坏 a 類に該当する。焼成不良のため調整痕跡が観察し難いが、底部切り離し処理は回転系切りである。

須恵質土器

播鉢 (9) 口縁部だけの破片で、全形については明らかにし難い。内外面ともにハケによる器面調整を行い、内面に 4 条を一単位とする条線を描く。

3SK016 灰茶色粘質土出土遺物 (F 図 54)

土師質土器

鍋 (10) 鉄鍋模倣のものと考えられ、口縁部にて外方へ屈曲する形態を呈している。内面にハケ調整痕跡、外面には指頭圧痕が顕著に残り、胎土中には角閃石が多く含まれている。

3SK025

3SK025 茶灰色土出土遺物 (F 図 54)

須恵器

坏身 (11) 口径復原が困難な資料で、口縁端部内面に内傾する傾斜面を形成している。底部外面は回転ヘラ削りするものと考えられる。

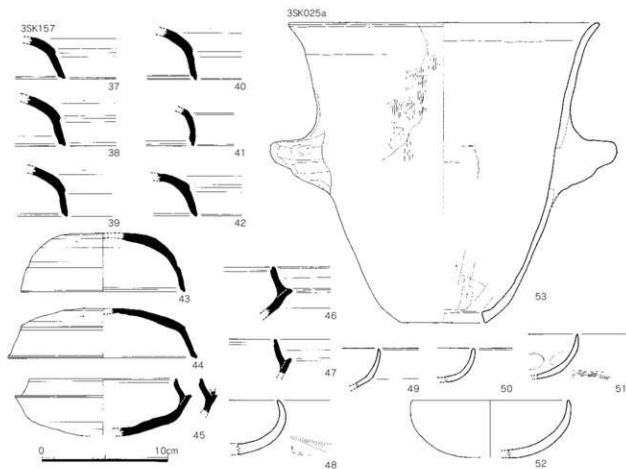


Fig 55 京ノ尾遺跡第3次調査土坑出土遺物実測図 13 SK 025・157)

3SK025褐茶色土出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏身 (12-14) いずれも口径復原が困難な資料で、口縁部内面に内傾する傾斜面を形成するものは12のみであとの二者は丸く仕上げている。底部外面をヘラ削りしていることが明らかなものも12のみで、資料限界故か、他の二資料については不明。

高杯 (15) 小形の高杯と考えられ、脚部の破片資料である。脚端部をやや肥厚するもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。なお脚端部内面が黒色に変色している。

3SK025茶褐色土出土遺物 (Fig 54)

土師器

甕 (16) 丸底から立ち上がり、口縁部を僅かに外反させる形態をとる甕で、外面を平行叩きにより仕上げ、内面は底部付近を工具によるナデ、体部から口縁部についてはナデによって調整している。器表面が剥離しており、内面には粘土紐痕跡が観察できる。

3SK025a出土遺物 (Fig 55)

土師器

甕 (53) 図上完形になるもので、はめ込み式の把手を貼付し、底部付近の内面は縦方向のヘラ削りにより仕上げている。外面はハケ調整し、内面に粘土紐痕跡が観察できる。分量は、復原口径33.0cm、器高32.7cmを測る。

3SK025e出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏身(17) 口径復原が困難な小破片資料で、直立気味に立ち上がる口縁部形態を有し、口縁端部は丸く仕上げている。

3SK050

3SK050出土遺物 (Fig 54)

土師質土器

擂鉢 こね鉢(18) 口縁部のみ破片で、注口ならびに擂り目の有無については明らかにし難い。器壁中心部が黒茶色に変色しており、燻がかけられた可能性もある。外面には指頭圧痕が多く観察できる。特筆すべき点は、胎土中に角閃石を多く含んでいる。

3SK050褐茶色土出土遺物 (Fig 54)

瓦質土器

火鉢(19) 脚が貼付され平底から直線的に立ち上がる体部形態を有するものと推定され、口縁部外面に菱形スタンプを押印する。

土師質土器

鍋(20) 口縁部の破片資料で、全形については明らかにし難い、擂鉢 こね鉢の可能性も残す。内面には横方向のハケ調整痕跡、外面には指頭圧痕が多く残り、煤状炭化物が外面に付着している。

3SK060

3SK060茶褐色土出土遺物 (Fig 54)

須恵器

蓋3(21) 口縁部のみ破片資料で、口縁端部を折り曲げるものである。口径復原は困難で、口縁部外面に三条の条線が残る。胎土中に微細な白色砂粒および黒色粒子を多く含んでいる。

土師器

甕a(22) 頸部屈曲が顕著でなく、緩やかに外方へ開く口縁部形態を有する。体部内面は横方向のヘラ削り、外面は縦方向のハケ調整痕跡が観察できる。

3SK060暗青色粘土出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏身(23) 口径復原が困難な資料で、口縁端部を丸く仕上げている。資料限界から底部外面の処理については、回転ナデのみ観察できる。

3SK070

3SK070暗灰色土出土遺物 (Fig 54)

青磁

椀(24) 口縁部のみ破片資料で、外面にヘラによる細蓮弁を描く。細蓮弁は剣頭部分と細線部分の離脱が見られないことから、龍泉窯系青磁椀で上田分類B 類に該当するものと考えられる(上田、1982)。

3SK070明灰色土出土遺物 (Fig 54)

土師質土器

擂鉢 こね鉢(25) 注口を有するもので、破片資料であることから擂り目の有無について観察できていない。内外面に指頭圧痕が多く残る。

3SK085

3SK085茶色土出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏身(26) 復原口径10.6mを測るもので、焼成・還元ともに良好である。口縁部から体部上位までの破片資料のため、底部外面の処理については観察できていない。

3SK085暗褐色土出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏身(27) 復原口径11.8mを測る破片資料で、焼成はやや良好で、還元は良好である。底部外面の処理については資料限界のため観察できていない。

土師器

小椀(28) 手づくねによる成形のもので、内外面に指頭圧痕が顕著に残っている。法量は、口径6.4m 器高4.2m 底径5.7mを測る。

3SK099出土遺物 (Fig 54)

土師器

小皿a1(29) 口縁端部を丸く仕上げるもので、底部外面の処理は磨耗のため明らかにし難い。復原口径は7.2mを測る。胎土中に白雲母を少量含んでいる。

坏 小皿1(30) 口縁端部の破片であることから器種特定に至っていない。内外面ともに回転ナデにより仕上げており、胎土中に白雲母を少量混入している。

坏a(31) 底部の破片資料で、底部外面の処理は回転系切りである。なお、外面には煤状炭化物が付着している。

土師質土器

播鉢 かね鉢(32) 口縁端部をやや内側に肥厚させるもので、破片資料であるため播鉢かかね鉢の区別が困難であった。外面には指頭圧痕を顕著に残し、かつハケにて調整している。胎土中に角閃石を少量混入している。

3SK125出土遺物 (Fig 54)

陶器

皿(33) 口縁部上端に溝を形成する「溝縁皿」で、明赤褐色の発色を呈する素地に暗黄白色の光沢ある濁った釉薬をかけている。唐津系陶器と考えられる。

3SK148出土遺物 (Fig 54)

須恵器

坏蓋(34) 口縁端部の小破片資料で、全形については明らかにし難い。口縁端部内面を僅かに凹ませ、沈線を形づくる。焼成ならびに還元良好。

土師器

甕(35) 直立する口縁部形態を有し、内面に粘土紐痕跡をとどめる。外面には縦方向のハケによる調整痕跡が観察できる。

石製品

紡錘車(36) 1ヶ欠損したもので、中心部分に直径0.6mほどの穿孔がなされている。石材は滑石製で明緑灰色を呈する。器表面には器面調整のための削り痕跡が顕著に見られる。

3SK157出土遺物 (Fig 55)

須恵器

坏蓋(37~44) 全て口縁端部内面を凹ませ、沈線状に形づかったもので、天井部外面を回転ヘラ削りして仕上げている。天井部と体部境界に凸帯状にするもの(37~40・42・44) 凹ませるもの(41・43)の二者がある。還元不良なもの(37 40・42) 良好なもの(41・43・44)も二者あり、還元不良

な赤褐色に焼き上げるものが卓越している。

坏身（45～47） 全て口縁端部内面を凹ませるもので、4刃のみ形骸化した沈線を巡らせている。底部処理が観察できるものは、全て回転ヘラ削りによって仕上げている。

土師器

椀（48～52） 丸底の底部から内湾気味に立ち上がる体部形態を有し、体部へ口縁部については横ナデを行い、48ならびに51については底部外面をハケによって仕上げている。

満

3SD001出土遺物（Fig 56）

染付磁器

椀（1） 高い高台を有する椀で、外面に花木を描き、内面は三条の圏線ならびに見込みに「書」ないし「寿」を連想させる文字を書く。呉須の色合いはくすんだ紺色を呈し、素地特徴として明灰白色の精良な素地である。豊付部分の釉は掻き取られている。体部外面中位に付着物がある。

3SD001灰褐色ブロック土出土遺物（Fig 56）

土師質土器

鍋（2） 鉄鍋模倣形態を有し、内面は横方向のハケ、外面には指頭圧痕が観察できる。胎土中に角閃石を少量含む。灰褐色砂質土出土。

3SD002出土遺物（Fig 56）

土師器

小皿a1（3） 復原口径6.3cmを測り、底部外面処理は回転糸切り。胎土中に白雲母細片をやや多く混入し、口縁端部に僅かに油煙痕跡が残る。

土師質土器

播鉢 こね鉢（4） 口縁部を肥厚させ、外傾する面を形成するもので、焼成不良のため調整痕跡が定かではないものの、内面に横方向のハケ痕跡が観察できる。条線が観察できなかったことから、播鉢 こね鉢とした。

鍋（5） 鉄鍋模倣のもので、体部内面は横方向のハケ、口縁部内外面は横ナデならびに指頭圧痕が観察できる。外面全面に煤状炭化物が付着している。胎土中に角閃石を少量含む。

鉄絵磁器

皿（6） 蛇の目高台風の高台形状を有し、豊付部分から底部外面を露胎にする以外は全面に施釉している。見込み部分には鉄釉にて「絵」が描かれているようだが、資料限界のため明らかにし難い。

染付磁器

瓶（7） 「とっくり」と呼称される瓶で、豊付部分の釉を削り取る。外面には濃紺の呉須にて草花を描いており、暗青白色でガラス質の釉がかけられている。素地には黒色微粒子を少量含み、暗黄白色を呈している。

3SD006出土遺物（Fig 56）

土師質土器

播鉢（8） 口縁部を肥厚させるもので、内面に4条一単位とする条線が観察できる。口縁端部内面には指頭圧痕、外面にはハケ痕跡が観察できる。断面観察では、器表面が淡黄褐色から淡灰黄色を呈し、中心部分は暗黒灰色を呈している。このことから、土師質土器としたが、瓦質化の不十分な製品である可能性が残る。

3SD018出土遺物（Fig 56）

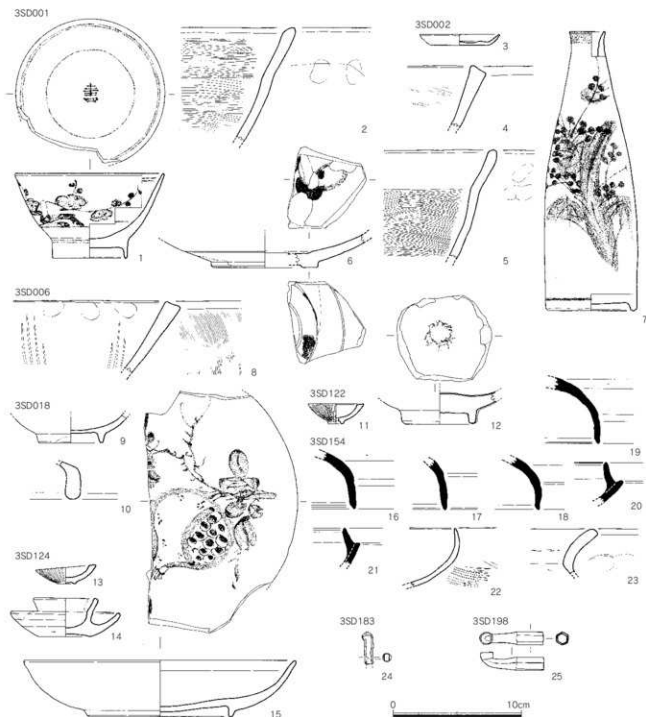


Fig 56 京ノ尾遺跡第3次調査溝出土遺物実測図(13)

陶器

小碗(9) 黒色微粒子を微量に含む明黄白色を呈する素地特徴を有し、器表面には暗茶黄色で光沢があり、細かい貫入が多く入る釉薬をかけている。なお底部と体部では器厚に差があり、底部の方が薄いつくりになっている。

土師質土器

用途不明(10) 小破片のため器種を特定することは困難である。図上では蓋として復原している。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

3SD122出土遺物(Fig 56)

白磁

紅皿(11) 褐色微粒子を極少量混入する素地特徴を有し、内外面にやや濁る青白灰色の釉薬をかけた。釉薬には光沢があり細かい貫入および褐斑が観察できる。

青磁

椀(12) 龍泉窯系青磁椀 工類に分類され、褐色微粒子をやや多く含む茶白灰色の素地特徴を有し、緑灰色の濁った釉薬を厚くかける。内外面に細かい貫入が多く入る。見込み部分には花文と思しき文様が描かれている。釉厚が厚いことから押印が描いたものかの判断ができない。

3SD124出土遺物 (Fig.56)

白磁

紅皿(13) 褐色微粒子を少量含み、外面は暗黄白色ないしは淡赤白色を呈し、断面は白色を呈する素地特徴を有し、口縁端部から内面にかけて明黄白色の光沢ある釉薬をかけている。淡灰褐色土出土。

陶器

ひょうそく(14) 微細な白色砂粒をやや多く含み暗灰色を呈する素地特徴を有し、明茶褐色から黒色を呈する鉄釉をかけている。ただし釉厚にムラがあり、底部外面は露胎のままである。なお釉の分布状況から施釉手法が復元でき、内側の「受け部」に釉薬を溜め、片方に傾けるように釉薬をかけるという手法で、全面に釉薬がかけられていない。淡灰褐色土より出土。

染付磁器

皿(15) 復原口径21.5cmの中皿で、全面施釉の後畳付部分の釉をかきとる。見込み部分に花木文様を描いている。なお見込み部分には砂が付着している。暗灰色土より出土。

3SD154出土遺物 (Fig.56)

須恵器

坏蓋(16~19) いずれも口縁端部内面に凹み(16・18)ないしは沈線(17・19)を巡らせるもので、天井部外面の処理が観察できるものは、全て回転ヘラ削りによって仕上げられている。17・18は焼成ならびに還元不良のため調整痕跡が観察できない。

坏身(20・21) 両者とも口縁端部内面に沈線を形成するもので、焼成・還元ともに良好である。観察できる範囲では外面の処理は回転ナデによって仕上げられている。

土師器

椀(22) 丸底から内湾気味に立ち上がる形態をとり、底部外面をハケによって調整する。他の部位は全て横ナデによって調整している。

甕(23) 頸部を「く」字状に屈曲させるもので、頸部上位には粘土紐痕跡が観察でき、外面には指頭圧痕が残る。体部はヘラ削りによって調整されているが、残存部分が小さいため単位までは確認できない。

3SD183出土遺物 (Fig.56)

鉄製品

釘(24) 一辺0.6cmの断面方形を呈し、残存長2.3cmを測る。折り曲げによって打部を形成している。

3SD198出土遺物 (Fig.56)

金属製品

キセル(25) 銅製のもので、断面六角形を呈し、金属部分のみの残存である。残存長5.0cm 直径1.0cmを測る。

谷

3SD109出土遺物

遺構解説において記述したT69に基づき、土層上位より下記に説明する。

3SD109茶色土出土遺物 (F.ig.57)

須恵器

坏(1) 下位の土層が近世時の堆積であることを考えると、当該資料の位置はさいして意味をなさないと考えられる。しかしこれまで記述してきたように古代における遺構数が少ない状況下において、調査区近傍における古代の遺構の存在を示すものとして、ここに報告する。

当該資料は、口縁部の細片であることから、遺物全形が明らかにし難い。口縁端部を若干外反させるものの、内外面ともに回転ナデによって仕上げており、ほぼ直立気味に復元できるところをみると、奈良期前半に帰属時期を求めることができる。

3SD109灰茶色土出土遺物 (F.ig.57)

土師質土器

鍋(2) 口縁部の破片資料で、やや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を内傾させるように平坦面を形成する。内面に横方向のハケ痕跡をとどめ、外面には煤状炭化物が付着している。形態的な特徴から防長型土師器鍋と考えられる。

3SD109茶褐色土出土遺物 (F.ig.57)

土師器

小皿a1(3) 復原口径70cmを測り、底部外面の処理は磨耗のため不明。

3SD109灰褐色土出土遺物 (F.ig.57)

金属製品

釘(4・5) 一辺0.65cm×0.85cmを測る断面正方形の鉄製の釘であるが、両者とも破片資料のため、長さ等が明らかにし難い。

石製品

鉢(6) 黒曜石製で、一部欠損しているものの、残存長20cm、幅1.75cm、厚さ0.5cmを測り、重量は10gを量る。

3SD109暗茶色土出土遺物 (F.ig.57)

青磁

碗(7) 微細な砂粒をやや多く含む白灰色を呈する素地特徴を有し、内外面に淡緑灰色のやや濁った釉薬がかけられている。硬質で光沢がありやや厚めにかけられている。なお口縁端部は釉薬が橙褐色に変色しており、口縁部内外面が付着したものが剝離した痕跡が観察できる。口縁部外面に雷文帯が巡るもので、諸特徴から上田氏の分類による龍泉窯系青磁碗C類に該当するものと考えられる(上田、1982)。

3SD109黄茶色土出土遺物 (F.ig.57)

縄文土器

深鉢(8) 内外面に条痕を明瞭に残し、外方に大きく開く口縁部形態をとる。口縁端部も同様に条痕が観察できる。胎土中に0.5cm×2.5cmの白色砂粒を多く含み、0.5mm程度の白雲母を少量含む。

金属製品

釘(9) 厚さ1.05cm、幅1.3cmを測る扁平な形状を呈しており、打部が観察できることから、クサビであると考えられる。鉄製。

木製品

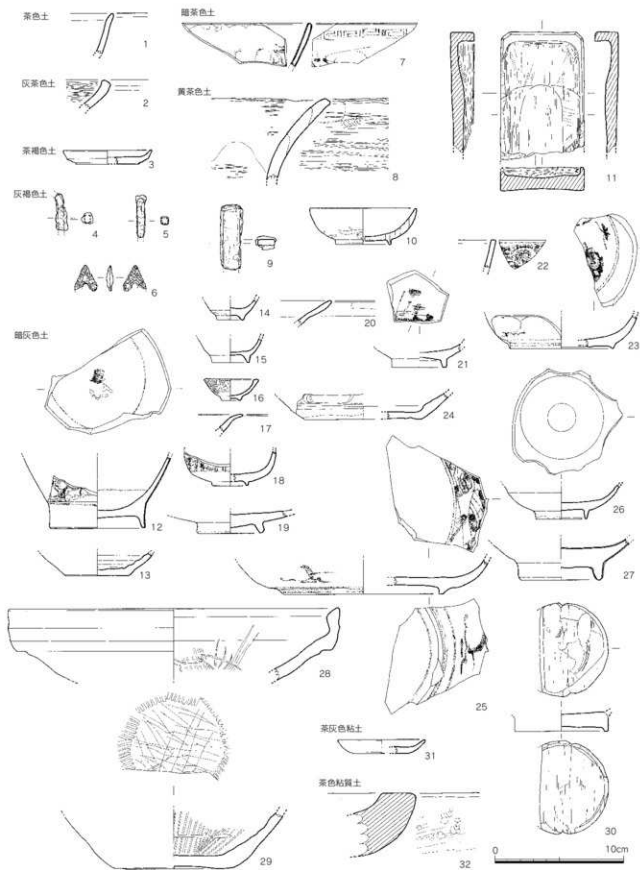


Fig 57 京ノ尾遺跡第3次調査SD109出土遺物実測図(113)

小椀(10) 内面に赤漆、外面には黒漆を塗布するもので、生地は木である。外面に漆による文様が描かれているが、文様構成については不明。復原口径8.4cm、器高2.85cm、高台径4.4cmを測る。

石製品

硯(11) 風字硯で、海部と陸部の半分程度が残存しており、陸部の半分が欠損している。陸部中央が使用によって磨り減っており、背面の接地部分も不定方向の擦り痕跡が観察され凹んでいる。石材は緑泥片岩と考えられる。

3SD109暗灰色土出土遺物(Fig.57)

土師器

坏b(13) 口縁部を欠失するもので、内面に轆轤成形時の凹凸が明瞭に観察できる。底部外面の処理は回転糸切り。

染付磁器

椀(12・18・22・23・25) 高高台椀(広東椀)と称される12、小ぶりの椀である18、口縁部だけの破片資料で全形が明らかに難しいもののそば猪口と考えられる22、蛇の目凹形高台を有し深めの皿と考えられる23がある。これらのものよりもやや大形の皿29は、体部内外面に草文と考えられる文様を描いている。なお12については、呉須の色調が滲んでおり、肥前産かどうか特定し難い。

白磁

小坏(14・15) 小形の坏で、疊付のみ釉を掻き取る15と底部外面を露胎とする14の二者がある。両者とも淡白灰茶色を呈する釉薬をかけており、素地特徴は砂粒を若干混入するものの、白灰色を呈している。

紅皿(16) 図上完形で、内面のみ淡白灰色の濁った釉をかけている。素地特徴は砂粒を少量含み、白灰色を呈している。

皿(17・19) 17は口縁部だけの破片資料で、端反の口縁部形態を有する。微細な白色ならびに黒色砂粒をやや多く含む灰白色の素地特徴を有し、内外面に淡灰色のやや濁った光沢ある釉薬をかけている。19は高台の破片資料で、疊付から底部外面について露胎で、内外面については明青灰色の釉薬をかけている。露胎部分における技法観察では、回転ヘラ削りによる削り出し高台であることがわかる。既存の分類では17は森田分類B群、19は森田氏分類B群に包括されるものと考えている(森田、1982)。

椀(26) 見込みを輪状に釉を掻き取るもので、この部分のほか疊付箇所を除く全面は、淡青灰白色のやや濁った釉薬がかけられている。やや内湾気味に立ち上がる体部形状を有し、口縁部にてやや屈曲気味に外反するものと考えられる。

青磁

梅瓶(24) 平底の底部から外方へ大きく開く体部形態を有しているものと推定できる。内面は露胎で、外面に明緑白色の光沢ある釉薬がかけられ、細かい貫入が多く入っている。このことから、内面を見せない袋物と考えられ、梅瓶とした。外面にはヘラによる文様が描かれているが、資料限界故、文様の内容については明らかにし難い。

椀(27) 底部外面を輪状に釉掻き取りを行うもので、他の部位は全面施釉する。釉薬は全体的に厚く、濃緑灰色のガラス質の釉調をとどめる。素地は微細な砂粒をやや多く含み、全体に暗灰白色を呈している。龍泉窯系青磁 工類に該当するものと考えられる。

陶器

皿(20) 体部中位に段を有するもので、口縁部外面から内面にかけて乳白色が混じる灰色の釉薬をかけている。胎土は微細な砂粒が若干混入し、灰色を呈している。唐津系陶器の範疇に入るものと考え

られる。

椀(21) 削り出し高台で、体部下位ならびに内面に明黄茶色の半透明釉薬をかけ、見込み部分に鉄釉による絵が描かれている。胎土は明茶白色を呈し、諸特徴から京都風陶器に入るものと考えられる。

播鉢(28・29) 口縁部ならびに底部の破片で、胎土特徴から同一個体の可能性があるが、接合点が見出せなかったことから、別個体として報告する。口縁部の破片28は、直立する拡張口縁部を形成し、外面を不明瞭ながら凹線状に窪ませている。内面には条

線単位が不明瞭な播り目が形づくられる。底部破片の29は、見込み部分に条線単位不明な播り目が描かれ、体部内面には咲を一単位とする播り目が描かれている。両者とも胎土は微細な白色・黒色の砂粒を少量含むもので焼上がり色調は橙系の色調を呈している。底部外面の処理は磨耗のため不明。備前系陶器 期の製品と推定する(間壁、1977)。

木製品

椀(30) 底部のみの破片で、全形を推定することは困難。見込み部分に赤漆による文様が確認できるが、残存状況が極めて悪く、文様構成については明らかにし難い。

3SD109茶灰色粘土出土遺物(Fig 57)

土師器

小皿 a1(31) 復原口径6.9cmを測るもので、底部外面は回転系切りによって処理される。胎土中に白色・茶色の砂粒を多く混入している。

3SD109茶色粘質土出土遺物(Fig 57・58)

石製品

臼(32) 石臼の受け部の破片と考えられ、砂岩を石材としている。外面には調整のための小叩き痕跡が観察できる。

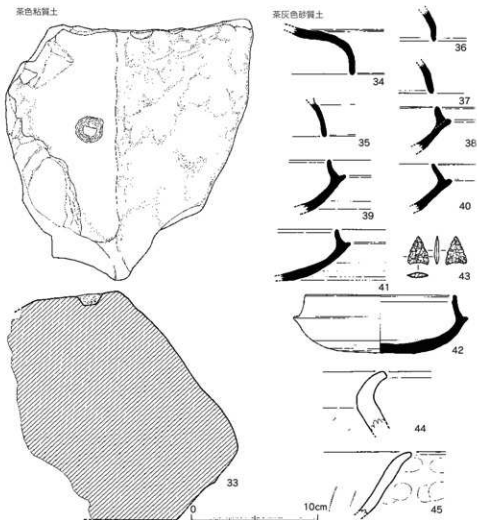


Fig 58 京ノ尾遺跡第3次調査SD109出土遺物実測図2(13)

柱座(33) 表面風化が著しく石材特定が困難であるが、重量や欠損部分から観察して玄武岩と考えられる。全体的にノミ痕跡、小叩き痕跡が観察され、箇所ホソ穴状のものが残る。穴内面が著しい擦痕が残っており、内部に何か入り込み回転していたかのような印象を受ける。このことから用途不明ながら柱座的なものを想定している。

3SD109茶灰色砂質土出土遺物 (Fig 58)

須恵器

坏蓋(34~37) 36以外は全て口縁端部を丸く仕上げるもので、36のみ口縁端部内面を窪ませている。天井部外面の処理については、34のみが回転ヘラ削り調整が観察できる。いずれも焼成・還元良好。

坏身(38~42) 42以外は、全て口縁部を丸く仕上げている。底部外面の処理は観察できない38以外のもので全て回転ヘラ削りによって調整している。42は復原口径 12.0cmを測り、口縁端部内面をやや窪ませる。

土師器

甕(44) 頸部を「く」字状に屈曲させるもので、体部内面をヘラ削りする。小破片のため口径などの法量は不明。

甕(45) 逆「八」字状に大きく開くもので、外面には指頭圧痕、内面にはヘラ削り痕跡をとどめている。全形を推定することは困難であるが、調整・形状から甕と推定した。

石製品

鎌(43) 挟りがあまり顕著でないもので、全長2.2m、最大幅17cm、厚さ0.35cmを測り、重量10gである。石材はサヌカイト。

その他の遺構

小穴、不整形土坑などが該当し、性格不明なものを当該項目に含めた。

不整形土坑

3SX004出土遺物 (Fig 59)

染付磁器

皿(1) 外反する口縁部の小破片資料で、内外面に呉須による文様が描かれている。釉調は淡白青色のやや濁ったもので、柔らかな光沢がある。呉須の色調は明るい紺色である。諸特徴から、小野氏分類のB群に属するものと考えられる(小野、1982)。

瓦質土器

火鉢(2) 丸みを帯びた体部で、やや屈曲する頸部をもち、直立気味の口縁部形態を有する。内外面ともにハケ調整を行い、体部内面下位には指頭圧痕が観察できる。

こね鉢 搦鉢(3) 破片資料であることから、用途を特定できていない。後述する(4)を考慮すると搦鉢の可能性が高い。焼成不良ながら、内面に横方向のハケ調整痕跡が観察できる。

搦鉢(4) 内面に搦り目が観察でき、口縁端部をハケ調整によって平坦に仕上げている。内面は横方向のハケ痕跡が明瞭に残り、外面は指頭圧痕、縦方向のハケ痕跡が観察できる。搦り目の条線は8本を一単位とするものと考えられる。

土師質土器

搦鉢(5・8) 全形が判明する(5)は、平底からやや内湾する体部から内傾する平坦面を有する口縁端部形態を呈する。注口が三本指によるつまみ出しによって形成され、内面には5本を一単位とする条線が観察できる。外面には多くの指頭圧痕が残存し、口縁部外面には煤状炭化物が付着している。なお胎土中に角閃石片を少量含んでいる。底部のみの破片資料である(8)は、内面をハケ調整した後、6

糸を一単位とする条線を入れている。底部外面はナデによって仕上げられている。

鍋(6・7) 内湾気味の体部に、やや外方へ屈曲させる口縁部が付き、鉄鍋模倣形態とされる鍋と考えられる。体部内面には両者ともハケ痕跡が観察でき、外面には指頭圧痕をとどめている。なお(6)は胎土中に角閃石を多く含んでおり、形態上差異のない両者であるが、胎土によって二者存在していることが分かる。

石製品

砥石(9) 粘板岩製のもので、二面を使用している。

石臼(10) 凝灰岩製と考えられ、細片であることから用途を特定することができない。

3SX010出土遺物(Fig 59・60)

須恵器

坏蓋(11-16) 口縁端部内面に沈線ないしは凹線を有するもの(11・12・14・16)と内傾する平坦面を形成するもの(13)の二者がある。天井部外面が観察できるものは全て回転ヘラ削りによって仕上げられており、13は天井部外面にヘラ記号を有している。

坏身(17-22) 坏蓋同様に口縁端部内面に沈線ないしは凹線を有するもの(17・18・20・22)とやや内傾する面を有するもの(19)の二者がある。口縁部のみ破片資料が多いため底部外面の処理について明らかにし難いが、底部が残存する20および22については、いずれも回転ヘラ削りによって仕上げられている。

土師器

小鉢(23-25) ミニチュア土器と呼称されるもので、手づくねによる成形のため内外面に指頭圧痕を明瞭に残している。

碗(26-34) 丸底から内湾気味に立ち上がり、丸い口縁端部形状を有するもの(26・31・33・34)と、口縁部を外反させるもの(32)の二者がある。内面はハケ、ナデによる器面調整を行っており、底部外面についてはハケおよびヘラによる調整が行われている。なお33については、内外面にナデ痕跡を明瞭にとどめている。

甕(35-38) 頸部を「く」字形に屈曲させるものと、口縁部をつまみ上げによって成形するものがある。口縁部の破片資料であり全形が判然としない。(37・38)については内面に粘土紐痕跡が観察できる。

甗(39) 口縁部破片のため、用途については、直線的な形状から甗と推定した。観察できる範囲からは内外面ともにナデによって仕上げている。

壺(40) 胴張りのする形状であることから壺と推定した。内面はヘラ削り、外面は指頭圧の後ハケによる器面調整を行っている。

把手付甕(41・42) 下膨れのする体部に、やや外方へ屈曲する頸部を有し、内面はヘラ削り、外面には指頭圧痕が観察できる。把手ははめ込み式のもので丁寧に貼付されている。頸部内面には粘土紐痕跡が観察できる。

石製品

用途不明(43) 粘板岩製のもので、削り痕跡様のものが観察できたため報告した。しかし破片資料であることから器種等について特定できていない。

3SX010灰茶色土出土遺物(Fig 60)

須恵器

坏蓋(44-46) 口縁端部内面を窪ませるもの(45・46)ないしは内傾させるもの(44)の二者があり、先の3SX010と同様の傾向を有する。いずれも口縁部のみ破片資料であることから、天井部に関

する情報は得られていない。

坏身(47) 焼成および還元不良のため、成形ならびに調整に関する情報が欠失している。復原口径は11.8cmを測る。

土師器

甌(48) 直線的に外方へ広がる口縁部形態を有し、体部内面は縦方向のハケ、口縁部は横方向のハケによって調整されている。外面は指頭圧痕が観察でき、その上を縦方向の粗いハケによって調整している。

3SX013出土遺物(Fig.60)

土師器

坏a(51) 底部のみの破片資料のため、法量計測が困難。底部外面は回転系切りによって処理されている。外面に煤状炭化物が付着している。

土師質土器

鍋(49・52・53) それぞれ形態に差がある。49は鉄鍋模倣形であるが、口縁端部上面に平坦面を形成し内外面はナデにより仕上げている。52は前者同様、鉄鍋模倣形であるが口縁端部は丸く仕上げられており、外面にハケならびに指頭圧痕が観察できる。これら二点と大きく異なる形状を53は呈し、口縁部を折り曲げることで凸帯状のものを口縁部外面に形成している。内面はハケ、外面には指頭圧痕を明瞭に残し、凸帯下位に煤状炭化物の付着が見られる。

白磁

碗 皿(56) 薄手のもので、口縁部の小破片のため器種特定に至っていない。淡灰緑色の濁った釉がかかけられており、細かな貫入が内外面に観察できる。

青磁

碗(54) 口縁部外面に雷文を施文するもので、ヘラによる形骸化した雷文が描かれている。緑灰色の濁りのある釉薬が内外面に厚くかけられており、貫入が内外に観察できる。素地は砂粒をやや多く含む白灰色を呈する。上田氏分類のC類に属するものと考えられる。

染付磁器

皿(55) 底部の小破片で、断面三角形の高台を有し、見込みならびに外面に濃紺色 淡い青色を呈する呉須による施文がなされている。畳付部分の釉薬がかき取られている他は、全面に釉薬がかかけられている。釉調は淡白灰色のやや透明なものである。これらの特徴から、小野氏分類の皿B群に該当するものと考えられる(小野、1982)。

石製品

砥石(50・57) 粘板岩を石材とする50と砂岩を石材とする57がある。50は敲打痕跡が一面観察できる。

3SX014出土遺物(Fig.61)

白磁

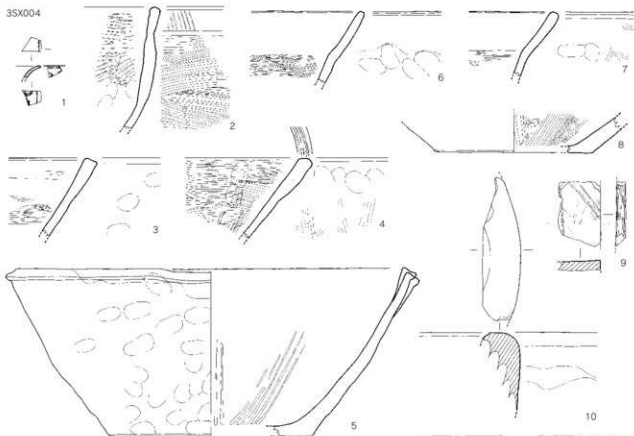
小碗(58・59) 口縁部ならびに高台部分の小破片資料で、全形については明らかにし難い。口縁部のみ破片資料58は、内外面に施釉し口縁部外面をやや反させる。高台のみ破片資料59は畳付部分の釉薬を掻き取り、断面三角形の高台形状を有している。

3SX024出土遺物(Fig.61)

陶器

皿(60) 高台脇から底部にかけて露胎とし、他の部位は全て淡黄白色で光沢ある釉薬がかかけられて

3SX004



3SX010

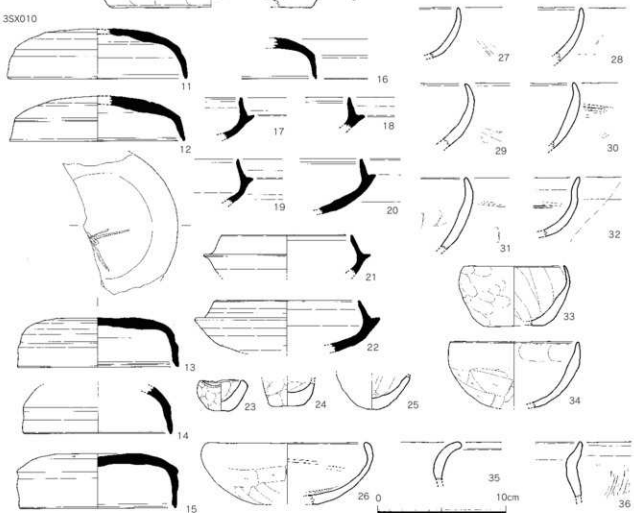


Fig 59 京ノ尾遺跡第3次調査その他の遺構出土遺物実測図(1/3)

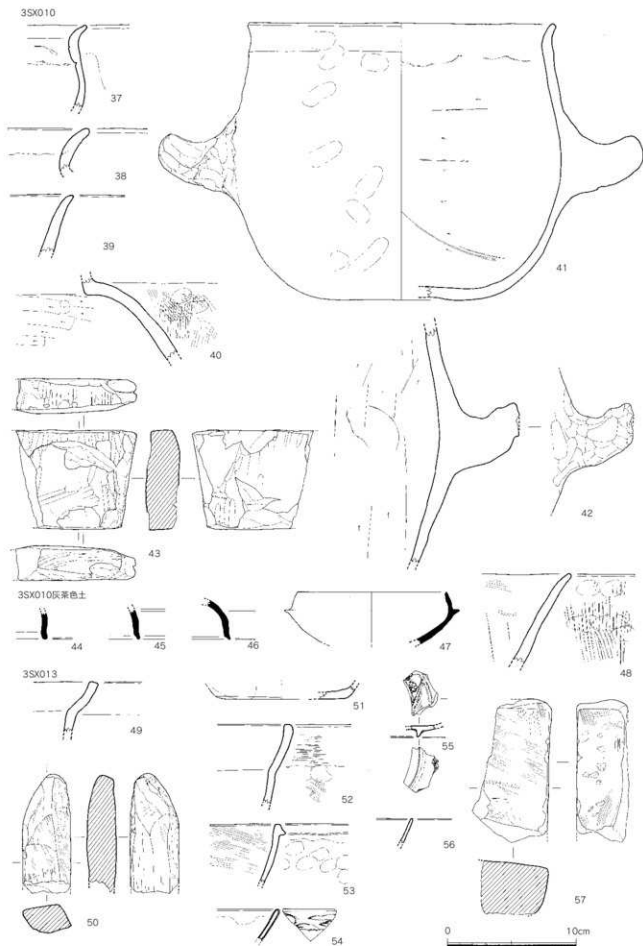


Fig 60 京ノ尾遺跡第3次調査その他の遺構出土遺物実測図(2/13)

いる。

3SX027出土遺物 (Fig61)

青磁

椀 (61) 口縁部の小破片で、外面に雷文を描くものと考えられる。内外面ともに淡緑灰色の釉薬を厚めに施釉している。龍泉窯系青磁椀で上田氏分類のC 類に入るものと考えられる (上田、1982)。

3SX031出土遺物 (Fig61)

染付磁器

椀 (62~64) 三者とも椀と考えられるが、64は高高台椀と考えられ直立する高台を有する。63は見込み部分を輪状に釉を掻き取っており、見込み中央部に五弁花の文様が観察できる。いずれも高台部分の破片であり全形については明らかにし難い。

陶器

椀 (66) 内外面ともに黒褐色から茶褐色を呈する鉄釉をかけ、口縁部を僅かに外反させる。体部外面下位は露胎としており、「天目茶碗」と考えられる。

石製品

砥石 (65) 砂岩製で、二面に使用痕跡が観察できる。

3SX041出土遺物 (Fig61)

須恵器

坏蓋 (67) 口縁部の小破片であり、全形については明らかにし難い。残存する部分からは、口縁端部をやや外方へ屈曲させる形態をとる。

坏身 (68・69) 破片資料であることから、詳細は不明。口縁部まで残存する (69) は、やや内傾する平坦面を口縁端部に観察できるものの、丸い形態に近づいており、形状化したものとして捉えた方がよいと考えられる。観察できる範囲では外面は全て回転ナデ調整である。

3SX102出土遺物 (Fig61)

金属製品

釘 (70) 打部を折り曲げるもので、尖端を僅かに欠損している。断面正方形のもの。

3SX107出土遺物 (Fig61)

金属製品

刀子 (71) 両端を欠損するもので、全形については明らかにし難い。

3SX117出土遺物 (Fig61)

須恵器

壺 a (72・73) 両者とも口縁端部の破片資料で、口縁端部に平坦面を有することから壺 a (短頸壺) と判断した。

3SX121出土遺物 (Fig61)

青磁

椀 (74) 体部下位から口縁部までの破片資料で、口縁部を外反させる形態を有する。内外面ともに明緑灰色のやや濁った釉薬がかけられ、細かい貫入が多く入る。釉厚は厚い。龍泉窯系青磁椀 類の範疇に入る。

3SX129出土遺物 (Fig61)

石製品

砥石 (75) 砥石の石材としては珍しい花崗岩製で、二面に擦痕が観察できる。

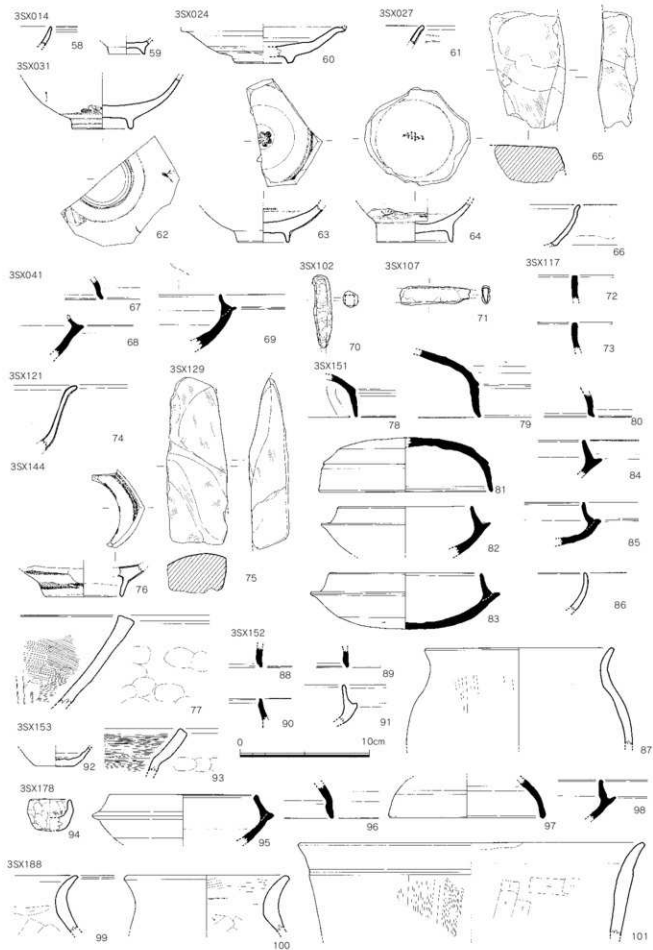


Fig 61 京ノ尾遺跡第3次調査その他の遺構出土遺物実測図(3/13)

3SX144出土遺物 (Fig61)

染付磁器

椀 (76) 底部中心に向かって高台が傾斜し、内外面ともに呉須による施文がなされている。畳付ならびに高台内面が露胎であるが、他の部位は観察できる範囲ですべて施軸されている。底部が円形に欠損しており、人為性がうかがえる。小野氏分類椀群に該当するものと考えている (小野、1982)。

土師質土器

播鉢 (77) 口縁端部を内傾させ平坦面を形成するもので、内面にハケ調整ならびに播り目が観察できる。外面には指頭圧痕のみ観察でき、胎土中に角閃石を少量混入している。

3SX151出土遺物 (Fig61)

須恵器

坏蓋 (78~81) 口縁端部を丸く仕上げるもの (78・79) と口縁端部内面に凹線を形成するもの (80・81) の二者がある。天井部外面が観察できる個体は全て回転ヘラ削りによって仕上げられている。坏身 (82~85) 坏身の口縁端部も坏蓋同様に、丸く仕上げているもの (82~84) 窪ませているもの (85) の二者がある。底部外面が観察できる (83) では、回転ヘラ削りによって仕上げられている。

土師器

椀 (86) 内湾する体部形態をとり、口縁部は丸く仕上げている。焼成不良のため調整痕跡が観察し辛い。内外面ともにナデによって仕上げられている。

甕 (87) 胴張りのする体部から、「く」字状に屈曲する頸部形状をとる。内面はナデ、外面はハケ痕跡が観察できる。

3SX152出土遺物 (Fig61)

須恵器

坏蓋 (88・89) 口縁端部内面を窪ませるもの。小破片のため詳細な情報が得難い。

坏身 (90) やや内傾する口縁部形態をとり、端部内面を窪ませている。

土師器

坏身 (91) 内外面ともに褐色系の色調を有し、かえり部分が未発達な印象を受けることから、土師器と判断した。ただし焼成不良のため、成形・調整については不明。

3SX153出土遺物 (Fig61)

土師器

小皿 b (92) 口縁部を欠損するもので、内面には轆轤目が顕著に残っている。底部外面は回転糸切りにより処理されている。

土師質土器

鍋 (93) 口縁部を外方へ屈曲させるもので、鉄鍋模倣形態に属している。内面は横方向のハケ、頸部外面に指頭圧痕を顕著に残す。

3SX178出土遺物 (Fig61)

須恵器

坏身 (95) 口縁端部を内傾させるように平坦面を形成し、復原口径 11.7cm を測る。観察できる範囲では底部外面は回転ナデによって仕上げている。

土師器

小椀 (94) ミニチュア土器に属し、内外面に指頭圧痕を顕著に残す。

3SX188出土遺物 (Fig61)

須恵器

坏蓋(96・97) 両者とも口縁端部を丸く仕上げているもので、観察できる範囲では内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

坏身(98) 口縁部の破片で、先の坏身同様口縁端部を丸く仕上げている。

土師器

甕(99・100) 頸部を「く」字形に屈曲させ、体部内面はヘラ削り、口縁部内面をハケによって調整するもの(100)とナデによるもの(99)がある。

甎(101) 直線的に外方へ開くことから甎と判断した。内面はヘラ削り、外面はハケ調整し、口縁部は横ナデによって仕上げている。

小穴

3SX012出土遺物(Fig.62)

染付磁器

椀(1) 丸みを有する底部からやや直立気味に口縁部へ立ち上がる。外面には淡い青灰白色の呉須による文様が描かれている。

3SX037出土遺物(Fig.62)

須恵器

坏c(2) 底部から丸みを有しつつ、直立気味に立ち上がる口縁部形態をとり、断面台形の高台を下に貼付する。奈良期中頃のものと考えられる。

3SX054出土遺物(Fig.62)

須恵器

蓋3(3) 断面三角形の口縁部形態を有し、天井部外面に回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

3SX079出土遺物(Fig.62)

石製品

砥石(4) 風化が著しいことから石材特定が困難であるものの、花崗岩ではないかと考えられる。一面に使用による擦痕をとどめる。

3SX092出土遺物(Fig.62)

須恵器

蓋3(5) 断面三角形の口縁部形態を有し、観察できる範囲では内外面ともに回転ナデ調整である。

皿(6) 口縁部だけの破片資料で、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。焼成・還元とも不良。

3SX093出土遺物(Fig.62)

土師器

椀(7-9) 体部形状が内湾するもの(7・8)と、口縁部を若干外反させるもの(9)の二者がある。(7)は底部外面をヘラ削りし、(9)は底部外面をナデによって仕上げている。(8)は焼成不良のため不明。

3SX146出土遺物(Fig.62)

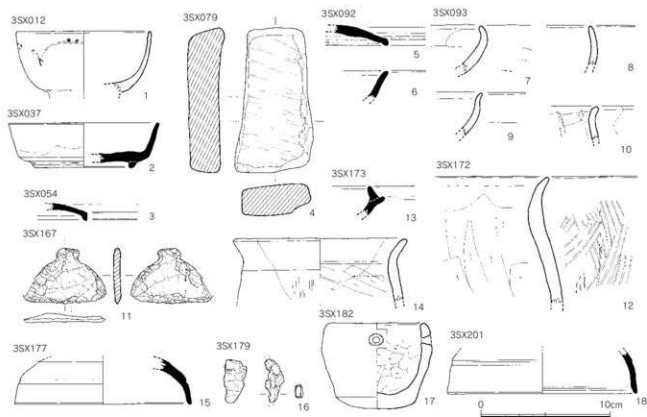
土師器

甕(10) 口縁部を若干外方へ屈曲させるもので、体部内面をヘラ削りしている。

3SX167出土遺物(Fig.62)

石製品

石匙(11) 青みがかった黒色を呈し、サヌカイトを石材としている。刃部長6.45cm 厚さ0.5cmを測る。



Fg 62 京ノ尾遺跡第3次調査その他の遺構出土遺物実測図(4/13)

3SX172出土遺物 (Fg 62)

土師器

甕 (12) やや胴張りのする体部形態を有し、頸部を「く」字に屈曲させる。内面はヘラ削り、外面は粗いハケにて調整している。

3SX173出土遺物 (Fg 62)

須恵器

坏身 (13) 口縁部だけの破片資料。口縁端部を丸く仕上げるもの。

土師器

甕 (14) 頸部を「く」字状に屈曲させるが、あまり胴張りが無い。体部内面はヘラ削り、外面はハケにて調整している。口縁部内面から体部内面にかけて煤状炭化物が付着している。

3SX177出土遺物 (Fg 62)

須恵器

坏身 (15) 口縁部と天井部の境界に凹線が入り、口縁端部は丸く仕上げている。天井部外面は回転ヘラ削りが観察できる。

3SX179出土遺物 (Fg 62)

金属製品

釘 (16) 小破片で、木質が付着している。断面は長方形。

3SX182出土遺物 (Fg 62)

土師器

小椀 (17) 手づくねによる成形で口縁部に一箇所穿孔があり、「たこ壺」と称されるものではないかと考えられる。

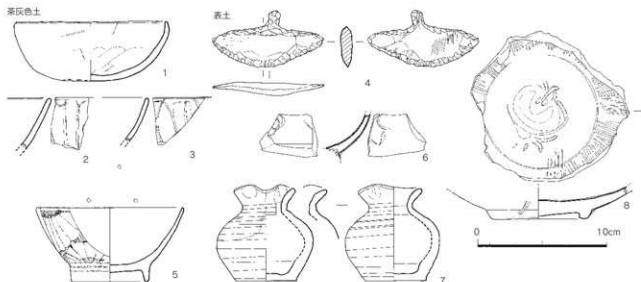


Fig 63 京ノ尾遺跡第3次調査土層出土遺物実測図 13)

3SX201出土遺物 (Fig 62)

須恵器

坏蓋 (18) 口縁端部をやや窪ませるもので、口縁部と天井部の境界に沈線を入れる。

土層

茶灰色土出土遺物 (Fig 63)

土師器

碗 (1) 丸底の底部から内湾気味に口縁部へ至る。内外面には調整のための工具痕跡が観察でき、工具の「当り」痕跡が各所に観察できる。

青磁

碗 (2・3) 外面に蓮弁文が描かれるものであるが、刺頭と細線が分離したもの (2) と分離していないもの (3) の二者がある。刺頭と細線が分離しているものについては、まだ各々が一致しており骸化があまり進んでいないものと判断される。両者とも龍泉窯系青磁に該当し、前者が上田氏分類 B 類、後者が B 類に該当するものと考えられる (上田、1982)。

表土出土遺物 (Fig 63)

石製品

石匙 (4) サヌカイトを石材とし、刃部長 8.8cm を測る。両面に使用に伴うものと考えられる擦痕が観察できる。

染付磁器

碗 (5) 高高台碗で、体部外面に花文を紺色の呉須で描いている。見込み部分に 壺首「ハリ」状の目跡が観察できる。

青磁

碗 (6) 龍泉窯系青磁に該当し、内外面にヘラによる施文がある。内外面ともに明灰緑色を呈する釉薬をかけており、やや厚めの釉厚である。

盤 (8) 高台のみの破片で、全形を明らかにし難い。底部外面を霽胎にする以外は、全面に暗緑色を呈するガラス質の釉薬がかけられている。見込み部分には印文が観察できるが、釉厚が厚いため、判読できない。

陶器

鷹口壺(7) 器高76cmを測る小壺で、注口をつまみ出しによって形成している。内外面ともに回転ナデによって成形しており、底部外面には回転系切り痕跡が観察できる。色調は暗灰色を呈し、灰色砂粒を少量混入している。諸特徴から備前期に属する製品と考えられる(間壁、1977)。

【引用文献】

- 間壁忠彦(1977)「備前」『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館
上田秀夫(1982)「14-16世紀の青磁碗の種類」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
小野正敏(1982)「15-16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会
森田 勉(1982)「14-16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

(5) 小結

A 竪穴住居群

先に竪穴住居の建造方向や空間的な距離によって群にまとめる可能性を指摘した。再度確認すると以下ようになる。

A群: 3SD3Q 3SD55

B群: 3SD45

C群: 3SD8Q 3SD9Q 3SD95

これら群の他に、隣接する京ノ尾遺跡第4次調査でも竪穴住居跡が数軒確認されており、これらを総合的に考える必要がある。ここでは、上記群の帰属時期について記述し小結とする。

各遺構から出土した遺物から導き出される帰属時期について大別すると以下ようになる。

期: (須恵器坏身および坏蓋の口縁端部内面において、沈線ないしは内傾する面を形成するものによって構成される。) 3SD3Q 3SD90

期: (須恵器坏身および坏蓋の口縁端部内面において、沈線を有するものと丸くおさめるものが混在する。) 3SD45 3SD8Q 3SD95

期: (須恵器坏身および坏蓋の口縁端部内面において、丸くおさめるもののみで構成される。) 3SD55

これらと先の想定される群構成から、住居跡の変遷を考えると以下ようになる。

3SD30 3SD55

3SD90 3SD95 3SD80

3SD45

期において3棟の竪穴住居が並存したようにとれるが、3SD95と3SD80が切りあい関係にあり、建替えによる規模拡大とも考えられることから、本調査区内における並存住居は2棟と考えられる。期には3SD55のみとなることから別地への移動ないしは、同地での衰退が想定される。

これら各期の具体的な時期は、既存の編年観で記すと下記のように考えている(小田、1979)。

期: 6世紀前半(期 < A期)

期: 6世紀中葉(A・B期)

期: 6世紀後半(B期)

B 中世後期の遺構

京ノ尾遺跡第3次調査区内で中世中期に位置する遺構は、鎌倉期から室町期を境として前後に分けたとき、遺構一覧に記載したように中世後期に属するものが圧倒的に多いことがわかる。具体的な時間軸上の位置は、当該期における「在地土器」編年、特に中世前期の土器編年とは対照的に、土器器供膳具

の詳細な編年が確立されず、問題として残されていることに起因し、大きく立ち遅れていると言わざるを得ない。大まかな検討を以下に行い、出土遺物の時間的位置を確認し、その後当該調査区周辺に所在している同時代社会背景を考慮した上での遺跡解釈を簡単に行う。

a土器の検討

中世後期の土器に関する検討は、室町期、実年代観で14世紀代のものについては別稿にて検討してきた(中島、2002)。その後の15世紀～17世紀のものについては、太宰府において資料が希薄なこともあり、十分な検討を行えないのが実状である。そこで、隣接資料として博多遺跡群での出土資料を手がかりとし、検証資料として旧筑後国内の資料を用い、空間的安定性に関する検討を経た後、様相設定を行った(中島、2005)。主要な分析対象資料は、空間的に安定的に出土する土師器供膳具を対象とする。

抽出する資料群は、Tab 7に記載した資料群で、共伴した広域分布品の年代観、報告者の年代観、さらには先学等による詳細な分析結果を加味して、先後関係を検討した。

その結果、土師器環・小皿で口径の縮小化傾向が観察でき、法量による型式化を試みた。型式化された資料群の組列を表記したものが、Fig 64となる。

次に、これら各型式との共伴資料による様相観察を行う。抽出した資料群が必ずしも一括資料ばかりではないため、資料群個々が有する資料限界を内包している。この点に関しては、今後の検討課題として残される。

これらの諸手続きに基づき様相を設定すると、分析対象時間幅内において、3期の様相に大きく区分されることになる。設定された各様相の詳細について、以下に記載する。

なお設定様相番号が中途からになっているのは、大宰府成立時からの様相設定に基づいていることによる。

期

構成形式：土師器(環E類 環F類【少量】小皿A類 小皿A類)
瓦質土器(鉢類 鉢類 火鉢類)
輸入陶磁器(大宰府G期構成陶磁器 森田A D群構成白磁)
国内産陶器(瀬戸・美濃系陶器 備前系陶器 常滑系陶器)

期

構成形式：土師器(環E類 環F類【少量】小皿A類 小皿A類) 法量縮小
瓦質土器(鉢類【少量】 鉢類 火鉢類 火鉢類 茶釜)
輸入陶磁器(大宰府G期構成陶磁器 森田E群構成白磁 上田 期構成青磁 青花)
国内産陶器(瀬戸・美濃系陶器 備前系陶器 常滑系陶器)

期

構成形式：土師器(環E類 環F類【少量】小皿A類 小皿A類) 法量縮小
瓦質土器(鉢類【少量】 鉢類 火鉢類 火鉢類 茶釜)
輸入陶磁器(大宰府G期構成陶磁器 森田E群構成白磁 上田 期構成青磁 青花)
国内産陶器(唐津系陶器 瀬戸・美濃系陶器 備前系陶器 常滑系陶器)

b実年代の付与

前項にて設定した各様相の時間軸上での位置確認を行うための基礎資料は、これまで蓄積されてきた紀年銘記載資料との関係を問うことで推定する。具体的な資料は、Tab 8に記載した資料群で、各資料の一括性を視点とした等級、紀年記載資料自体が有する「保管」性と記載年代との関係を視点とした等級を記し、各資料群が有している様相へ、実年代観を付与するに足る資料であるかを明記した。各資料

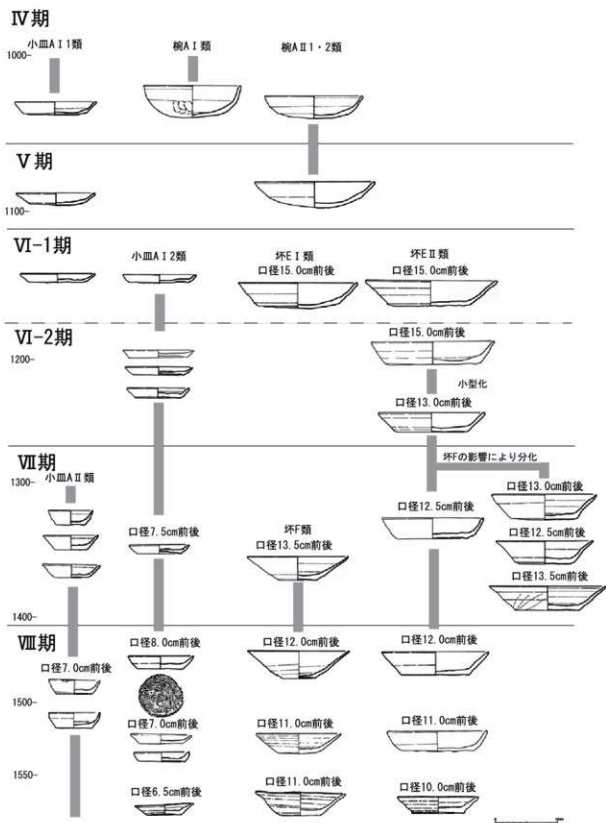


Fig 64 土師器環・小皿の時間軸上での変遷
 【左端の数字は概略の時間的位置 西暦 を記載】(S = 16)

の詳細については、引用文献として記載しているので、ご参照いただきたい。

これら実年代付と資料の設定様相下における位置を検討し、各様相の混在状況を一括資料上で検討した結果がF図64となる。本稿にて設定した様相および年代観の検証については、広域分布品の有する年代観を手がかりに検証している。

c遺構の時間軸上での位置

先に検討した考古資料の時間軸上での位置を手がかりにして、当該調査で検出した諸遺構の時間的位置を推定する。ただし遺構出土資料の量および型式認定に左右され、時間的位置の長短が生じている。この点は、型式存続幅から生じたことであり、いわば分析限界ということになる。

以上のことを踏まえ、遺構一覧に記した「中世後期」に位置すると考えられる諸遺構の具体的な位置を表現したものが、Tab6となる。これらから、漠然と「中世後期」と捉えていた各遺構の帰属時期が大まかではあるが、16世紀代に収まることが分かる。次項において今次調査で明らかとなった事象について、16世紀史を踏まえて一定の整理を行っておく。

d当該調査区の空間的位置

本文で記してきた各遺構の帰属時期は、大略16世紀代に収まる。16世紀代の時代背景としては戦国期に当り、大宰府においても大内氏・大友氏・高橋氏・島津氏等による攻防が繰り返されていた時期である(太宰府市、2004)。

太宰府市大佐野地区の南、筑紫野市杉塚に筑紫氏の出城とされる和久堂城跡があり戦乱の世にあって、大佐野地区も例外ではなかったものと思われる(福岡県教委、1979)。このような歴史的情勢にあって、16世紀に位置する遺構からは、土師器杯・小皿、土師質土器鍋・播鉢、瓦質土器鍋・播鉢など中世後期に一般的な食器が出土している。また、これらと共に本文においては染付磁器として報告してきた青花磁器、備前産陶器も出土しており、量は少ないものの中国産陶磁器、国内産陶器も受容できる階層であったことが分かる。加えて土師質土器鍋・播鉢において角閃石を含む製品がある。酸性岩地帯である太宰府の位置を考えた時、これら塩基性岩風化生成物を原料とする製品を生産する地からの搬入品と考えられ、「雑器」類においても搬入品を受容するなど、決して「在地」製品のみで食器を構成していたのではないことが分かる。第3次調査では良好な一括資料に恵まれていないため、これ以上踏み込んだ議論を成し得ない。しかし、搬入品を一定量受容した食器構成を保持していた点を考慮すると、決して自立的な食器構成ではなかったことだけは指摘できる。これら搬入品(広域・狭域流通品)の入手経路、角閃石を混入する「雑器」生産地、瓦質土器生産地などこれまで「在地」生産品として処理されてきたこれら「雑器」類の生産地を明らかにし、狭域流通品の実態を調べる必要性を強く感じる。

【引用文献】

- 福岡県教育委員会(1979)「付録 福岡県中世山城跡」、『九州縦貫自動車道関係係属文化財調査報告』
- 小田富士雄(1979)「九州の須恵器」、『世界陶磁全集 2 日本古代』小学館
- 太宰府市(2004)『太宰府市史 通史編』
- 中島恒次郎(2002)「遺跡の時間軸上での位置付け」、『大宰府系坊跡 分析編』太宰府市教育委員会
- 中島恒次郎(2005)「九州」、『中世窯業の諸相 - 生産技術の展開と編年 - 』文部科学省特定領域研究

Tab 5 3SD 109土層関係

		取り上げ土層名			
上位	茶色土	(古代)			
	灰白色砂		灰茶色土	(近世)	
			茶褐色土	(中世)	
			暗茶褐色土	(近世)	
		灰褐色土	現代	黄茶土	
		暗茶色土	(中世後期)		
		黒灰色土			
		黄茶色土	現代		
	暗灰色土	近世		暗灰土	
下位	茶色粘土	中世後期		茶粘 (腐食(植)土)	
	茶灰色粘土	(中世前期)	茶色粘質土		茶灰粘
	茶褐色粘土				
			茶灰色砂質土	中世後期	
不明	暗灰色砂質土	古墳後期		茶灰砂	
	黄灰色粘質土	不明			
	黄灰色土	不明			

Tab 6 「中世後期」に位置する検出遺構の
時間的な位置

推定 実年代	様相	遺構の時間的位置	
1400	VII期	3SK016	
		3SK050	
1500	VIII期	3SK070	3SX013
		3SB130	3SX004
			3SX153
			3SD099

Tab 7 分析対象遺構一覧

遺構名	種類	施設名称		一宮 名称	所在地	基礎部												基礎外、土質等												基礎付法				備考			
		名称	種類			基礎				基礎外				土質等				基礎付法																			
						1.1 基礎	1.2 基礎	1.3 基礎	1.4 基礎	1.5 基礎	1.6 基礎	1.7 基礎	1.8 基礎	1.9 基礎	2.1 土質	2.2 土質	2.3 土質	2.4 土質	3.1 基礎付法	3.2 基礎付法	3.3 基礎付法	3.4 基礎付法															
三宮遺構第10次調査	水堀	SK1100	土坑	○	33東配水	10.8m-13.8m	12.7m				7.4m-9.8m	8.5m																			16						
稲崎遺構第1次調査	瓦葺	SK5	土坑 ¹⁾	×	14東平	11.8m-14.8m	12.5m				7.8m-10.8m	8.8m	10.5m	10.5m																	22						
猪手遺構第104次調査	猪手	120号遺構	瓦葺瓦葺	×	14東平	10.6m-12.2m					7.5m-9.5m																										
田原町遺構第1次調査	竪堀	012号遺構	土坑	×	14東平	10.2m-10.2m	12.7m				2.8m-8.8m	8.1m	7.5m	7.8m	○	○																13					
猪手遺構第20次調査	猪手	017号遺構	土坑 ¹⁾	×	14東平～中郷	12.5m-12.6m	12.7m				8.2m																										
下川町遺構第1次調査	掘削	009	溝	○	14東平	11.16m-14.25m	12.8m				8.5m-10.8m	7.8m	8.7m-9.3m	8.2m																			19				
平蔵遺構	遺構	SK120A-120B	土坑	×	14東平	12.15m-11.5m	12.45m				7.25m-8.85m	7.85m	7.5m-7.2m	7.45m																			20				
猪手遺構第10次調査	猪手	107号土坑	土坑	○	14東平	12.8m-15.8m	13.45m				8.3m-9.8m	8.8m	7.2m-7.8m	7.2m																				2			
平蔵遺構	遺構	SK121	土坑	×	14東平	12.28m-14.7m	13.45m				7.25m-8.8m	7.85m	8.15m-8.75m	7.25m																				20			
平蔵遺構	遺構	SK124-219	土坑	×	14東平	12.15m-12.36m	13.45m				7.35m-8.75m	8.17m																						20			
稲崎遺構第1次調査	竪堀	SK109	土坑 ¹⁾	○	15西郷			14.8m	14.8m		7.8m-9.8m	8.1m																						14			
猪手遺構第12次調査	猪手	SK410	土坑	×	15西郷	12.36m-14.7m	13.5m				7.8m-9.8m	8.15m	7.6m	7.6m	○	○																		6			
猪手遺構第1次調査	猪手	SK01	土坑 ¹⁾	×	15西郷	12.5m-12.5m	12.4m				7.2m-9.3m	7.55m	7.8m	7.8m																					27		
大卒町大講堂内池遺構第1次調査	土中貯	198002	土坑	×	15西郷	12.9m-12.2m	12.4m				8.3m-8.8m	7.5m	8.4m-7.82m	8.85m	○	○																		1			
猪手遺構第10次調査	猪手	SK0102	溝	×	15西郷	11.5m-12.3m	12.36m	11.5m	11.5m		8.8m-7.45m	8.95m	8.15m-8.95m	8.8m																				7			
猪手遺構第20次調査	猪手	271号土坑	土坑	×	15西郷	11.8m-14.2m	12.6m				7.2m-9.2m	7.42m																						15			
月形町七郎遺構第2次調査	掘削	SK16	溝	×	15西郷	11.4m-13.8m	12.36m				7.95m-8.25m	8.75m																						26			
猪手遺構第21次調査	猪手	SK01	土坑	×	15西郷	12.6m-12.8m	12.5m	11.5m-11.5m	11.4m			8.5m-7.3m	8.75m																						17		
猪手遺構第22次調査	猪手	SK04	土坑 ¹⁾	×	15西郷	11.6m-13.2m	12.6m	10.8m	10.8m		8.3m-8.8m	7.2m	8.5m	8.5m																				11			
大卒町大講堂第10次調査	土中貯	SK1805	溝	×	15西郷	10.6m-11.5m	11.2m	10.6m-10.6m	10.5m		8.4m-7.2m	7.2m																							15		
掘削の森遺構	掘削	1930201	土坑 ¹⁾	×	15西郷	10.5m-12.2m	11.45m				7.3m-8.4m	8.75m																							21		
海洋遺構	瓦葺	SK44	土坑	×	16南郷	10.8m-11.8m	10.93m	12.4m	12.4m			8.9m-7.5m	8.4m																						22		
海洋遺構	瓦葺	SK20	土坑	○	16南郷	9.8m-11.3m	10.47m				8.9m	8.9m	8.9m-7.5m	8.5m																					23		
海洋遺構第1次調査	瓦葺	SK04	土坑 ¹⁾	×	16南郷	10.5m-11.5m	10.71m				8.4m	8.4m	8.9m-7.2m	8.8m	○	○																			24		
猪手遺構第11次調査	猪手	SK04	土坑	×	16南郷	10.26m-11.85m	10.47m	10.8m-11.25m	10.71m		8.85m-7.2m	8.88m	8.98m-7.25m	7.25m																					9		
猪手遺構第11次調査	猪手	171号遺構	竪堀土坑	×	16南郷	9.7m-10.4m	10.1m	11.5m	11.5m		8.7m-7.2m	7.8m																							12		
猪手遺構第12次調査	猪手	SK08	土坑	×	16南郷	9.88m-12.25m	10.14m				8.95m-8.15m	7.7m	8.75m-7.38m	8.9m																					10		
猪手遺構第10次調査	猪手	SK004遺構	竪堀土坑	×	16南郷		10.2m		11.5m																												6
猪手遺構第1次調査	猪手	23号遺構	土坑	×	16南郷	10.4m-10.8m	10.46m				8.4m-7.5m	8.15m	8.15m	8.45m	○	○																			8		
猪手遺構第13次調査	猪手	SK10土坑	土坑	○	16南郷	9.45m-12.15m	10.9m				7.55m-8.25m	7.36m	8.45m-7.15m	8.2m	○	○																					16
猪手遺構第16次調査	猪手	151号遺構	土坑	×	16南郷						8.4m-8.8m																									3	
猪手遺構第20次調査	猪手	150003	土坑	×	16南郷	11.7号掘	12.2m					7.3m	7.5m		○	○																			4		

Tab 7 引用文献

- | | |
|---------------------|---|
| 1 太宰府天満宮 (1988) | 『太宰府天満宮』 _a |
| 2 福岡市教育委員会 (1998) | 『博多 6』 _a |
| 3 福岡市教育委員会 (1995) | 『博多 4』 _a |
| 4 福岡市教育委員会 (2003) | 『博多 8』 _a |
| 5 福岡市教育委員会 (1999) | 『博多 6』 _a |
| 6 福岡市教育委員会 (2004) | 『博多 8』 _a |
| 7 福岡市教育委員会 (1999) | 『博多 6』 _a |
| 8 福岡市教育委員会 (1996) | 『博多 4』 _a |
| 9 福岡市教育委員会 (2002) | 『博多 8』 _a |
| 10 福岡市教育委員会 (1997) | 『博多 5』 _a |
| 11 福岡市教育委員会 (2001) | 『博多 7』 _a |
| 12 福岡市教育委員会 (2001) | 『博多 7』 _a |
| 13 福岡市教育委員会 (2000) | 『吉塚祝町 1』 _a |
| 14 福岡市教育委員会 (1998) | 『箱崎遺跡5 蒲田部木原遺跡 5』 _a |
| 15 福岡市教育委員会 (1992) | 『博多 3』 _a |
| 16 福岡市教育委員会 (1988) | 『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告 I 博多』 _a |
| 17 福岡市教育委員会 (2001) | 『博多 7』 _a |
| 18 福岡市教育委員会 (2003) | 『三苫 4』 _a |
| 19 福岡市教育委員会 (1998) | 『下月隈C遺跡 2』 _a |
| 20 那珂川町教育委員会 (1990) | 『平巖遺跡 Ⅱ』 _a |
| 21 大野城市教育委員会 (2004) | 『御笠の森遺跡 Ⅰ』 _a |
| 22 久留米市教育委員会 (1996) | 『城崎遺跡 2次調査』 _a |
| 23 久留米市教育委員会 (1994) | 『安武地区遺跡群』 _a |
| 24 久留米市教育委員会 (1997) | 『大善寺北部地区遺跡群』 _a |
| 25 九州歴史資料館 (1982) | 『太宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報』 _a |
| 26 福岡市教育委員会 (1988) | 『井相田C遺跡』 _a |
| 27 福岡市教育委員会 (1997) | 『博多 5』 _a |

Tab8 実年代付と資料【中世後期】

番号	遺跡名	遺構名	実年代付資料	付与年代	資料等級		種別	掲載書	備考
					資料等級	出土状況			
1	香穂B遺跡 1~4	次調査 SD103	礎礎	寛治七(1095)年	B	B	V期・VI-1期	1	
2	大宰府史跡 33	次調査 SD605_榎	木札	貞徳二(1224)年	C	B	VI-1期・VI-2期	2	
3	大宰府史跡 78	次調査 SG2100	平埴礎	壽永三(1227)年?	B	B	埴明	3	
4	博多遺跡群 62	次調査 713号遺構	明書寄附物	文應(ホウ?)二(1285)年	A	A	M-2期	4	考古資料の「年代」欄より想定。
5	大宰府史跡 109・111	次調査 SD3200	平埴礎	昌元二(1304)年	B	B	VI-2期・VII期	5	
6	大宰府史跡 130	次調査 SD3840	木札	元亨二(1323)年	C	B	VI-2期・VII期	6	
7	大宰府史跡 45	次調査 SX1200 (790)	平埴礎	元應(ホウ?)二(1330?)年	B	B	VI-2期・VII期	7	考古資料の「年代」欄より想定。
8	井相田C遺跡 2	次調査 SG16	平埴礎	寛正五(1464)、長祿(1459)年	B	B	埴明	8	
9	大宰府史跡 70	次調査 SD1805	木片	文亀元(1501)年	C	B	埴明	9	
10	博多遺跡群 築造1	次調査 51号遺構	石碁	天文二(1533)年	B	A	埴明	10	報告者は、天正十五(1587)年、豊原秀吉による博多町(現福岡)鎮下の焼上と報告。

資料等級：紀年記載資料の有する資料性種から導き出されるもので、保存性の高低によって等級を決定する。

- A：保存性が良く、紀年記載年に近い時期の構築（埋没）が想定できるもの。
 B：保存性が良く、紀年記載年から時期差が想定できるもの。
 C：資料評価不明

出土状況：紀年記載資料と他資料群との共存関係によって、時期差を考慮し等級を決定する。

- A：一様性が高く、紀年記載資料との構築（埋没）の同時性が想定できるもの。
 B：一様性が低く、紀年記載資料との構築（埋没）の同時性が想定できないもの。
 C：報告に記して記載のないもの。

掲載文献

- 福岡市教育委員会 (2000) 『香穂B遺跡』
- 九州歴史資料館 (1975) 『大宰府史跡 昭和49年度発掘調査報告』
- 九州歴史資料館 (1983) 『大宰府史跡 昭和57年度発掘調査報告』
- 福岡市教育委員会 (1995) 『博多 48』
- 九州歴史資料館 (1989) 『大宰府史跡 昭和63年度発掘調査報告』
- 九州歴史資料館 (1993) 『大宰府史跡 平成4年度発掘調査報告』
- 九州歴史資料館 (1978) 『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査報告』
- 福岡市教育委員会 (1988) 『井相田C遺跡』
- 九州歴史資料館 (1982) 『大宰府史跡 昭和56年度発掘調査報告』
- 福岡市教育委員会 (1988) 『都市計画道路博多駅前線道路埋蔵文化財調査報告』(博多)

Tab 10 1 京ノ尾遺跡第3次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	土層	先後関係	時期	地区番号
1	2SD001	溝	灰褐色砂質土→灰褐色ブロック土		中世後期～近世	B32～
2	2SD002	溝	黒灰色土→青白色粘土		現代	A30～
3	2SX003	小穴				B32
4	2SX004	盛り状	灰褐色砂質土・暗灰色細粒砂		中世後期	B32～
5	2SK005	土坑	褐色色土	S 4・14・S 5	近世	F31
6	2SD006	溝	灰褐色土	S-1→S-6	中世後期	A31～
7	2SX007	小穴		S-8→S-7→S-2	不明	A31
8	2SX008	盛り状			不明	B30
9	2SX009	盛り状			不明	B30
10	2SX010	盛り状	灰色粘土		不明	B30
11	2SX011	小穴	灰褐色土→暗茶色土→褐色土→淡灰色土		古墳時代後期～現代	K18
12	2SX012	小穴		S-8→S-11	不明	B30
13	2SX013	盛り状	淡灰色土→暗灰色土→淡褐色色土	S-8→S-12	近世	B30
14	2SX014	盛り状	淡褐色土→淡灰色土	S-9→S-13	中世後期	B29～
15		大溝			古墳時代後期～中世	E31
16	2SK016	土坑	灰茶色粘質土→茶色土		中世後期	B32
17	2SX017	小穴		S-16→S-17	中世	B33
18	2SK018	溝	灰色粘土		近世	F31
19	2SX019	小穴		S-13→S-19	不明	C31
20	2SX020	盛り状	灰茶色土		中世前期	B20
21	2SX021	小穴			近世	C30
22	2SX022	盛り状			奈良前期	H18
23	2SX023	小穴		S-22→S-23	不明	H18
24	2SX024	盛り状	暗灰色土→灰茶色土→淡灰色土		近世	I18～
25	2SK025	土坑	黄色土→褐色土→茶灰色土		古墳時代前期	B14
26	2SX026	覆土	褐色色土		現代	H17
27	2SX027	盛り状	暗茶色砂質土	S-27→S-4→S-5	現代	C31
28	2SX028	盛り状	茶灰色砂質土		奈良期	C30
29	2SX029	小穴	茶灰色土		古墳時代後期	U2
30	2SX030	住居	黄褐色土→灰茶色土→茶灰色土→茶色土		古墳時代後期	B64
31	2SX031	盛り状		S-31→S-27→S-28	現代	C31
32	2SX032	盛り状	茶灰色砂選じり土		奈良期	C30
33	2SK033	溝	褐色色土		近世	T2
34	2SX034	盛り状	暗茶色土		古墳時代後期	I19
35	2SK035	土坑	暗茶色土		古墳時代後期	B65
36	2SX036	小穴	暗茶色土		奈良期	I19
37	2SX037	小穴	茶灰色土		奈良前期	C29
38	2SX038	盛り状	茶灰色土		中世前期	C29
39	2SX039	小穴群	茶灰色土		古墳時代後期	B6
40	2SK040	土坑		S-40→S-141	古墳時代後期	B63
41	2SX041	盛り状	茶灰色土		古墳時代後期	Q6
42	2SD042	溝	茶灰色土		古墳時代後期	Q5
43	2SX043	小穴群	茶灰色土		中世	E29
44	2SX044	小穴群	茶灰色土		現代	D27
45	2SX045	住居	褐色土	S-45→S143	古墳時代後期	B06
46	2SX046	盛り状	茶褐色土		不明	D29
47	2SX047	小穴群			不明	E28
48	2SX048	小穴群		3SB130の柱穴を構成	不明	E27
49	2SX049	小穴			不明	E27
50	2SK050	土坑	褐色土→暗灰色土		中世後期	B04
51	2SX051	盛り状		S-51→S-49	不明	E27
52	2SX052	小穴群			不明	E27
53	2SX053	小穴群		3SB130の柱穴を構成	古墳時代後期	F27
54	2SX054	小穴			奈良期	F27
55	2SX055	住居	褐色土→褐色土→茶色土→茶灰色土		古墳時代後期	B14
56	2SX056	小穴群		3SB130の柱穴を構成	中世後期	G27
57	2SK057	土坑			近世	G27
58	2SK058	土坑			不明	k29
59	2SX059	小穴			古墳時代後期	B29
60	2SK060	土坑	暗灰色粘土→茶褐色土	S-95→S-60→S-158	古墳後期～奈良期	B45～6
61	2SD061	溝	茶色土→褐色色ブロック土		不明	E27～
62	2SX062	小穴群		S-62→S-61	古墳時代後期	E27
63	2SX063	小穴		3SB130の柱穴を構成	不明	F28
64	2SX064	小穴	茶色土		弥生時代後期	J20
65	2SK065	土坑	茶褐色土	S-95→S-65→S-158	中世後期	B46
66	2SX066	小穴	灰色土→黄色土	S-66→S-10	不明	J18
67	2SX067	小穴	暗灰色土	S-67→S-10→S-24	不明	I18
68	2SX068	小穴群			不明	G26
69	2SX069	小穴群	茶色土		不明	E26
70	2SK070	土坑	暗灰色土→明灰色土		中世後期	B06
71	2SX071	小穴	茶色土		古墳時代後期	B26
72	2SX072	盛り状			不明	G26
73	2SX073	小穴	灰茶色土		不明	D26
74	2SX074	盛り状	灰茶色ブロック土		中世	B04
75	2SK075	土坑			現代	B13～4
76	2SX076	小穴群	灰茶色土		中世	F26
77	2SX077	小穴群			不明	F26

Tab 10 2 京ノ尾遺跡第3次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	土層	先後関係	時期	地区番号
78	25X078	小穴	灰青色土		不明	F26
79	25X079	小穴		S-79-S-83	不明	F26
80	25X080	住居	黄褐色土→茶色土→赤褐色土→茶褐色土→灰青色土		古墳時代後期	B67
81	25X081	小穴		S-81-S-83	奈良前期	F26
82	25X082	小穴		S-82-S-83	不明	F26
83	25X083	溜り状		S-79-S-81・S-82-S-83	奈良前期以降	F26
84	25X084	小穴群	茶色土		不明	E26
85	25X085	土坑	暗褐色土→茶色土		古墳時代後期	B66~8
86	25X086	小穴			不明	G26
87	25X087	小穴群	灰色土		不明	H21
88	25X088	小穴群	茶灰色ブロック土		不明	H20
89	25X089	小穴群			近代	G22・Q7
90	25X090	住居	複層坑に大きく開かれている。		古墳時代後期	M6~X7
91	25X091	小穴	黄褐色土・暗茶色土		不明	P9
92	25X092	小穴群	暗茶色土		奈良前期	F9
93	25X093	小穴	暗茶色土		古墳時代後期	K21
94	25X094	小穴群	茶色土		近代	L21
95	25X095	住居	黄褐色土→暗茶色土	S-95-S-99	古墳時代後期	B45~B96
96	25X096	溜り状	赤褐色土		近世	T21
97	25X097	溜り状	赤褐色茶色土		中世後期	P8
98	25X098	小穴群	暗茶褐色土		近世	G25
99	25X099	土坑	暗茶灰色土		中世後期	O7
100	25X100	雁立柱建物			近世	U11能
101	25X101	小穴群	暗茶色土		中世後期	F25
102	25X102	溜り状	暗茶灰色土		近世	F25
103	25X103	溜り状	黄褐色ブロック凝人茶色土		古墳時代後期	L26
104	25X104	土坑	黄褐色土		近代	N8能
105	25X105	溝列			不明	V12能
106	25X106	小穴	灰青色土		不明	L15
107	25X107	溜り状	灰青色土(複層の可能性高い)		現代	I29能
108	25X108	小穴群	暗茶灰色土		中世	L16
109	25D109	谷	灰青色砂質土→茶色砂質土・灰青色砂土・黄褐色土→黄褐色土・暗茶褐色土・暗茶褐色土・茶褐色土・灰青色土・赤褐色土(ただし、暗褐色質土・黄褐色質土・黄褐色土については、上下関係不明)	S-109-S-124-S-122	古墳時代後期～現代	M16能
110	25X110	溝列			不明	#12能
111	25X111	溜り状			近代	F24
112	25X112	小穴	灰色土層(?)茶色土		近代	E24
113	25X113	溜り状	黄褐色土		近代	G24能
114	25D114	溝	黄褐色土		不明	O6
115	25E115	井戸			不明	R16
116	25X116	溜り状			近世	H23
117	25X117	溜り状	赤褐色土		古代	H23
118	25X118	溜り状	灰色ブロック土		不明	P11
119	25X119	小穴			中世	O10
120	25X120	小穴			近代	T19
121	25X121	溜り状	赤灰色土		中世後期	B30
122	25D122	溝	灰色土		中世	T13
123	25X123	溜り状			中世後期	S16
124	25D124	溝	黒灰色粘土→赤灰色土→暗茶褐色土		現代	C14
125	25H125	土坑			近世	E20
126	25X126	小穴		S-109-S-126	古代	S16
127	25H127	溜り状	灰褐色砂	S-109-S-127	現代	L16
128	25X128	小穴		S-109-S-128	不明	T14
129	25X129	溜り状		S-109暗茶色土→S-129	近世	T16
130	25D130	雁立柱建物		S-48・53・56・63によって構成される。	中世後期	F27能
131	25X131	溜り状		S-109灰褐色土→S-131	近世	V15
132	25X132	溜り状		S-109灰褐色土→S-132	中世後期	V16
133	25X133	小穴			近世	U13
134	25X134	小穴			不明	T13
135	欠番					
136	25D136	溝			不明	U13
137	25X137	溜り状			不明	T13
138	25H138	土坑			不明	H23
139	25X139	小穴群			不明	D63
140	欠番					
141	25D141	溝	明灰色土→暗灰色土	S-40-S-141	古墳時代後期	B23
142	25X142	溜り状	暗灰色土		不明	B23
143	25X143	段落ち	茶灰色土		古代	B66・B67
144	25X144	溜り状	茶灰色土		古代	BA10
145	欠番					
146	25X146	小穴群			近代	D67
147	25X147	複層土坑			現代	M16
148	25H148	土坑			古墳時代後期	B66
149	25X149	溜り状			中世後期	E16
150	欠番					

Tab 10 3 京ノ尾遺跡第3次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	土層	先後関係	時期	地区番号
151	35X151	溜り状			古墳時代後期	BG3
152	35X152	溜り状			古墳時代後期	BG3
153	35X153	落ち込み			中世後期	BC9~
154	35D154	溝	暗灰色土		古墳時代後期	BG3
155	欠番					
156	35X156	小穴			不明	BF4
157	35K157	土坑		S-30→S-157→S-151・152	古墳時代後期	BG3
158	35X158	溜り状		S-60・65→S-158	不明	BA5~6
159	35X159	小穴群			中世	Y6~
160	欠番					
161	35X161	溜り状		S-30→S-161→S-154	不明	BG3
162	35K162	土坑		S-162→S-65・159	不明	BA6
163	35X163	小穴		S-28e→S-163	不明	B13
164	35K164	土坑			不明	BF5
165	欠番					
166	35K166	土坑			不明	BE5
167	35X167	小穴群		S-55→S-167	不明	BF4
168	35X168	小穴			不明	BE4
169	35X169	小穴			古代	BE4
170	欠番					
171	35X171	小穴群			古墳時代後期	BB6
172	35X172	小穴群			古墳時代後期	BC4
173	35X173	小穴	暗灰色土		古墳時代後期	BB6
174	35X174	溜り状	暗灰色土		中世	BA7
175	欠番					
176	35X176	小穴群			近世	BA9
177	35X177	小穴			古墳時代後期	BF4
178	35A178	溜り状		S-178→S-45→S-145	古墳時代後期	BD6~BD8
179	35X179	小穴群		S-179→S-70	不明	BD5
180	欠番					
181	35K181	土坑			不明	BD4
182	35X182	小穴	35T080の小穴		古墳時代後期	BF7
183	35X183	溝			近世	V12~
184	35X184	小穴		S-183→S-184	不明	U11
185	欠番					
186	35X186	溜り状			中世	Y11
187	35X187	小穴群			不明	Y・BA11
188	35X188	溜り状			古墳時代後期	BD4
189	35X189	溜り状			不明	Y6
190	欠番					
191	35X191	溜り状			不明	Y6
192	35X192	小穴	黒灰色土		不明	Y7
193	35X193	小穴			不明	X7
194	35D194	溝			現代	T12~
195	欠番					
196	35X196	溜り状			不明	Y7・8
197	35D197	溝			近世	1.23~
198	35D198	溝			現代	1.22~
199	35X199	小穴			不明	V11
200	欠番					
201	35X201	小穴			古代	BB6
202	35X202	溜り状	褐色色砂		現代	S21~T22
203	35X203	小穴		S-203→S-202	現代	S21
204	35X204	土坑			近代	T20
205	欠番					
206	35D206	溝			不明	T17~U17
207	35K207	土坑			近代	V・R17
208	35X208	小穴群			近世	U19

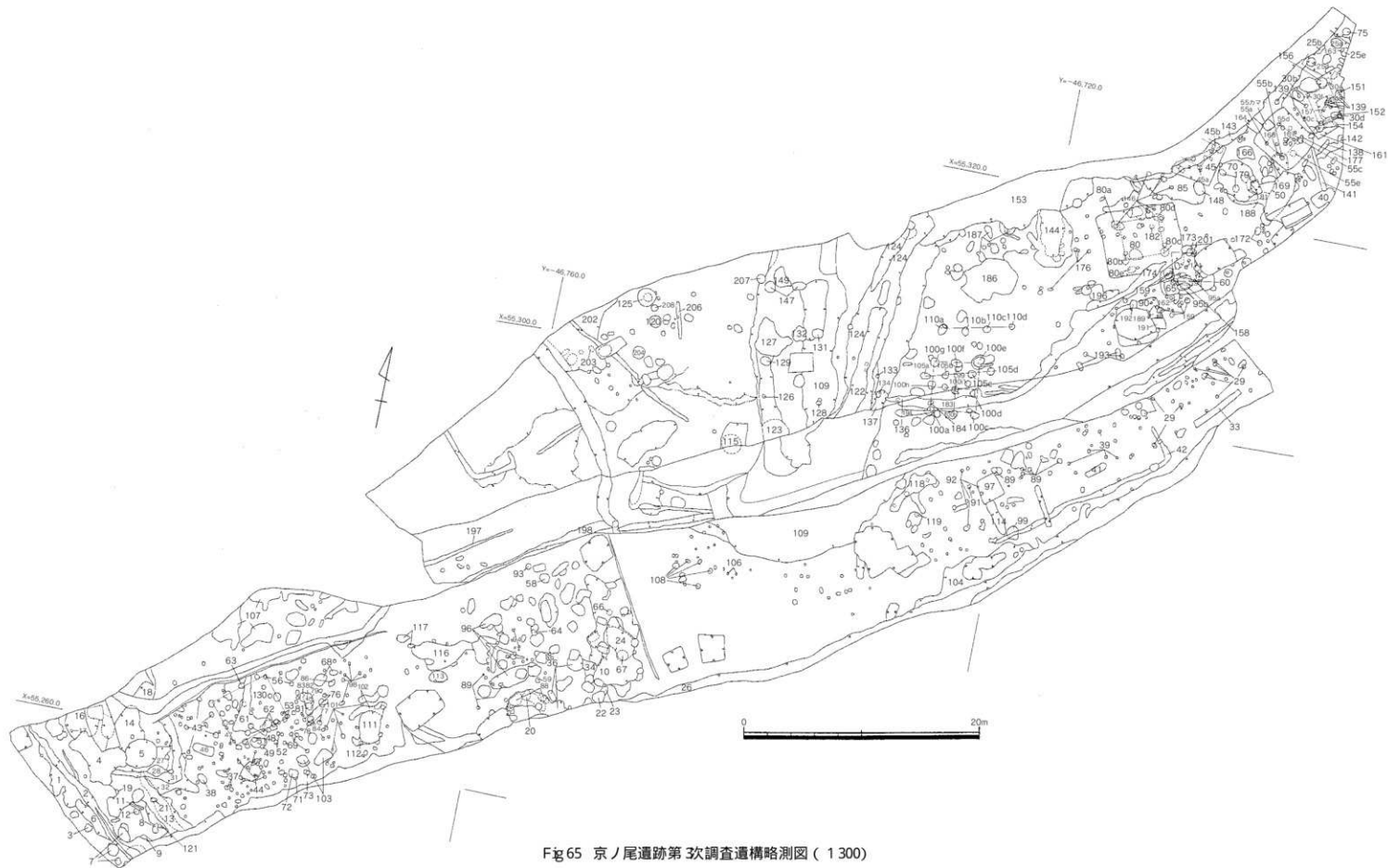


Fig 65 京ノ尾遺跡第3次調査遺構略測図(1/300)

Tab 11 京ノ尾遺跡第3次調査出土遺物一覧表

<p>S-1灰褐色ブロック土</p> <p>須 東 銅 環、鏢</p> <p>土 質 土 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢、鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付板 (石製鏢)</p>	<p>S-10暗灰色土</p> <p>土 質 銅 鏢、供養具</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢 (現代)</p>
<p>S-1灰褐色粘質土</p> <p>須 東 銅 環</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p>	<p>S-11</p> <p>土 質 銅 鏢片</p>
<p>S-2</p> <p>須 東 銅 鏢付、環</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢、鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付 (ツクリ)、白銅小鏢</p> <p>瓦 銅 鏢片 (産し)</p>	<p>S-12</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢</p>
<p>S-2黒色土</p> <p>須 東 銅 鏢付、大鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>瓦 質 土 銅 鏢、大鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢、大鏢</p> <p>瓦 銅 鏢片 (産し)</p> <p>瓦 銅 鏢片 (産し)</p> <p>瓦 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>石 製 小瓦平鏢</p>	<p>S-13</p> <p>須 東 銅 環身×環身</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 鏢片</p> <p>瓦 質 土 銅 鏢</p> <p>石 製 小瓦石</p>
<p>S-2黒色粘質土</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 小鏢</p>	<p>S-13暗灰色土</p> <p>須 東 銅 鏢、環身、大鏢</p> <p>土 質 銅 鏢付 (イト)、鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢、鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢片 (石製、産鏢)</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢 (産し)</p> <p>石 製 (輸入) 瓦 土 銅 鏢付</p> <p>須 東 瓦 土 銅 鏢、上製瓦鏢 (1)</p> <p>石 製 小瓦石</p> <p>金 瓦 製 小物残</p>
<p>S-4緑灰色砂質土</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 小鏢</p>	<p>S-13暗灰色土</p> <p>須 東 銅 鏢、環身</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>瓦 質 土 銅 鏢</p> <p>石 製 高足鏢</p>
<p>S-4緑灰色砂質土</p> <p>須 東 銅 鏢、環身、鏢、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>瓦 質 土 銅 鏢、鏢</p> <p>瓦 質 土 銅 小鏢 (輸入)</p> <p>瓦 質 銅 鏢片</p> <p>石 製 小瓦平鏢</p>	<p>S-14緑褐色土</p> <p>須 東 銅 鏢、環身、鏢、大鏢</p> <p>土 質 銅 鏢、鏢、鏢、鏢</p> <p>白 銅 鏢、小鏢 (半分鏢) (2)</p>
<p>S-5暗灰色銅鈔</p> <p>須 東 銅 環、つまみ、環身、環身、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢、鏢、鏢 (角形石入り)</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢、鏢</p> <p>瓦 質 土 銅 鏢×環身、鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢片</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢 (輸入)</p> <p>石 製 (輸入) 瓦 土 銅 鏢</p> <p>瓦 質 銅 鏢片</p> <p>石 製 小瓦石、黒色下平石製鏢</p>	<p>S-14緑褐色土</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 供養具</p>
<p>S-5</p> <p>須 東 銅 環、環身、環身、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢、鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付 (現代)</p>	<p>S-15赤褐色粘質土</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 鏢付 (イト)</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p>
<p>S-6灰褐色土</p> <p>須 東 銅 鏢、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢、環身、鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>白 銅 鏢、鏢片</p>	<p>S-16</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 小鏢</p>
<p>S-7</p> <p>須 東 銅 鏢×鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p>	<p>S-17</p> <p>土 質 銅 鏢片</p>
<p>S-8</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p>	<p>S-18</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 小鏢</p>
<p>S-9灰色粘土</p> <p>瓦 銅 鏢</p>	<p>S-19</p> <p>土 質 銅 鏢片</p>
<p>S-10</p> <p>須 東 銅 環、環、環身、鏢</p> <p>土 質 銅 小鏢、環、環身、鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢、鏢</p> <p>石 製 小瓦石</p>	<p>S-20暗灰色土</p> <p>須 東 銅 鏢、環身、環身、大鏢</p> <p>土 質 銅 鏢、鏢</p> <p>白 銅 鏢、V (1)</p>
<p>S-10緑灰色土</p> <p>須 東 銅 環身</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢 (現代)</p>	<p>S-21</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付小鏢</p> <p>瓦 銅 鏢片</p>
<p>S-10緑灰色土</p> <p>須 東 銅 環、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p>	<p>S-22</p> <p>須 東 銅 鏢</p> <p>土 質 銅 鏢片</p>
<p>S-10深灰色土</p> <p>須 東 銅 環、環身</p> <p>土 質 銅 鏢、鏢、鏢片</p>	<p>S-23</p> <p>土 質 銅 鏢片</p>
<p>S-10緑灰色土</p> <p>須 東 銅 環身</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢 (現代)</p>	<p>S-24</p> <p>須 東 銅 環身×環身</p> <p>土 質 銅 鏢</p>
<p>S-10深灰色土</p> <p>須 東 銅 環、環身、環身、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢×環身</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付 (産鏢)</p> <p>須 東 瓦 土 銅 鏢、上製瓦鏢 (1)</p> <p>須 東 瓦 土 銅 鏢、鏢片 (1)</p>	<p>S-24緑褐色土</p> <p>須 東 銅 環、環身、環身、鏢</p> <p>土 質 銅 鏢</p> <p>土 質 瓦 土 銅 鏢×環身</p> <p>須 東 瓦 銅 鏢付 (産鏢)</p> <p>須 東 瓦 土 銅 鏢、上製瓦鏢 (1)</p> <p>須 東 瓦 土 銅 鏢、鏢片 (1)</p>

Tab 11 2 京ノ尾遺跡第3次調査出土遺物一覧表

5-24灰青色土	須 東 銅環, 牙身, 鏃 土 碎 銅環, 鏃 京 東 銅環, 牙身	5-30灰青色土	土 碎 銅色鍍具, 鏃
5-24緑灰色土	須 東 銅七環 土 碎 銅破片	5-30赤色土	須 東 銅環, 銅環, 牙身, 鏃 土 碎 銅環, 青銅具
5-25赤灰色土	須 東 銅牙身 土 碎 銅環, 青銅具	5-30黄赤色土	須 東 銅牙身 土 碎 銅粉, 鏃
5-25褐色土	須 東 銅小鏃, 牙身, 鏃 土 碎 銅牙身, 鏃	5-30f	土 碎 銅破片
5-25褐色土	須 東 銅小鏃, 牙身, 鏃 土 碎 銅牙身, 鏃	5-31	須 東 銅環, 牙身, 鏃 土 碎 銅環, 青銅具 京 東 土 銅鏃 須 東 銅 銅環, 破片 須 東 銅環, 銅環 (古東), 鏃 須 東 銅環 須 東 銅色鍍具 京 東 銅色鍍具 土 の 銅色鍍
5-25褐色土	須 東 銅破片 土 碎 銅破片	5-32	須 東 銅牙身, 銅環, 古鏃 土 碎 銅色鍍具, 破片 京 東 銅牙身 (黒曜石)
5-25a褐色土	須 東 銅牙身 土 碎 銅色鍍具	5-33	土 碎 銅土 銅破片 京 東 銅 銅破片
5-25b褐色土	須 東 銅小破片	5-34	須 東 銅破片 土 碎 銅色鍍具
5-25c	須 東 銅破片 土 碎 銅破片	5-35	須 東 銅環 土 碎 銅破片
5-25a	須 東 銅牙身 土 碎 銅環	5-36	須 東 銅牙身, 鏃 土 碎 銅色鍍具
5-25a褐色土 (埋込)	須 東 銅環, 牙身, 鏃, 鏃, 古鏃 須 東 銅環, 牙身, 鏃 紀前古銅色鍍具, 鏃	5-37	須 東 銅牙身
5-27	須 東 銅環, 牙身, 鏃, 鏃, 古鏃 土 碎 銅牙 (古鏃), 鏃牙 (古鏃), 銅牙身 (古鏃) 土 碎 銅土 銅鏃 (古鏃以類), 鏃 (中子) 京 東 土 銅鏃 須 東 銅 銅環, 銅環, 小鏃 須 東 銅 銅色鍍具 (現代), 破片 銅色鍍具, 鏃環; (1環(1), 破片(1))	5-38	須 東 銅破片 土 碎 銅牙, 青銅具
5-28	須 東 銅環, 牙, 古鏃 土 碎 銅色鍍具	5-39	須 東 銅古鏃 土 碎 銅色鍍具
5-29	須 東 銅牙身 土 碎 銅色鍍具, 青銅具	5-40	須 東 銅牙身, 鏃 土 碎 銅色鍍具
5-30	須 東 銅牙身, 牙身 土 碎 銅環, 銅環, 鏃	5-41	須 東 銅牙身, 牙身 土 碎 銅色鍍具
5-30a	土 碎 銅色鍍具	5-42	須 東 銅牙身 京 東 銅牙身 (黒曜石)
5-30カマド	須 東 銅牙身 土 碎 銅色鍍具, 青銅具	5-43	土 碎 銅牙 (黒石あり), 青銅具 京 東 銅牙身 (黒曜石)
5-30カマドa	土 碎 銅環	5-44	須 東 銅色鍍具, 鏃 土 碎 銅牙身 (黒石粘着不詳) 須 東 銅小鏃
5-30カマドb	土 碎 銅小鏃	5-45	須 東 銅色鍍具 土 碎 銅色鍍具
5-30カマドc	土 碎 銅環	5-45褐色土	須 東 銅牙身, 牙身, 鏃 土 碎 銅牙身, 鏃 京 東 銅牙身 (黒曜石)
5-30カマドd	土 碎 銅環	5-45a	土 碎 銅破片
5-30カマドe	土 碎 銅環	5-46	土 碎 銅破片
5-30a褐色土	須 東 銅牙身, 牙身 土 碎 銅環, 青銅具	5-47	土 碎 銅破片

Tab 113 京ノ尾遺跡第3次調査出土遺物一覧表

S-48	土 器 副土器片	S-63	土 器 高脚土器
S-49	須 恵 副土器片	S-64赤色土	須 恵 土 副土器(赤系)
S-50	須 恵 副土器片	S-65茶褐色土	須 恵 副土器 燵
S-51	須 恵 副土器片	S-66赤色土	土 器 副土器片、赤褐色
S-52	須 恵 副土器片	S-67灰褐色土	須 恵 副土器片
S-53	須 恵 副土器片	S-68	須 恵 副土器片
S-54	須 恵 副土器片	S-69	須 恵 副土器片
S-55茶褐色土	土 器 副土器片	S-70	須 恵 副土器片
S-56赤色土	須 恵 副土器片	S-71	須 恵 副土器片
S-57	須 恵 副土器片	S-72	須 恵 副土器片
S-58	須 恵 副土器片	S-73	須 恵 副土器片
S-59	須 恵 副土器片	S-74茶褐色ブロンズ土	土 器 副土器片
S-60	須 恵 副土器片	S-75	須 恵 副土器片
S-61	須 恵 副土器片	S-76	須 恵 副土器片
S-62	須 恵 副土器片	S-77	須 恵 副土器片
S-63	須 恵 副土器片	S-78	須 恵 副土器片
S-64	須 恵 副土器片	S-79	須 恵 副土器片
S-65	須 恵 副土器片	S-80茶褐色土	須 恵 副土器片
S-66	須 恵 副土器片	S-81赤褐色土	須 恵 副土器片、赤褐色
S-67	須 恵 副土器片	S-82茶褐色土	須 恵 副土器片、赤褐色
S-68	須 恵 副土器片	S-83茶褐色土	須 恵 副土器片
S-69	須 恵 副土器片	S-84茶褐色土	須 恵 副土器片
S-70	須 恵 副土器片	S-85茶褐色土	須 恵 副土器片
S-71	須 恵 副土器片	S-86茶褐色土	須 恵 副土器片
S-72	須 恵 副土器片	S-87茶褐色土	須 恵 副土器片
S-73	須 恵 副土器片	S-88茶褐色土	須 恵 副土器片
S-74	須 恵 副土器片	S-89茶褐色土	須 恵 副土器片
S-75	須 恵 副土器片	S-90茶褐色土	須 恵 副土器片
S-76	須 恵 副土器片	S-91茶褐色土	須 恵 副土器片
S-77	須 恵 副土器片	S-92茶褐色土	須 恵 副土器片
S-78	須 恵 副土器片	S-93茶褐色土	須 恵 副土器片
S-79	須 恵 副土器片	S-94茶褐色土	須 恵 副土器片
S-80	須 恵 副土器片	S-95茶褐色土	須 恵 副土器片
S-81	須 恵 副土器片	S-96茶褐色土	須 恵 副土器片
S-82	須 恵 副土器片	S-97茶褐色土	須 恵 副土器片
S-83	須 恵 副土器片	S-98茶褐色土	須 恵 副土器片
S-84	須 恵 副土器片	S-99茶褐色土	須 恵 副土器片
S-85	須 恵 副土器片	S-100茶褐色土	須 恵 副土器片
S-86	須 恵 副土器片	S-101茶褐色土	須 恵 副土器片
S-87	須 恵 副土器片	S-102茶褐色土	須 恵 副土器片
S-88	須 恵 副土器片	S-103茶褐色土	須 恵 副土器片
S-89	須 恵 副土器片	S-104茶褐色土	須 恵 副土器片
S-90	須 恵 副土器片	S-105茶褐色土	須 恵 副土器片
S-91	須 恵 副土器片	S-106茶褐色土	須 恵 副土器片
S-92	須 恵 副土器片	S-107茶褐色土	須 恵 副土器片
S-93	須 恵 副土器片	S-108茶褐色土	須 恵 副土器片
S-94	須 恵 副土器片	S-109茶褐色土	須 恵 副土器片
S-95	須 恵 副土器片	S-110茶褐色土	須 恵 副土器片
S-96	須 恵 副土器片	S-111茶褐色土	須 恵 副土器片
S-97	須 恵 副土器片	S-112茶褐色土	須 恵 副土器片
S-98	須 恵 副土器片	S-113茶褐色土	須 恵 副土器片
S-99	須 恵 副土器片	S-114茶褐色土	須 恵 副土器片
S-100	須 恵 副土器片	S-115茶褐色土	須 恵 副土器片

Tab 116 京ノ尾遺跡第3次調査出土遺物一覧表

5-120	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-121成徳色土	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片、環身	
須 東 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
5-128	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-129	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片(角筒形)	
須 東 高砂質土	
須 東 高砂質土(破片?)	
高 砂 高砂質土	
5-131	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
須 東 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
5-132	須 東 銅破片×環身
土 部 銅破片	
土 部 高砂質土	
5-133	土 部 銅破片
須 東 高砂質土	
須 東 高砂質土	
5-134	土 部 銅破片
5-136	土 部 銅破片
高 砂 高砂質土(破片)	
5-137	土 部 銅破片
5-138	土 部 銅破片
5-139	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
高 砂 高砂質土(風堀石)	
5-141	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
土 部 銅破片	
5-142	土 部 銅破片
5-143	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片	
5-144	須 東 銅破片
土 部 銅破片、青銅片	
5-144成徳色土	須 東 銅破片、環身、環
土 部 銅破片、環	
土 部 高砂質土	
須 東 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
高 砂 高砂質土	
5-146	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
須 東 高砂質土	
5-147	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
土 部 銅破片	
高 砂 高砂質土	
5-148	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
須 東 高砂質土	
高 砂 高砂質土(緑石製)	
5-149	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
高 砂 高砂質土	
5-151	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片、環身	
5-152	須 東 銅破片、環身、銅破片
土 部 銅破片、青銅片	
5-153	須 東 銅破片、環身、銅破片、環
土 部 銅破片(イト)、銅	
土 部 高砂質土	
高 砂 高砂質土(風堀石)	
5-154	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片、環	
5-157	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片、環	
須 東 高砂質土	
5-158	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片	
5-159	須 東 銅破片
土 部 銅破片(イト)	
5-161	土 部 銅破片
5-162	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-163	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-164	土 部 銅破片、青銅片
5-166	土 部 高砂質土
5-167	高 砂 高砂質土(中央カド)
5-169	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-171	須 東 銅破片×環身
土 部 銅破片、青銅片	
5-172	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-173	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-174	須 東 銅破片
土 部 銅破片(イト)、環	
5-176	土 部 銅破片
須 東 高砂質土	
5-177	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
5-178	須 東 銅破片、環身
土 部 銅破片、環身、環	
5-179	須 東 銅破片
土 部 銅破片	
高 砂 高砂質土	
5-181	土 部 銅破片、青銅片
5-182	土 部 銅破片、環

Tab 117 京ノ尾遺跡第3次調査出土遺物一覧表

S-185
銅 葉 鏡蓋の一部分
木 釘 銅鍍金
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-184
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-186
銅 葉 鏡蓋の一部分
木 釘 銅鍍金
土 師 瓦 土 師 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-187
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-188
銅 葉 鏡蓋の一部分
土 師 瓦 鏡蓋
S-189
土 師 瓦 鏡蓋
S-191
土 師 瓦 鏡蓋片
S-192
土 師 瓦 鏡蓋片
S-193
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-194
土 師 瓦 鏡蓋
S-195
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-196
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-197
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-198
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-201
銅 葉 鏡蓋片
S-202
土 師 瓦 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
S-203
銅 葉 鏡蓋片
S-204
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-205
土 師 瓦 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-207
銅 葉 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-208
銅 葉 鏡蓋片

銅 葉 鏡蓋の一部分
木 釘 銅鍍金
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-184
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-186
銅 葉 鏡蓋の一部分
木 釘 銅鍍金
土 師 瓦 土 師 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-187
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-188
銅 葉 鏡蓋の一部分
土 師 瓦 鏡蓋
S-189
土 師 瓦 鏡蓋
S-191
土 師 瓦 鏡蓋片
S-192
土 師 瓦 鏡蓋片
S-193
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-194
土 師 瓦 鏡蓋
S-195
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-196
銅 葉 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-197
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-198
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-201
銅 葉 鏡蓋片
S-202
土 師 瓦 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
S-203
銅 葉 鏡蓋片
S-204
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
S-205
土 師 瓦 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
土 師 瓦 鏡蓋片
S-207
銅 葉 鏡蓋片
銅 葉 鏡蓋片
瓦 瓦 瓦 瓦
瓦 瓦 瓦 瓦
S-208
銅 葉 鏡蓋片

4. 京ノ尾遺跡 第4次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字京ノ尾 278 1、278 2、315 2、314 2、323 2、313、276 2、276 1、312、317 1、318 1、314 1、315 である。

佐野士地区画整理事業に伴い、2002(平成14)年7月2日から1月29日にかけて発掘調査を実施した。調査は高橋学、宮崎亮一が担当した。調査対象面積は3649.03㎡、調査面積は3840㎡である。

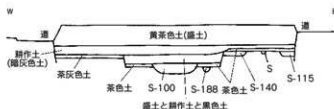


Fig.66 京ノ尾遺跡第4次調査土層模式図

(2) 基本層位 (Fig.66)

今回の調査地は地権者のひとりである島一雄氏によると昭和時代中頃には東側が畑で、一段低いところに水田があったという。その後昭和40年代に福岡農業高校の取り付き道路での水道管理設工事の際、工事の土砂を水田に入れ、盛土したという。その後は畑、桃畑、工場になって現在に至っていた。そのため耕作土の上には約2.3mの厚い盛土が行われていた。その下に耕作土である暗灰色土が厚さ約0.3mあり、それを除去すると遺構が存在する。

(3) 検出遺構

竪穴住居

4SI035 (Fig.68)

大きさは3.35m×3.9m、深さ0.2m、推定床面積10.9㎡の隅丸方形をした竪穴住居である。主柱穴が4つ確認され、柱間は1.4～1.8mを測る。西辺にカマドの痕跡が検出された。

4SI045 (Fig.68)

大きさ3.4m×3.95m、深さ0.1m、推定床面積12.2㎡の方形をした竪穴住居である。柱間が1.8mの主柱穴が4つ確認され、その柱に囲まれた住居の中央に大きさ0.6×0.65m、深さ0.2mの穴が掘られている。焼土やカマドは検出していない。

4SI050 (Fig.69)

上面を削平され、北側のプランが不明瞭だが、東西5.65m、南北5.0m、深さ0.2m、床面積23.1㎡の方形をした竪穴住居である。床面でピットが確認され、そのうち2つが柱穴とみられる。その位置関係から本柱であろうが、残り2つについては確認できていない。住居中央をSD030が横断している。

4SI055 (Fig.69)

東西5.3m、南北5.5m、深さ0.15m、床面積25.2㎡の方形をした竪穴住居である。床面には4つの主柱穴があり、それぞれの柱間は南北2.9m、東西2.5mを測る。西側に僅かに焼土が確認され、カマドの一部と推測される。

4SI060 (Fig.70)



Fig 67 京ノ尾遺跡第4次調査遺構全体図(1350)

大きさ4.6m 4.2m 深さ0.15m 床面積17.5m²の方形をした竪穴住居である。床面には4つの支柱穴が確認でき、柱間はそれぞれ1.6mである。

4SI070 (F 図70)

京ノ尾遺跡第3次調査でSD30として調査された住居で、調査区外だった部分を今回調査している。大きさ4.6m 4.8m 深さ0.1m 床面積19.1m²の方形をした竪穴住居である。

4SI075 (F 図71)

南北2.9m 東西3.1m 深さ0.2m 床面積7.9m²の方形で、西側に焼土が確認された。形状から竪穴住居と考えられるが、床面には柱穴と呼べるものは1つしかなく、規模も他の住居に比べ小さいことから、他の住居と異なる施設の可能性も考えられる。埋土は黄色土である。

4SI085 (F 図71)

南北3.8m以上、東西2.0m以上、深さ0.35mで、西側と北側は削平されているが、方形をした竪穴住居と考えられる。柱穴が2つ確認され、柱間は1.5mを測る。

4SI090 (F 図71)

南北6.2m 東西2.3m以上、深さ0.2mで西側は削平されている。若干プランが不定形な部分もあるが、推定床面積36m²の方形をした竪穴住居と考えられる。床面にピットが数個確認されていて、そのうちの2つが柱穴と推測され、全体として4本柱の住居と考えられる。東側は一部SD59によって切られている。

4SI115 (F 図72)

南北4.0m 東西2.2m以上、深さ約0.2m 推定床面積15.2m²の方形をした竪穴住居である。東側は道路建設によって削平されている。西辺中央にはカマドがあり、その中央では土製の支脚が確認された。床面は小刻みに起伏があり、検出した範囲では小さなピットがあり、その中に2つの支柱穴が確認され、全体として4本柱の竪穴住居と推定される。

4SI120 (F 図72)

調査区北端に位置し、南北3.75m 東西3.4m 深さ約0.1m 床面積11.1m²の方形をした竪穴住居である。1.2 1.8mの柱間で4つの支柱穴が検出され、北辺中央に焼土が堆積し、カマドの痕跡と考えられる。

4SI140 (F 図72)

南北3.8m 東西2.85m 深さ0.35m 推定床面積12.2m²の方形をした竪穴住居で、南西部が削平されている。北辺に堆積している焼土は、遺構検出時点では未確認であったため、埋土の上層は住居廃絶後の堆積ということが想像できる。焼土の中心付近には花崗岩の川原石が立っていて、カマドの支脚と考えられる。床面にピットはみられるが、支柱穴と呼べるものは検出されていない。

4SI145 (F 図73)

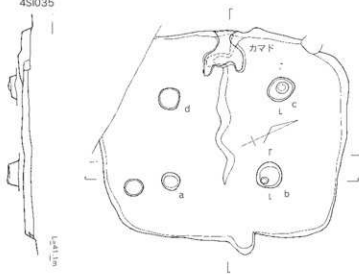
東西4.1m 南北4.5m 深さ約0.25m 床面積16.4m²の方形をした竪穴住居である。4つの支柱穴が確認され、柱間2.1mと1.8mである。西辺にカマドの痕跡と思われる焼土が確認され、中央に花崗岩の支脚が立っていた。支脚石は一部火を受けたため赤色化している。

4SI155 (F 図73)

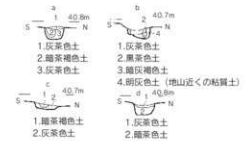
西側は削平され、南北4.3m 東西4.2m以上、深さ0.13m 推定床面積14.0m²の方形をした竪穴住居である。4つの支柱穴が確認され、柱間は南北1.8m 東西1.65mである。北辺中央にカマドの痕跡とみられる焼土があり、住居の南半分には赤土が薄く堆積していた。

4SI190 (F 図74)

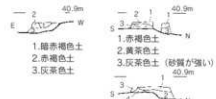
4SI035



L=1.0m

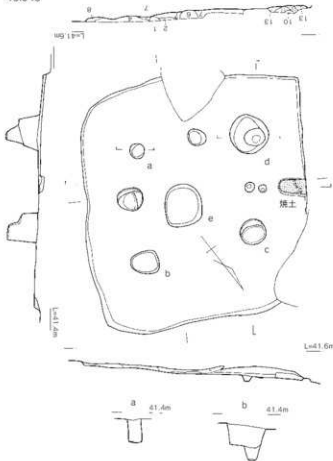


カマド部分

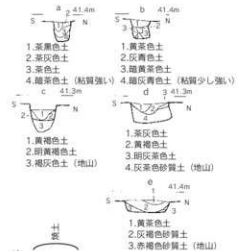


1. 茶色土
2. 茶色土 (灰色粘土混じり)
3. 黄茶色土
4. 茶褐色土
5. 赤褐色土 (赤褐色土ブロック状に入る)
6. 黒赤褐色土 (カマド部分)
7. 明赤茶色土 (カマド床土)
8. 黒茶色土 (赤褐色土含む)
9. 黒茶褐色土
10. 黒灰褐色粘質土
11. 灰茶色粘質土 (地山)

4SI045



L=1.5m



7. 黄茶色土
 8. 灰茶色粘質土
 9. 明黄褐色土
 10. 明黄褐色土
 11. 赤褐色土
 12. 赤褐色土
 13. 灰褐色土

1. 黒茶褐色土
 2. 茶褐色土
 3. 明黄褐色土
 4. 黄褐色土
 5. 茶褐色土
 6. 褐色土

0 2m

Fig 68 京ノ尾遺跡第4次調査SI035・045遺構実測図 (160)

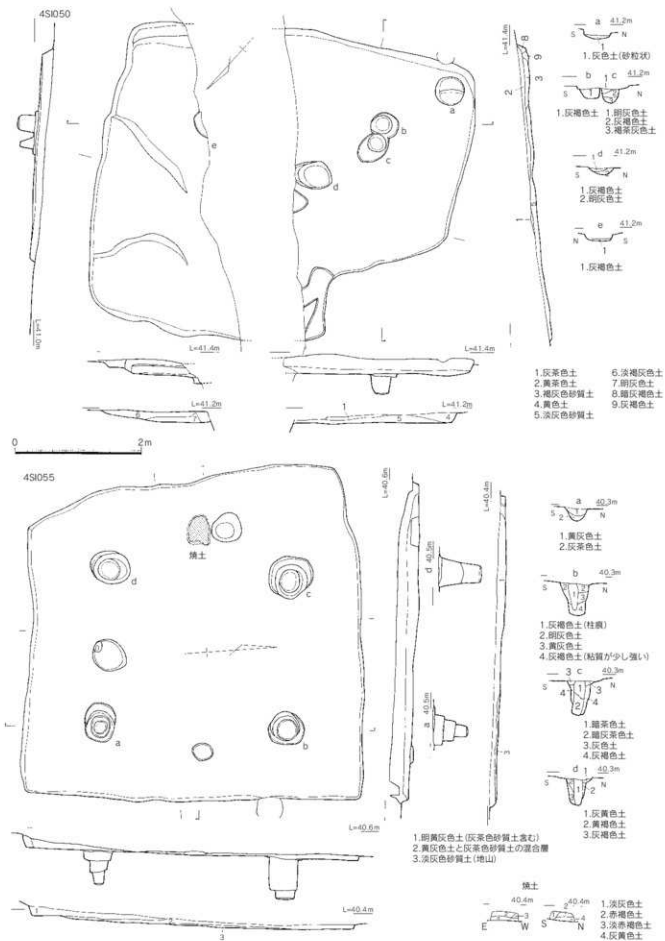


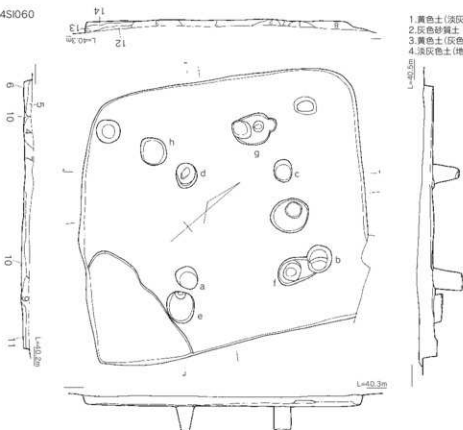
Fig 69 京ノ尾遺跡第4次調査 SI050・055遺構実測図 (160)

4SI060

1. 黄土
2. 灰黄色土
3. 黄灰色土(灰黄色砂質土含む)
5. 黄灰色土
5. 黄灰色土

6. 灰黄色砂質土(地山に近し)
7. 灰黄色砂質土
8. 黄灰色土
9. 黄灰色土
10. 黄灰色砂質土

11. 1.0m間
12. 黄茶褐色土
13. 灰黄色砂質土(灰色砂質土含む)
14. 1.0cm間



1. 黄土(淡灰色土層)
2. 灰色砂質土
3. 黄土(灰色砂質土混じり)
4. 淡灰色土(地山)

a 40.1m
2

f 5 b 40.1m
3

1. 茶褐色土 4. 黄土
2. 灰茶色土 5. 黄灰色土
3. 淡灰茶色土 6. 黄灰色砂質土

c 40.1m
3

1. 黄土
2. 灰茶色土
3. 淡灰色土(地山)

d 40.1m
3

1. 黄土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土

4SI070

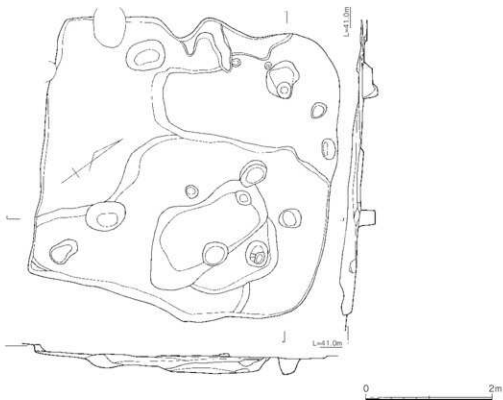
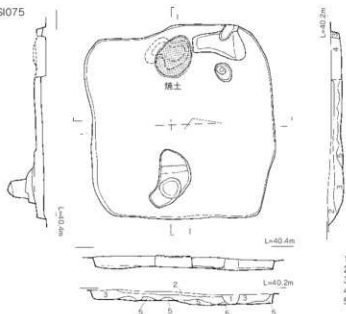


Fig 70 京ノ尾遺跡第4次調査 SI060・070遺構実測図(160)

4SI075



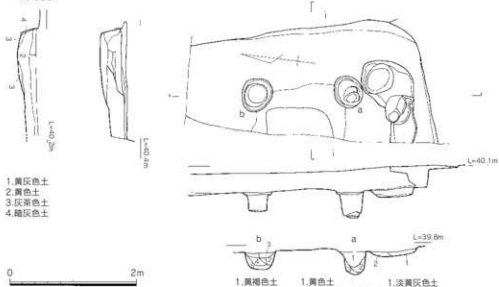
埴土



1. 暗赤褐色土 (相灰色土少量含む)
2. 灰黄色土
3. 暗赤褐色土
4. 淡赤褐色土
5. 褐色土
6. 淡黄灰色土
7. 明黄灰色土
8. 明黄灰色土
9. 暗青灰色土 (地山)

1. 暗黄灰色土
2. 黄灰色土
3. 明黄灰色土
4. 埴土
5. 黑灰色砂質土 (地山)

4SI085



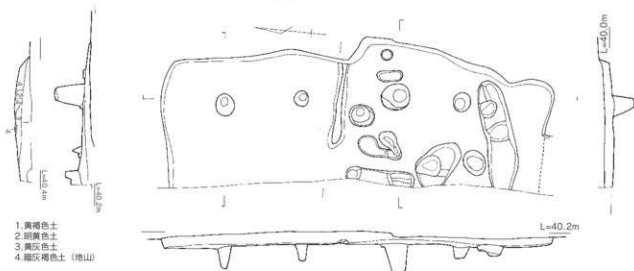
1. 黄灰色土
2. 黄色土
3. 灰黄色土
4. 暗灰色土

1. 黄褐色土
2. 黄褐色土
3. 灰色土
4. 黄灰色土
5. 明灰褐色土

1. 黄色土
2. 黄色土(粘質が強い)
3. 灰褐色土

1. 淡黄灰色土
2. 淡灰褐色土

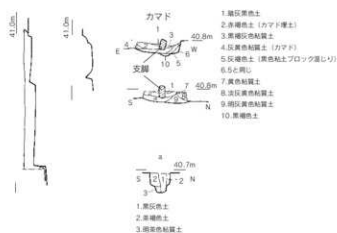
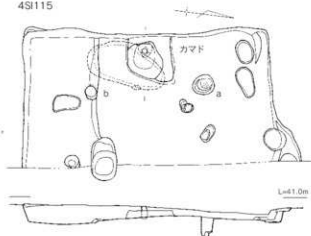
4SI090



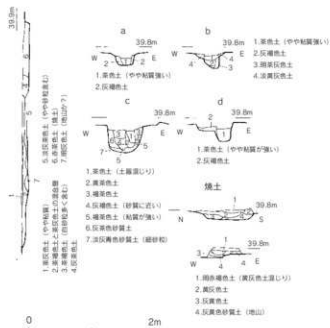
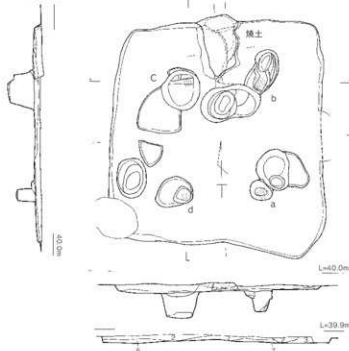
1. 黄褐色土
2. 明黄褐色土
3. 黄灰色土
4. 暗灰褐色土 (地山)

Fig 71 京ノ尾遺跡第4次調査SID75・085・090遺構実測図(1/60)

4SI115



4SI120



4SI140

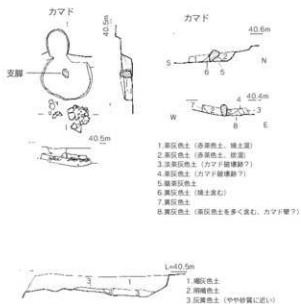
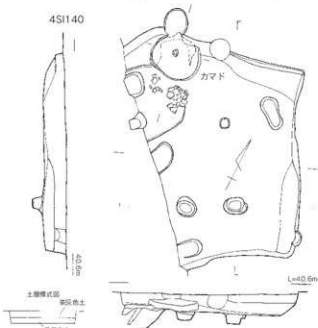
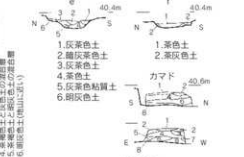
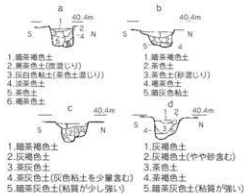
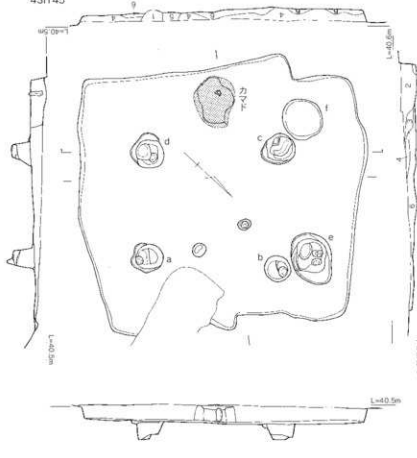


Fig 72 京ノ尾遺跡第 4 次調査 SI115・120・140 遺構実測図 (160)

(※破線はカマド除去後)

4S1145



4S1155

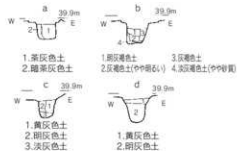
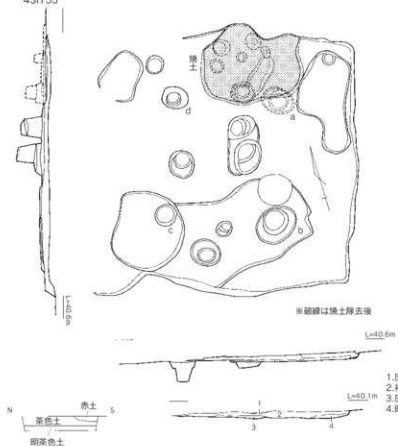


Fig 73 京ノ尾遺跡第4次調査 SI145・155遺構実測図(160)

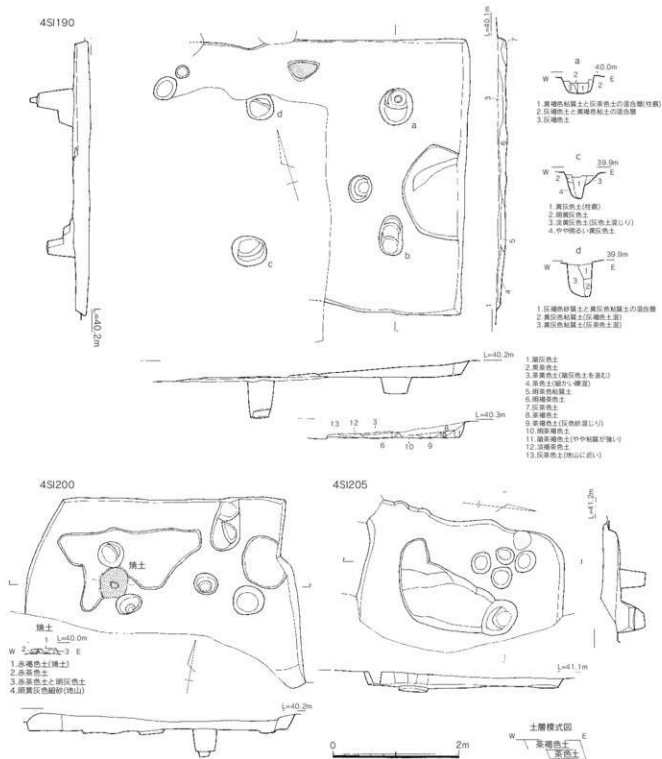


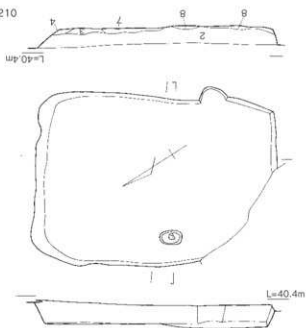
Fig 74 京ノ尾遺跡第4次調査 SI190・200・205遺構実測図(160)

西側はSI159によって切られている。南北4.4m、東西4.8m以上、深さ0.23m、推定床面積19.5m²の方形をした竪穴住居である。4つの支柱穴はSI155の床面にも残存していて、それぞれの柱間は2.3mである。埋土はおよそ明茶色土である。北辺に焼土が僅かに確認された。

4SI195

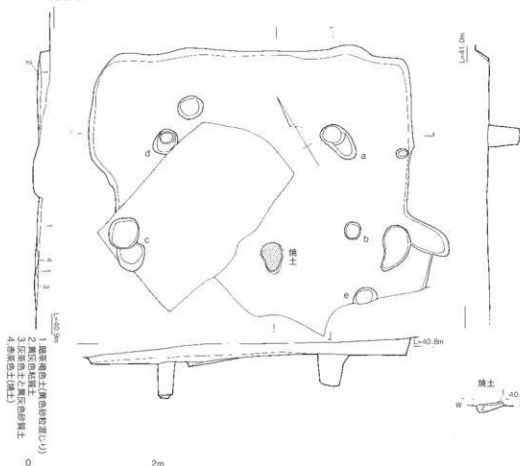
SI200・155・190に切られているが、形状から竪穴住居と推測される。東西4.1m、南北2.7m以上、深さ0.25mの方形のプランを残す。埋土はおよそ黄灰色土で、目立った層位はないものの、周囲から流

4SI210



- 1 灰褐色土と赤褐色土(黄土)の混合層
- 2 灰褐色土(灰褐色土・黄灰色土のブロック層)
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 灰褐色土(白色砂粒多く含む)
- 7 灰褐色土と赤褐色土の混合層
- 8 灰褐色砂質土

4SI215



a
W 40.7m
E

1. 茶褐色土
2. 灰褐色粘質土
3. 淡黄灰色粘質土

c
W 40.4m
E

1. 灰褐色土(黄灰色砂粒多く含む)
2. 灰褐色粘土と茶灰色土の混合層
3. 灰褐色粘土と茶灰色土の混合層
4. 茶褐色土
5. 灰褐色粘土と茶灰色土の混合層

d
W 40.5m
E

1. 茶褐色土(黄色砂粒多く含む)
2. 茶褐色土
3. 黄灰色土と茶褐色土の混合層
4. 灰褐色土と黄褐色土の混合層

e
W 40.7m
E

1. 灰褐色土
2. 黄褐色土

掘土
W 40.7m
E

1. 赤褐色土
2. 明灰褐色土

Fig 75 京ノ尾遺跡第4次調査 SI210・215遺構実測図(160)

れ込んだような砂粒を含んでいるため、比較的速く埋没したように思える。

4SI200 (Fig 74)

南側が削平され、南北 2.8m以上、東西 4.45m、深さ 0.26m、推定床面積 16.8m²の方形をした竪穴住居と推測される。焼土が底面で確認された。床面にビットがいくつか確認されているが、どのビットが柱穴になるかは明確でない。北側はSI195と切り合っているが、切り合いに関しては不明瞭であった。

4SI205 (Fig 74)

東側は削平され、南北 3.2m、東西 2.4m以上、深さ 0.2m、推定床面積 9.6m²の方形をした竪穴住居と考えられる。柱穴は確認できていない。埋土上面に焼土を含むビットが確認されたが、かなり上面に位置するため、この遺構に伴うものとは判断しがたい。

4SI210 (Fig 75)

主軸を南西から北東に向けた長方形で、3.8m × 2.7m、深さ 0.35m、推定床面積 9.2m²を測る。形状から竪穴住居として報告する。西端に焼土が確認できる。しかし、土層観察からこの焼土はこの遺構の埋土に切り込んでいることが確認された。

4SI215 (Fig 75)

西側を削平されている。南北 4.6m以上、東西 5.15m、深さ 0.2m、推定床面積 24.5m²の方形をした竪穴住居である。床面にビットが検出されているが、柱穴と考えられるものもあるが、綺麗な方形に並んでいない。南西側で焼土が検出された。

掘立柱建物

4SB040 (Fig 76)

南北 2間、東西 2間の総柱の掘立柱建物。掘り方は 0.3~0.6mの円形で、掘り方の間隔が不揃いで、平面形はかなり歪んでいる。

4SB080 (Fig 76)

南北 2間、東西 2間の掘立柱建物。掘り方は径 0.4~0.6mの円形で、北側の一部はSI059によって切られている。柱間は梁行 1.6m、桁行 1.4mを測り、建物は 3.2 × 2.8mの大きさになると推測される。振れは N 37 55 Wである。

4SB130 (Fig 77)

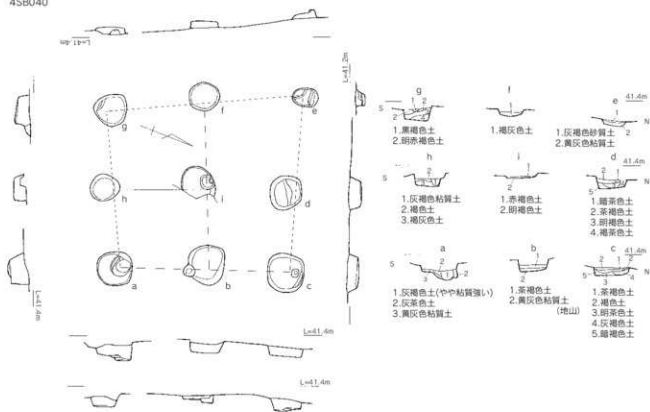
布掘りの南北 2間、東西 2間の総柱の掘立柱建物で、振れは N 15 54 Wである。南側の掘り方は誤って掘り抜いてしまったため、柱穴の掘り方等は確認できなかったが、そのほかの 2本の溝状の掘り方には、さらに不正円形の掘り方が確認できた。掘り方の長さは全て 4.7m、幅は 0.5~1.45mであるが、概ね 0.9~1.0mである。遺構検出時では柱穴の掘り方は確認できてなく、0.05mほど掘り下げた段階で確認できた。埋土の状況から布掘りの掘り方を埋めた後、一辺 0.7~1.6mの柱穴の掘り方を掘り抜いて、柱を立て埋めている。柱穴の埋土の土層で確認された柱痕は径 0.15mであった。柱間はおよそ東西 1.65m、南北 2.0mであった。布掘りの掘り方の底面はやや凹凸で、埋土の底面近くは白色粘土混じりの茶灰色土である。

4SB150 (Fig 78)

南北 2間、東西 2間の総柱の掘立柱建物。隅丸方形の掘り方は大きさ 0.45~0.85mであるが、確認された柱痕から柱間は東西 1.6~1.8m、南北 1.4~1.8mとやや不統一に並んでいる。西辺と北辺の柱筋に合わせると建物の大きさは南北 3.6m、東西 3.2mと推測され、西辺の柱筋の振れは N 17 4 Wである。

4SB185 (Fig 78)

4SB040



4SB080

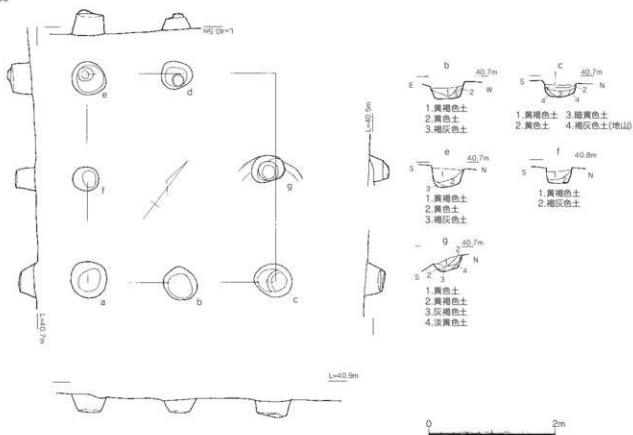


Fig 76 京ノ尾遺跡第4次調査SB040・080遺構実測図(1/60)

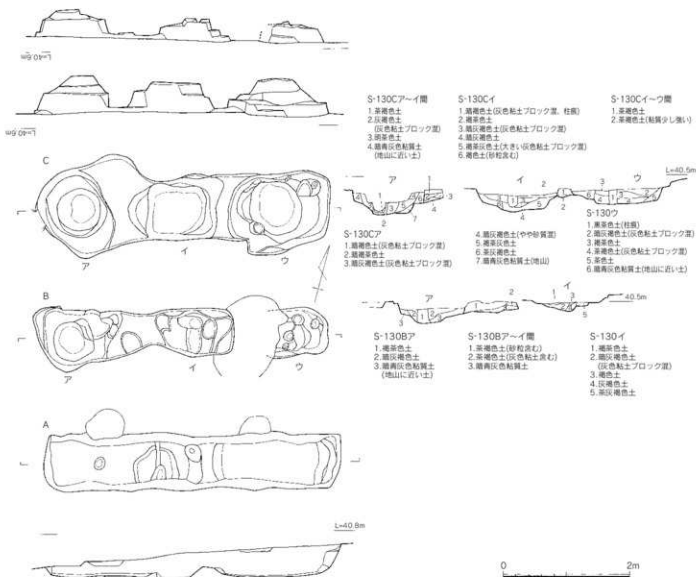


Fig. 77 京ノ尾遺跡第4次調査SB130遺構実測図(160)

南北2間 東西2間の南北棟で、不定円形の掘り方の大きさは0.6~0.9mで、柱間は桁行1.6m 梁行3.2mを測る。振れはN 35 2 W。

土坑

4SK010

方形のプランを確認したため、竪穴住居とも考えられたが、床面が安定していないこともあり、土坑として報告する。

4SK064

東西1.75m 南北1.15m 深さ0.4mの円形土坑である。

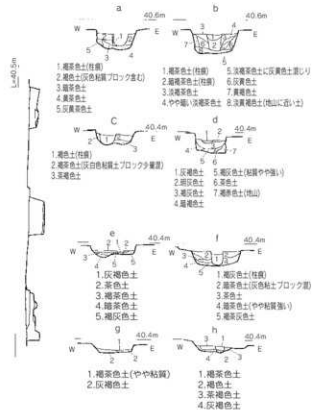
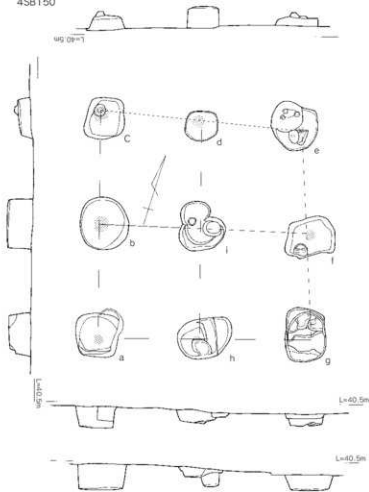
4SK065 (Fig. 79)

東西2.6m 南北2.3m 深さ0.25mの隅丸方形土坑で、底面が凹凸である。周囲の壁が一部焼けている。埋土途中に炭混じり層が確認されている。

4SK081

東西0.9m 南北0.95m 深さ0.65mの円形土坑である。

4SB150



4SB185

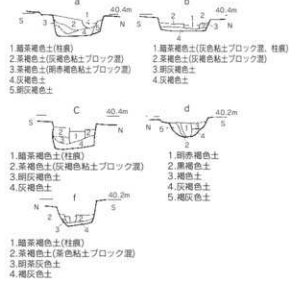
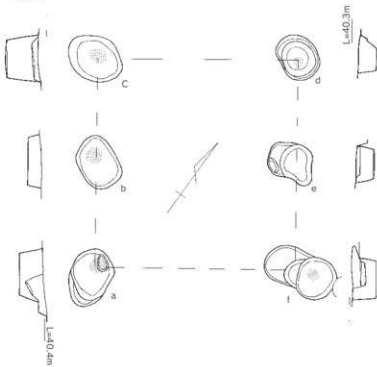


Fig 78 京ノ尾遺跡第4次調査SB150・185遺構実測図(160)

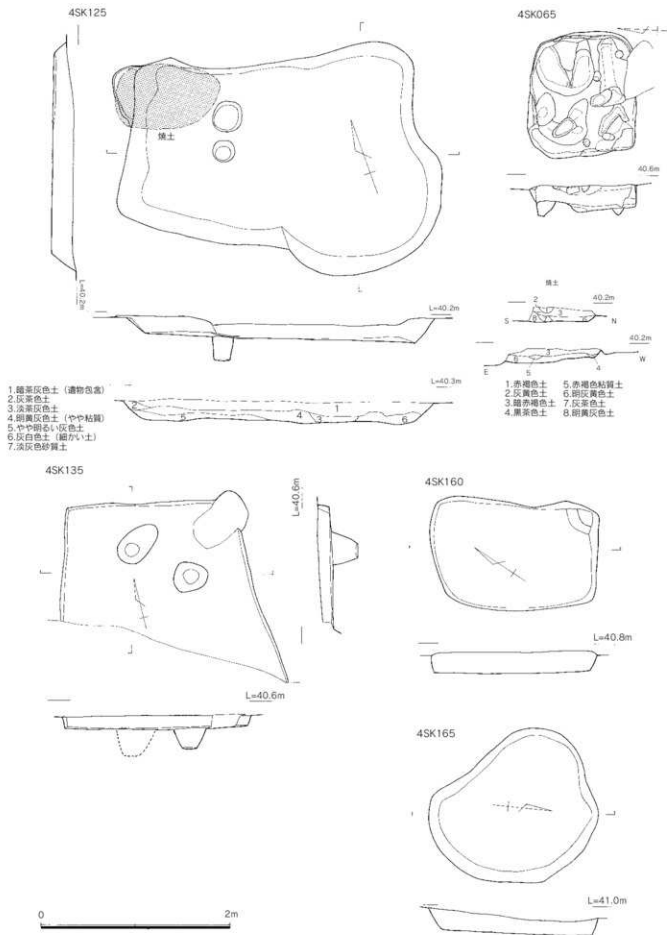
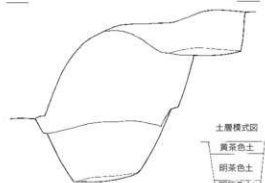


Fig 79 京ノ尾遺跡第4次調査土坑遺構実測図 (140)

4SK170



L=41.1m



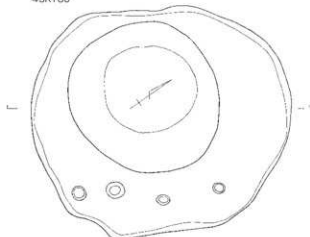
土層模式図

黄茶色土

明茶色土

刷灰布土

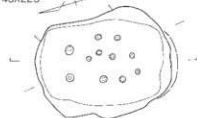
4SK180



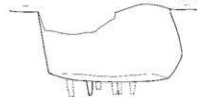
L=39.7m



4SX225

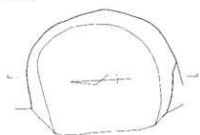


L=40.5m



L=0.6m

4SK175



L=41.1m



0

2m

- 1.黄茶色土 (やや粘質が強い)
- 2.褐色土
- 3.黄褐色土
- 4.黄褐色土
- 5.やや粘い黄褐色土
- 6.刷灰茶色粘質土
- 7.刷灰布土 (灰色粘土ブロック層)

Fig 80 京ノ尾遺跡第4次調査SK170・175・180 SX225遺構実測図(140)

4SK125 (Fig 79)

大きさは東西3.45m、南北2.5m、深さ約0.25mの長方形の土坑である。北端に焼土が確認できる。焼土は埋土の上面にあり、焼土範囲が土坑からはみ出ていることなどから、別遺構の可能性もある。

4SK127

調査区北端にある不定形土坑。

4SK135 (Fig 79)

南側が削平され、東西2.4m以上、南北2.1m以上、深さ約0.15mの方形状をしている。焼土やカマド痕跡などは検出されていないが、竪穴住居の可能性も考えられる。

4SK141

東西0.85m 南北1.5m 深さ0.2mの不定形土坑である。

4SK142

東西1.0m 南北0.8m 深さ0.2mの円形土坑である。

4SK160 (Fig 79)

長辺1.78m 短辺1.16m 深さ約0.25mの隅丸長方形をした土坑である。形状から木棺墓の可能性も考えられたが、墓と特定できるものは見つかっていない。

4SK165 (Fig 79)

東西1.65m 南北1.8m 深さ0.3mの楕円形をした土坑で、廃棄土坑と考えられる。遺構検出時点で土器が露出している状態で、埋土は茶灰色のやや固い粘質土の単層で、土器に混じって川原石が数個混じっていた。

4SK170 (Fig 80)

南北2.3m以上、東西2.25m以上、深さ1.75mで西側は削平されているが、隅丸方形をした土坑で、深さ0.45m付近から径1.7mの円形土坑になる。粘土質のやや分りづらい埋土をしているが、西側の削平法面に遺構断面が観察でき、埋土は単純層である。底面に近いほど砂質土になっていく。素掘りの井戸である可能性も考えられる。

4SK175 (Fig 80)

南北1.6m 東西1.3m以上、深さ0.54mの楕円形をした土坑で西側は削平されている。埋土の上層ほど遺物が多く出土した。

4SK176

南北6.5m 東西4.5m以上、深さ0.3mの不定形の土坑である。遺物は下層ほど少ない。埋土は西側に傾斜する堆積状況を示し、竪穴住居の可能性も考えられたが、プランが不定形で、底面に柱穴が確認できなかったため、土坑と判断した。埋土の中位に焼土の層が確認できた。また、最上層にSK165として記録した廃棄土坑があったが、これら焼土や廃棄遺物は、土坑埋没過程で堆積したものと推測される。

4SK179

4SX10dに接する溝状の土坑で、長さ3.0m 幅1.5m 深さ0.1mを測る。

4SK180 (Fig 80)

長軸2.75m 短軸2.4m 深さ0.3mの円形をした土坑で、埋土は黒色土で、底面は明灰色粘質土である。落とし穴

4SX220

1.1m 1.5m 深さ0.7mの楕円形をした土坑で、底面からは杭を立てたと考えられる小ピット10個が検出された。埋土は茶褐色土である。

4SX225 (Fig 80)

1.2m 1.4m 深さ0.8mの楕円形をした土坑で、埋土は黄褐色土である。底面からは杭を立てたと考えられる小ピットが1個検出された。

溝

4SD030

長さ17.0m 幅1.0～2.1m 深さ1.05mの断面逆台形の溝で、北西に向かって底面は下がっている。埋土には遺物が多く含まれ、最上層にはコンクリート片を含んでいるため、近世～現代にかけて埋没した

と考えられる。

4SD183

長さ 16.2m 幅 0.75～2.5m 深さ 0.25mだが、平均的に 0.1mほどの浅い溝である。表土剥ぎ段階でやや削平したため、もう少し深かったものと思われる。埋土は黒灰色土で、底面は微妙な凹凸がある。SX 110に平行するため、奈良時代の段階では、流路の存在が認識されていたことを物語っている。

4SD188

長さ 12.5m 幅 1.0m 深さ 0.15mを測る。SI183と同じく浅い溝であるが、表土剥ぎ段階でやや削平したため、もう少し深かったものと思われる。埋土は黒灰色土で、底面は微妙な凹凸がある。SX 110に平行するため、奈良時代の段階では、流路の存在が認識されていたことを物語っている。

4SD196

長さ 11.5m 幅 1.0～1.5m 深さ 0.2mを測る。浅い溝であるが、表土剥ぎ段階でやや削平したため、もう少し深かったものと思われる。埋土は黒灰色土で、底面は微妙な凹凸がある。SX 105に平行するため、この遺構が掘られた段階で、流路の存在が認識されていたことを物語っている。

流路

4SX100 (Fig 81)

今回検出された流路は全体で長さ 55m 幅 7.8～10.0m 深さ 0.6～1.0mを測り、北側に向かって流れていて、上流側で分岐している。調査の便宜上分岐点から南西側を SX 105 南東側を SX 110とし、合流した北側を SX 100とし報告する。SX 100は途中から西に向かって屈曲している。木片が多く堆積しているのは分岐付近から西側に屈曲している付近である。

上層の黒色土は草木を殆ど含まない層で、その下層である黒茶色土には木片、草木を多く含んでいる。黒茶色土は草木を含む茶色の層で空気に触れるとすぐ黒色に変色する。その下が灰色砂層で、黒茶色土と灰色砂との差は明瞭である。木片には樹根や湾曲した枝、草木葉が多くあり、大木を切っただけで、樹皮がそのままの状態のものも存在する。また、明瞭な加工材のほかに径 1～2mほどの細い材の木片も多くみられ、その中には先端を加工しているものもある。灰色砂には黒茶色土が藍穴状に入り込んでいる。部分的に黒茶色土がサンドイッチ状態になっているため、灰色砂からの出土遺物は基本的に黒茶色土の遺物と同じものと考えられる。

西側に屈曲している部分の岸辺には切り株が検出された。当時流路際に木が生えていたと考えられる。また、その切り株の東側には長い木材が斜めに堆積していて、木材を除去すると、その付近は土坑状に深くなっていて、意識的に窺いもしくは掘り込んで木材を置いていた可能性が考えられる。また、土坑には本だけだが、杭が刺さっている。その木材は一部砂に埋もれていて、堰き止めた状態になっている。長い木材は水の流れた速かったと思われる北東側が流された状態で堆積している。この付近より下流は黒茶色土の堆積が厚くなるが、木片は少ない。

昭和 23年の航空写真によると、現在福岡農業高校がある南側丘陵一帯は、以前は調査地より 15～20m程高く、その丘陵根根がちょうど調査地の南側付近で低くなっていて、僅かに丘陵がくびれている。このくびれた谷の延長にこの流路が存在している。

4SX105 (Fig 81)

SX 100が分岐した西側流路。分岐から南東に向かって 20m分を検出した。幅 3.6～5m 深さ 0.6mを測る。SX 100の分岐に近いところで、ネズミ返しなどの木製品が出土した。中間付近では曲がりくねった自然木が多くみられた。この少し下流では東西方向に木片が並んでいて、0.1m程の川原石も混じっていたが、人為的の置かれた痕跡は見つからなかった。この SX 105の延長上には保田池という小さな池が

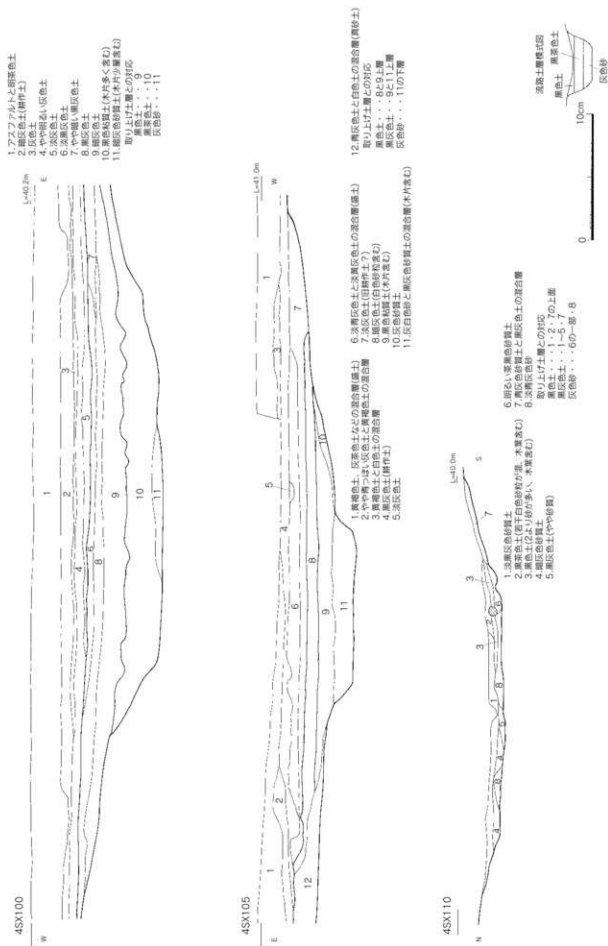


Fig 81 京ノ尾遺跡第4次調査SX100 105 110土層実測図(160)

存在し、調査時はよくサギが飛来していた。

4SX110 (Fig 81)

SX100が分岐した東側流路。分岐から南に向かって20m分を検出した。幅4.5~5.6m 深さ0.6mを測る。兩岸はだらだらと立ち上がっている。木材を含む黒茶色土は薄く北西のSX100の分岐に近づくほど黒茶色土層は厚くなり、流木や加工材が見られる。上流の方では加工材はもちろん木片も少ない。

(4) 出土遺物

竪穴住居

4SI035茶褐色土出土遺物 (Fig 82)

須恵器

坏蓋 (1~3) 1は口縁端部内面に沈線を巡らし、体部外面中位に段を有する。復元口径12.4cm。2は口縁端部を丸く仕上げる。復元口径14.0cm。3は口縁端部を丸く仕上げる。

土師器

坏 (4) 口縁端部の破片で、外面下半はナデか。胎土は精製されている。

小甕 (5・6) 5は復元口径12.0cm 口縁部はヨコナデ、外面タテハケ、内面ヘラ削りを行う。6は復元口径10.0cm 口縁部と底部が残存する。底部付近は指頭圧のあとタテハケ。内面ヘラ削り。

4SI045黄茶色土出土遺物 (Fig 82)

須恵器

坏身 (7・8) 7は復元口径12.0cm 立ち上がりは低い。外面下半は回転ヘラ削り。8は口縁端部を細く仕上げる。

4SI050明黄色土出土遺物 (Fig 82)

須恵器

坏蓋 (9) 若干厚みのある蓋で、口縁端部内面に段を、外面中位に段を巡らす。

坏身 (10・11) 10は口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。11は復元口径11.2cm 器高4.0cm 外面下半は回転ヘラ削り、内面は回転ナデで、一部不定方向のナデを行う。

土師器

坏 (12) 内面と外面下半にはミガキを行う。胎土は精製され一部黒漆のような痕跡を残す。復元口径12.8cm。

4SI055出土遺物 (Fig 82)

須恵器

坏身 (13) 復元口径11.9cm 内面底部は回転ナデで一部不定方向のナデ。底部にヘラ記号を施す。

甕 (14) 口縁部で端部に沈線が巡る。

土師器

坏 (15) 胎土は精製された黄橙色土。内外面磨滅している。

4SI060茶灰色土出土遺物 (Fig 82)

須恵器

坏蓋 (16) 丸味のある器形で、外面上部が回転ヘラ削り。

土師器

高坏 (17) 外面は小刻みなヘラ削り、内面ナデ。

甕 (18・19) 18は外面ヨコハケ、内面ナデ。19は口縁部が僅かに外反する器形とみられ、口縁部ヨ

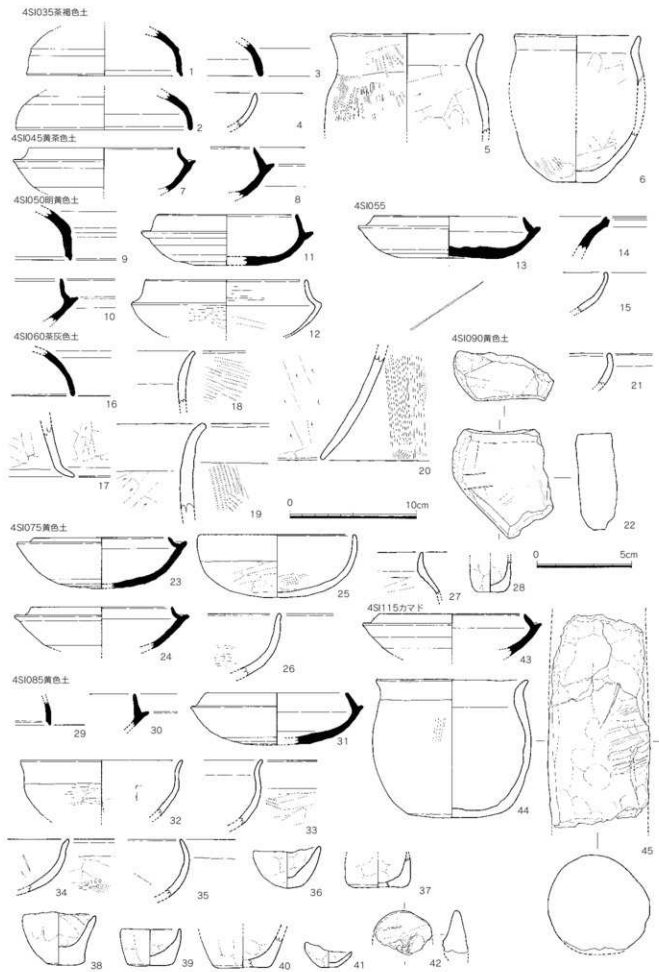


Fig 82 京ノ尾遺跡第4次調査竪穴住居出土遺物実測図1(13 22は12)

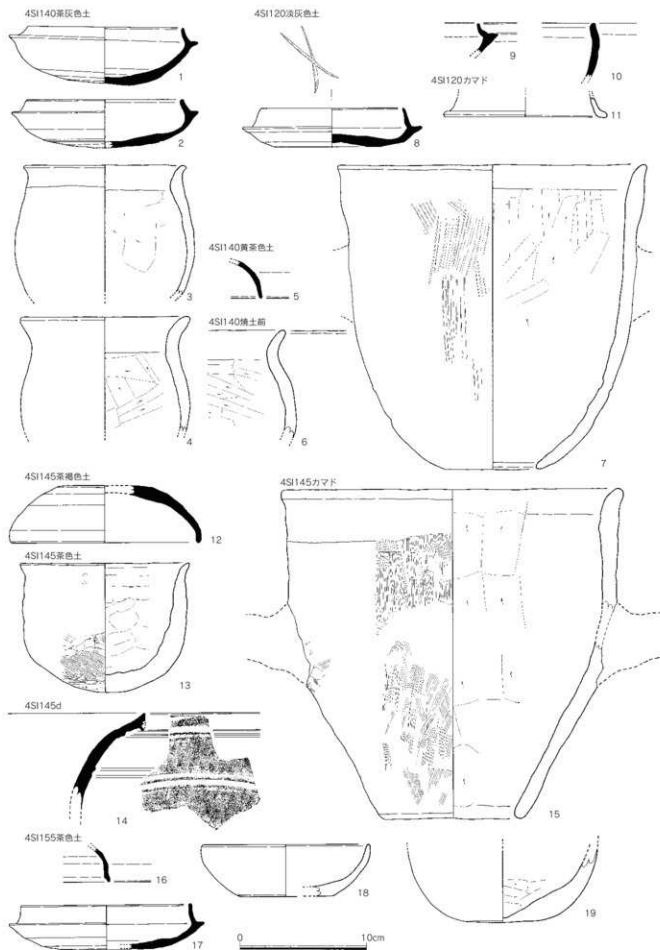


Fig 83 京ノ尾遺跡第4次調査竪穴住居出土遺物実測図2(13)

コナデ、内面ヘラ削り、外面ハケ調整。

甌 (20) 外面はタテハケ、内面はヘラ削りで端部がナデ調整。

4SI075黄色土出土遺物 (Fg 82)

須恵器

坏身 (23・24) 立ち上がりは低く内傾が目立つ。体部下半は回転ヘラ削り。23は復元口径 10.8cm、24は復元口径 11.2cm。

土師器

坏 (25・26) 25は復元口径 12.2cm、口縁部はヨコナデ、内面底部にはハケ痕跡が残る。外面下半は手持ちヘラ削り。26は口縁端部が僅かに外反する。内面ミガキ。

小甕 (27) 直口縁で体部内面はヘラ削り、外面ヨコナデ。

手捏ね土器 (28) 胎土は精製されている。内外面に指頭圧痕が残る。

4SI085黄色土出土遺物 (Fg 82)

須恵器

坏蓋 (29) 口縁端部内面に段を有する。

坏身 (30・31) 30は口縁端部を丸く仕上げる。31は復元口径 11.0cm、器高 4.1cm、内面底部は同心円当て具の後ナデを行う。

土師器

坏 (32-35) 32-34は口縁部が外反する器形。32は口縁部が回転ナデ、外面下半がヘラ削りのあと雑なミガキ。内面はコテ当て痕が残る。復元口径 12.8cm、33は外面下半がヘラ削りで一部ハケ目がある。34は内面コテ当て痕が残る。外面下半がヘラ削りの後ヨコハケを行う。35は口縁部が内湾する器形で、外面下半がヘラ削り。

手捏ね土器 (36-41) 部分的な欠損が目立つが、指頭圧痕は残る。36は復元口径 5.4cm、器高 2.9cm、37は口径 5.6cm、器高 4.2cm、38は安定して復元口径 4.6cm、器高 2.9cm。

土製品

模造鏡 (42) 半分欠損する。紐部分はひとつまみで作る。

4SI090黄色土出土遺物 (Fg 82)

土師器

坏 (21) 丸味のある器形の口縁部である。

石製品

砥石 (22) 大きさは 5.8 × 5.3cm、厚さ 2.6cm、2面で研磨されている。一部に切り込みと敲打痕がみられる。

4SI115カマド出土遺物 (Fg 82)

須恵器

坏身 (43) 立ち上がりは短く、やや内傾が目立つ。口径 11.6cm。

土師器

小甕 (44) くびれ部分がやや肥厚し、口縁部に向かって細くなる。復元口径 12.0cm、器高 10.9cm、内面はケズリとみられるが、かなり磨滅している。外面に僅かにタテハケが残る。

土製品

支脚 (45) 円柱で両端を欠損し、表面の欠落も目立つ。胎土は 0.2~0.3mmの白色砂粒を多く含む黄橙色土である。現存長 16.9cm、径 7.5~8.0cm。

4SI120淡灰色土出土遺物 (Fig 83)

須恵器

坏身 (8・9) 8は復元口径 11.2cm、器高 3.1cm、受け部に重ね焼きの痕跡が残る。内面にヘラ記号がある。外面下半は回転ヘラ削り、その他は回転ナデを行う。9は立ち上がりが短く低い。内外面とも回転ナデ。

鉢 (10) 口縁部の破片で全形が掴めにくい、鉢と推測される。内外面とも回転ナデ。

4SI120カマド出土遺物 (Fig 83)

土師器

高坏 (11) 端部を外側に屈曲させる。復元口径 13.0cm、外面ヨコナデ調整。

4SI140茶灰色土出土遺物 (Fig 83)

須恵器

坏身 (1・2) 1は復元口径 12.4cm、器高 4.9cm、かなり歪んでいる。外面下半は回転ヘラ削り、内面は同心円の当て具をナデ消している。2は復元口径 12.3cm、器高 3.9cm、外面下半は回転ヘラ削り。

土師器

甕 (3・4) 3は復元口径 12.8cm、内面ヘラ削り、外面ナデ調整。4は復元口径 13.2cm、体部外面粗いナデ、内面はヘラ削り。

4SI140黄茶色土出土遺物 (Fig 83)

須恵器

坏蓋 (5) 口縁端部は丸く仕上げる。外面中位に僅かに浅い段を付ける。

4SI140焼土前出土遺物 (Fig 83)

土師器

甕 (6) 外面は粗いナデ、内面はヘラ削り、口縁部はヨコナデを行う。

甎 (7) 把手は欠落する。口縁端部はヨコナデ、外面タテハケ、内面上方向へのヘラ削り。復元口径 24.4cm。

4SI145茶褐色土出土遺物 (Fig 83)

須恵器

坏蓋 (12) 外面上半部回転ヘラ削り、その他は内外面とも回転ナデ。外面天井部に僅かにヘラ記号が残る。焼成・還元は悪く黄白色を呈する。復元口径 15.0cm。

4SI145茶色土出土遺物 (Fig 83)

土師器

小鉢 (13) 体部下半はケズリ、内面は指で押さえた痕跡があり、粘土紐接合痕も残る。口縁部はヨコナデ、外面は熱によって赤褐色に変色している。復元口径 13.4cm、器高 10.3cm。

4SI145d出土遺物 (Fig 83)

須恵器

甕 (14) 外面には口縁部直下と頸部中位に突帯を巡らし、その沈線の間と下方に波状文を施す。

4SI145カマド出土遺物 (Fig 83)

土師器

甎 (15) 復元口径 27.0cm、器高 26.0cm、底径 11.2cm、把手は欠損し接合時に作られた穴が開いている。外面は細かいタテハケ、内面は上方向へのヘラ削り、口縁部はヨコナデを行う。

4SI155茶色土出土遺物 (Fig 83)

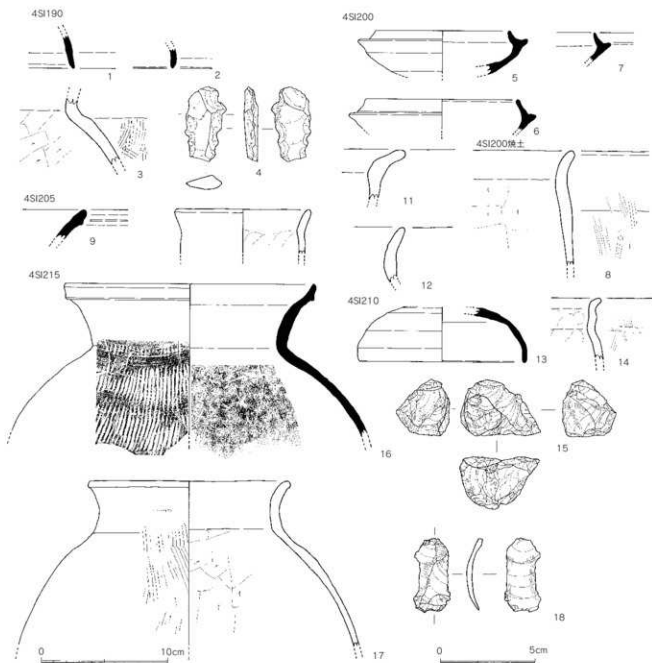


Fig 84 京ノ尾遺跡第4次調査竪穴住居出土遺物実測図3(13 4・15・18は12)

須恵器

坏蓋 (16) 口縁端部内面に段を巡らす。

坏身 (17) 復元口径 13.4cm 器高 3.6cm。内面底部は同心円当て具痕、外面下半は回転ヘラ削りで、板状圧痕がみられる。端部は丸く仕上げる。

土師器

坏 (18) 復元口径 13.3cm 器高 4.1cm。胎土は精製された黄橙色土。底部が平坦になるとみられる。

甕 (19) 底部付近で内面ナデ、外面に僅かにハケ目が残る。

4S1190出土遺物 (Fig 84)

須恵器

坏蓋 (1・2) 1は端部内面を斜めに作る。2は端部を丸く仕上げる。

土師器

甕 (3) 内面ヘラ削り、外面タテハケ。

石製品

剥片(4) 縦39cm 横21cm 厚さ0.7cmで縦長剥片の側面を剥離させ、二次加工している。安山岩製。

4SI200出土遺物(Fig.84)

須恵器

坏身(5-7) 口縁端部は丸く仕上げる。9は復元口径10.7cm、外面調整は磨滅し不明瞭。6は復元口径12.2cm、7は全面回転ナデ。

4SI200焼土出土遺物(Fig.84)

土師器

甕(8) 口縁部は僅かに外反する。内面方向のケズリ、外面はタテハケ。口縁部は磨滅しているが回転ナデ。

4SI205出土遺物(Fig.84)

須恵器

甕(9) 口縁端部で、僅かに肥厚させている。

土師器

甕(10-12) 10は小甕で、体部内面はナデ。復元口径10.7cm、11・12はSI205の底面の土坑から出土。

4SI210出土遺物(Fig.84)

須恵器

坏蓋(13) 外面頂部に回転ヘラ削り、内面頂部は当て具を粗く回転ナデしている。復元口径13.2cm、端部は丸く仕上げる。

土師器

小壺(14) 口縁部に向かって若干くねっている。口縁端部は回転ナデで、外面にはタテハケ、内面はナデが確認できる。

石製品

石核(15) 大きさ30×4.2×2.8cmの黒曜石製で、全面細かな剥離を行い、一部剥片が接合する。一部自然面が残る。

4SI215出土遺物(Fig.84)

須恵器

甕(16) 体部外面は平行叩きで、内面の当て具痕はナデられ殆ど残っていない。口縁部は回転ナデ。

土師器

甕(17) 胴部外面はタテハケ、内面は上方向へのヘラ削り。口縁部が回転ナデ。復元口径16.0cm。

石製品

剥片(18) 縦40cm 横18cm 厚さ0.3cmの黒曜石の縦長剥片。

擬立柱建物

4SB040a出土遺物(Fig.85)

土師器

坏(1) 復元口径10.8cm、外面下半の調整はナデで、底面には葉脈痕が僅かに残る。

4SB040d出土遺物(Fig.85)

土師器

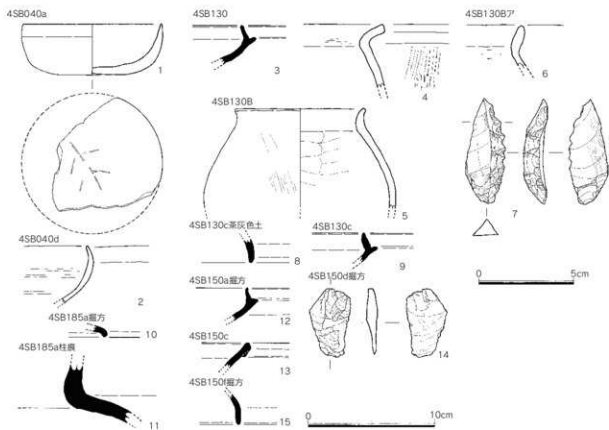


Fig 85 京ノ尾遺跡第4次調査掘立柱建物出土遺物実測図(13)

坏(2) 口縁端部はヨコナデで、その下は内外面ともミガキのような痕跡がみられる。

4SB130出土遺物 (Fig 85)

須恵器

坏身(3) 外面は焼成によって器面が荒れている。その他は回転ナデ。

土師器

甕(4) 口縁部は明瞭に屈曲させ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ。

4SB130B出土遺物 (Fig 85)

土師器

甕(5) 復元口径 10.3cmの小甕で、体部内面ヨコナデ、外面は僅かにタテハケが残る。

4SB130Bア出土遺物 (Fig 85)

土師器

甕(6) 口縁端部で体部内面は横方向のヘラ削り。

石製品

ナイフ形石器(7) 縦5.6cm 横2.1cm 厚さ1.25cmの断面三角形で、背部を細かく剥離調整している。

4SB130c出土遺物 (Fig 85)

須恵器

坏蓋(8) 端部は丸く仕上げる。SB130c茶灰色土から出土。

坏身(9) 口縁部で内外面とも回転ナデ。

4SB150a掘方出土遺物 (Fig 85)

須恵器

坏身(12) 低い立ち上がりで、内外面とも回転ナデ。

4SB150c出土遺物(Fig 85)

須恵器

甕(13) 口縁部外面に突帯を付け、肥厚させている。内外面とも回転ナデ。

4SB150d掘方出土遺物(Fig 85)

石製品

剥片(14) 縦3.5cm、横2.1cm、厚さ0.5cm、淡黄褐色のチャート製。

4SB150f掘方出土遺物(Fig 85)

坏蓋(15) 口縁部は丸く仕上げる。

4SB185a掘方出土遺物(Fig 85)

須恵器

蓋3(10) 口縁端部で内外面とも回転ナデ。

4SB185a柱痕出土遺物(Fig 85)

須恵器

甕(11) 頸部の付け根で外面には叩き痕に自然軸が付いている。

土坑

4SK065黒色土出土遺物(Fig 86)

須恵器

坏身(1) 復元口径10.9cm、口縁端部内面に僅かな段が巡る。外面底部回転ヘラ削り、内面底部に当て具痕残る。

4SK125出土遺物(Fig 86)

須恵器

坏蓋(2-6) 2は外面頂部回転ヘラ削り、内面頂部当て具の後ナデ。復元口径14.0cm、器高4.3cm、3は復元口径15.0cm、器高3.2cm、9は端部内面に斜めに作られ、浅い沈線が巡る。

坏身(7-9) 全て端部は丸く仕上げる。7はやや歪んでいる。回転ヘラ削りのあと底部付近はナデ。復元口径12.6cm、8は復元口径11.6cm、SK125茶灰色土から出土。

高坏(10) 脚部端部で内外面とも回転ナデ。

4SK125焼土出土遺物(Fig 86)

須恵器

坏蓋(11) 端部は丸く仕上げ、重ね焼きの痕跡が残る。

4SK135出土遺物(Fig 86)

須恵器

蓋c(12) ボタン状のツマミを付ける。

蓋3(13・14) 13は復元口径15.1cm、外面上部はヘラ切り後未調整。14は復元口径17.2cm、外面天井部は回転ヘラ削り。

高坏(15) 端部は緩やかに屈曲させ、先端を折り曲げている。復元底部径9.7cm。

甕(16) 体部内面同心円の当て具、外面格子叩き。復元口径26.4cm。

4SK165出土遺物(Fig 86)

須恵器

坏蓋(17・18) 17は口縁端部に浅い沈線が巡る。外面中位に僅かに沈線が巡る。18は丸く仕上げる。

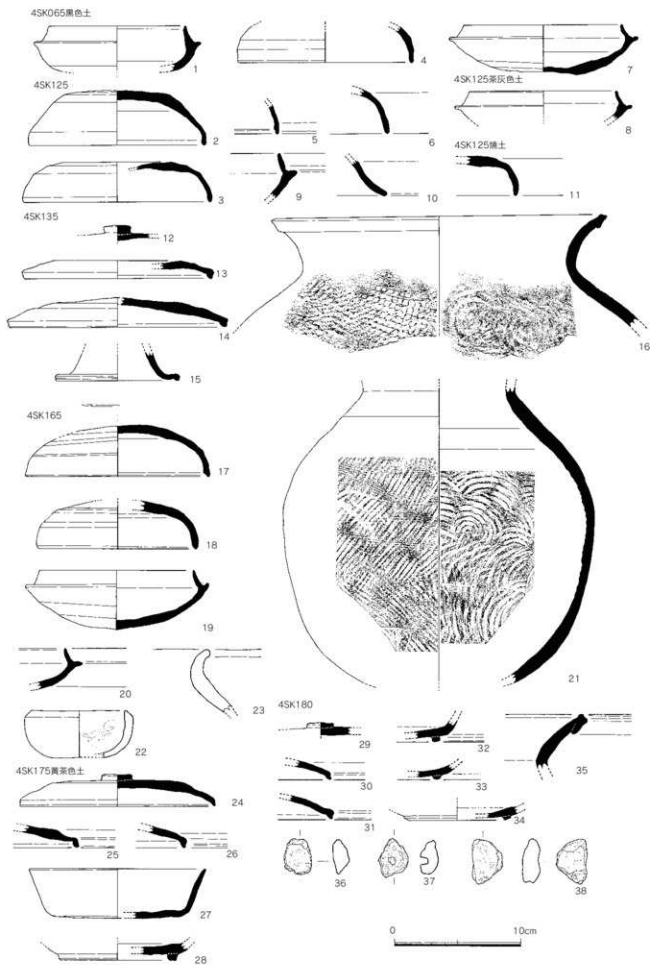


Fig 86 京ノ尾遺跡第4次調査主要土坑出土遺物実測図(13)

坏身(19・20) 2点とも口縁端部を丸く仕上げる。外面下半回転ヘラ削りで、他は内外面とも回転ナデ。19は復元口径12.2cm、器高4.7cm、外面に須恵器片が付いている。

甕(21) 肩部が張っていない。内面同心円の当て具痕が残り、外面は叩きの後に所々カキ目を施す。
土師器

坏(22) 口縁端部は外側に斜めに仕上げる。復元口径8.6cm、内面指押さえの後ハケを施す。外面は磨滅しているが下半はヘラ削りのような痕跡が残る。

甕(23) 口縁部は短く外反するため、頸部が短い。全面磨滅し調整不明。

4SK175黄茶色土出土遺物(Fig.86)

須恵器

蓋c(24) 扁平なボタン状のツマミが付く。外面上半部はヘラ切り後未調整。復元口径15.4cm、器高2.5cm。

蓋3(25・26) 25は外面中位以上はヘラ切り後未調整。26は端部を折り曲げ、その外側に沈線が巡る。

坏a(27) 復元口径13.9cm、器高3.9cm、復元底径10.0cm、全面磨滅し調整不明。還元不良。

坏c(28) 復元高台径9.3cm、内面底部ナデ、底部ヘラ切り後未調整。

4SK180出土遺物(Fig.86)

須恵器

蓋c(29) つぶれた宝珠ツマミを付ける。外面調整磨滅し不明。内面ナデ。

蓋3(30・31) 両方とも僅かに外側に揃みながら断面台形の口縁端部を作っている。

坏c(32~34) 全て低い方形高台を貼付する。34は復元高台径8.4cm。

甕(35) 口縁端部は折り曲げ肥厚させる。

金属製品

鋳滓(36~38) メタル部分が僅かに残り、焼土塊も殆ど付いていないため、取り出された鉄周辺の滓と推測される。

4SK010明灰色土出土遺物(Fig.87)

須恵器

坏蓋(1~3) 復元口径12.0~13.2cm、1は体部中位に沈線があり、それより上は回転ヘラ削り。口縁端部内面にも沈線巡る。2・3は体部中位に僅かに浅い窪みが巡り、口縁端部に沈線などはなく丸く仕上げる。

坏身(4~6) 口縁部の破片で、端部は丸く仕上げる。

甕(7) 頸部から口縁部にかけて浅い沈線が6条巡る。その他は回転ナデ。

土師器

坏(8) 端部の破片で、復元口径13.4cm、胎土は精製されている。内面中位より下はナデ、そのほか内外面は回転ナデ。

土製品

模造鏡(9) 大きさは3.15×2.6cm、厚さ0.9cm、紐の部分に横から孔を穿つ。

4SK064出土遺物(Fig.87)

須恵器

坏蓋(10) 体部中位まで回転ヘラ削りを施し、その下に沈線を巡らす。口縁端部には明瞭な段を有する。内面天井部には同心円当て具が明瞭に残る。復元口径13.6cm、器高4.1cm。

4SK081出土遺物(Fig.87)

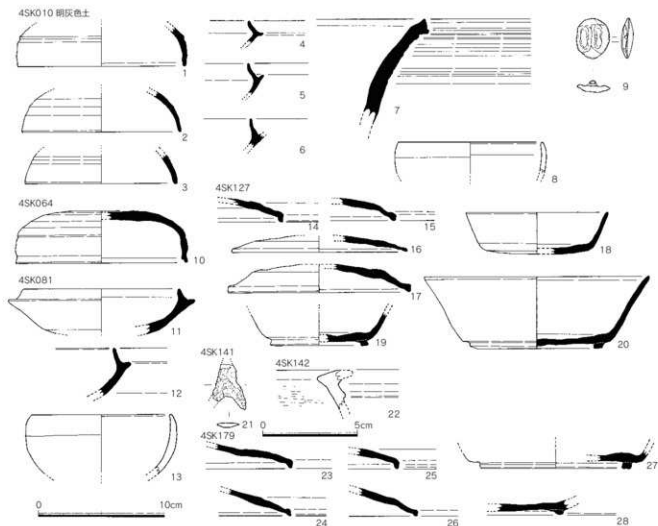


Fig 87 京ノ尾遺跡第4次調査その他の土坑出土遺物実測図 (13 21は 12)

須恵器

坏身 (11・12) 2点とも焼成・還元が悪く白灰色を呈する。11は復元口径 12.4cm、立ち上がりは低い。12は小破片で磨滅している。

土師器

坏 (13) 僅かに内湾しながら立ち上がる。復元口径 11.2cm、内面はナデ、その他は磨滅している。

4SK127出土遺物 (Fig 87)

須恵器

蓋 3 (14~17) 14・17は外面頂部ヘラ切り後未調整。19は外面頂部ナデ。16はヘラ切りのあと粗いナデ。復元口径 13.8cm、17は復元口径 14.4cm、外面に重ね焼きの痕跡を残す。

坏 a (18) 復元口径 11.2cm、底部外面は丁寧な回転ヘラ削り。

坏 c (19・20) 19は復元高台径 7.7cm、底部はヘラ切り後粗いナデ。20は復元口径 17.8cm、器高 5.7cm、高台径 10.4cm、内面底部ナデ、その他は回転ナデ。

4SK141出土遺物 (Fig 87)

石製品

石鏃 (21) 縦 2.3cm、横 1.6cm、厚さ 0.3cm、安山岩製。

4SK142出土遺物 (Fig 87)

弥生土器

壺 (22) 口縁端部で、内面に磨いたような痕跡が残る。内外面とも朱塗りしている。

4SK179出土遺物 (Fig.87)

須恵器

蓋 3(23-26) 全て口縁部の破片で、外面上半部はヘラ切りの後粗いナデを施す。

坏 c(27・28) 27は復元高台径 11.8cm, 28は底部ヘラ切り後未調整。

溝

4SD030茶色土出土遺物 (Fig.88)

土師質土器

鍋 (1・2) 1は口径 49.2cm, 口縁部内面は僅かに斜めに作られている。下半は僅かに屈曲させ底部へ続いている。外面タテハケ、内面は磨滅しているがナデとみられる。外面には煤が付着している。2は復元口径 28.4cm, 耳の長さは約 10.5cmで、その下にも突帯が巡る。口縁部に釣手を結ぶ径 0.8cmの孔を内面から穿つ。内面ヨコハケ、口縁部外面タテハケで若干煤が付着する。

擂鉢 (3) 内面はヨコハケの後摺り目を施す。

瓦質土器

擂鉢 (4) 内面はヨコハケの後摺り目を施す。片口か。

湯釜 (5) 直口縁で復元口径 14.0cm, 内外面はナデ、肩部に菊花文のスタンプを巡らしている。

国産陶器

皿 (6) 内面と高台にそれぞれ 4ヶ所目跡が残る。高台径 5.6cm,

瓦類

軒平瓦 (7) 厚さ 4.2cm, 磨滅が目立つ、唐草文や珠文が残る。

石製品

石臼 (8) 砂岩製。

土製品

模造鏡 (9) 大きさ 3.5・3.9cm, 厚さ 1.6cm, 紐の部分に孔を穿つ。

4SD030黄茶色粘土出土遺物 (Fig.88)

瓦質土器

火鉢 (10) 底部付近と見みられ、内面はヨコハケ、外面には 2条の突帯がみられ、その間に菱形を 4つ組み合わせたスタンプを施している。

4SD030灰色土出土遺物 (Fig.88)

土師器

小皿 a(11) 口径 6.4cm, 器高 1.2cm, 底径 5.2cm, 底部調整不明。

坏 a(12) 復元底径 7.6cm, 器面は磨滅し調整等不明。

鍋 (13) 口縁部を外側に屈曲させる。外面には部分的に煤が付着する。

托型土器 (14) 口径 5.0cm, 器高 6.2cm, 底径 7.6cm, 外面には受け部が巡る。内部は中空で上半は回転ナデ、下半はケズリ。その他は回転ナデ。

土師器

擂鉢 (15) 復元口径 31.0cm, 口縁部には片口が作られている。外面には僅かにハケが確認できる。内面には摺り目のみ確認できる。

瓦質土器

火鉢 (16) 復元口径 38.4cm, 外面上部に 2条の突帯を巡らせ、その間に梅花文のスタンプを施す。その他はミガキ。内面は斜め方向のハケ調整を行うが、器面は荒れている。

4SD030茶色土

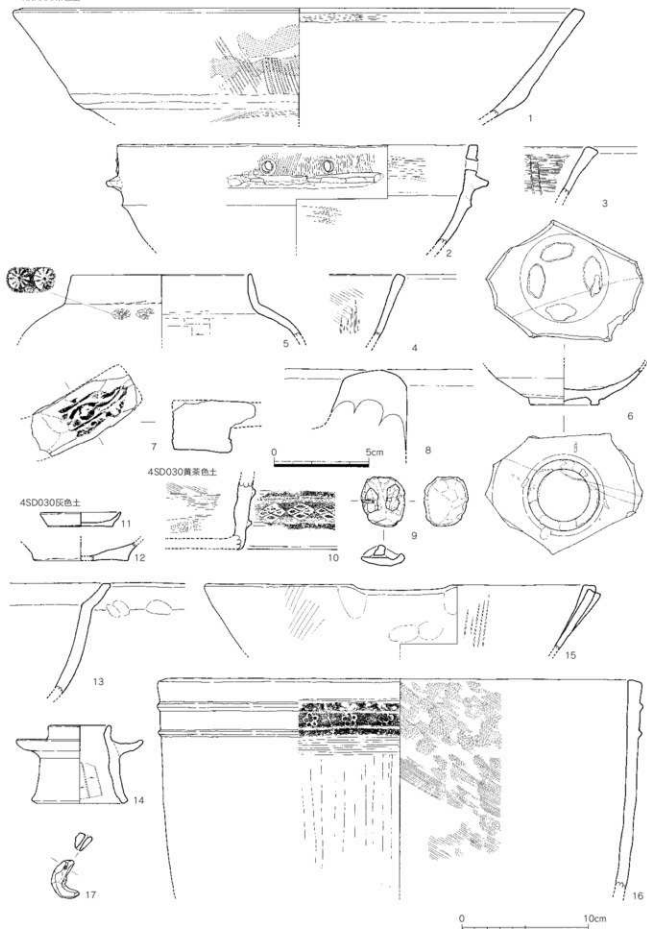


Fig 88 京ノ尾遺跡第4次調査SD030出土遺物実測図(13 8は12)

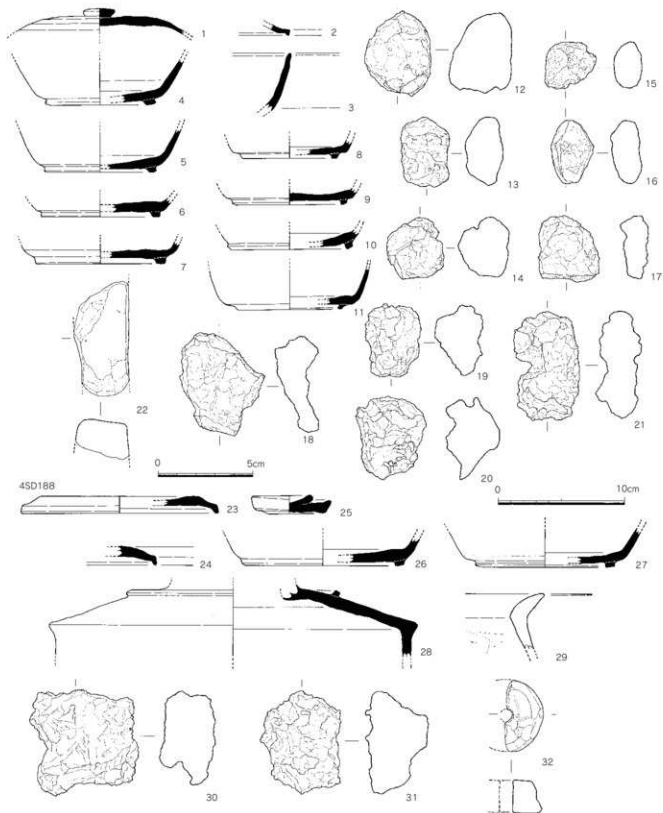


Fig 89 京ノ尾遺跡第4次調査SD183・188出土遺物実測図(13 22・32は12)

土製品

勾玉(17) 長さ30cm 径1.3~2.2cm, 0.2cm程の孔を施す。

4SD183出土遺物(Fig 89)

須恵器

蓋 c(1) 扁平な宝珠ツマミを貼付する。外面回転ヘラ削り。内面天井部ナデ。

蓋 3(2) 口縁端部で内外面とも回転ナデ。

坏 c(3) 口縁部で内外面とも回転ナデ。

坏 c(4-11) 低くやや外開きの高台を貼付する。復元高台径 8.8-10.2m、4は内面底部ナデ。5-7は内面回転ナデで、底部外面はナデ調整である。

金属製品

鉢滓 (12-21) 12-16はメタルが残っているものや焼土を含んでいない鉢滓である。17-21はメタル部分が残ってなく、黒褐色の鉢滓部分にスサの痕跡を含む炉壁が癒着した状態のものである。

石製品

砥石 (22) 両端を欠損し、丸くなっている。現存長 6.6m、幅 2.0-3.0m、2面研磨面がある。砂岩製。
4SD188出土遺物 (Fig.89)

須恵器

蓋 3(23-24) 23は復元口径 15.6m、外面頂部はヘラ切り後未調整。24は外面上部回転ヘラ削り。

蓋 (25) 口径 6.2m、器高 1.4mの小さな蓋で、さらに内側に径 3.8mのツマミ状のものを作り出している。

坏 c(26-27)

壺 e(28) 外面は回転ヘラ削りのあと肩部に断面方形の突帯を巡らす。内面は当て具のあと回転ナデを行う。

土師器

甕 (29) 体部外面には僅かにタテハケが残る。内面はヘラ削り。口縁部は回転ナデ。

金属製品

鉢滓 (30-31) 30は断面で見ると鉢滓の両側に炉壁部分がある状態で、何度が溶解炉を使用した様子が窺える。31は僅かにメタル部分が付着していて、炉壁部分は細かい気泡が多い。

石製品

紡錘車 (32) 断面台形をなしている。半分欠損していて、径 3.8m、厚さ 1.7m、滑石製。

流路

4SX100黒色土出土遺物 (Fig.90-95)

須恵器

坏蓋 (1-22) 1は他より時期が古く、器形も異なる。口縁端部に明瞭な段を有し、外面中位にも段を巡らす。側面にヘラ記号のようなキズが付く。2-17は口縁端部を丸く仕上げ、外面上半部が回転ヘラ削りで、段は付けられていない。口径 11.8-16.0m、器高 3.5-4.45m、3は端部内面に浅い沈線がみられる。9はやや歪んでいる。18-22は外面頂部調整に手抜きが見られる。口径 11.0-14.0m、器高 3.4-4.4m、18は雑な回転ヘラ削りで頂部だけさらにナデしている。19は雑な回転ヘラ削り。20-22はヘラ切り後未調整。内面頂部はナデ。

蓋 a(23) 口縁部内面に返りが付く。外面上部は回転ヘラ切り後未調整で、ヘラ記号を施す。内面天井部はナデ調整。

坏身 (29-55) 29は口縁端部内面に段を巡らす。復元口径 10.3m、器高 4.9m、外面は灰かぶり調整不明で、一部に須恵器片が付着する。30-31は底部がやや尖り気味の器形で、立ち上がりは 1m程である。口径はそれぞれ 12.5mと 13.6m、32-54は口径 10.7-13.6m、器高 2.4-4.4mで、立ち上がりが短く低い。外面下半は回転ヘラ削り、内面底部はナデ調整。31は還元が悪く橙灰色を呈する。38は雑

な回転ヘラ削り。42は底部外面が手持ちヘラ削り。54・59は外面下半がヘラ切り後未調整である。54は復元口径 12.2cm、器高 4.1cm、59は内面底部がナデ調整、外面にヘラ記号を施す。口径 9.3cm、器高 4.0cm。

高坏 (25-28) 25・26は脚部下半で屈曲させ、段をなしている。25の復元底径 12.8cm、26の坏部下半には力キ目を施す。復元底径 11.8cm、27は無蓋高坏で、口縁端部内面を斜めに作る。内面には漆のようなものが付着する。坏部外面下半には力キ目を施す。復元口径 14.0cm、器高 10.7cm、復元底径 12.2cm、28は器高の低い高坏で脚部に円形透かし窓を2ヶ所設ける。

提瓶 (24) 小破片で全形が掴みにくいが、肩部には下方に屈曲した把手が付くことから、提瓶のよなものかと推測される。外面にハケ工具のよなもの当り痕跡が残る。

蓋 c (63・64) 2点ともツマミは欠損しているが、頂部につまみを接合時のナデがみられる。63は外面上半部が回転ヘラ切り後不定方向のナデ。それに対応するように内面天井部が当て具の後ナデ。復元口径 18.6cm、64は外面上部が回転ヘラ削りし平坦をなす。復元口径 14.0cm。

蓋 3 (65-67) 65は回転ヘラ切り後未調整。復元口径 16.0cm、66は外面上半部が回転ヘラ削り。復元口径 14.4cm、67は外面上半部が回転ヘラ削り。復元口径 12.6cm。

皿 a (68・69) 68は復元口径 15.2cm、器高 2.0cm、復元底径 12.1cm、底部ヘラ切り後雑なナデ。内面底部はナデ調整。69は復元口径 18.0cm、器高 2.15cm、復元底径 14.6cm、底部は回転ヘラ切り後未調整。

坏 c (70-78) 復元高台径 8.8-10.8cm、外面底部は回転ヘラ切り後にナデ。70は復元口径 14.0cm、71は復元口径 14.4cm、72は底部外面にヘラ記号がある。73は細く低い高台を付す。

壺 (56) 底部で外面は回転ヘラ削り、内面底部は不定方向のナデ。高台は断面方形で、復元径 11.0cm。

甕 (57-62) 57は口径 19.8cm、還元が悪く淡橙色を呈する。頸部外面にヘラ記号を施す。胴部外面は叩きの後力キ目を施す。58は復元口径 17.2cm、59は復元口径 20.6cm、60は復元口径 17.2cm、器高 38.0cm、胴部外面は叩きの後に頸部を中心に力キ目を施す。胴部は薄く仕上げる。61は復元口径 21.4cm、頸部に突帯をつくり、その上下に波状文を施す。62は大甕の頸部とみられ、沈線に挟まれて波状文を施す。

土師器

坏 (79-82) 79は復元口径 13.0cm、外面下半は手持ちヘラ削り。80は内面ミガキ、外面下半は手持ちヘラ削りの後ミガキ。口径 11.5cm、器高 5.8cm、81は口縁部をヨコナデし僅かに外反させる。内面にはミガキの工具当り痕が残る。外面下半は手持ちヘラ削り。復元口径 11.8cm、器高 5.9cm、82は復元口径 11.4cm、内面回転ナデ、外面下半はヘラ削りを行う。

高坏 (83) 坏部は欠損する。外面ミガキ、内面ヘラ削り。復元底部径 10.0cm。

手捏ね土器 (84) 口径 5.0cm、器高 3.5cm。

甕 (85-89) 85は復元口径 11.4cm、内面ヘラ削り、外面ナデで、口縁部はヨコナデ。86は体部外面タテハケ、内面ヘラ削り。口縁部はヨコナデ。復元口径 17.0cm、87は外開きに直線的な頸部で、口縁端部は平坦に仕上げる。体部は細かいタテハケが確認できる。内面はヘラ削りが明瞭に残る。口径 16.0cm、88は体部内面が上方向のヘラ削り、外面はタテハケ。口径 16.6cm、89は復元口径 20.0cmで、体部外面ナデ、内面はヘラ削り、頸部ヨコナデ。

甕 甕 (90) 口縁部は僅かに外反する。外面タテハケ、内面は一部ヨコハケの後ナデ。復元口径 29.0cm。

白磁

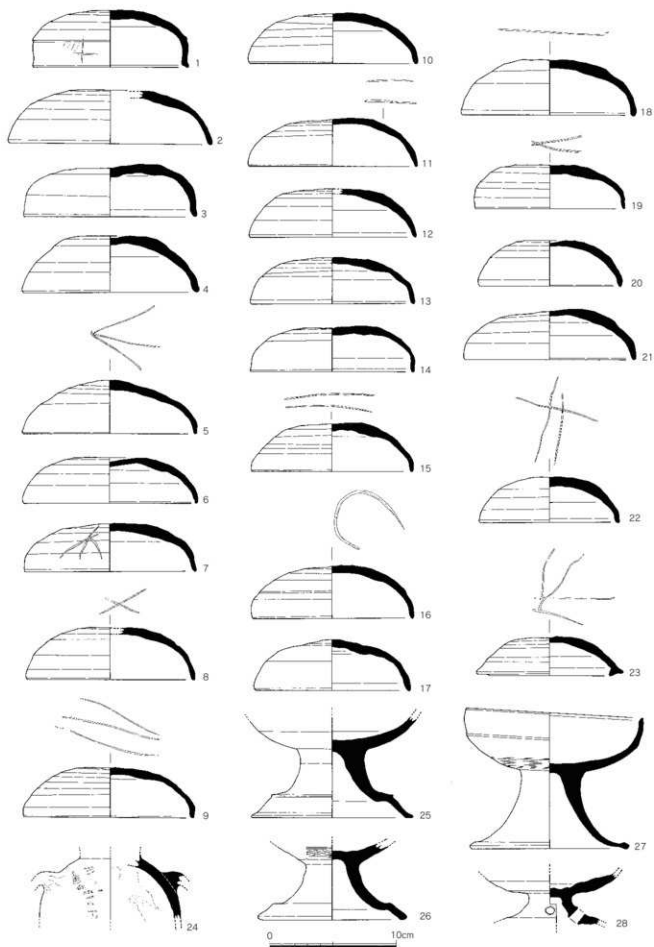


Fig 90 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒色土出土遺物実測図1(13)

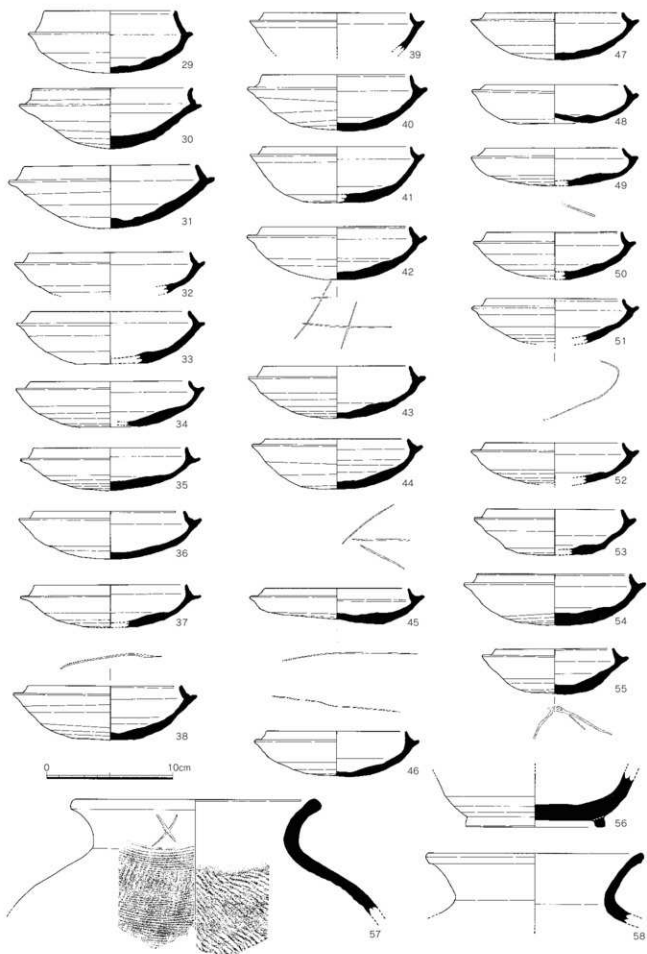


Fig 91 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒色土出土遺物実測図2(13)

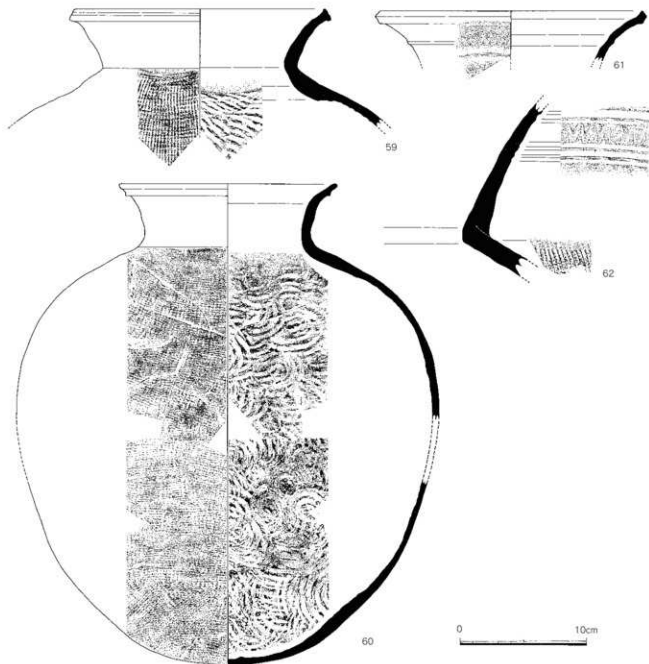


Fig 92 京ノ尾遺跡第4次調査SX10Q黒色土出土遺物実測図3(13)

椀(91) IV類。

土製品

模造鏡(92・93) 92は大きさ43・44cm、厚さ14cm、93は大きさ36・40cm、厚さ19cmで、紐を2方向からつまみ出している。

石製品

紡錘車(94) 大きさは32・33cm、厚さ09cm、滑石製。

砥石(95・96) 95は研磨面が面で、大きさは36・47cm、厚さ11cm、砂岩製。96は欠損部以外全て研磨されている。大きさは31・46・59cm、薄茶白色の天草産と思われる砂岩製。

丸石(97) 大きさは35~56cm、厚さ22cm、石英製。

木製品

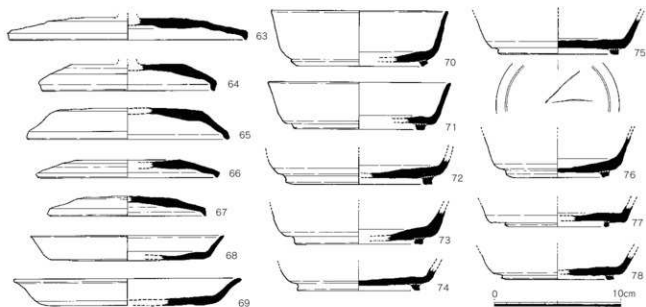


Fig 93 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒色土出土遺物実測図4(13)

板材 (98・99) 98は長さ129.8cm、現存幅35.7cm、厚さは最大6.2cm。表面はケズリのような痕跡がみられるが、木目が浮き出るほど腐食している。材質そのものは腐食せず芯までしっかり残っている。小口は両側ともに面が残っている。側面の片方は欠損せずに残っていて、綺麗に平坦に作っている。99は現存長82.0cm、幅20.3cm、厚さ4.5cm。表面のケズリ痕跡は僅かに残るが若干凸凹している。側面の一部を除いて、小口・側面の殆どが欠損している。

杭 (100~103) 端部以外に加工はなく、丸太をそのまま使用している。先端部は小刻みなカットで尖らせていて、上部部はホゾ状に削り出されている。材は腐食せず保存状態は良好である。100は長さ63.0cm、径8.7~12.3cm。上部のホゾは殆ど欠損し僅かに2.5cm分残る。101は長さ59.5cm、径8.0~10.3cm。上部のホゾは端部を欠損するが7cm分残っている。102は長さ56.1cm、径8.3~8.6cm。上部のホゾ部分は欠損しているとみられる。103は長さ59.7cm、径8.8cm。上部のホゾは大きく欠損し2.8cm分残る。

4SX100出土遺物 (Fig 95)

木製品

大足 (104・105) 代踏用田下駄の部材の一部で、山形市の嶋遺跡出土復元図にみるように足板を固定するものである。近代でも使用されている所もあり、遺跡からは全国各地で時折出土し、この周辺では福岡市の拾六町ツイジ遺跡で出土している。2点ともほぼ同じ規格で、104は長さ43.3cm、幅11.2cm、厚さ1.9cmを測り、その孔の両側は0.3cmほど窪んでいる。両端には約1cmのホゾが作り出されている。105は長さ43.6cm、幅11.4cm、厚さ1.8cmを測り、中央に2.6cm四方の孔を穿つ。その孔の両側は0.4cmほど窪んでいる。両端には約2cmのホゾが作り出されている。

4SX100黒茶色土出土遺物 (Fig 96~104)

須恵器

坏蓋 (1~25) 1~11は口縁端部内面に僅かに段や沈線を巡らす。さらに1~4・7・8には外面中位に浅い沈線が巡っている。外面上半部回転ヘラ削り、内面頂部当て具そのまま、もしくはナデ消している。8は口縁端部内面は明瞭な段が付く。9は回転ヘラ削りの後雑なナデを行う。10は外面ヘラ切り後ほとんど未調整で、内面頂部は当て具を雑な回転ナデとナデで消している。この蓋から製作工程が内面頂部を当て具で押さえ外面ヘラ切り 当て具をナデ消す 外面回転ヘラ削りの順で行われていたことが理解で

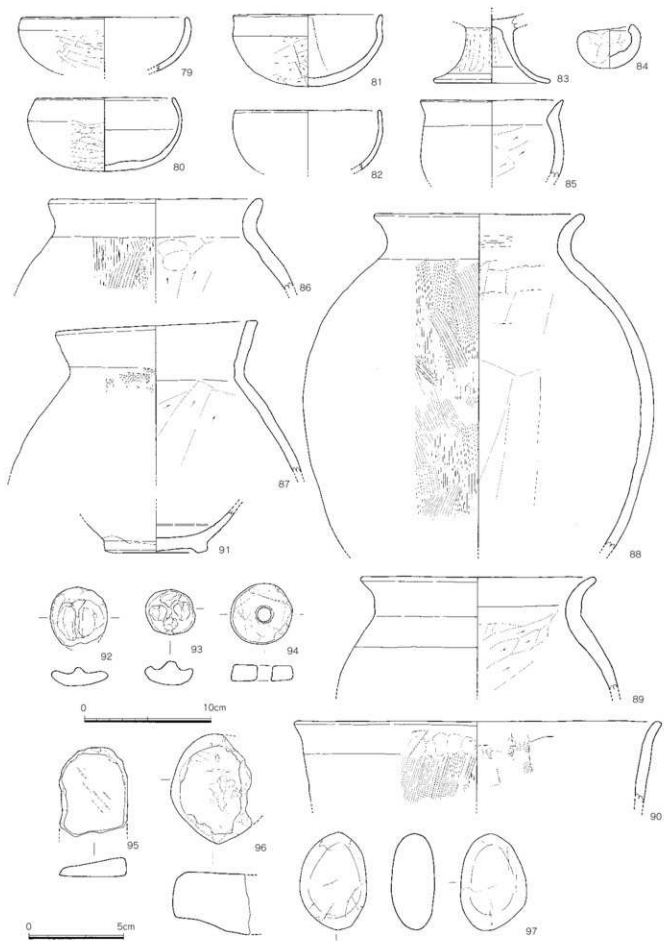


Fig 94 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒色土出土遺物実測図5(13 94~97は12)

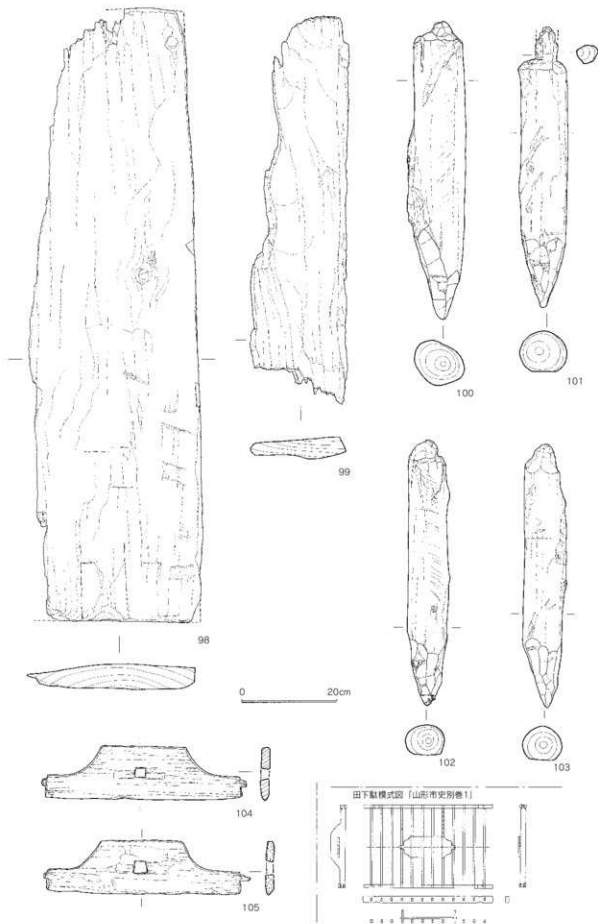


Fig 95 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒色土6・SX100出土遺物実測図(13)

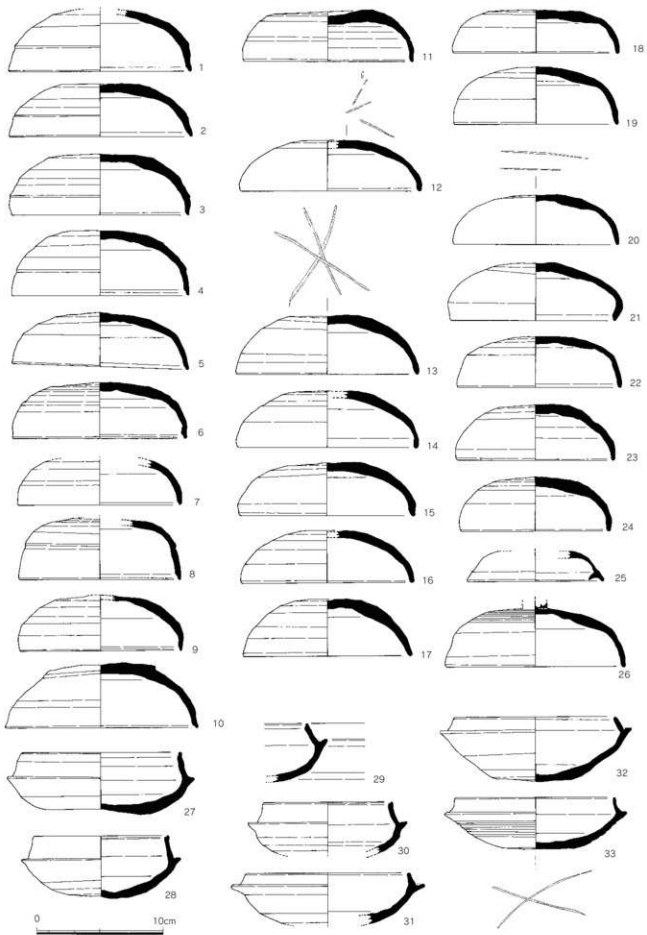


Fig 96 京ノ尾遺跡第4次調査 SX100黒茶色土出土遺物実測図1(13)

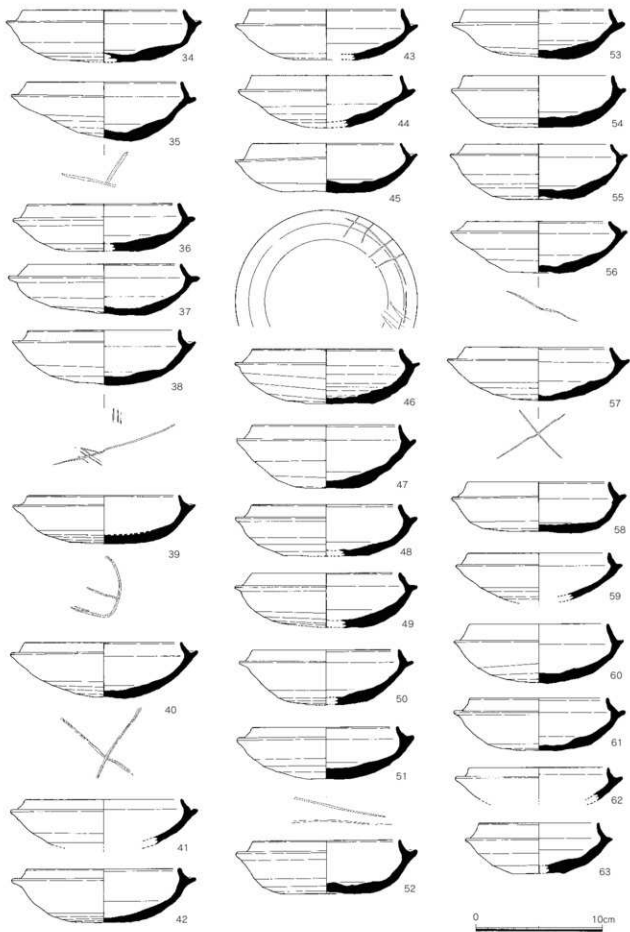


Fig 97 京ノ尾遺跡第4次調査 SX100黒茶色土出土遺物実測図 2(13)

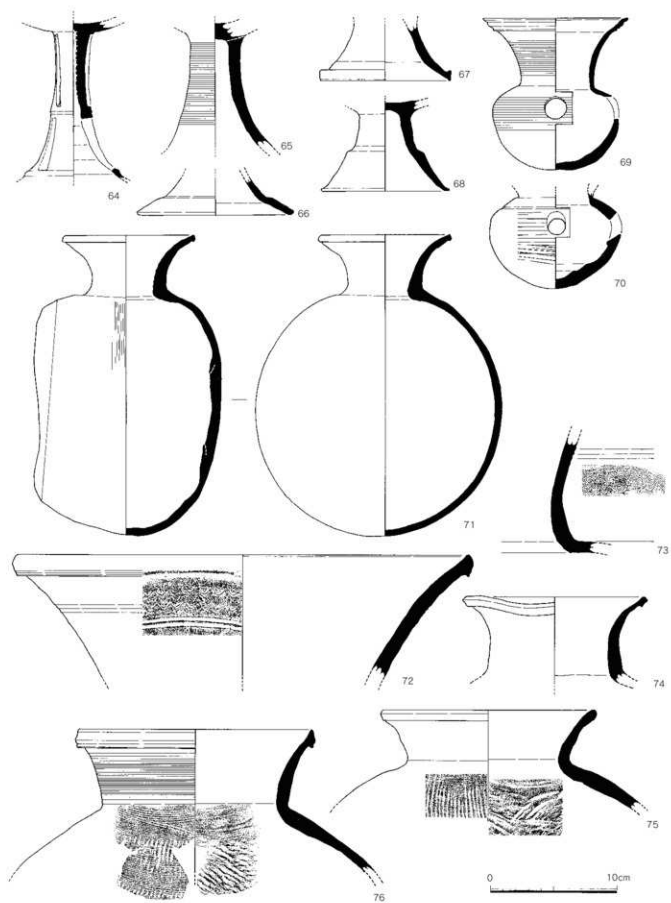


Fig 98 京ノ尾遺跡第4次調査 SX100黒茶色土出土遺物実測図3(13)

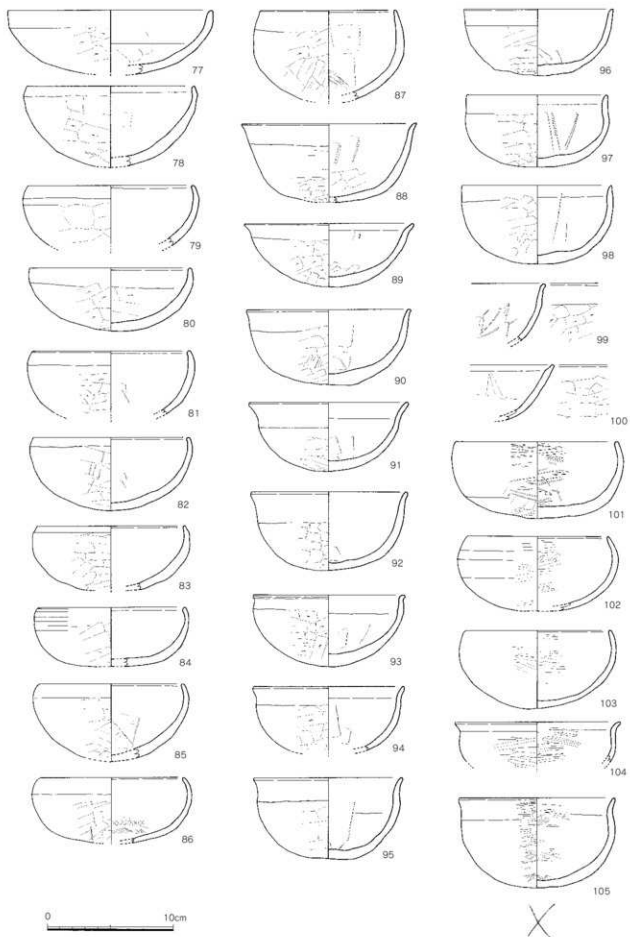


Fig 99 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒茶色土出土遺物実測図4(13)

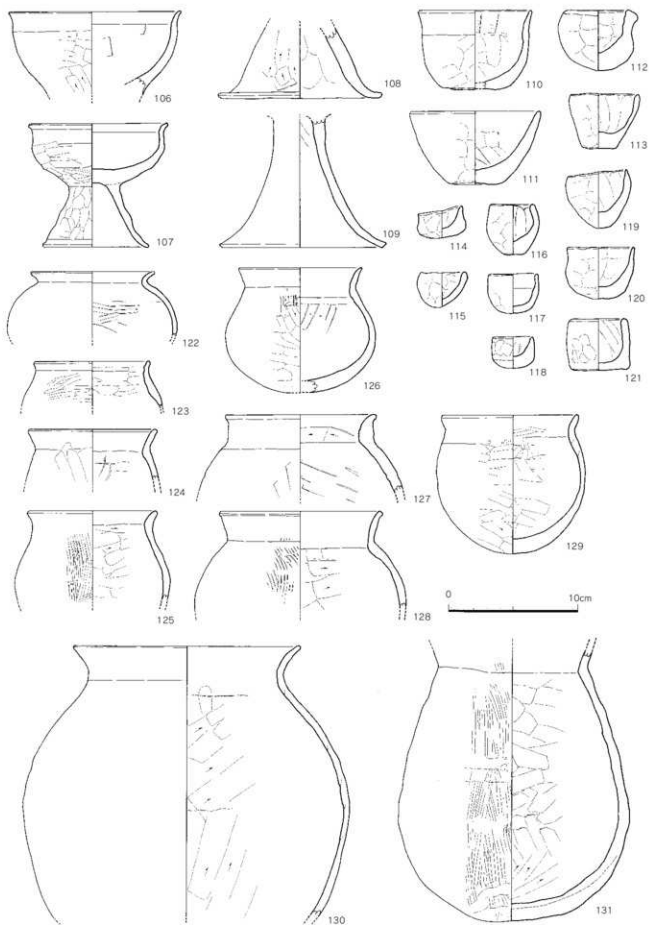


Fig 100 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒茶色土出土遺物実測図5(13)

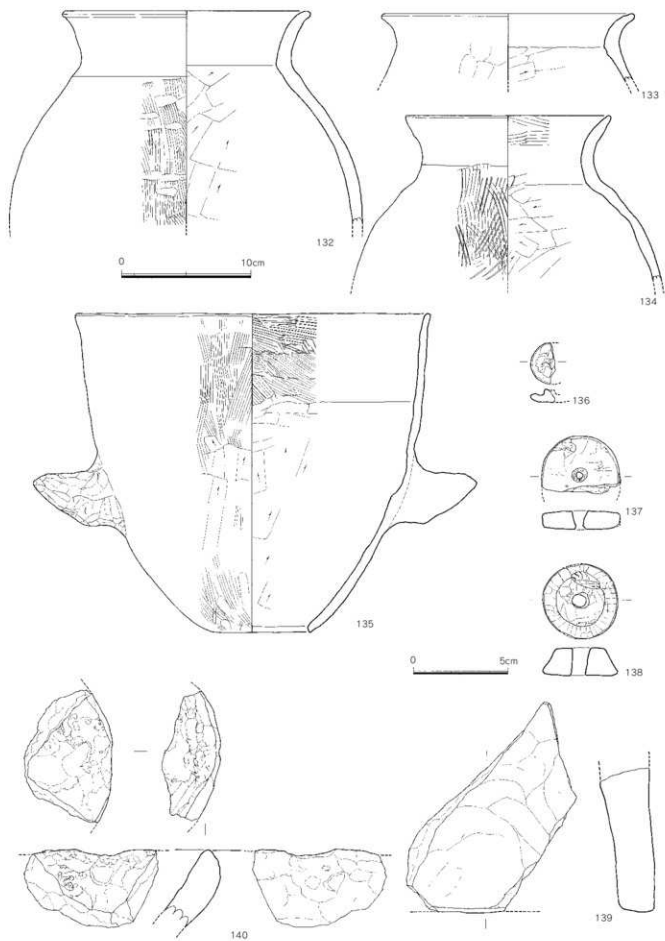


Fig 101 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒茶色土出土遺物実測図6(13 137~139は12)

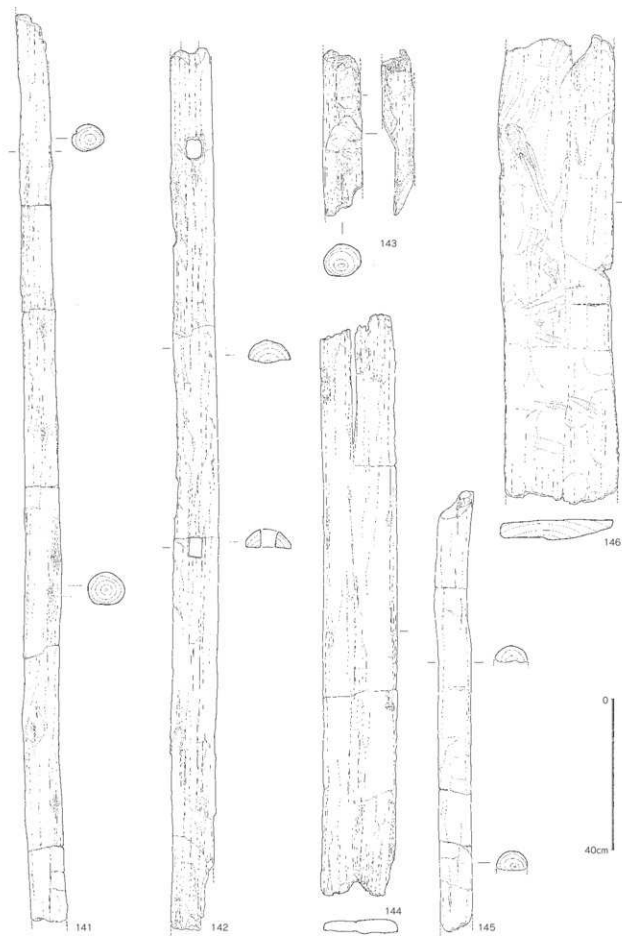


Fig 102 京ノ尾遺跡第4次調査 SX100黒茶色土出土遺物実測図7(110)

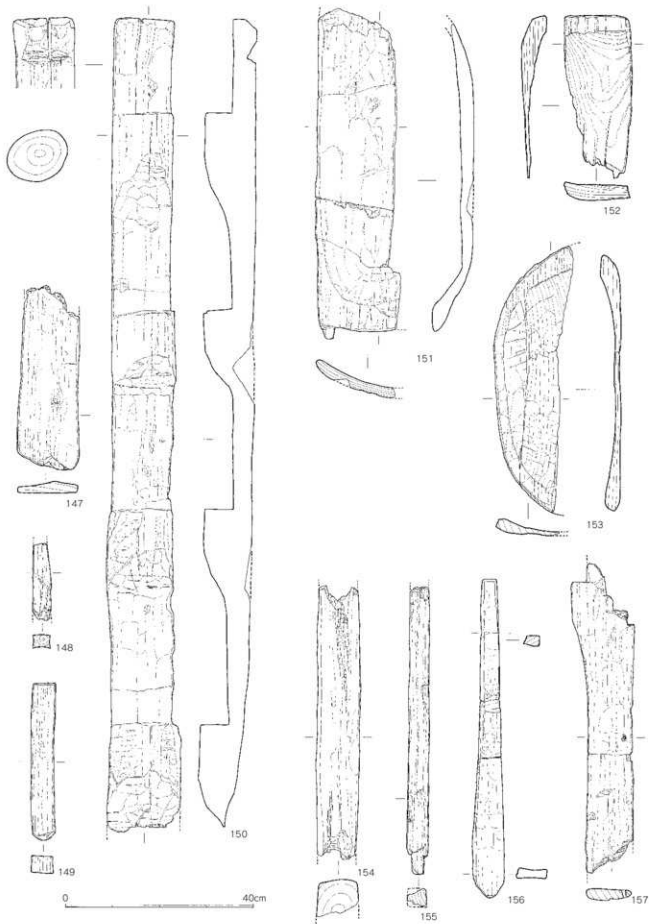


Fig 103 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒茶色土出土遺物実測図8(18)

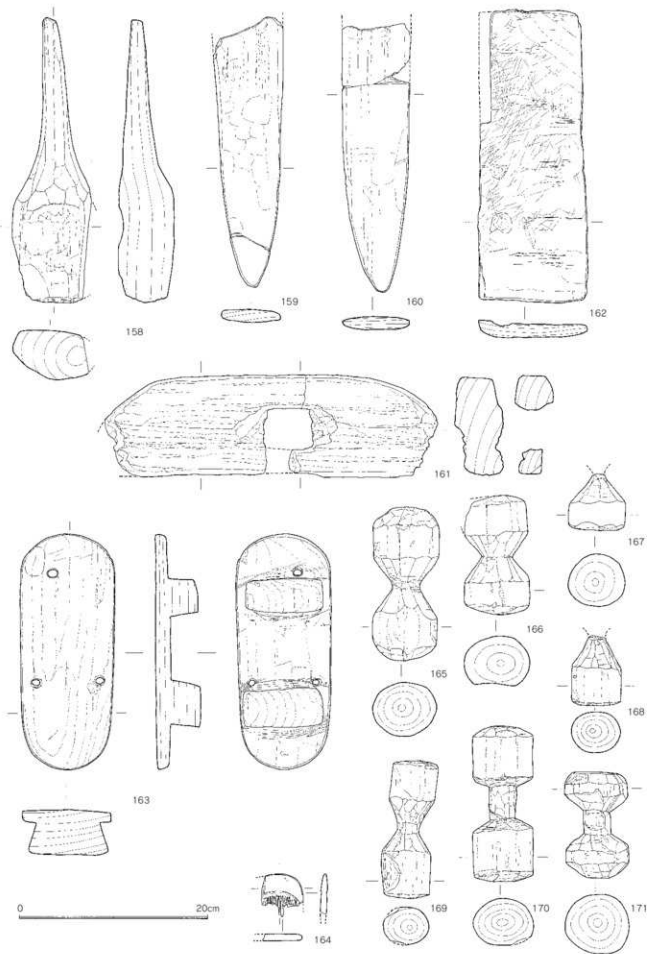


Fig 104 京ノ尾遺跡第4次調査SX100黒茶色土出土遺物実測図9(14)

きる。12～24は丸味のある器形で、口縁端部を丸く仕上げる。外面上半部回転ヘラ削り、内面頂部当て具そのまま、もしくはナデ消している。12は内面に付着物がべっとり付いている。21は口縁部が内側に丸くなっている。13は外面頂部はヘラ削りがあまい。29は返りが付くもので、内外面とも回転ナデ。復元口径 10.8cm

高坏蓋 (26) 外面上部にカキ目を施す。内面天井部は当て具の後不定方向のナデを行う。口径 14.0cm

坏身 (27～63) 27～30は口縁端部内面に段や沈線を巡らす。27は口径 12.5cm 器高 5.0cm 外面に須恵器片が付着している。28は口径 10.6cm 器高 4.7cm 口縁端部には明瞭な沈線が巡る。30は復元口径 10.2cm 31～63は立ち上がりが 1cm前後で短くて低く口縁端部丸く仕上げる。口径 9.4～13.0cm 器高 3.75～4.7cm 外面下半は回転ヘラ削り、内面底部は当て具をナデもしくは回転ナデで消している。ヘラ記号を施すものもある。49は内面に付着物があり、外面上部にヘラ記号がある。59は底部の一部がヘラ切り後未調整である。

高坏 (64～68) 全て坏部を欠損する。64は沈線を挟んで上下 2段に透かし窓を設けるが、上段の方は切り込みが不十分で透かしになっていない。下段の方は配置から 3ヶ所透かし窓があったとみられる。69は外面にカキ目を施し、部分的にナデがある。内面は回転ナデ。64は端部近くで屈曲させ段を付ける。復元底径 12.4cm 67は内外面回転ナデ。復元底径 10.2cm 68は脚部中位で僅かに屈曲させ、段を設けている。復元底径 10.2cm

甕 (69・70) 69は復元口径 11.4cm 器高 12.0cm 頸部と胸部外面にはカキ目を施す。体部中位に円孔を穿つ。体部下半は回転ヘラ削りの後ナデを行う。70は体部中位に粗いカキ目を施し、円孔を穿つ。胸部下半はナデを行う。

横瓶 (71) 胸部の一部に細いカキ目が残るが全面には確認できない。口径 10.5cm 器高 23.7cm

甕 (72～76) 72は復元口径 36.4cm 大甕の口縁部とみられる。頸部中位に沈線を巡らし、その上位に波状文を施す。73は頸部中位に波状文を巡らす。74は直立気味の頸部で、全体的に歪んでいる。復元口径 14.6cm 75は頸部内外面回転ナデ、体部外面は平行叩き、内面は当て具が残る。復元口径 16.8cm 76は頸部外面と体部は外面叩きの後にカキ目を施す。復元口径 18.4cm

土師器

坏 (77～105) 口縁部は全て回転ナデであるが、77～87は口縁部が内湾し、外面が手持ちヘラ削り調整を行うタイプ。77は復元口径が 16.1cmとやや大きい、その他は口径 10.8～13.2cm 84は口縁部外面に糸痕がみられる。86の内面底部付近には細い線で菱形の文様が刻まれている。88～99は口縁部が外反し、外面が手持ちヘラ削りで、内面が工具によるナデの後回転ナデやナデを行うタイプで、内面には工具の当り痕が明瞭に残る。口径 11.2～13.8cm 器高 5.0～6.4cm 89はやや浅い坏で、内面底部にヘラ削りのような痕跡がある。93は内面にヘラ記号を施す。99は内面に僅かにミガキを施す。100は他と若干形状が異なり、直線的に外開きし口縁端部内面に僅かに段を有する。内面工具ナデ、外面ヘラ削り。101～103は口縁部が内湾し、内外面に細かいミガキを行うタイプ。101は外面底部がヘラ削りを行う。102・103は内外面とも黒漆を塗る。104・105は口縁端部を外反させ、内外面にミガキを行い、内外面とも黒漆を塗るタイプ。105の底部にはヘラ記号がある。

高坏 (106～109) 106は脚部を欠損する。内面ナデ、外面ヘラ削りを行う。復元口径 13.6cm 107は坏部外面がヘラ削りの後ミガキ、内面は不定方向のナデ。脚部はヘラ削りでミガキのような光沢がある。復元口径 10.8cm 器高 9.8cm 底径 8.1cm 108は端部が外側に屈曲する脚部で、外面縦方向のケズリ、内面はナデを行う。復元底径 13.0cm 109は高い脚部で、内外面とも回転ナデ。復元底径

13.2m

小鉢 (110・111) 110は復元口径9.0cm、器高6.3cm、口縁部が僅かに外反する。内面はナデ、外面はナデ調整とみられるが、磨滅し不明瞭。111は内面が工具によるナデ、外面ナデ、底部外面には葉脈痕のようなものが僅かに残る。復元口径10.3cm、器高5.8cm。

手捏ね土器 (112～121) 口径3.0～5.3cm、器高2.4～4.7cm、形は様々で不定形である。内面を中心に指押さえの痕跡が明瞭に残っている。112と121は底部が平坦で安定している。

壺 (122) 口縁部を短く丸く曲げる。胴部内面にヨコハケが僅かに残る。復元口径9.6cm。

小甕 (123～129) 123は頸部が短い。内外面ともミガキを行う。復元口径9.0cm、124は復元口径10.2cm、内面に工具の当り痕が残り、外面はヘラ削り。125は復元口径10.2cm、外面タテハケ、内面ヘラ削り。26は復元口径9.7cm、器高9.9cm、胴部下半ヘラ削り。127は頸部がやや太く、復元口径11.0cm、内面クズリ、外面工具ナデ。128は内面ヘラ削り、外面タテハケ、復元口径12.9cm、129は復元口径10.8cm、器高11.0cm、内面は雑なミガキ、外面はヘラ削りを行う。胎土は精製されている。

甕 (130～134) 130は外面ナデ、内面ヘラ削りで器壁は薄い。復元口径18.0cm、131は最大胴部径が下半にある。外面はナデの後タテハケ、底部は使用によってやや磨滅している。内面はヘラ削りで、底部が雑なナデを行う。133～134は体部内面ヘラ削りで、132は外面タテハケの後雑なナデ、内面ヘラ削りで煤が付着している。復元口径19.6cm、133は外面ナデ、復元口径20.0cm、134は外面タテハケで、口縁部内面にヨコハケを行う。復元口径16.2cm。

甌 (135) 口縁部内面はハケ目、下半は上方向のヘラ削り、外面はタテハケで部分的にヘラ削りを行う。体部には大きく一次焼成の黒斑が残る。復元口径28.0cm、器高25.2cm、底径7.6cm。

土製品

模造鏡 (136) 半分欠損する。タテ3.4cm、厚さ1.1cm、廻摺んで紐を作り出している。

トリベ (140) 口縁部の破片であるが、注ぎ口のような部分が残っていて、内面は褐灰色の滓が付いていて、その中に青緑色、暗紫色、赤紫色の部分が所々にみられる。外面は注ぎ口部分から暗褐色の溶解物が垂れたような痕跡を示す。

石製品

紡錘車 (137・138) 137は長さ4.2cm、厚さ1.0cmで1程欠損する。表裏ともやや磨滅している。滑石製。138は断面台形で表面は丁寧に削った痕跡が残る。大きさは3.9～4.0cm、厚さ1.5cm、滑石製。

砥石 (139) 欠損著しいが2面で研磨痕が残る。砂岩製。

木製品

柱材 (141～143・145) 141は長さ240.6cm、径9.8cmを測る丸太材で、両端は欠損する。表面に樹皮は残ってなく、加工痕も観察できない。142は長さ233.5cm、径10.5～11.8cm、厚さ6.2cmを測る丸太材で、現状では丸太が半裁された状態である。半裁部に虫食いがみられるため、当時の状態である可能性もある。表面には樹皮や加工痕は確認できない。また、材には方形のホソ穴が3ヶ所確認でき、さらに実測図の下端部にも腐食しているもののホソ穴があった可能性がある。143は長さ44.0cm、径10.3cmの丸太材で、両小口とも小刻みにカットされており、柱材の再利用もしくは丸木の加工途中と考えられる。145は欠損し半裁状態で、片方の小口は切断されている。現存長116.8cm、径8.6cm、樹皮は残ってなく、加工痕も確認できない。

板材 (144・146・147) 144は現存長158.7cm、幅19.5cm、厚さ最大1.5～3.8cmで、両端を斜めに面取りしている部分がある。両面に加工痕は確認できない。146は両端が欠損し、現存長125.9cm、幅30.6cm、厚さ最大6.0cmで、表面は僅かに凸凹しているが、加工痕は確認できない。147は現存長38.9cm、

幅 13.2cm、厚さ 2.5cmで両端は欠損している。全面加工痕は不明瞭である。

角材 (148・149・154・155) 148は現存長 16.3cm、幅 3.0～3.9cm、表面は加工痕のような痕跡が僅かにみられる。149は現存長 33.2cm、幅 3.5～4.8cm、片方の小口は欠損しているもののホゾ状に削りだしが残る。154は現存長 58.0cm、幅 9.1cm、現存厚さ 7.0cm、側面にケズリ痕が明瞭に残るほかは、加工痕は確認できていない。また、一部火を受けて炭化している。155は 3.7～4.4cmの角材で、現存長 60.9cmで先端部にホゾが作り出されている。

梯子 (150) 4段分の梯子で、出土した時点で一部折れていて、取り上げる際にさらに折れ、9片になっている。現存長 174.2cm、幅 12.0～14.5cm、厚さ 3.9～10.7cmを測る。丸太を加工し、樹皮が一部残っている。裏面は表面より腐食している。下部末端は裏面加工しているように見えるが、不明瞭でまだ続くようにも見える。上部裏面には建物に持たれ掛ける挟り込みが作り込まれている。

槽 (151～153) 151は半分欠損し現存長 70.7cm、現存幅 16.7cm、厚さ 2.9cmを測る。隅に 2.5cm程の突出部を作り出している。152は大きく欠損し、槽の中央付近の一部で、現存長 34.3cm、現存幅 14.1cm、厚さ 0.7～3.5cmを測る。全面も木目が浮き出るほど腐食している。153は 3片に分かれて出土した。半片が欠損していて、現存長 56.3cm、現存幅 12.9cm、厚さ 0.7～4.0cmを測る。側面は小刻みなケズリで整形し、内面にもケズリ痕跡が確認できる。裏面は木目に沿って裂いた感じに見える。

樞木製品 (156) 長さは 60.9cm、端部にいくほど幅広になっていて、中央付近の表面を浅くカットしている。先端はV字状にカットしている。幅は 3.0～6.7cm、厚さ 2.2cmを測る。釘だけケズリ痕跡が明瞭に確認できる。

加工材 (157) 現存長 65.5cm、幅 9.3～13.0cm、厚さ 2.7cmで、板材であるが、中央付近に径 0.7cmの円孔が穿たれ、側面が僅かに円弧を描くように加工されている。また、小口部分も直角に加工されている。全体像が掴めずその用途については不明である。

木槌 (158) 長さ 30.1cm、幅 5.8～8.2cmでほぼ完形で、柄の部分は先端ほど細く仕上げる。頭の部分の片面が若干欠損していて、使用による磨耗と推測される。全面ケズリ整形している。

又鋸 (159・160) 2点とも刃先部分とみられ、側面は丸く仕上げられている。159は現存長 28.5cm、幅 7.4cm、厚さ 1.3cm、全面ぼんやりとケズリ痕は残るが、一見研磨したような表面をしている。160は現存長 28.4cm、幅 8.3cm、厚さ 1.3cm、表面に加工痕は確認できないが、研磨したように綺麗である。

えぶり状木製品 (161) 現存長 35.2cm、現存幅 10.8cm、厚さ 6.0cmを測り、えぶりに似た形状であるが、使用するにはやや厚いため明確に言い切れない。中央には 4.3～5.0cmの方形孔が粗く穿たれている。上面はやや円弧を描くように加工されている。反対側は水平であるが欠損か加工かの判別が困難である。

下駄 (163) 長さ 24.9cm、幅 10.0cm、厚さ 1.6cmで、台形状の歯の部分は厚さ 4.8cmで、殆ど欠損もなく保存状態は良好である。歯は削り出して作られ、歯の根元付近にはその時のキズが残っている。鼻緒の穴は3個穿たれ、親指付近は使用によって僅かに窪んでいる。

櫛 (164) 大きく欠損していて、現存長 4.4～4.4cm、厚さ 0.7cmで、側面の円弧具合から推測すると比較的小さな櫛と考えられる。側面や表面は研磨されている。

木錘 (165～171) 槌の子とも呼ばれる編み具で、保存状態は全て良好である。両小口とくびれ部分を小刻みにカットしている。長さは 165が 16.3cm、166は長さ 12.6cm、168は片側が欠損し、現存長 7.4cm、169が 14.5cm、170・171はくびれ部分が長く削られたもので、170は長さ 16.4cm、171は長さ 11.3cm。

俎板 (162) 長さ 31.0cm、幅 11.4cm、厚さ 1.3～1.8cmの板材で、表面には細かいキズが無数に残っ

ているため俎板と推測した。しかし、その表面の一部には2ヶ所楕円形の浅い窪みがあり、その周りは黒ずんでいる。何か当たっていたとみられ、他の用途の可能性も考えられる。裏面にも僅かにキズが付いている。

4SX100灰色砂出土遺物 (Fig 105)

石製品

石鏃(1) 縦10.2cm、

横5.3cm、厚さ1.8cmで周縁部を粗く打ち揃っている。緑色片岩製。

剥片(2・3) 2は台形石器のような形状をした剥片である。大きさ3.35×2.7cm、厚さ0.7cm、黒曜石製。3は大きさ2.6×3.2cm、厚さ0.7cm、黒曜石製。

4SX105黒色土出土遺物 (Fig 106)

須恵器

坏蓋(1~3) 口縁端部を丸く仕上げ、外面中位には段がなく、外面上部に回転ヘラ削りを行う。

坏身(4~14) 4~7は復元口径11.0~12.8cm、6~14は立ち上がりが低く、内傾が目立つ。8の体部はやや厚みがあり、端部内面に浅い沈線を巡らす。

壺(15) 短頸壺とみられる。口縁端部内面に沈線を巡らす。内外面とも回転ナデ。

坏c(16) 内外面とも回転ナデ。

甕(17~19) 17は破片だが、大甕になるとみられる。口縁部外面に沈線を巡らす。18は復元口径20.3cm、頸部中位に突帯を巡らし、その上下に波状文を施す。19は頸部から胴部にかけての外面にカキ目を施す。胴部内面は当て具の後粗いナデ。復元口径16.8cm。

鉢(20) 歪んでいるが復元口径21.0cm、口縁部外面はカキ目、沈線を挟んでその下に波状文を施す。外面下半は叩き痕を残す。内面下半は当て具痕を残す。

土師器

手捏ね土器(21) 復元口径3.8cm、器高3.6cm、底部は平坦で安定している。胎土は精製されている。

小鉢(22) 外面はナデ、内面はヨコハケのあとナデを行う。底部には葉脈痕が残る。

甕(23) 復元口径20.1cm、口縁部回転ナデ、胴部は外面ハケ、内面ヘラ削りを行う。

4SX105黒茶色土出土遺物 (Fig 106~108)

須恵器

大蓋c(24) 特大のツマミで径5.6cmを測る。蓋の内面には当て具痕が残る。

坏身(25~31) 復元口径10.4~14.4cm、外面下半は回転ヘラ削り。25は口縁端部を薄く作る。受け部には重ね焼きの蓋が付着する。内面底部は回転ナデを行う。26・27は口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。28~31は口縁端部を丸く仕上げる。28は内面底部が当て具の後一部ナデ調整。29は立ち上がりが低い。内面底部は当て具が残る。外面は灰かぶり状態である。30は立ち上がりが低い。

壺(32) 頸部には1本の沈線が巡り、その両側に波状文が丁寧な巡らす。

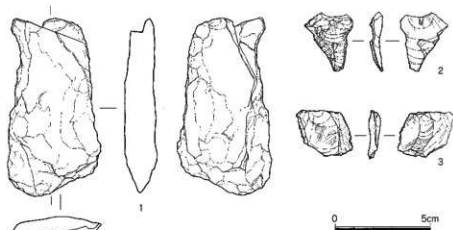


Fig 105 京ノ尾遺跡第4次調査SX100灰色砂出土遺物実測図(12)

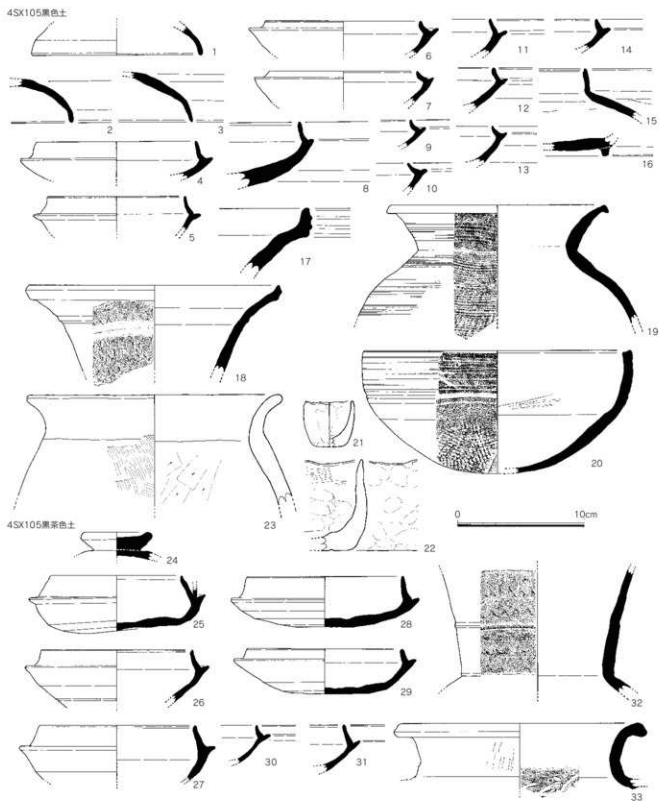


Fig 106 京ノ尾遺跡第4次調査SX105出土遺物実測図1(13)

甕(33) 短い頸部で、復元口径20.0cm。口縁部は回転ナデ、胴部外面は叩きで、内面には当て具痕が残る。

土師器

甌(34-36) 34の下半が35とみられる。34は復元口径36.5cm、把手が剥落している。口縁部は僅かに外反しヨコナデ、内面はハケとヘラ削り、外面はハケ目調整を行う。35は端部はナデ、内面ヘラ削り。

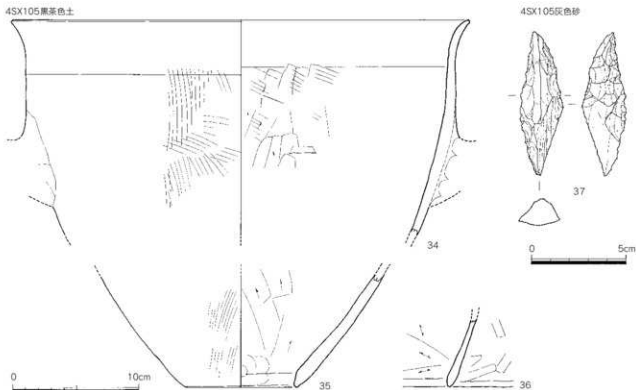


Fig 107 京ノ尾遺跡第4次調査SX10出土遺物実測図2(13 37は12)

38は底部付近が外面ナデで一部ヘラ削り、内面ヘラ削り。

木製品

ねずみ返し(38-40) 38は長さ62.0cm、幅5.5cm、厚さ5.2cmの隅丸方形で、中央には10cm四方の方形の穴が開けられている。2片に割れ、一部欠損している。表面の腐食はあるが部分的にケズリ痕跡が確認できる。裏面は腐食によって部分的に挟れている。側面は面取りしている。39は一部欠損していて、現存長59.0cm、現存幅4.2cm、厚さ5.8cmで、復元すると長さは60.5cm、幅5.1cmになると推測される。中央に8.5×8.7cmの方形孔が穿たれている。表面は大きい単位のケズリ痕が残る。裏面は荒れていて欠落している部分もある。40は半分以上欠損していて、現存長53.2cm、幅4.37cm、厚さ6.5cm、表面はケズリ痕跡が確認できる。裏面は腐食・欠落で面が殆ど残っていない。

板材(41) 小口の片方は欠損するが、もう片方は面が残っている。表面は小刻みなケズリが施され、平坦面を作り出している。裏面も同様であるが若干腐食している。現存長71.8cm、幅17.7cm、厚さ2.8cm。

柱材(42) 丸太を縦に半裁して、現存長48.5cm、幅1.5cm、厚さ6.0cmを測る。小口の片側は欠損しているが、実測図下側はやや丸くなっていて人為的に切断もしくは面取りしている可能性も考えられる。中央には6.0×6.5cmの方形のホリが若干斜めに穿たれている。

角材(43) 欠損も目立つが、側面は面取りしていて方形の角材とみられる。現存長42.0cm、幅9.8×8.3cm、中央には4.5cmの方形孔が穿たれている。両小口は伐採・加工した痕跡がみられ、また、各所にカットした痕跡がみられ、柱材を再利用しようとしたものと推測される。

二又鎌(44) 半分と刃先部分が大きく欠損していて、現存長19.7cm、現存幅6.5cm、厚さ1.7cmを測る。中央には一辺4cmの柄を挿入する方形孔が穿たれている。

4SX105灰色砂出土遺物(Fig 107)

石製品

尖頭器(37) 長さ8.15cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm、安山岩製。基部に一部自然面が残るが、刃部は両

4SX105黒茶色土

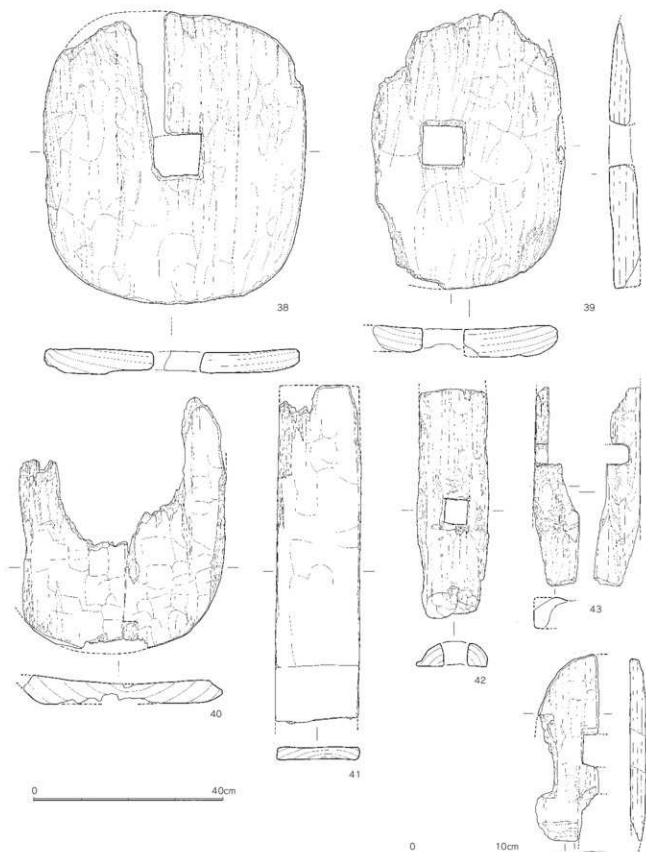


Fig 108 京ノ尾遺跡第4次調査SX105出土遺物実測図3(1&44㊦14)

面から丁寧に加工し尖らせている。風化はみられるが、剥離痕は明瞭に残る。

4SX110黒色土出土遺物 (F_区109)

須恵器

坏蓋 (1-6) 口径12.5-14.2cm 器高3.8-4.6cm 外面上半部に回転ヘラ削りを行う。内面頂部は当て具をナデ消している。1は外面中位に浅い段が巡り、口縁端部内面にも浅い沈線が巡る。2・3は雑な回転ヘラ削り。2は外面頂部に押し潰された粘土が付いている。4は外面にヘラ記号がある。

高坏蓋 (7) 外面上半部は回転ヘラ削り。口縁端部は丸く仕上げる。復元口径12.7cm 器高4.9cm
坏身 (8-17) 8・9は立ち上がりが高く、口縁端部内面に段や沈線を巡らす。8は復元口径11.6cm
9は口径10.4cm 器高4.8cm 10-17は復元口径10.6-12.4cm 器高3.1-5.5cm 内面底部は当て具の後ナデもしくは回転ナデを行う。11は還元不良。14は受け部に重ね焼き痕が残る。

無蓋高坏 (18) 坏部下半が回転ヘラ削り、脚部は欠損する。内面底部はナデ、その他回転ナデ。復元口径13.5cm

蓋3 (19-23) 19-21は口径13.8-15.7cm 外面上半部は回転ヘラ削り。19は端部僅かに屈曲させる。22・23は口径が小さい蓋で、22は復元口径11.0cm 器高1.6cm 23は扁平で口径10.8cm 器高1.3cm
坏c (24-31) 低い高台を貼付する。高台径7.0-11.4cm 内面底部は不定方向のナデ。

鉢 (32) 復元口径16.7cm 外面下半は回転ヘラ削り、内面下半は細かいケズリ、その他は回転ナデ。

土師器

甕 (33-35) 33は復元口径16.4cm 胴部外面タテハケ、内面ヘラ削り。34は器面が磨滅し調整不明。35は工具による縦方向のナデで、ハケ目状に残る。内面は不定方向のヘラ削り。頸部付け根は強いヨコナデ、頸部はハケの後ヨコナデ。口径16.2cm

手捏ね土器 (36) 丸い器形で、最大口径3.8cm 器高2.3cm

4SX110黒茶色土出土遺物 (F_区110・111)

須恵器

坏蓋 (37-40) 復元口径13.4-14.0cm 器高3.65-4.5cm 外面上半部は回転ヘラ削り、37・38は口縁端部内面に段を有す、内面天井部はナデ調整。39・40は内面天井部回転ナデ。40の外面にはヘラ記号を施す。胎土は白色砂粒を多く含む。

坏身 (41) 復元口径10.6cm 器高3.8cm 外面底部は焼成によって器面が荒れて調整不明瞭。内面回転ナデの後一部不定方向のナデ。底部にヘラ記号がある。

蓋3 (42) 復元口径14.5cm 外面上部は回転ヘラ切り後未調整。

坏c (43-45) 全て底部内外面ともナデ。その他は回転ナデ。43は復元口径12.6cm 器高3.6cm 44は復元口径12.0cm 器高3.5cm 低い高台を貼付する。45は復元高台径10.0cm

高坏b (46) 復元口径21.6cm 外面底部回転ヘラ削り、内面底部ナデ、その他は回転ナデ。

小壺 (47) 胴部径7.4cmに復元される小壺である。外面胴部下半は回転ヘラ削り、胴部中位に指頭圧痕が残る。その他は回転ナデ。

短頸壺 (48) 口縁部付近の破片で、内外面回転ナデ。

土師器

坏 (49) 復元口径13.1cm 器高5.3cm 全体的に磨滅しているが、内面底部付近にミガキ工具の当り痕が僅かにみられる。

高坏 (50) 坏部は欠損する。脚部内面は工具を使って滑らかにナデている。その他はナデとみられるが、磨滅して明瞭でない。

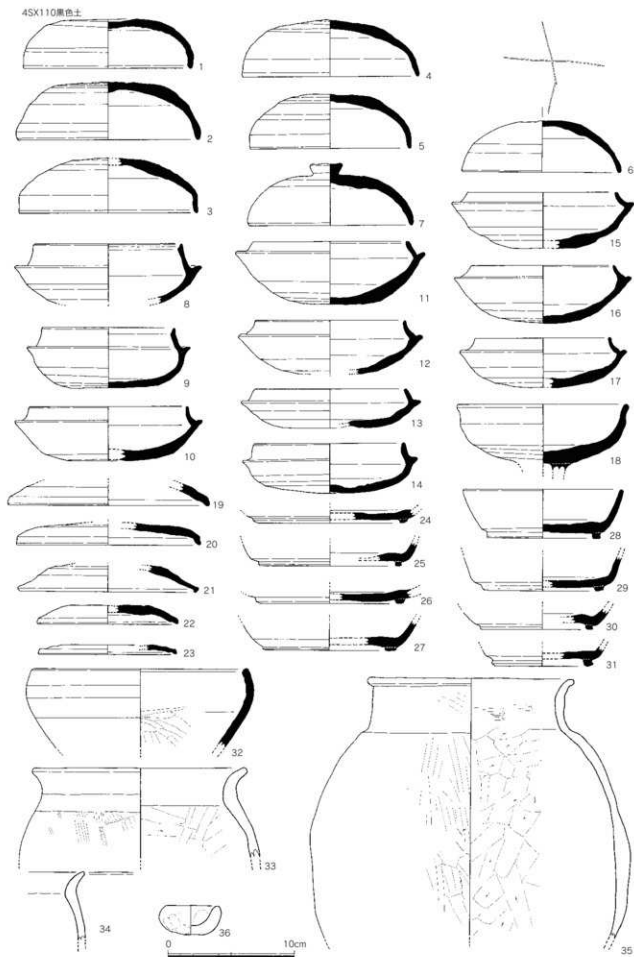


Fig 109 京ノ尾遺跡第4次調査SX110出土遺物実測図1(13)

4SX110黒紫色土

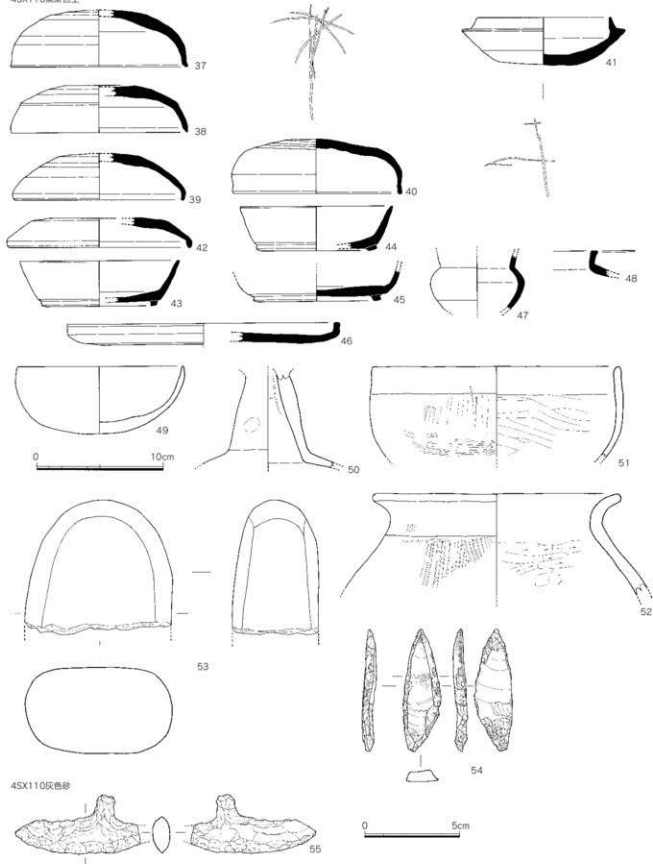


Fig 110 京ノ尾遺跡第4次調査SX110出土遺物実測図2(13 53~55は12)

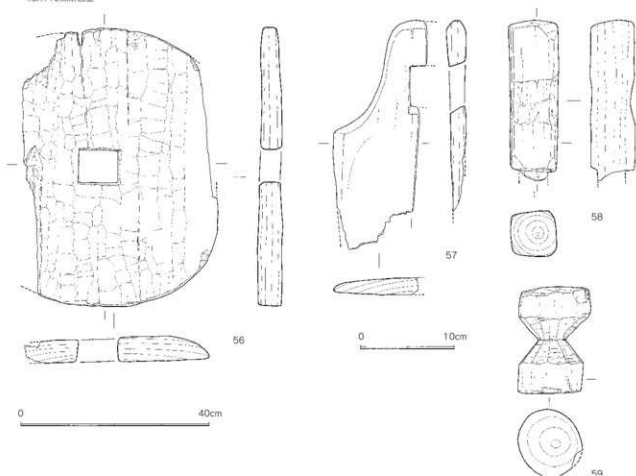


Fig 111 京ノ尾遺跡第4次調査SX110出土遺物実測図3(14 56は18)

鉢(51) 口縁部内外面はヨコナデ、外面は上部が粗いタテハケ、下半がヨコハケ。内面が横方向のヘラ削り。復元口径19.4cm。

甕(52) 復元口径19.6cm。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラ削り、外面はタテハケを行う。口縁部外面が黒色を呈する。

石製品

磨石(53) 半分ほど欠損している。表裏は磨いて平坦をなしている。側面は明瞭ではないが、敲打しているようにみられる。7.1cm 7.3cm 厚さ4.6cm。

ナイフ形石器(54) 長さ6.5cm 幅2.0cm 厚さ0.7cm。基部と背面を丁寧加工している。黒曜石製。木製品

ねずみ返し(56) 長さ58.7cm 幅41.4cm 厚さ5.2cmで部分的に欠損していて、幅は復元すると51cm程である。中央には7.1 8.3cmの方形孔が穿たれている。表面には明瞭にケズリ痕跡が確認できる。また、側面に向かって丸味を持たせ斜めに加工している。裏面は削れていて面の残りは悪い。

鎌(57) 鎌の半分と刃先部分が欠損していて、現存長24.2cm 現存幅9.0cm 厚さ2.1cmを測る。上部には一辺5.0cmの方形ホゾ穴が斜めに穿たれている。側面は丁寧に面取りしている。表面に加工痕は確認できない。裏面はやや荒れている。

横杵(58) 握り部分を欠損する。現存長17.0cm 幅4.9 4.9cmで方形に加工されている。側面中央には使用によって、幅約5cmの範囲で僅かに窪んでいる。小口は小刻みなカットを施すが、その他の面では加工痕が確認し辛い状態である。

木錘(59) 長さ11.3cm 径は6.5~7.5cm、くびれ部径2.5~2.8cm、くびれ部と両小口部分は小刻みなカット・加工が施されている。

4SX110灰色砂出土遺物(Fig 110)

石製品

石匙(55) 一部欠損する。現存長3.0cm、幅6.6cm、厚さ0.9cm、安山岩製。

茶色土出土遺物(Fig 112・113)

須恵器

蓋c3(1~4) 口径12.6~15.8cm、器高1.2~2.8cm、外面上部が回転ヘラ削り、それに対応する内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデである。1はボタン状のツマミを、2~4は扁平な宝珠型のツマミを貼付する。

大蓋c3(5) 復元口径21.8cm、器高2.7cmで、やや扁平の宝珠型のツマミを貼付する。外面上部が回転ヘラ削り、それに対応する内面は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。

蓋3(6・7) 口縁部の破片で頂部付近は欠損する。復元口径15.4cm、14.8cmで、6は全体が潰れたように平坦である。

皿a(8) 復元口径17.1cm、器高2.5cm、底径13.2cm、底部は回転ヘラ切り後不定方向のナデで、粘土紐痕も僅かに残る。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

大皿c(9) 復元高台径16.6cm、底部回転ヘラ削り。内面不定方向のナデ。

坏a(10) 復元口径13.4cm、器高3.7cm、底径8.8cm

坏c(11~24) 復元口径11.0~17.9cm、器高3.45~7.0cm、11・12は低い高台を貼付する。13・14は高台を底部端に貼付する。19は外面底部に「富」の墨書がある。SX100の流路の東岸付近で出土。21は口縁部が僅かに外反する。22は底部がやや膨らんでいて、全体的に歪んでいる。その中央付近に0.3cmの円孔が穿たれている。

壺(25) 口縁部を欠損する。胴部中位を中心にカキ目を巡らし、その下半は不定方向のケズリを行う。カキ目の上方には刺突文を、頸部には波状文を巡らす。

高坏(26・27) 26は口径11.0cm、坏部の中位に段を巡らす。27は坏部の口縁端部。

壺 鉢(28) 底部ヘラ切り未調整。内面は回転ナデ。

鉢b(29・30) 29は外面下半と底部が回転ヘラ削り、外面上部と内面は回転ナデ。復元口径28.6cm、30は内外面とも回転ナデ。復元口径20.4cm

土師器

坏a(31) 復元口径15.8cm、器高3.8cm、内外面に僅かにミガキが残る。

高坏(32) 脚部の外面は縦方向のケズリ、内面は横方向のケズリを施す。

鍋(33) 口縁部は僅かに屈曲し外反させる。内面に細かいヨコハケを施す。

肥前系磁器

椀(34) 高台置付と内面底部は輪状に軸が掻き取られている。緑青色で文様を施す。

土製品

土錘(35) 縦3.5cm、径1.6~1.8cm

石製品

石鏃(36) 縦3.1cm、横1.6cm、厚さ0.23cmで、両翼端部を僅かに欠損する。全面風化が目立ち、剥離痕もぼんやり見える程度である。

紡錘車(37) 断面台形状の円形で、中央に径0.7cmの円孔を穿つ。底面は整形時のケズリ痕が確認

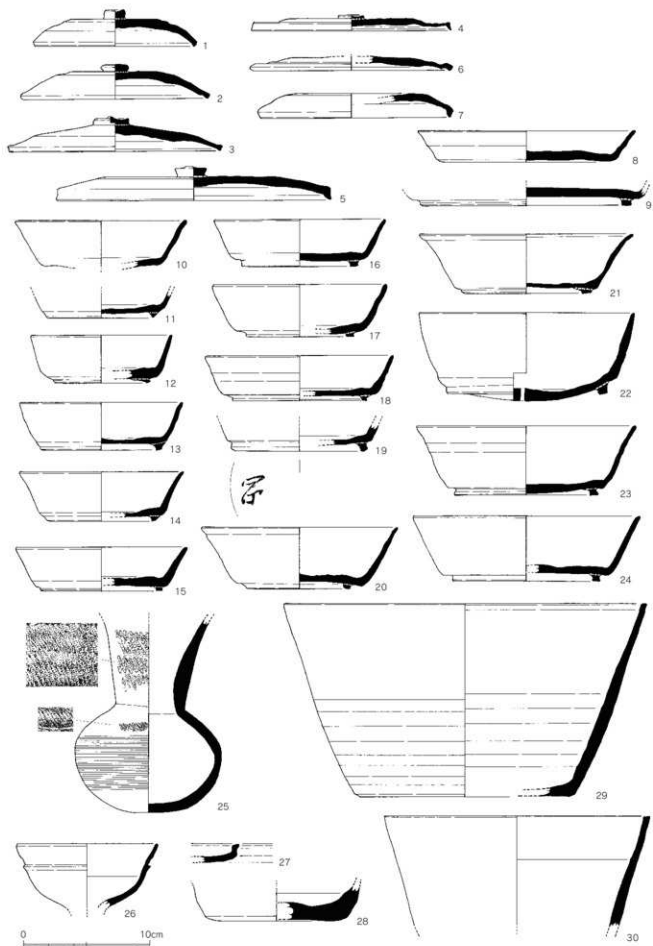


Fig 112 京ノ尾遺跡第4次調査茶色土出土遺物実測図1(13)

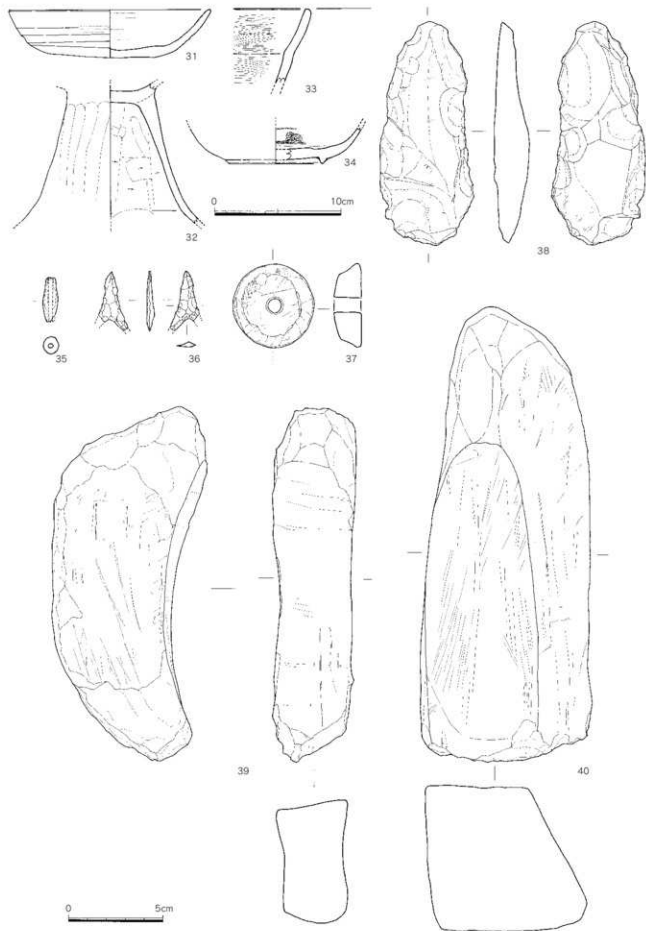


Fig 113 京ノ尾遺跡第4次調査茶色土出土遺物実測図2(13 35~40は12)

できる。径43~44cm 厚さ14cm 滑石製。

石鏃(38) 長さ118cm 幅49cm 厚さ19cmの玄武岩製で、表面を粗く打ち揃っているが、全面的に風化が著しい。

砥石(39・40) 39は縦188cm 横44.81cmで、3面研磨痕が残る。天草石とも言われる明茶黄色の砂岩製である。40は主に2面で研磨痕が残り、その他に2面で僅かに研磨痕がみられる。縦241cm 横77.91cm 砂岩製。

茶灰色土出土遺物(Fig 114)

弥生土器

甕(1・2) 底部で磨滅して調整等は不明。1は台形状の高台。2は平底の厚みのある高台。

須恵器

椀c(3) 復元口径92cm 器高61cm 復元高台径54cm 胎土は精製されている。銅椀を思われるような丁寧なつくりの椀で、体部中位に漆の沈線が巡り、内面は焼成によって荒れている。外面は回転ナデで、全体の色調はやや暗い暗灰色を呈している。

小壺(4) 短い直口縁で、体部は浅いカキ目が施されている。復元口径48cm

鍋(5) 口縁端部で、内面は僅かに斜めに仕上げる。外面には煤が付着する。

瓦質土器

播鉢(6・7) 6は復元口径25.8cm 口縁部を僅かに肥厚させる。外面にはぼんやりとタテハケがみえる。内面には僅かに摺り目が残っている。7は外面タテハケ、内面はヨコナデのあと摺り目を施す。

白磁

椀(8) Ⅱ類。

龍泉窯系青磁

椀(9) Ⅱ類。

国産陶器

皿(10・11) 10は口縁短部を外側に屈曲させ、上端に凹面を作る。内面は花弁形を削り出している。底部は暮筭底で、内外面とも緑灰色の透明釉を施軸する。復元口径10.3cm 器高2.5cm。11は復元口径12.4cm 器高3.1cm 底径4.2cm。口縁部は外側に屈曲させる。体部外面下半は露胎で、内面には砂粒の目跡が残る。高台にも砂粒の目跡が残る。

鉢(12) 安定感のある削り出し高台で、外面は高台など底部以外は緑灰色の釉を施す。また、内面底部は釉を輪状に拭き取っている。

肥前系磁器

椀(13・14) 13はいわゆる広東椀で、体部と高台との境目に圏線を描く。復元高台径6.4cm。14は口縁内部に四方禪文を描く。

石製品

石核(15) 縦4.2cm 横3.8cm 厚さ1.2cm 安山岩製。

石鏃(16・17) 16は縦3.65cm 厚さ0.4cmで、一部欠損する。安山岩製。17は縦4.0cm 厚さ0.4cmで、一部欠損する。安山岩製。

土製品

棒状土製品(18) 縦7.3cm 14.15cmの断面方形の細長い棒で、表面はナデられている。

表土出土遺物(Fig 114)

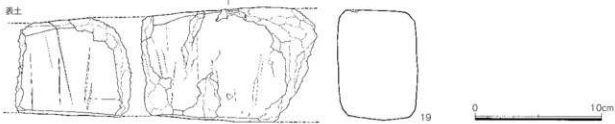
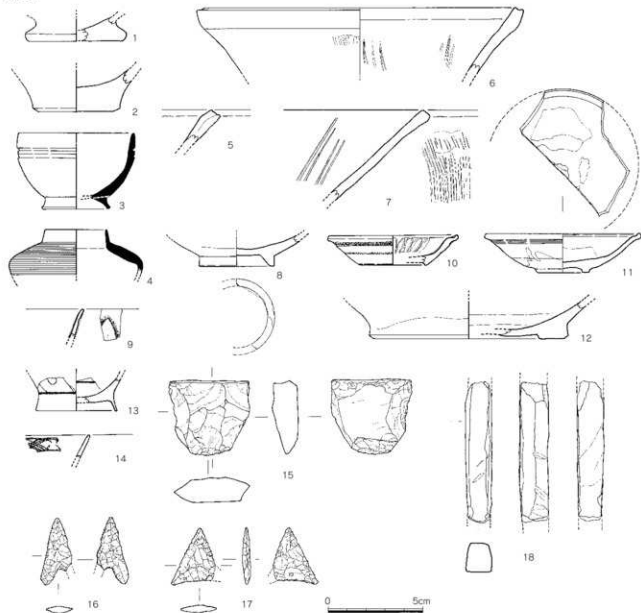


Fig 114 京ノ尾遺跡第4次調査茶灰色土・表土出土遺物実測図（13 15～17は12）

土製品

棒状土製品（19） 両端は欠損し、途中でも折れている。長さは23cm以上、幅9.1cm、厚さ6.4cmの断面方形でナデ整形されている。先端ほど細くなっている。胎土は0.2～0.3cmの砂粒を多く含み黄橙色を呈する。

(5) 小結

今回の調査でわかったことは以下の通りである。

- ・遺物の主体を占めるのは、大きく6世紀と8世紀のものである。
- ・6世紀後半から末頃の竪穴住居（19棟）、掘立柱建物（4棟）を中心とした集落の確認。
- ・流路から多量の木製品（ねずみ返し、梯子、下駄など）が出土。
- ・鉦滓を含む溝の検出。

6世紀後半から末頃を中心とする集落は、竪穴住居と小規模な掘立柱建物が流路を挟んで兩岸に展開している。注目すべきことは流路からねずみ返しや梯子など太宰府市で初めて確認された木製品をはじめ多くの加工木材が出土したことである。また、SX100黒茶色土から出土した下駄は、6世紀後半～末頃の遺物を多く含む土層から出土しているため、その時期のもつと推測されるが、このSX100の流路が8世紀前半～中頃の遺物が上面からめり込む地盤状況であり、下駄の保存状況が良好ということから、8世紀代のものという可能性も捨てきれない。どちらにしろ太宰府市では最古級の下駄であることには間違いない。

また、後者の8世紀代の遺物は、京ノ尾遺跡全体に包含層として覆っていることが確認されているが、今回の調査では、8世紀代の掘立柱建物や鉦滓を含む溝が、流路（SX100）に沿って掘られていることをはじめ奈良時代の遺物を含むピットが、流路の東岸に展開している。流路で奈良時代の遺物が出土するにも関わらず、鉦滓が廃棄された痕跡が確認できないことから、鉄生産は小規模であったことが推測できる。しかし、条坊外のこの地で大宰府政庁第Ⅰ期に一時的に生産活動を行っていたことが注目すべきことである。



Fig 115 京ノ尾遺跡第4次調査遺構略測図 (1450)

Tab 12 1 京ノ尾遺跡第4次調査遺構一覧表

S番号	遺構番号	種別	時期	地区
1		東西溝 黒色土	古代～	AM16～AG18
2		南北溝 茶色土	近世～	AF20～AG21
3		東西溝 茶色土		AG19
4		東西溝 黒色土砂利混じり 腐抜き用か?		AM15～
5		土坑 茶灰色土	6世紀	AF・AG20
6		東西溝 黒色土砂利混じり 腐抜き用か?	近代～	AI21～
7		土坑 茶色土		AG19
8		土坑	近世～	AI17～AM18
9		土坑		AM19
10	4SK010	たまり状遺構(竅穴住居?)	6世紀末～近世	AM17～AI18
11		たまり状遺構		AM19・20
12		ピット		AI19
13		覆土×竅穴遺構	近現代	AI18～20
14		溝 灰色土 深い溝	近世～近現代	AM20～
15		溝 黄茶色土 丘陵落ちの溝?	6世紀後半(1118期)	AI15～
16		溝 灰黄色土 浅い溝	近世	Ak 19～
17		ピット 暗茶色土		AN20
18		たまり状遺構 茶色土 S 18・10	6世紀	AM18
19		ピット群 暗茶色土		AI18
20		東西溝 茶色土	近世～	AM14～
21		溝 茶色土 S 21→25		AQ20～
22		溝 黒色土 S-21→22	8世紀	AQ20～
23		溝 茶色土	近現代	AM14～
24		溝 赤茶色土		AM14～16
25		溝 茶色土(黄茶色粘土ブロック混じり)S-21→25	近世～	AP16→22
26		たまり状遺構 黒茶色土 S 31→26	近世～	AM・AM14
27		溝 黒灰茶色土	近世～	AM14・15
28		溝 砂利入り黒色土	現代	AI14～
29		ピット 赤灰色粘土	6世紀	AM14
30	4SD020	溝 茶色土 S-30→4・6・13	16世紀	AI20～
31		たまり状遺構 赤褐色粘土 S 31→26		AM14
32		溝 茶灰色土 S-32→24→28	古墳時代～	AM14～
33		溝 茶灰色土		AO15
34		たまり状遺構 黒茶色土 S-16→34		AK18
35	4ST035	竅穴住居	6世紀後半(1118期)	AO16
36		溝 砂利入り	現代	AI18～
37		溝 砂利入り	現代	AI18～
38		たまり状遺構 明赤褐色粘土	6世紀	AI15
39		たまり状遺構 明赤褐色粘土	古墳時代～	AI16
40	4SB040	竪立柱建物 2×2隅	6世紀	AI16・AM16
41		土坑 茶灰色粘土 26→41	近現代	AQ16
42		土坑 茶褐色土(石混じり)	江戸時代末期	AA25
43		溝 黒茶色土	江戸時代末期～明治	AA26～AE20
44		溝 黒茶色土 S-43と同一遺構か	6世紀後半(1118期)	AM14～AF19
45	4ST045	竅穴住居 黒茶色土	6世紀末(IV期)	AE23～
46		溝 黒茶色土		AA23～AA26
47		たまり状遺構 赤灰色土 S-47→46	中世～?	AB・AC24
48		ピット群 黒色土		AM23・25
49		ピット群 茶色土		AM24・25
50	4ST050	竅穴住居 明茶色土	6世紀後半(1118期)	AI21～AM22
51		ピット		AI25
52		たまり状遺構 黒色土 S-30→52→14	近世～	AI22
53		たまり状遺構 茶褐色粘土		AC25
54		溝 黒灰色土		AE22
55	4ST055	竅穴住居	6c後～末(1118～IV期)	AM19～AT21
56		ピット 黄灰色土 S 2→56		ME21
57		土坑群 黒茶色土		AG21・22
58		たまり状遺構	6世紀中頃(111A期)	AI15
59		土坑 茶色土 S 45→59		AI22
60	4ST060	竅穴住居	6c後～末(1118～IV期)	AI18
61		土坑 茶灰色砂 S-45→61		AI23
62		ピット 茶色土 S 45→62		AI23
63		たまり状遺構 S-45→63	明治時代～	AI23
64	4SK064	土坑 S-64→36	6世紀前半(1118期)	AP18
65	4SK065	竪土坑	6世紀中頃(111A期)	AR17
66		ピット S-25→66		AP16
67		土坑 S-67→20	近世～	AN21
68		土坑 S-68→20	6世紀	AM22
69		土坑		AM21・AS21
70	4ST070	竅穴住居 京ノ尾3次調査S-30と同一遺構	6c前～中頃(11～111A期)	AI24
71		ピット群 S-55→71		ME20
72		ピット S-50→72		AI22
73		溝 京ノ尾3次調査S-41と同一遺構		AG24～
74		ピット群		AM23
75	4ST075	竅穴住居	6世紀末(IV期)	AM20

Tab 12 2 京ノ尾遺跡第4次調査遺構一覧表

76		溝			AL・AN21
77		上塚			AQ19
78		ピット			AV21・22
79		ピット群		6世紀末(IV期)	AL16・AM16
80	4S080	掘立柱建物	S-80→77・55	6c前～中頃(II～IIIA期) ?	AQ19～AR20
81	4SX081	上塚		6世紀末(IV期)	AR18
82		上塚			AR17
83		上塚			AR17
84		ピット群		6世紀	AR18～AT18
85	4S1085	竪穴住居	黄灰色土	6c後～末(IIIB～IV期)	AU21～AV21
86		なまり状遺構			AG20
87		上塚			AM・AN23
88		上塚	黒色土 S-85→88	6c後～末(IIIB～IV期)	AV21
89		落ち込み遺構			AN24～AO23
90	4S1090	竪穴住居	黄灰色土 S-90→55	6c前～中頃(II～IIIA期)	AN21～AV21
91		上塚×なまり状遺構			AS21
92		ピット			AS21
93		なまり状遺構	S-93→75		AT20
100	4SX100	溝跡		6世紀後半～8世紀中頃	
101		ピット群		古墳時代	BO10
102		ピット群			B110
103		ピット			BO9
104		ピット群		古墳時代	BO8
105	4SX105	溝跡(西側)	S-100の枝分れ	6世紀後半～奈良時代	
106		掘乱			BE7
107		ピット群			BO8
108		ピット群			BP9
109		ピット群			BG11
110	4SX110	溝跡(東側)	S-100の枝分れ	6世紀後半～8世紀中頃	
111		ピット群		6世紀後半	BH12
112		ピット群		古墳時代	BH12
113		ピット			BH12
114		ピット		6世紀	BH12
115	4S1115	竪穴住居		6世紀末(IV期)	BE7
116		ピット群		8世紀前半	BO13
117		ピット群		8世紀前半	BO12
118		ピット群		6世紀後半(IIIB期)	BO14
119		ピット群			BO16
120	4S1120	竪穴住居		6c後～末(IIIB～IV期)	BN11
121		ピット		8世紀後半	BO13
122		ピット群			BO12
123		ピット群			BO14
124		ピット群			BO12
125	4SK125	上塚		6世紀末(IV期)	BO13
126		上塚			BM11
127	4SK127	上塚		8世紀中頃	BO12
128		ピット群	S-127の底面のピット		BW12
129		なまり状遺構	黄灰色土		BN11
130	4SB130	掘立柱建物	S-145→130→150	6世紀末(IV期)	BO9
131		ピット群			BO13
132		ピット			BO13
133		ピット群			BO12
134		ピット群	茶褐色土		BO8
135	4SK135	上塚		8世紀中頃	BO13
136		上塚		6世紀	B115
137		上塚			BO10
138		ピット群			BO11
139		ピット群			B113
140	4S1140	竪穴住居		6世紀後半(IIIB期)	BF11
141	4SK141	上塚		6世紀	BO13
142	4SK142	上塚			B112
143		上塚			BO14
144		溝(掘乱)			AR11
145	4S1145	竪穴住居	S-145・130・150	6世紀末(IV期)	BO10
146		上塚	茶褐色粘土		AY6
147		上塚	茶褐色粘土		AY6
148		上塚	茶褐色粘土 下層に灰色粘土		AX6
149		段落ち	僅かに著っている土層		ウライン
150	4SB150	掘立柱建物	S-145→130→185→150	遺物は16世紀末のみ	奈良時代
151		ピット群			BO10
152		ピット群			BO7
153		ピット群			AY7
154		ピット群			BO16
155	4S1155	竪穴住居	S-195→190→155	6c後～末(IIIB～IV期)	B116
156		上塚			BF10
157		ピット			B116
158		ピット群			BO14

Tab 12 3 京ノ尾遺跡第4次調査遺構一覧表

159		ピット			B68
160	4SK169	土坑		6世紀	B69
161	SB1308ウ	土坑	上層は白色粘土混じり		B68
162	4S1205	土坑	暗茶褐色土、炭混じり S1205の底面		B66
163		ピット			B68
164		土坑			BH10
165	4SK165	土坑	遺構検出時すでに土器が露出	6世紀後半(1118期)	B68
166		土坑		8世紀前半～中頃	BP10
167		ピット	S-135内のピット		BC13
168		落ち込み			BG13
169		土坑		古墳時代	B69
170	4SK170	土坑			AY8
171		ピット		奈良時代	AX7
172		ピット群			AX7
173		ピット群			BG13
174		土坑	黒色土	8世紀	BD14
175	4SK175	土坑		8世紀前半～中頃	AW7
176	4SK176	土坑	茶褐色土	6世紀後半(1118期)	BA8
177		ピット群	灰色土	8世紀	BF16
178		窪み		8世紀	BD13
179	4SK179	土坑	液路側は黒灰色土のようになっている	8世紀中頃	BD15
180	4SK180	土坑	黒色土		BE13
181		ピット		奈良時代	BC14
182		窪み	暗灰色土	奈良時代	AX9
183	4SD183	溝	暗灰色土	8世紀前半～中頃	AP9
184		ピット群			BI13
185	4SR185	掘立柱建物	S-185→150	奈良時代	BI11
186		ピット	S-125内のピット		BI13
187		土坑	暗灰色土	奈良時代	BE16
188	4SD188	溝	暗灰色土	8世紀前半～中頃	AV9
189		土坑	S-209内の土坑		BI15
190	4S1190	竪穴住居	明茶色土 S-195→190→155	6c後～末(111B～IV期)	BI14～BK16
191		ピット	S-209内のピット(柱穴か)		BI15
192		ピット群	S-192→125		BK12
193		ピット群	S-155床前		BI16
194		土坑	S-155床前 窪みか?		BK15
195	4S1195	竪穴住居	茶色土 S-195→190→155	6c前～中頃(11～111A期)	BI15
196	4SD196	溝		8世紀	AQ14
197		ピット群			BF17
198		ピット群			BC11
199		ピット群		8世紀	AX11
200	4S1200	竪穴住居	茶色土 S-195→200→136	8世紀末(IV期)	BI15
201		ピット群			BE13
202		溝			BD11
203		土坑	暗灰色土		BD12
204		溝		近世～	BA12
205	4S1205	竪穴住居		6世紀	B68
206		溝		8世紀	BA11
207		溝	暗灰色土	奈良時代～	BG15
208		焼土ピット			BE7
209		焼土ピット			BE7
210	4S1210	土坑	茶灰色土 床面一部に焼土	6c後～末(111B～IV期)	BI14
211		ピット	S-162の底面		B68
212		ピット			BA7
213		ピット			BH10
214		ピット			BI10
215	4S1215	竪穴住居	S-215→176	6c前～中頃(11～111A期)	B68
216		土坑			BI9
217		土坑	S-217→145		BE10
218		土坑	明茶色砂質土	8世紀	AV10
219		土坑		8世紀	AJ9
220	4SX220	落ち穴			BA8
221		ピット			AB8
222		焼土坑			BE10
223		土坑			AE7
224		土坑	S-225→224		BI9
225	4SX225	落ち穴	S-225→130B 黄茶色土		B68
226		土坑			B69
227		土坑			B68
228		ピット			BI16
229		ピット			BI15
231		ピット			BI15
232		ピット			BI15
233		溝			BI14

Tab 13 1 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覽表

S-1	須 惠 銅環(古遺)、鏢、鍔片 土 師 銅環、鍔片	S-18	須 惠 銅環、鏢 土 師 鍔片 石 製 品瓦石
S-2	須 惠 銅鏢、鍔片 土 師 鍔片 瓦 質 土 師六鉢 須 惠 陶 銅環、鍔片	S-19	土 師 銅野篭片
S-3	須 惠 銅鏢 土 師 銅鍔片	S-20	須 惠 銅環身、環蓋、環底、鏢、鍔片 土 師 銅環、野篭片、平環白土師 土 師 質 土 師七輪 紀 前 瓦 甍 銅輪、江、壺? 須 惠 陶 銅小鉢 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘 石 製 品石灰、剝片 土 製 品埴土塊
S-4	須 惠 銅環身 土 師 銅鏢×鍔、鍔片 紀 前 瓦 甍 銅環?、鍔片	S-20(瓦片土)	須 惠 銅環身、鏢、鍔片 土 師 銅環、野篭片 土 師 質 土 師鍔片 須 惠 陶 銅鏢、鍔片 紀 前 瓦 甍 銅釘、鍔片 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘、50釘硬貨 石 製 品埴土塊
S-5	須 惠 銅鏢4 土 師 銅鍔片 金 屬 製 品五釘、瓦瓦片?	S-21	須 惠 銅鏢、鍔片 土 師 銅鍔片
S-6	須 惠 銅鏢 土 師 銅鍔片 紀 前 瓦 甍 銅環×鍔、小輪、鍔片 瓦 銅平瓦(古遺代)、埴土瓦	S-22	須 惠 銅環 土 師 銅野篭片 瓦 銅鏢土瓦
S-7	須 惠 銅鍔片 土 師 銅鍔片	S-23	須 惠 銅環身、環蓋、鍔片 土 師 銅環、小鉢、鏢、鍔片 須 惠 陶 銅鍔片 紀 前 瓦 甍 銅鍔片(古遺代)
S-8	須 惠 銅環(古遺) 土 師 銅野篭片、片 須 惠 陶 銅鏢、鍔、鍔片 瓦 銅鏢土瓦	S-24	須 惠 銅鍔片 土 師 銅鏢×鍔、鍔 須 惠 陶 銅鏢、鍔片
S-9	土 師 銅野篭片	S-25	須 惠 銅環身、環蓋、鍔1、鍔2、鏢、鍔片 土 師 銅環、鏢×鍔、平環、鍔片 須 惠 質 土 師鍔片 須 惠 陶 銅鏢、鍔片 須 惠 陶 銅鍔片 紀 前 瓦 甍 銅釘、鍔口、鍔片 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘、五塊 石 製 品瓦石
S-10(埴土)	須 惠 銅環身、環蓋、鍔×鍔、鏢 土 師 銅環身、野篭片 須 惠 陶 銅輪、環底、鍔片 紀 前 瓦 甍 銅鍔片 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘、不可辨製品 土 製 品埴土塊、埴土塊	S-26	須 惠 銅環身、環蓋、鏢 土 師 銅環、鍔×鏢、野篭片、鏢×鍔 紀 前 瓦 甍 銅釘、鍔、鍔片 金 屬 製 品五釘
S-11	瓦 銅鏢土瓦	S-27	須 惠 銅環身、鏢 土 師 銅環、野篭片 紀 前 瓦 甍 銅鍔片 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘
S-12	須 惠 銅鍔片	S-28	須 惠 銅環身、鍔片 土 師 銅環、野篭片、鍔片 金 屬 製 品五釘
S-13	須 惠 銅環身、鏢、鍔片 土 師 銅鍔片 須 惠 陶 銅鍔片 紀 前 瓦 甍 銅鍔、鍔片	S-29	須 惠 銅環身 土 師 銅環
S-14	須 惠 銅環身、環蓋、鏢 土 師 銅野篭片 土 師 質 土 師鍔、鏢 瓦 質 土 師鍔蓋 須 惠 陶 銅刀、鍔片 紀 前 瓦 甍 銅鍔片 瓦 銅鏢土瓦 金 屬 製 品五釘 石 製 品石灰 土 製 品埴土塊	S-30(瓦片土)	須 惠 銅環、鍔3、環身、鏢 土 師 銅鍔片 土 師 質 土 師鍔、鍔、六鉢 瓦 質 土 師六鉢
S-15(埴土)	須 惠 銅環身、環蓋、鏢、鍔、鏢 土 師 銅環、鍔片 白 銅鍔片	S-30(瓦石)	須 惠 銅環、鍔3、環身、鏢 土 師 銅小口、環、平環、埴土塊、鏢、鏢×鍔 土 師 質 土 師鍔鍔 瓦 質 土 師六鉢 石 製 品剝片(無磁石) 土 製 品瓦石
S-15(埴土)	須 惠 銅環身、鏢		
S-16	土 師 銅環 紀 前 瓦 甍 銅輪 瓦 銅鏢土瓦		
S-17	土 師 銅野篭片		

Tab 13 2 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覽表

S-30a褐色土
須 京 銅片, 環身, 環身
土 師 銅片, 環身片
S-30a色土
須 京 銅片, 環(1), 環(2), 環身, 環身, 環×鉄, 環
土 師 銅片, 小環, 小環, 環身, 小環, 銅, 貯藏具片
大 塚 銅片, 銅片, 銅, 銅片, 火鉢
須 京 銅片, 銅片
瓦 製 土 銅片, 環身
陶 瓦 銅片, 陶, 目, 環, 銅片
白 銅片IV
白 銅 銅片IV
瓦 銅片IV
金 環 銅片, 銅片, 銅片
石 製 銅片, 銅片, 銅片, 石口
土 製 銅片, 銅片
S-31
土 師 銅片
S-32
須 京 銅片, 環身, 環
土 師 銅片
S-33
土 師 銅片
S-34
既 前 瓦 製 銅片
S-35カマド
土 師 銅片, 環身片
S-35a褐色土
須 京 銅片, 環身
土 師 銅片, 小環, 環, 貯藏具片
石 製 銅片, 石口
S-36
須 京 銅片, 環身
陶 瓦 銅片
瓦 銅片, 銅片
S-37
須 京 銅片
土 師 銅片
既 前 瓦 製 銅片
S-38
須 京 銅片, 環身
土 師 銅片, 貯藏具片
S-39
須 京 銅片, 環身, 銅片
土 師 銅片, 環身, 銅片, 貯藏具片
S-40a
土 師 銅片, 環
S-40b
土 師 銅片, 貯藏具片
S-41
須 京 銅片
土 師 銅片, 貯藏具片
既 前 瓦 製 銅片
石 製 銅片, 石口
S-42
土 師 銅片(古代), 銅片, 銅
既 前 瓦 製 銅片
瓦 銅片, 銅片(環)
S-43
須 京 銅片, 環身, 環, 銅片
土 師 銅片, 貯藏具片
土 師 瓦 土 銅片
陶 瓦 銅片
既 前 瓦 製 銅片, 目
瓦 銅片, 銅片(環), 銅片
土 師 銅片, 銅片, 銅片
土 師 銅片, 銅片, 銅片
S-44
須 京 銅片, 環身, 環
土 師 銅片, 貯藏具片
S-45
土 師 銅片
S-45a褐色土
須 京 銅片, 環身, 環身, 銅片
土 師 銅片, 貯藏具片

S-46
須 京 銅片
土 師 銅片
土 製 銅片, 銅片
S-47褐色土
須 京 銅片
土 師 銅片, 銅片
S-47a褐色土
須 京 銅片, 環身, 銅片
土 師 銅片, 銅片
石 製 銅片, 石口
S-47b褐色土
土 師 銅片
S-47
土 師 銅片, 環身片
S-48
須 京 銅片
土 師 銅片
S-49
土 師 銅片, 貯藏具片
S-50褐色土
須 京 銅片, 環身, 環身, 環
土 師 銅片, 貯藏具片
S-50a
土 師 銅片, 環身片
S-51
土 師 銅片, 環身片
S-52
土 師 銅片
既 前 瓦 製 銅片
S-53
土 師 銅片
S-54
既 前 瓦 製 銅片(現代A?)
S-55
須 京 銅片, 環身, 環
土 師 銅片, 銅片, 貯藏具片
金 環 銅片, 銅片, 貯藏具片
S-55a褐色土
須 京 銅片, 環身
土 師 銅片, 環身, 貯藏具片
S-55a
土 師 銅片, 環
S-55b
土 師 銅片, 貯藏具片
S-56
須 京 銅片
土 師 銅片
S-57
須 京 銅片(古環)
土 師 銅片
石 製 銅片, 石口
S-58
須 京 銅片, 環, 環, 環×鉄
土 師 銅片, 貯藏具片
S-58褐色土
須 京 銅片, 環身, 環身
土 師 銅片, 貯藏具片
S-58a褐色土
須 京 銅片, 環身, 環
土 師 銅片
S-58b褐色土
須 京 銅片, 環身, 環
土 師 銅片, 銅片
S-58c褐色土
須 京 銅片, 環身, 環, 環, 貯藏具片
石 製 銅片, 石口

Tab 13 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覧表

S-038	土 器 銅像	S-89	土 器 銅鏡片
S-039	土 器 銅鏡×鏡	S-91	銅 器 銅式、押身
S-040	土 器 銅鏡×鏡	土 器 銅式、鏡	
S-61	土 器 銅釘鐵具片	S-92	土 器 銅像
S-62	土 器 銅像	S-93	土 器 銅像
石 製 高麗石		銅 器 銅押身、鏡	
S-93	銅 器 銅押身、鏡片	土 器 銅式、銅、鏡片	
土 器 銅釘鐵具片		S-95	土 器 銅式、銅鐵具片
銅 釘 系 風 銅鏡片		S-95褐色土	
S-94	銅 器 銅押身、押身	銅 器 銅押身、銅、鏡	
土 器 銅式、銅鐵具片		土 器 銅式、手取粘土器、小鉢	
S-95褐色土		弥 生 土 銅鏡片?	
銅 器 銅押身、鏡		石 製 高麗石	
土 器 銅釘鐵具片		土 製 高麗木桶	
S-95	土 器 銅釘鐵具片	S-96	銅 器 銅像、鏡片
S-96	土 器 銅像	土 器 銅鏡片、銅鐵具片	
石 製 高麗石		S-97	
S-97	銅 器 銅式	銅 器 銅式	
土 器 銅鏡片		土 器 銅鏡片	
弥 生 土 銅鏡片?		S-98	
S-98	銅 器 銅式	銅 器 銅式	
銅 器 銅式、押身、銅、鏡		土 器 銅式、銅鐵具片、小鉢?	
土 器 銅式、銅鐵具片		S-99	
銅 釘 系 風 銅鏡片		銅 器 銅式、鏡、鏡片	
弥 生 土 銅鏡片?		土 器 銅式、銅鐵具片	
S-98	銅 器 銅式	石 製 高麗石(高麗石)	
銅 器 銅式、押身、銅、鏡		S-99褐色土	
土 器 銅式、銅鐵具片		銅 器 銅式	
銅 釘 系 風 銅鏡片		土 器 銅式、鏡×鏡、銅鐵具片	
弥 生 土 銅鏡片?		石 製 高麗石、高麗石	
S-99	銅 器 銅式	S-99	
銅 器 銅式、押身、銅、鏡		銅 器 銅式、鏡、鏡片	
土 器 銅式、銅鐵具片		土 器 銅式、銅鐵具片	
S-99	銅 器 銅式	S-100	
銅 器 銅式、押身、銅、鏡		木 製 高麗木	
土 器 銅式、銅鐵具片		S-100褐色土	
S-100	木 製 高麗木	銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
S-100褐色土		鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、銅、銅、鏡、銅、鏡、鏡	
銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片、手取粘土器	
鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、銅、銅、鏡、銅、鏡、鏡		陶 器 陶 銅	
土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片、手取粘土器		白 銅 銅IV	
陶 器 陶 銅		弥 生 土 銅像?	
白 銅 銅IV		金 銀 銅	
弥 生 土 銅像?		石 製 高麗木桶	
金 銀 銅		土 製 高麗木桶	
石 製 高麗木桶		木 製 高麗木桶	
土 製 高麗木桶		木 製 高麗木桶	
木 製 高麗木桶		S-100褐色土	
S-100褐色土		銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片	
土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片		弥 生 土 銅像?	
弥 生 土 銅像?		金 銀 銅	
金 銀 銅		石 製 高麗木桶	
石 製 高麗木桶		土 製 高麗木桶	
土 製 高麗木桶		木 製 高麗木桶	
木 製 高麗木桶		S-100褐色土	
S-100褐色土		銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片	
土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片		弥 生 土 銅像?	
弥 生 土 銅像?		金 銀 銅	
金 銀 銅		石 製 高麗木桶	
石 製 高麗木桶		土 製 高麗木桶	
土 製 高麗木桶		木 製 高麗木桶	
木 製 高麗木桶		S-100褐色土	
S-100褐色土		銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
銅 器 銅式、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石	
鏡、銅釘、鏡、鏡×鏡、鏡、押身、銅、鏡、押身、鏡、高麗石		土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片	
土 器 銅式、押身、高麗土、小鉢、鏡、銅鐵具片		弥 生 土 銅像?	
弥 生 土 銅像?		金 銀 銅	
金 銀 銅		石 製 高麗木桶	
石 製 高麗木桶		土 製 高麗木桶	
土 製 高麗木桶		木 製 高麗木桶	
木 製 高麗木桶		S-100褐色土	

Tab 13 4 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覧表

S-101	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片、環	
S-102	須 煮 銅環、作葉、環×α
土 師 銅製片	
S-103	須 煮 銅環(古代)
土 師 銅製片	
S-104	須 煮 銅製片、平環?
土 師 銅製風具片	
S-105黒茶色土	須 煮 銅環、環身、作葉、環、高坪、鉢、銅製葉、環
土 師 銅環、高坪?、平環(土師製)、鉢、環、葉、野鐵具片	
石 製 品 銅製片	
白 銅製口	
赤 土 銅製	
石 製 品 玉石	
S-105黒茶色土	須 煮 銅環身、つぎみ、作葉、環
土 師 銅環、鉢、葉、野鐵具片	
赤 土 銅製	
石 製 品 玉石	
S-105灰色砂	須 煮 銅環
土 師 銅製	
石 製 品 ナイフ決定部	
S-106	須 煮 銅環身、鏡片
土 師 銅製片	
S-107	須 煮 銅環身、葉
土 師 銅製風具片	
S-108	須 煮 銅環身、環
土 師 銅環、葉	
石 製 品 銅片(黒曜石)	
S-109	須 煮 銅環身、葉
土 師 銅環、野鐵具片	
S-110黒茶色土	須 煮 銅環身、葉、高坪、環身、作葉、環、高坪、鉢、銅製葉、環、鏡×鉢、鏡片
土 師 銅環、高坪、鉢、作葉、野鐵具片	
石 製 品 銅片	
赤 土 銅製	
瓦 銅平瓦(環)	
石 製 品 玉石	
S-110黒茶色土	須 煮 銅環身、高坪、葉、鏡×鉢、環身、作葉、環、高坪、銅製葉、環
土 師 銅環、高坪、鉢、作葉、野鐵具片	
石 製 品 ナイフ(黒石製、銅片(黒曜石)、銅片、環身)	
赤 土 銅製	
石 製 品 玉石	
S-110灰色砂	須 煮 銅環、葉
土 師 銅環、葉、野鐵具片	
石 製 品 銅片(黒曜石)、玉石	
S-111	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片	
石 製 品 銅片(黒曜石)	
S-112	須 煮 銅環
土 師 銅製片	
S-113	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片、鏡片	
S-114	須 煮 銅環身、環
土 師 銅製風具片	
石 製 品 玉石	
S-115	須 煮 銅環身、葉
土 師 銅環、鉢、鏡×鉢、鏡片	

S-115カマド	須 煮 銅環身、環
土 師 銅製×鉢、環、鏡片	
土 製 品 土柱	
S-116	須 煮 銅環、環身、環片
土 師 銅環、高坪?、野鐵具片	
石 製 品 銅片(黒曜石)、玉石	
土 製 品 銅土塊	
S-117	須 煮 銅環、作(作葉)、高坪?
土 師 銅製片	
S-118	須 煮 銅環(古代)
土 師 銅環、野鐵具片	
石 製 品 銅片(黒曜石)	
S-119	須 煮 銅環×鉢
土 師 銅製×鉢、鏡片	
石 製 品 玉石	
S-120a	須 煮 銅環
土 師 銅製片	
S-120b	須 煮 銅環
土 師 銅製片	
S-120c	須 煮 銅環
土 師 銅製片	
S-120c作環	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片	
S-120d	須 煮 銅環
土 師 銅環、鏡片	
S-120カマド	須 煮 銅環、高坪、環片
石 製 品 玉石	
S-120灰色土	須 煮 銅環身、環身、鉢、環
土 師 銅環、野鐵具片	
石 製 品 銅片(黒曜石)	
S-121	須 煮 銅環
土 師 銅環、鏡片	
S-122	須 煮 銅環、作葉
土 師 銅環、野鐵具片	
S-123	須 煮 銅環
土 師 銅製片	
S-124	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片	
S-125灰色土	須 煮 銅環身
土 師 銅製風具片	
S-125銀土	須 煮 銅環
土 師 銅環、葉×鉢	
S-125	須 煮 銅環身、作葉、野鐵具片、高坪、葉
土 師 銅環、野鐵具片	
赤 土 銅製片?	
S-126	須 煮 銅環、作葉
土 師 銅環、鏡片	
S-127	須 煮 銅環、葉、作葉、高坪、鏡片
土 師 銅環、鏡片	
S-128	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片	
S-129	須 煮 銅環、環
土 師 銅製風具片	
赤 土 銅製 品 銅環	
S-129b龍方	須 煮 銅環
土 師 銅製風具片、鏡片	

Tab 13 5 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覧表

S-130ア片断	須 泉 網紋片
S-130ア了	須 泉 網紋
土 部	網紋×紙、貯蔵具片
右 製	品割片(黒曜石)
S-130Bイ	須 泉 網紋
土 部	網紋×紙
右 製	品割×片
S-130B灰色土	須 泉 網紋
土 部	網紋
S-130B	須 泉 網紋、鏡片
土 部	網紋、貯蔵具片
S-130C了部方	土 部 網紋片
S-130C了	土 部 網紋具片
右 製	品割片(黒曜石)
土 製	品割土塊
S-130Cイ管底	土 部 網紋片
S-130Cイ部方	須 泉 網紋片
土 部	網紋?、鏡片
S-130Cノ	須 泉 網紋
土 部	網紋具片
S-130Cの部方	土 部 網紋、鏡片
S-130Cの片断	土 部 網紋片
S-130Cウ	須 泉 網紋
土 部	網紋具片
S-130C灰色土	須 泉 網紋
土 部	網紋片
右 製	品割片(黒曜石)
S-130C	須 泉 網紋、貯蔵、鏡
土 部	網紋、貯蔵具片
右 製	品割×紙
右 製	品割片(黒曜石)
S-130(a)	須 泉 網紋、鏡
土 部	網紋、鏡×紙
S-131	土 部 網紋片
S-132	須 泉 網紋、鏡片
土 部	網紋、貯蔵具片
S-133	土 部 網紋具片
右 製	品割片
S-134	須 泉 網紋、鏡
土 部	網紋具片、鏡片
S-135	須 泉 網紋、鏡×紙、貯蔵、鏡、鏡
土 部	網紋
右 製	品割片
S-136	須 泉 網紋
土 部	網紋具片
右 製	品割片(黒曜石)
S-137	土 部 網紋片
S-138	土 部 網紋片
右 製	品割石

S-139	須 泉 網紋
土 部	網紋、貯蔵具片
S-140塊上部a	土 部 網紋
S-140塊上部b	土 部 網紋、鏡片
S-140葉灰色土	須 泉 網紋、貯蔵、鏡
土 部	網紋、鏡×紙
右 製	品割片(黒曜石)
S-140葉灰色土	須 泉 網紋、貯蔵、鏡
土 部	網紋×紙、貯蔵具片
右 製	品割土塊
右 製	品割石
S-140カマド	土 部 網紋×紙
右 製	品割
S-141	須 泉 網紋
土 部	網紋
右 製	品割、鏡片
S-142	須 泉 網紋
S-143	須 泉 網紋
S-144	須 泉 網紋、貯蔵、貯蔵、鏡、鏡
土 部	網紋、貯蔵
須 泉	網紋
土 部	網紋片
S-145灰色土	須 泉 網紋、鏡
土 部	網紋、小鉢、貯蔵具片
S-145灰色土	須 泉 網紋、鏡、鏡片
土 部	網紋×紙、貯蔵具片
S-145カマド	土 部 網紋
右 製	品割土塊
土 製	品割土塊
S-146a	土 部 網紋片
S-146b	須 泉 網紋
土 部	網紋片
S-146	須 泉 網紋(正確)
土 部	網紋片
S-147	須 泉 網紋
土 部	網紋、鏡×紙、鏡片
S-148	土 部 網紋、鏡片
S-149	須 泉 網紋
土 部	網紋具片
右 製	品割片
S-150a部方	須 泉 網紋
土 部	網紋、鏡片
S-150a部方	須 泉 網紋
土 部	網紋、貯蔵具片、鏡片
S-150a片断	土 部 網紋具片
S-150b	須 泉 網紋
土 部	網紋、鏡片
S-150c部方	須 泉 網紋
土 部	網紋片
右 製	品割片

Tab 13 6 京ノ尾遺跡第4次調査出土遺物一覽表

S-150a	須 京 銅鑿、鏡片
土 師 銅鏡片	
S-150b東方	須 京 銅鏡片
石 製 品製片(チヤコト)	
S-150c	土 師 銅鏡片
S-150d東方	土 師 銅片、貯藏具片
S-150f東方	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
石 製 品製片	
S-150g	土 師 銅鏡片
S-150h東方	土 師 銅貯藏具片
S-150i	土 師 銅鏡片
S-150k	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150l東方	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150m	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150n	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150o	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150p	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150q	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150r	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150s	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150t	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150u	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150v	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150w	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150x	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150y	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-150z	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-151	須 京 銅片鑿
土 師 銅鏡片	
S-152	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿、鑿×前	
金 屬 製 品製片	
S-153	須 京 銅鑿
土 師 銅貯藏具片	
石 製 品製片(魚塚石)	
S-154	土 師 銅片鑿、貯藏具片
土 製 品鑿土塊	
S-155a	土 師 銅鏡片
S-155b	土 師 銅鏡片
S-155c	土 師 銅鏡片
S-155d	土 師 銅鏡片
S-155e	土 師 銅鏡片
S-155f	土 師 銅鏡片
S-155g	土 師 銅鏡片
S-155h	土 師 銅鏡片
S-155i	土 師 銅鏡片
S-155j	土 師 銅鏡片
S-155k	土 師 銅鏡片
S-155l	土 師 銅鏡片
S-155m	土 師 銅鏡片
S-155n	土 師 銅鏡片
S-155o	土 師 銅鏡片
S-155p	土 師 銅鏡片
S-155q	土 師 銅鏡片
S-155r	土 師 銅鏡片
S-155s	土 師 銅鏡片
S-155t	土 師 銅鏡片
S-155u	土 師 銅鏡片
S-155v	土 師 銅鏡片
S-155w	土 師 銅鏡片
S-155x	土 師 銅鏡片
S-155y	土 師 銅鏡片
S-155z	土 師 銅鏡片
S-156	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿、貯藏具片	
土 製 品鑿土塊	
S-157	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿	
S-158	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿	
S-159	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿	
S-160	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿	
S-161	須 京 銅片鑿
土 師 銅片鑿、貯藏具片、鏡片	
S-162	須 京 銅片鑿×前、貯藏具片
土 製 品鑿土塊	
S-163	須 京 銅鏡片

S-164	須 京 銅鑿、鏡片
土 師 銅片鑿、貯、鏡片	
S-165	須 京 銅片鑿、貯藏、鏡片
土 師 銅片鑿、貯藏、鏡片	
S-166	須 京 銅片鑿3、貯(古鏡)
土 師 銅片鑿、貯藏具片	
S-167	須 京 銅片鑿3、貯身
土 師 銅片鑿×前、鏡片	
S-168	須 京 銅片鑿3、貯藏、鏡片、鑿
土 師 銅鏡片	
金 屬 製 品製片	
S-169	土 師 銅片鑿、鏡片
S-170真茶色土	須 京 銅片鑿
土 師 銅貯藏具片	
石 製 品製片	
S-171	須 京 銅片鑿
土 師 銅鑿×前	
S-172	土 師 銅鑿×前
S-173	須 京 銅片鑿×前、貯身、貯藏、鑿
土 師 銅鑿×前、鏡片	
S-174	須 京 銅片鑿×前、貯身、鑿3、鑿
土 師 銅貯藏具片、鏡片	
石 製 品製片	
S-175真茶色土	須 京 銅片鑿、貯身、貯、鑿3、鑿3、鏡、鑿
土 師 銅貯藏具片	
土 製 品鑿土塊	
石 製 品製片	
S-176茶褐色土	須 京 銅片鑿、鑿
土 師 銅片鑿、鑿×前	
土 製 品鑿土塊	
S-176茶色土	須 京 銅貯身、鏡片
土 師 銅片鑿、鑿×前、鑿	
石 製 品製片(魚塚石)	
S-176茶色粘土	須 京 銅貯身、鏡片
土 師 銅片鑿、貯藏具片	
土 製 品鑿土塊	
石 製 品製片	
S-177	須 京 銅片鑿×前、鏡片
土 師 銅片鑿、貯藏具片	
S-178	須 京 銅片鑿3、貯、鑿3、鑿
土 師 銅鏡片	
S-179	須 京 銅片鑿3、貯(古鏡)、貯、鑿
土 師 銅片鑿×前、貯身	
S-180	須 京 銅片鑿3、鑿3、貯、貯身、貯身、鑿
土 師 銅貯藏具片	
金 屬 製 品製片	
金 屬 製 品製片	
石 製 品製片、玉石	
S-181	須 京 銅片鑿、鏡片
土 師 銅貯藏具片	
石 製 品製片	
S-182	須 京 銅片鑿×前、鑿、鏡片
土 師 銅片鑿	
金 屬 製 品製片	

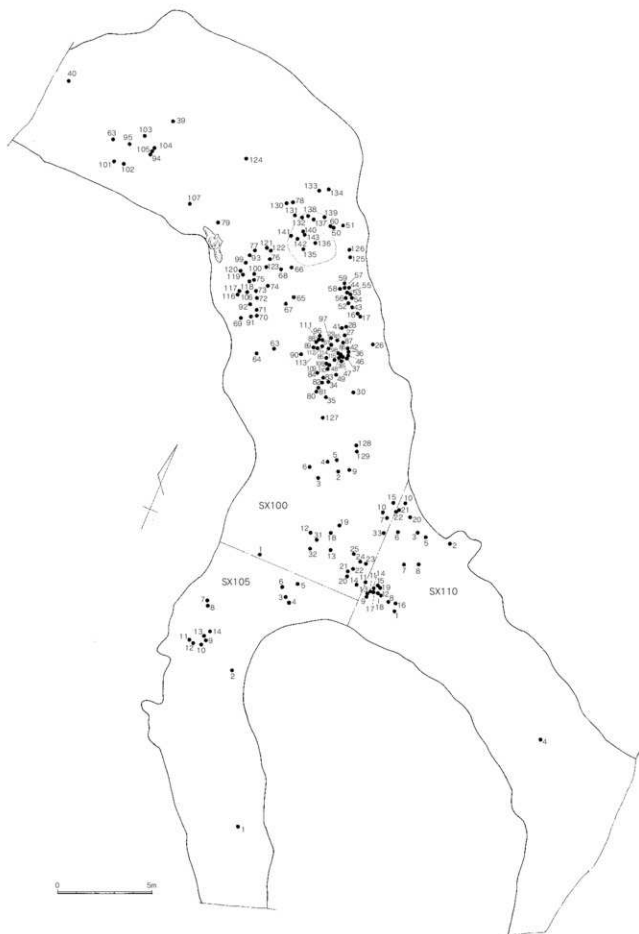


Fig 116 京ノ尾遺跡第4次調査 SX100・105・110木製品出土地点図 (1 200)

Tab 14.2 京ノ尾遺跡第4次調査木製品一覧表

103	竹筒式	42.0	10.7	5.0	小口側についたまま、小口を斜めにカット。	—	BB15	—
104	樽形半	72.0	18.9	—	榫が浅く、1/2部から斜めカットで切断。	—	BA19	—
105	樽形半	39.0	10.1	—	小口を斜めにスライスカット。	—	BA19	—
106	樽形半	16.5	3.9	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB17	—
107	樽形半	11.0	2.6	5.3	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB17	—
108	樽形半	150.0	36.3	—	小口を斜めにカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB17	—
109	樽形半	14.0	3.4	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB17	—
110	木釘	10.0	2.4	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB17	—
111	木釘	28.0	7.4	1.3	小口に斜め。	E-150	BB14	Fig. 104-159
112	樽形半	42.0	10.7	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
113	木釘	61.0	15.2	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
114	樽形半	33.0	8.3	4.9	小口に斜め。	E-151	BB14	Fig. 104-149
115	樽形半	26.0	6.5	4.3	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
116	樽形半	19.0	4.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
117	樽形半	13.0	3.2	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
118	木釘	49.0	12.2	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
119	樽形半	18.0	4.5	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
120	樽形半	42.0	10.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
121	樽	56.0	12.9	0.7-4.0	121・122・156は同一体。本文に記載。	E-152	BB15	Fig. 105-155
122	樽	—	—	—	—	—	BB15	—
123	樽形半	27.0	6.8	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
124	樽	34.0	8.5	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
125	樽	163.0	40.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-153	BB16	Fig. 105-152
126	樽形半	174.0	43.5	3.9-10.7	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-149	BB14	Fig. 105-156
127	樽形半	35.0	8.8	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-144	BB10	Fig. 104-141
128	樽形半	18.0	4.5	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-148	BB13	Fig. 104-145
129	樽形半	21.0	5.2	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-151	BB13	—
130	樽形半	17.0	4.3	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-152	BB15	Fig. 105-153
131	樽形半	28.0	7.1	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-148	BB13	Fig. 104-147
132	樽形半	40.0	10.1	1.9-2.5	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-147	BB13	—
133	樽形半	24.0	6.1	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-148	BB13	Fig. 104-146
134	樽形半	20.0	5.1	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-142	BB13	Fig. 104-143
135	樽形半	5.0	1.3	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
136	樽形半	116.0	29.1	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-141	BB15	Fig. 105-146
137	樽形半	18.0	4.5	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-148	BB13	Fig. 104-147
138	樽形半	70.0	17.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
139	樽形半	63.0	15.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
140	樽形半	14.0	3.5	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—
141	樽形半	70.0	17.7	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-151	BB15	Fig. 105-143
142	樽形半	59.0	14.4	—	小口に斜め。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB15	—

EX100 黒松

出土番号	種類	タテ	ヨコ(深)	厚さ	状況	産物番号	地区番号	図版番号
—	榫	128.0	30.3	—	本文に記載。	E-929	—	Fig. 95-99
—	榫	128.0	30.3	—	小口の傾。加工痕なし。	—	—	—
—	樽形半	159.0	39.7	4.2	本文に記載。	E-999	—	Fig. 95-98
—	樽形半	69.0	17.3	—	本文に記載。	E-100	—	Fig. 95-101
—	樽形半	59.0	14.8	—	本文に記載。	E-101	—	Fig. 95-102
—	樽形半	65.0	16.3	—	本文に記載。	E-102	—	Fig. 95-103
—	樽形半	55.0	13.8	—	本文に記載。	E-103	—	Fig. 95-104

EX100

出土番号	種類	タテ	ヨコ(深)	厚さ	状況	産物番号	地区番号	図版番号
—	木釘	—	—	—	本文に記載。	E-991	—	Fig. 95-104
—	木釘	—	—	—	本文に記載。	E-992	—	Fig. 95-105

その他に榫や木片あり。

EX100 黒松

出土番号	種類	タテ	ヨコ(深)	厚さ	状況	産物番号	地区番号	図版番号
1	文	18.7	4.5	—	本文に記載。	E-914	BB12	Fig. 104-144
2	文	37.0	9.0	—	小口が4/5部からカット。前方の小口は1/2部からカット。割製や加工痕。	—	BB13	—
3	文	59.0	14.2	—	本文に記載。	E-915	—	Fig. 104-145
4	文	53.0	12.7	—	本文に記載。	E-917	—	Fig. 104-146
5	文	42.0	10.5	—	本文に記載。	E-920	BB13	Fig. 104-148
6	文	49.0	12.0	—	小口を斜めにカット。小口を4/5部からカット。ホゾのようないれあり。	—	—	—
7	文	31.0	7.8	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
8	文	18.0	4.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
9	文	24.0	6.1	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
10	文	13.0	3.2	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
11	文	54.0	13.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB14	—
12	文	42.0	10.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-916	BB14	Fig. 104-149
13	文	59.0	14.2	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-918	BB14	Fig. 104-150
14	文	49.0	12.0	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-919	BB14	Fig. 104-151

EX100 黒松

出土番号	種類	タテ	ヨコ(深)	厚さ	状況	産物番号	地区番号	図版番号
1	文	58.7	14.4	—	本文に記載。	E-921	BB11	Fig. 111-99
2	文	11.0	2.8	—	本文に記載。	E-922	BB10	Fig. 111-100
3	文	17.0	4.2	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
4	文	21.0	5.2	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
5	文	7.0	1.8	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
6	文	27.0	6.8	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
7	文	14.0	3.5	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
8	文	24.0	6.1	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-920	BB11	Fig. 111-107
9	文	8.0	2.0	—	本文の斜。小口を斜めにスライスカット。	—	BB11	—
10	文	13.0	3.2	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
11	文	13.0	3.2	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
12	文	49.0	12.0	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
13	文	26.0	6.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
14	文	18.0	4.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
15	文	16.0	4.0	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
16	文	19.0	4.7	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
17	文	18.0	4.5	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
18	文	16.0	4.0	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
19	文	21.0	5.2	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
20	文	19.0	4.7	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
21	文	16.0	4.0	—	小口を斜めにスライスカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
22	文	18.0	4.5	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	—	BB11	—
23	文	17.0	4.2	—	榫が浅く、1/2部から斜めカット。榫が浅く、1/2部から斜めカット。	E-919	BB15	Fig. 111-108

加工材・・・製品に加工している途中のもの、自然木の部分を残して加工していない。
 後加工・・・自然木から加工途中の製品、自然木の部分を残すものもある。
 後加工・・・自然木を後加工した状態、小口のみ加工しているものが殆ど。

5. 京ノ尾遺跡 第5次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字京ノ尾 305 1で、南東隣には地祇神社が所在する。

佐野区画整理事業に伴って、2002(平成14)年4月10日に試掘調査を実施し、北側半分について僅かに遺構が確認されたため、2002(平成14)年9月2日から10月16日にかけて発掘調査を実施した。調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は765.68㎡であるが、北半分の調査のため調査面積は206㎡である。

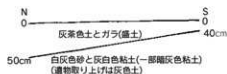


Fig. 117 京ノ尾遺跡第5次調査
土層模式図

(2) 基本層位 (Fig.117)

調査直前まで建っていた住宅の盛土が0.4~0.5mほどあり、それを除去した面で遺構が確認できる。遺構面は白灰色砂と灰白色粘土で、全体的に北側に向かって低くなっている。また、表土直下が遺構面ということもあり、宅地の周囲には植木穴やごみ穴などの攪乱が遺構面を破壊していた。

(3) 検出遺構

溝

5SD001 (Fig.119)

検出長7.05m、幅は0.75~1.9mで東に向かって狭く、浅くなっている。最も深いところで深さ0.35mを測る。埋土は黒灰色土である。

土坑

5SK005 (Fig.119)

東西1.7m、南北1.35m、深さ0.88mの楕円形の土坑である。埋土は灰茶色土と砂質土の互層で、上面に粘土塊が堆積していた。

(4) 出土遺物

土坑

5SK005淡灰色土出土遺物 (Fig.120)

土師質土器

鍋(1) 底部の破片で、内外面および底部ともハケ目調整し、全体的に煤が付着している。

鉢(2・3) 共に口縁部の破片である。2は内面ヨコハケ、外面ナナメハケ調整。3は口縁部が僅かに内湾する。内面ヨコハケ、外面は摩滅し不明。

瓦質土器

播鉢(4) 復元口径28.0cm、器高12.4cm、内面は細かいハケ目に4本の摺り目を施す。内面底部付近はやや摩滅している。使用によるものか。外面は粗いハケのあと雑なナデや指頭圧を施す。

5SK005灰茶色土出土遺物 (Fig.120)

肥前系磁器

碗(5) 僅かに青味がかった灰色透明釉を施す。外面に暗青色の文様を施している。口縁端部が外

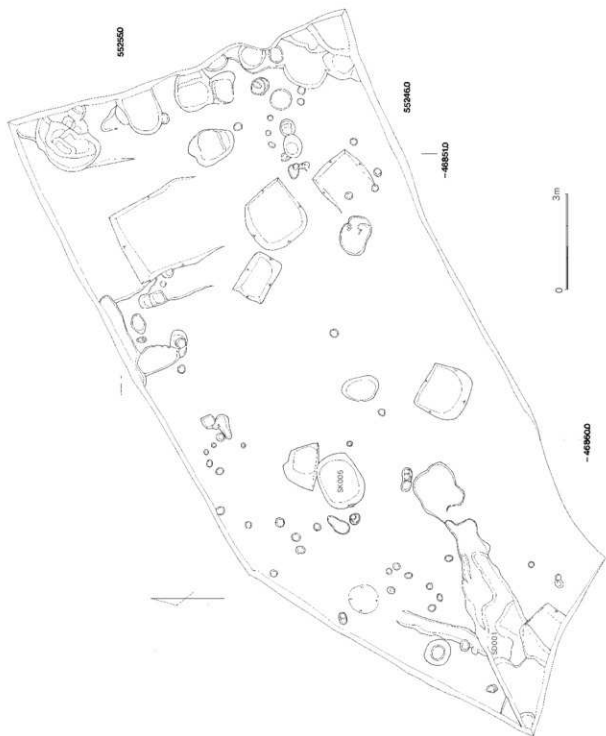


Fig 118 京ノ尾遺跡第5次調査遺構全体図(1/120)

反する。

皿(6) 僅かに青味がかった灰色透明釉を施し、口縁部内外面に暗青色の文様を施す。外面は花文である。

溝

5SD001出土遺物 (Fig 120)

土師器

小皿 a(7) 復元口径 10.5cm、器高 2.2cm、復元底径 6.3cm、底部回転イト切り。

土師質土器

鉢(8~11) 8は内面細かいヨコハケ、外面ナデ。口縁端部はやや丸味を帯びる。9は内面ヨコハケ、外面は指頭圧痕が残る。口縁端部は僅かな沈線がみられる。10は内面に粗いヨコハケ、外面は雑なナデ、指頭圧痕も残る。口縁部僅かに肥厚する。11は復元口径 28.0cm、外面は粗いハケ目があり、部分的に煤が付着する。内面も粗いヨコハケで、使用によるのか器面は粗い。

擂鉢(12) 片口の擂鉢で、外面はナデ、内面は細かいヨコハケのあと5cm単位で深い摺り目を施している。復元口径 32.0cm、器高 13.0cm、底径 14.0cm。

国産陶器

甕(13) 甕とみられる底部。外面は淡橙褐色の釉を施す。内面は露胎でヨコハケが残る。底部外面は板状圧痕が残る。

その他の遺構

灰色土出土遺物 (Fig 120)

金属製品

銭(14) 表面は劣化し、ぼんやりと「寛永通宝」の文字が確認できる。

(5) 小結

対象地の北側半分のみ遺構が残り、南側は削平されていた。当初の地形は地祿神社の位置くらいまで丘陵が迫っていたと考えられる。調査直前まで宅地であったため、攪乱が多く、明確な遺構は少なかった。SSK 005は上層に近世以降の遺物が出土するが、初期の埋土は中世後半期の遺物がみられる。SD00やSK009など残存する遺構からこの土地の開削は主に中世後半以降に行われたと推測される。

SSK005

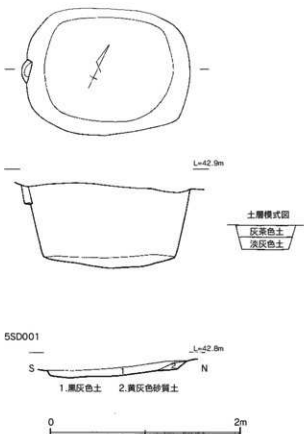


Fig 119 京ノ尾遺跡第5次調査SK005・SD001
遺構実測図(140)

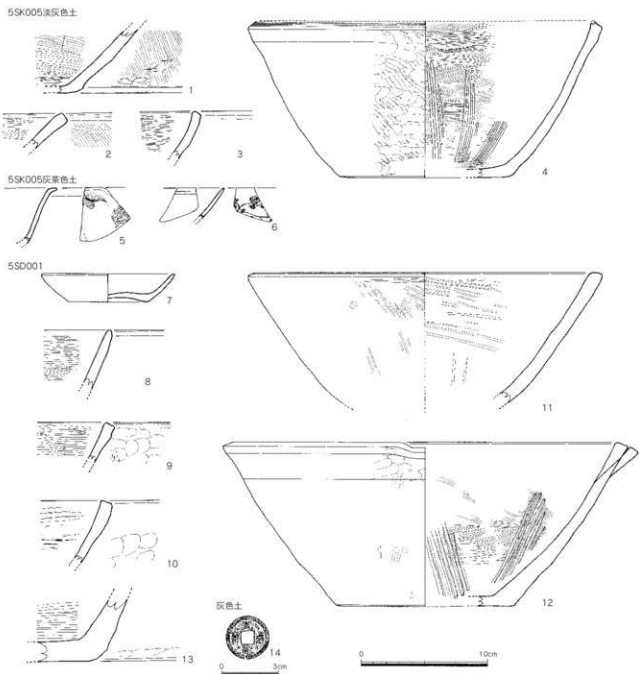


Fig 120 京ノ尾遺跡第5次調査出土遺物実測図(13 14は12)



Fig 121 京ノ尾遺跡第5次調査遺構略測図(1/150)

Tab 15 京ノ尾遺跡第5次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区	
1	5SP001	溝	暗灰色土	16世紀	Cライン
2		土坑	灰茶色土		D3
3		土坑	灰茶色土		E2
4		土坑	黄茶色土ブロック混じりの単層	近世～	F2
5	5SK005	土坑	黄茶色土ブロック混じり	近世	D6
6		土坑	黄茶色土ブロック混じり	近現代	E2
7		土坑		18世紀～近現代	D1
8		土坑	榎木穴か?	現代	F2
9		土坑	上部中心部に炭が混じる	江戸時代後半	G2
11		土坑	灰茶色土		E2
12		土坑			E2
13		段差		中世末	F4
14		窪み			F4
16		窪み			F5
17		ビット		中世	F5
18		ビット群			E5
19		土坑(樽乱)		現代	D5
21		土坑			C6

Tab 16 京ノ尾遺跡第5次調査出土遺物一覧表

S-1

須 原 銅鏃、鏃、破片
土 師 銅片(イト)、赤×小豆(イト)、鏃?、鏃、破片
土 師 買土 銅鏃、鏃、鏃
須 原 陶 銅鏃
瓦 製 銅瓦(破)

S-2

土 師 銅鏃、破片
土 製 山成土塊

S-3

土 師 銅鏃?、
須 原 陶 銅鏃片
瓦 製 山成土塊

S-4

土 師 銅鏃片
銅 釘 系 銅 釘
須 原 陶 銅鏃、鏃?、破片
土 製 山成瓦

S-5 焼灰色土

土 師 銅鏃?
土 師 買土 銅鏃、鏃
瓦 買土 銅鏃鏃

S-5 灰褐色土

須 原 銅鏃
土 師 銅鏃
銅 釘 系 銅 釘、鏃
瓦 製 山成土塊
土 製 山成土塊

S-6

銅 釘 系 銅 釘、破片
須 原 陶 銅鏃?
瓦 製 銅瓦(現代か)

S-7

須 原 銅鏃片
土 師 銅鏃?、鏃
銅 釘 系 銅 釘、鏃
須 原 陶 銅鏃、鏃、鏃
瓦 製 銅瓦(赤現代)
石 製 山成石臼

S-8

須 原 銅鏃
土 師 銅鏃片
須 原 陶 銅鏃、鏃
須 原 陶 銅鏃、破片
瓦 製 山成釘

S-9

須 原 銅鏃
銅 釘 系 銅 釘、鏃、鏃
須 原 陶 銅鏃片、土板、破片
瓦 製 銅瓦(焼し灰)、土師買の銅瓦

S-11

銅 釘 系 銅 釘、鏃、破片
石 製 山成石臼

S-12

土 師 銅鏃片
須 原 陶 銅鏃片(磨汰文あり)
須 原 陶 銅鏃片

S-13

土 師 買土 銅鏃
須 原 陶 銅鏃片(磨汰文)

S-14

土 師 銅鏃片
須 原 陶 銅鏃

S-16

須 原 陶 銅鏃?
瓦 製 山成土塊

S-17

土 師 銅鏃?、破片
銅 釘 系 土 師 銅鏃?
瓦 買土 銅鏃
瓦 買 製 山成片

S-18

土 師 銅鏃片

S-19

土 師 銅鏃片
須 原 陶 銅鏃

S-21

須 原 銅鏃片
土 師 銅鏃?

灰色土

須 原 銅鏃
土 師 銅鏃?、破片
土 師 買土 銅鏃、破片
瓦 買土 銅瓦鏃
銅 釘 系 銅 釘
須 原 陶 銅鏃
瓦 買 製 山成(買土遺物)

6. 京ノ尾遺跡 第6次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野字京ノ尾 345 1 347 1 349である。

佐野区画整理事業に伴って、2003(平成15)年4月10日に試掘調査を実施し、2004(平成15)年6月2日から8月5日にかけて発掘調査を実施した。調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は1661.02m²であるが、北側は攪乱が多く、遺構および遺物が見られないため、南半分に限って調査を行った。調査面積は767m²である。

調査期間中の7月19日早朝、太宰府市は記録的な豪雨(99mm/h)に見舞われ、市内各所で被害が相次いだ。現場もポンプの排水が追いつかず、現場内は満水となり、調査区外に流れ出ていく状態になっていた。一部東壁が崩壊したものの大きな被害はなかった。しかし、遺構が雨水で削れ、当初より大きくなっていた。

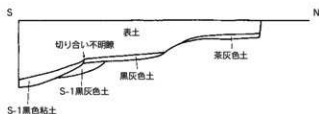


Fig. 122 京ノ尾遺跡第6次調査土層模式図

(2) 基本層位 (Fig. 122・124)

対象地の北側は宅地になっていたが、南側は一段低くて湿原のような沼地が存在していて、調査直前まで菖蒲が咲いていた。

宅地造成の表土や耕作土は合わせて1m程あり、その表土を除去すると、調査地はおよそ段になっていて、南側に向かって低くなっている。南側の湿地以外の段は表土直下に遺構面が確認され、遺構面に現代の遺物がめり込んでいる状況であり、北側は現代の攪乱も多く、遺構に新しい時期の遺物が混入する可能性が高い状況にあった。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

6SB005 (Fig. 125)

東西3間 南北2間で、北側に庇が間付く。振れはN 38 2 Wをとる。柱間は桁行2.65m 庇部分の桁行2.3m 梁行1.75m 掘り方は不定円形で径0.6~1.1m 深さは0.1~0.4mである。一部試掘トレンチや豪雨によって消滅している。埋土は黄灰色土を主としていて、柱痕は明瞭に確認できない。

土坑

6SK003

東西2.38m 南北4.9m 深さ0.1~0.2mの不定形土坑である。遺物は全体的にバラバラと出土し、自然堆積のような状況を示す。

溝

6SD010

検出長約5m 幅0.8~1.4m 深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色粘土である。SX010と接合するが切り合いは不明瞭であった。

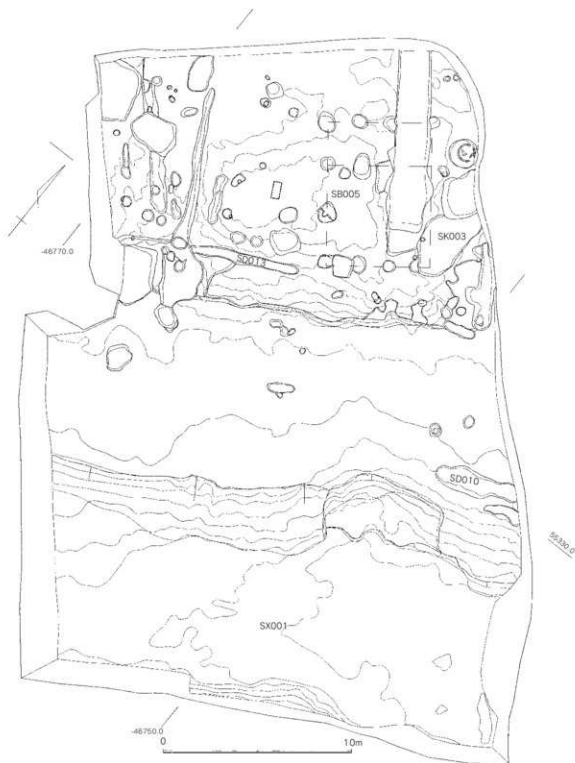


Fig 123 京ノ尾遺跡第6次調査遺構全体図(1200)



Fig 124 京ノ尾遺跡第6次調査西壁土層実測図(1120)

6SD013

検出長9.8m 幅0.4~0.6m 深さ0.2mを測る。埋土は灰茶色土で、0.15m程の石が混じっている。溝はSX001に平行している。

その他の遺構

6SX001

調査地の南側に広がっている流路(湿地)。僅かに南岸が確認され、流路幅は約10mである。製品は殆どなく、枝や幹などの木片も少ない。埋土は草が堆積したような茶色土で厚さ約0.6mあり、軟弱地盤ということもあり、現代生活時と調査時の沈み込みにより新しい時期の遺物も若干混入している。湧水が著しく、一昼夜でSX001は満水になる状況である。遺物は北側の流路の岸辺付近に多く見られるが、流路の中心付近ではほとんど出土しない。

6SX008

SX001の北側の平坦面で確認された窪みで、深さは殆どなく包含層と推測される。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

6SB005出土遺物(Fig126)

須恵器

蓋(1) 外面上部はヘラ切り未調整、内面底部はナデ。その他は回転ナデ。S5から出土。

坏(2) 口縁端部で調整はすべて回転ナデ。S5から出土。

高坏(3) 小型の高坏の脚部で、底部端は内側に僅かに屈曲させている。調整はすべて回転ナデ。底部復元径10.0cm。S5から出土。

土坑

6SK003出土遺物(Fig127)

土師質土器

鍋(1・2) 2点とも焼成は良好であるが底部を欠損する。底部と体部の境は僅かに屈曲し、直線的に開いている。1は内面に粗いヨコハケが左回りに行われている。外面はタテハケのあと雑な指頭圧を行い、煤が付着している。外面底部も同様にハケ目が残る。口縁部は僅かに肥厚し、内側は斜めに仕上げ、粗いヨコハケを行っている。復元口径5.40cm。2は内面に細かいヨコハケ、外面は1と同様、タテハケのあと雑な指頭圧を行い、煤が薄く付着している。口縁端部内面は僅かに斜めに仕上げる。復元口径50.0cm。

瓦質土器

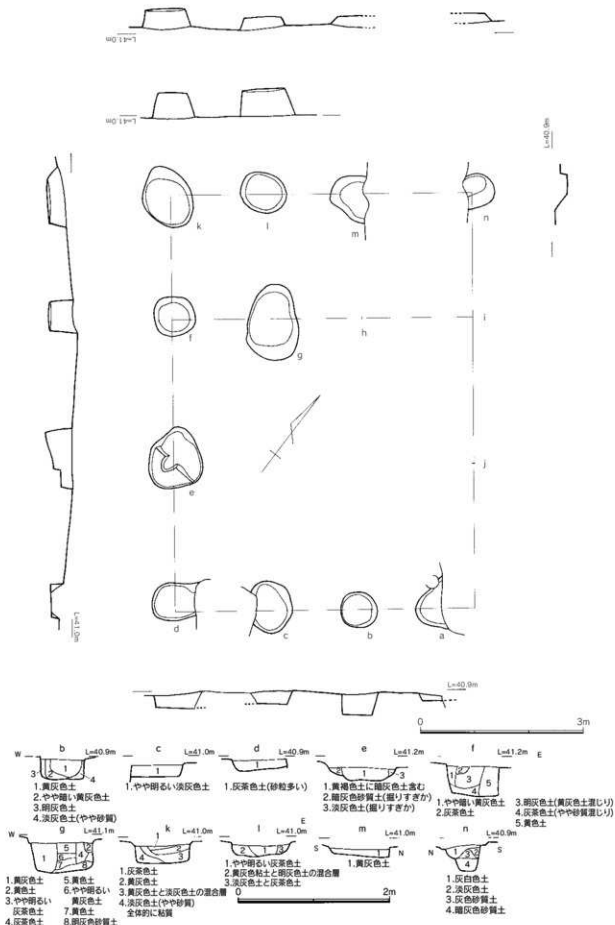


Fig 125 京ノ尾遺跡第6次調査SB005遺構実測図(17Q 150)

湯釜(3) 把手部分と底部は欠損している。頸部はやや内傾し、端部内面に僅かに沈線が巡る。体部中位に突帯を巡らしている。外面調整は体部上位が回転ナデ、下位はタテハケのあとナデている。肩部と体部下半に煤が付着している。内面調整は指頭圧のあとヨコハケを施し、部分的に付着物がある。体部中位に突帯を巡らしている。復元口径13.2m。

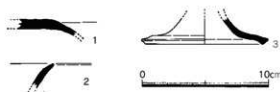


Fig 126 京ノ尾遺跡第6次調査SB005
出土遺物実測図(13)

播鉢(4・5) 4は口縁部を僅かに肥厚させる。外面調整は摩滅し不明だが、内面は細かいヨコハケのあと本単位以上の摺り目を施している。5の器面は焼成時に小爆発を起こし剥落している。外面は粗いナデとハケ、内面はヨコハケのあと本単位の摺り目を施す。内面体部付近は使用による摩滅がみられる。

国産陶器

椀(6) 胎土は淡茶色土で、内面のみ淡緑灰色釉が施軸されている。内面には3ヶ所の目跡が残り、外面には体部上位から軸垂れがみられる。高台内面には目跡の砂が厚く残っている。高台径4.8m。

鉢(7) 内面と底部付近を除く外面には暗褐色の薄い釉が施されている。胎土は淡褐色土で、外面露胎部分は赤茶色を呈する。復元高台径11.0m。

6SK003淡灰色土出土遺物(Fig 127)

土師質土器

鍋(8) 口縁部と体部中位がやや肥厚している。口縁部は内面を斜めに仕上げ、強いヨコナデを行う。内面は横方向の明瞭なハケ目がみられ、炭化物が付着している。外面はタテハケのあと横方向の粗いナデ、体部外面下半ヨコハケのあとナデ。

鉢(9・10) 9は口縁部を僅かに肥厚させる。内面はナナメ方向の粗いハケ、外面はハケのあとナデ、口縁部は強いヨコナデを施す。10は胎土が明茶色土で口縁部を折り曲げ、玉緑風に肥厚させている。内面は横方向の細かいハケ、外面はナデで、細かい凹凸が残る。

瓦質土器

鉢(11) 口縁部は僅かに肥厚させる。内面はヨコハケ、外面はハケのあとナデ、指頭圧痕が残る。

羽釜(12) 鐔部分にはハケ状の強いヨコナデを施す。焼成は良好。

火鉢(13) 底部付近の破片で、底部外面には数ヶ所、高さ1m、幅約9mの脚が付く。内外面ともハケ目が残り、高台から4.5m付近に突帯が巡る。

国産陶器

鉢(14) 口縁部は肥厚している。胎土は黄茶灰色土で、口縁部以外の内外面に茶褐色と黄茶色の2色の釉を施す。

溝

6SD010出土遺物(Fig 128)

須恵器

蓋2(1) 外面中位までへら削り、内面中位までナデ、それ以外は回転ナデ。復元口径13.6m。

蓋3(2・3) 2は復元口径13.6m 口縁端部はやや長く屈曲させている。3は復元口径15.2m 内面は不定方向のナデ。外面は天井部がへら切り未調整、その他は回転ナデ。

坏c(4-14) 底部付近の破片が殆どである。復元高台径7.6-14.6m 全体的に体部下位は丸味が残り、高台は低くやや不安定である。外面底部はへら切りのあと未調整。4と6は口縁部まで残存し、そ

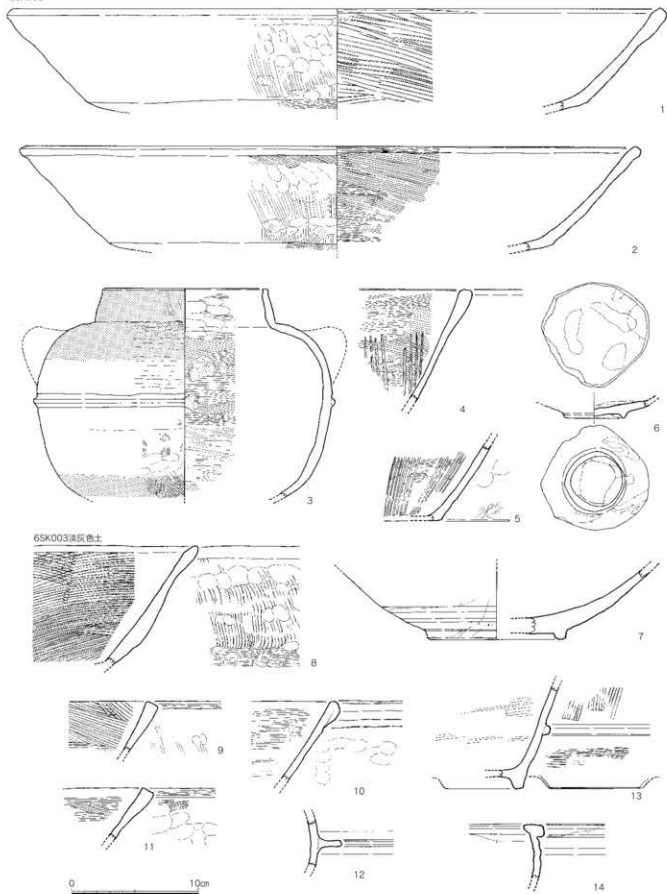


Fig 127 京ノ尾遺跡第6次調査SK003出土遺物実測図(13)

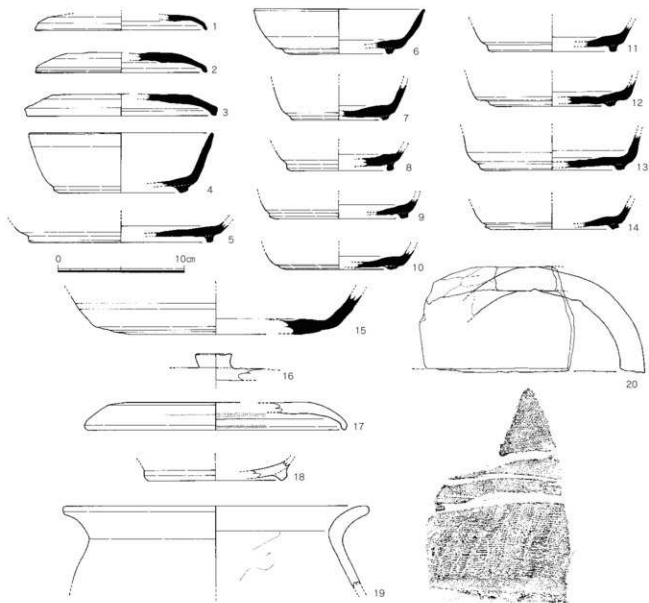


Fig 128 京ノ尾遺跡第6次調査SD01出土遺物実測図(13)

それぞれの器高は4.75mと3.55mを測る。10は焼成と還元が不良でかなり潰れた高台を貼付する。

鉢 壺(15) 底部外面はヘラ切り後僅かに不定方向のナデ、体部外面も回転ナデのあと一部に不定方向のナデ。内面は回転ナデ。

土師器

蓋(16) 逆台形の太いツツミである。外面は部分的に黒色化している。

蓋(17) 復元口径20.7m。摩滅が著しいが、内外面ともミガキが施されている。

坏c(18) 復元高台径10.6m。底部端に高台を貼付する。

甕(19) 復元口径24.2m。全体的に摩滅しているが、体部内面にはヘラ削り調整が僅かに残る。

瓦類

丸瓦(20) 外面は無文で粗くナデでいて、指紋が残る。色調は灰白色で外面の一部は燻したような黒灰色を呈する。

流路

6SX001黒灰色土出土遺物(Fig 129)

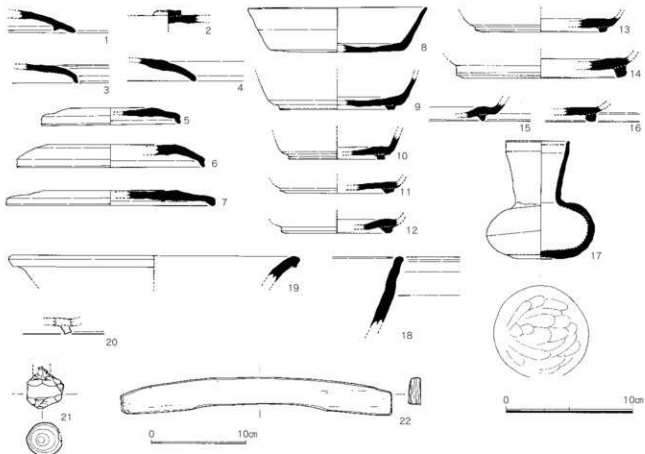


Fig 129 京ノ尾遺跡第6次調査SX00黒灰色土出土遺物実測図(13・21・22は14)

須恵器

蓋1(1) 断面三角形の低い返りが付く。内外面とも回転ナデ。外面天井部は回転ナデが他と異なりハケ状になっている。

蓋c(2) 断面方形の扁平なツマミが付く。

蓋2(3) 外面上部は回転ヘラ削り、下位は回転ナデ。内面はナデ。

蓋4(4) 内面天井部はナデ、その他は回転ナデ。口縁端部は僅かな膨らみはあるが、丸く仕上がる。

蓋3(5-7) 3点とも外面上部は回転ヘラ削り、内面ナデ。その他は回転ナデ。9は小型の蓋で口縁端部を強く折り曲げる。外面上部は未調整。内面ナデ。復元口径11.0cm。6は口縁端部を強く回転ナデしている。外面上部は回転ヘラ削り。復元口径14.8cm。7は全体的に扁平をしていて、端部も低い三角形に仕上げる。外面上部は回転ヘラ削り。復元口径16.6cm。

坏a(8) 復元口径14.2cm、器高3.5cm、底径10.6cm。底部外面はヘラ切り後雑なナデ、板状圧痕も残る。その他は回転ナデ。

坏c(9-16) 全て底部付近の破片で、復元高台径7.6-13.5cm。高台は低い台形を呈し、内面底部はナデ、その他は回転ナデを施す。14は還元焼成が甘く、胎土は灰白色、表面は淡灰色を呈する。15の高台は三角形に近い形状を示す。16は土師器のような色調に仕上がっている。

小壺(17) 復元口径5.0cm、器高9.3cm。内外面とも回転ナデで、外面底部は不定方向の強いナデが施され、明瞭にその痕跡を残す。

鉢(18) 外開きの直口縁で、調整は内外面とも回転ナデ。

甕(19) 復元口径23.0cm、内外面とも回転ナデ。

土師器

坏c(20) 土師器の供膳具の出土は少ない。この坏も小さな破片で、高台部分回転ナデ、内面ナデ調整が確認できる。

木製品

木錘(21) 槌の子とも呼ばれる編み具。径37cmで半分欠損している。小口とくびれ部には明瞭な加工痕が残る。

加工木製品(22) 長さ287cm、幅28~31cm、厚さ13cm。全面加工しているものの加工痕は確認できないが、材そのものの残りは良い。アーチ状に加工されていて、家財や農具の部材の一部とみられるが用途は不明である。

6SX001黒色粘土出土遺物(Fig.130~132)

須恵器

蓋c(1~5) 天井部の中位もしくは2/3まで回転ヘラ切り後未調整。扁平なツمامが付く。内面も同様の範囲でナデ、それ以外は回転ナデ。4・9はツمامこそ欠落しているが、ツمام接合のためのヨコナデが確認できる。復元口径124~158cm、器高16~255cm。

蓋c(6) ヘラ切り後に未調整のまま扁平な宝珠ツمامを付ける。

蓋c(7) 口縁部付近の破片のため、ツمامが付くかどうかは不明。

坏c(8~11) 底部外面はヘラ切り後未調整。8はやや歪んでいる。内外面とも熱によって器面が荒れている。復元口径108cm、器高34cm、高台径78cm、9はやや丸く高い高台で、高台径98cm、10は復元高台径100cm、11はやや大きい坏で、低い高台を付ける。底部ヘラ切り未調整、その他は回転ナデ。内面は灰白色だが、外面は燻したような黒灰色を呈する。高台径138cm。

高坏(12・13) 12は坏部で、口縁端部を外反させる。復元口径198cm、13は脚部で、坏部内面は不定方向のナデ、その他は内外面とも回転ナデ。

坏蓋(14・15) 2点とも外面中位まで回転ヘラ削り。口縁端部は丸く仕上げている。14は外面上位を回転ヘラ削りしている以外回転ナデ。口径142cm、器高47cm、15は外面屈曲部に浅い沈線が巡る。内面頂部は当て具をナデ消している。復元口径136cm、器高39cm。

高坏蓋(16) 全体的に丸味があり、外面頂部にツمامが付く。口縁端部は丸く仕上げる。口径144cm、器高46cm。

坏身(17~20) 口径112~120cm、器高42~50cm、17は口縁部内側に浅い沈線を、18は沈線の名残として斜めに仕上げています。18の底部外面の一部はヘラ切り未調整。19・20は内面当て具を粗くナデ消している。体部外面は中位まで回転ヘラ削り。20は立ち上がりが高い。

甕(21~23・31) 21~23は復元口径178~192cm、頸部付近の厚みが最も薄く、口縁部は折り曲げ玉縁状に仕上げる。内外面とも回転ナデ。31は底部と体部の2つの破片で、胎土や調整から同一個体とみられる。変形している口径205cm、復元器高約36cm、底径98cm、頸部内面は回転ナデ、外面には弱いカキ目状の痕跡がみられる。体部外面は平行叩きのあと粗く表面をナデる程度の回転ナデを施し、幅0.07cm毎に沈線が巡っている。内面は当て具痕が残る、その後4回ほど雑にヨコナデを行っている。外面底部は使用したことによって摩滅している。

大甕(32) SX00の岸辺で、破片がまとまった状態で出土した。復元口径438cmで、ここでは頸部付近しか掲載していないが、これに接合こそできなかったが、大きな胴部の破片もあり、その復元径は約74cmを測る。頸部外面には櫛目の波状文が2条沈線を挟んで巡っている。その他は回転ナデ。内面に偶然工具が当たったような沈線が数条みられる。胴部の外面は叩き、内面は同心円の当て具痕跡が残る。

土師器

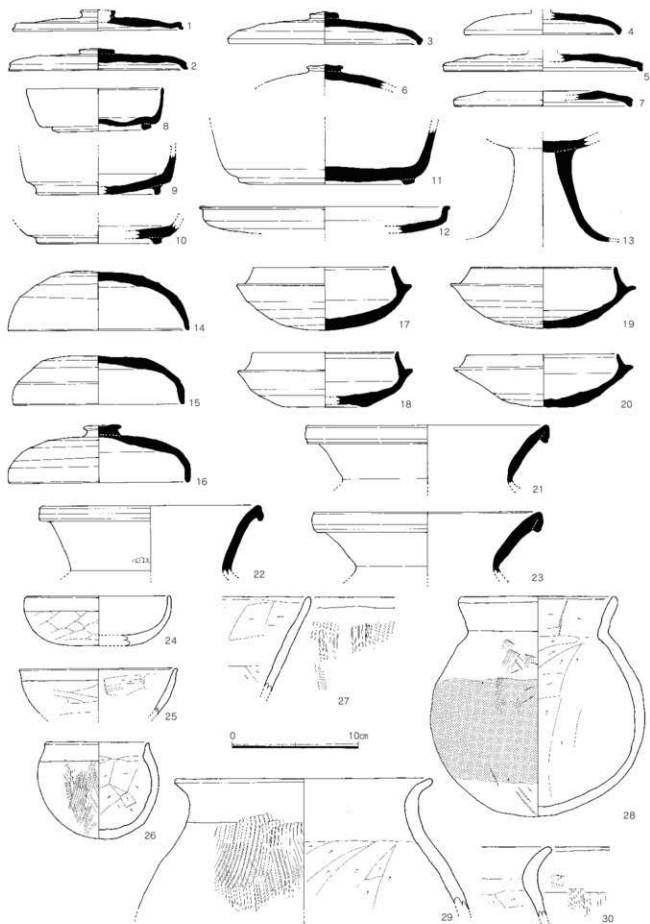


Fig 130 京ノ尾遺跡第6次調査SX00黒色粘土出土遺物実測図1(13)

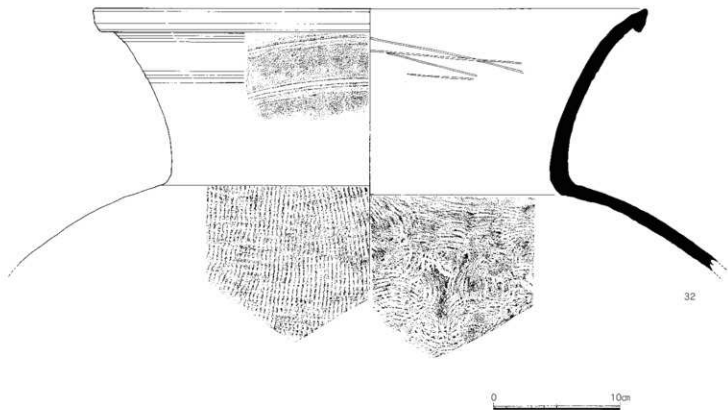
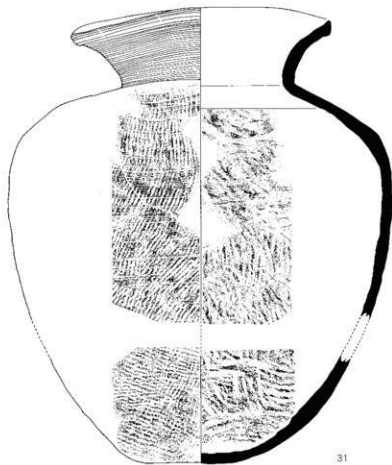


Fig 131 京ノ尾遺跡第6次調査SX00黒色粘土出土遺物実測図2(13)

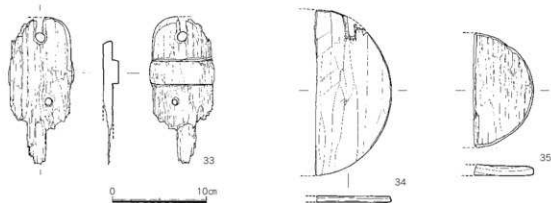


Fig 132 京ノ尾遺跡第6次調査 SX00 黒色粘土出土遺物実測図3(14)

坏(24・25) 24は丸味のある器形で、外面調整は手持ちヘラ削り。内面は摩滅しているがナデか。口径11.5cm、器高3.9cm。25は口縁端部が僅かに外反する。外面は手持ちヘラ削り、内面は黒色で摩滅しているがヘラミガキか。復元口径12.6cm、器高3.6cm。

小壺(26) 口縁部はヨコナデし、細く立ち上げている。外面は細かいハケ、内面はヘラ削り。口径8.3cm、器高7.7cm。

鉢(27) 外面タテハケ、内面ヘラ削り。口縁部はヨコナデで、丸く仕上げる。

甕(28～30) 28は体部中位を中心に煤が付着する。口縁部内面が横方向の小刻みなナデ。体部内面は上に引き上げたヘラ削りで、砂粒を多く引きずった痕跡は確認できるが、ケズリの単位はやや不明瞭。外面はタテハケで、その当たり始めの痕跡だけが確認できる。復元口径12.6cm、器高17.4cm。29は丸味を持ちながら口縁に向かって外反する。焼成は良好で、調整が明瞭に残る。口縁部の内外面ヨコナデ、体部内面は縦方向のヘラ削り、外面は口縁部ヨコナデのあとタテハケを行っている。復元口径20.4cm。30は外面タテハケ、内面横方向のケズリ。

木製品

下駄(33) 現存長15.5cm、幅6.9cm、厚さ1.0～1.7cm。腐食が著しく欠損も目立ち、当初の大きさを推測するのは困難である。2ヶ所円孔が残っているが、鼻緒を通す穴と節穴とみられる。歯の部分は削り出して作られている。

曲物底板(34・35) 2ヶとも半分欠損する。内外面ともケズリ調整している。34は径27.5cm、厚さ0.6cm。35は径12.1cm、厚さ1.2cm。

その他の遺構

6SX008出土遺物(Fig 133)

窪み状に検出された遺構であるが、埋土が後述する黒灰色土とほぼ同じとみられる。検出遺構どおり報告するが、遺構面を覆う包含層である黒灰色土の遺物と同一のものとみて問題ないとみられる。

土師質土器

鍋(1・2) 2ヶとも口縁部で、内面を斜めにして端部を僅かに細く仕上げる。外面調整は相いナデで、煤が付着する。内面はヨコハケ。

火鉢(3) 肥厚した口縁部で、上面を平坦に仕上げる。内外面横方向のハケ。

瓦質土器

火鉢(4) 全体的に器面は摩滅している。外面には低い2条の突帯の間に花文のスタンプを施している。内外面とも磨滅が著しい。

須恵質土器

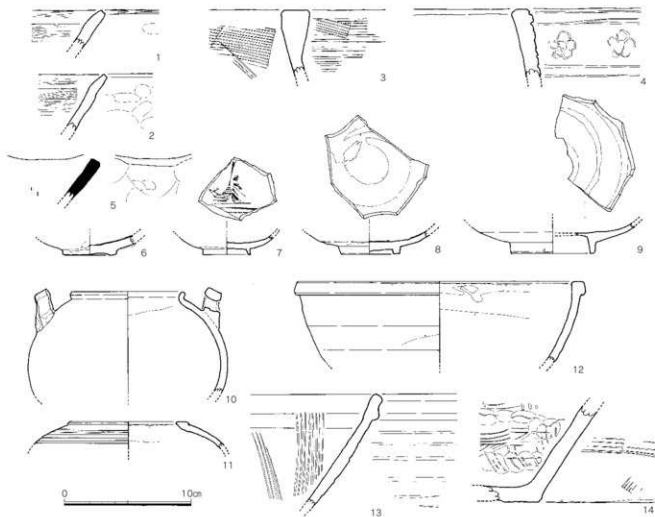


Fig 133 京ノ尾遺跡第6次調査SX008出土遺物実測図3(13)

鉢(5) 片口の鉢で、不明瞭だが内面に摺り目のような痕跡がみられる。内外面とも回転ナデ。
国産陶器

皿(6~8) 6は低い高台で復元高台径42cm、釉は灰白色で大きな貫入が入る。現存範囲では外面は施釉されていないが、僅かに釉垂れがみられる。7は京焼風で、明白色土に黄色味を帯びた透明釉を、高台付近を除いて施釉している。細かい貫入がみられる。内面には山水を描く。高台径38cm、8の釉調は内面が緑青色釉で、外面が薄い緑灰色釉である。高台付近を除いて施釉され、内面は施釉後、輪状に釉を掻き取って、目跡も残る。高台径47cm。

皿 鉢(9) 釉はやや緑色味を帯びた茶黄色釉で、内外面とも施釉。内面は施釉後、輪状に釉を掻き取っている。内面には黄白色釉で輪を描いている。高台置付は露胎。復元高台径68cm。

土瓶(10・11) 10は口縁部を短く屈曲する。内外面とも施釉されているが、外面と口縁部内面は黄白色釉で、その他の内面は暗茶色釉を施釉する。把手は釉下に指頭圧痕がみられる。復元口径92cm。11は土瓶の口縁部とみられ、口縁部は平坦に仕上げ、復元口径96cm、外面と口縁部内面が黒色釉で、その他は露胎で回転ナデ。

鉢(12) 口縁部を断面方形に仕上げる。胎土は赤茶色土で、光沢のない白色釉を施釉。口縁上部と内面の一部、そして体部下半が露胎。復元口径230cm。

摺鉢(13) 内外面回転ナデ。内面には8本を一単位とする摺り目を施す。内外面とも光沢のない茶褐色釉を施す。

甕(14) 外面は光沢のない茶褐色釉で、僅かにハケ目が確認できる。内面と外面底部は露胎で、底部は明橙色を呈する。内面は黒灰色を呈し、叩きのあとナデているが、粘土紐痕や叩き痕が確認できる。

黒灰色土出土遺物(Fig 134~138)

須恵器

蓋1(1~5) すべて口縁端部の小破片であるが、現存部分で内外面とも回転ナデ。内面の返りが口縁部とはほぼ同じ高さである。復元口径13.8~15.6cm。

蓋2(10) 口縁部を緩やかに折り曲げている。外面中位までヘラ削り。復元口径15.0cm。

蓋3(6・7) 2点とも外面天井部の2まで回転ヘラ削り。6は復元口径11.2cmとやや小さい。7はつぶれた扁平のツマミを付ける。復元口径13.8cm。

蓋c(8) 回転ナデの外面天井部にヘラ記号がある。

蓋3(9) 扁平で口縁端部も低く丸く仕上げている。天井部は回転ヘラ削り。復元口径15.8cm。

内面底部は不定方向のナデ。その他は回転ナデ。復元口径16.2cm。器高4.2cm。底径12.5cm。

坏c(12~25) 復元口径12.0~16.5cm。復元高台径8.0~11.4cm。高台は小さく低い方形で、19のように潰れた高台もある。口縁まで残るものうち1を除いた4点は器高が低く3.45~3.8cmである。19は器高3.45cmと低く体部と底部との境が丸味を帯びる。17は還元してなく、土師器のような仕上がりを示す。18は底部ヘラ切り未調整で、方形だが凸凹した不整形な高台が付く。

大椀a(26) 体部と底部との境は丸味を帯びる。外面底部はヘラ切り後粗いナデ。内面底部は回転ナデのあと不定方向のナデ。復元底部21.4cm。

鉢a(27) 丸味のある体部で、口縁部はつまみ出し、体部よりやや薄くなっている。内外面とも回転ナデ。復元口径19.4cm。

鉢(28) 口縁部を玉縁状に肥厚させる。

高坏(29~31) 29は坏部。復元口径15.8cmとやや小さい。外面はヘラ削り、内面は回転ナデ。30・31は脚部で、内外面ともヨコナデ。30は内外ともに自然釉が付く。

甕(32~34) 32・33は口縁部を折り曲げ肥厚させている。口縁部の内外面は回転ナデ。34は大甕で、内外面とも回転ナデ。口縁部は外面を肥厚させ沈線と突帯が巡る。

壺(35) 胎土は他の須恵器と異なり白色砂粒を多く含み、焼成時のものとみられる暗紫色粒が内外面に散らばっている。内外面とも回転ナデ。復元底径6.8cm。

土師器

坏c(36・37) 数少ない土師器の供膳具。内外面に僅かにミガキが確認できる。

土師質土器

鍋(38・39) 38は口縁部を肥厚させ、口縁部内面をやや斜めに整形する。外面はタテハケのあとナデ押し、内面はヨコハケ、外面には煤が付着する。39は口縁部を僅かに肥厚させ、口縁部内面をやや斜めに整形する。内面ヨコハケ、外面雑なナデで下方にタテハケ。外面には煤が付着する。

鉢(40) 口縁端部はやや丸く仕上げる。外面タテハケ、内面ヨコハケ。

播鉢(41) 内面はヨコハケのあと本単位で摺り目を施す。また、内面には煤が付着する。

瓦質土器

鉢(42) 内外面とも黒灰色をした丸味を帯びた器形で、内外面ともミガキのような浅いヨコハケ、外面中位に雑なナデを施す。復元口径22.2cm。

播鉢(43) 底部付近で内面はヨコハケのあと本単位で摺り目を施す。内面底部付近は使用によ

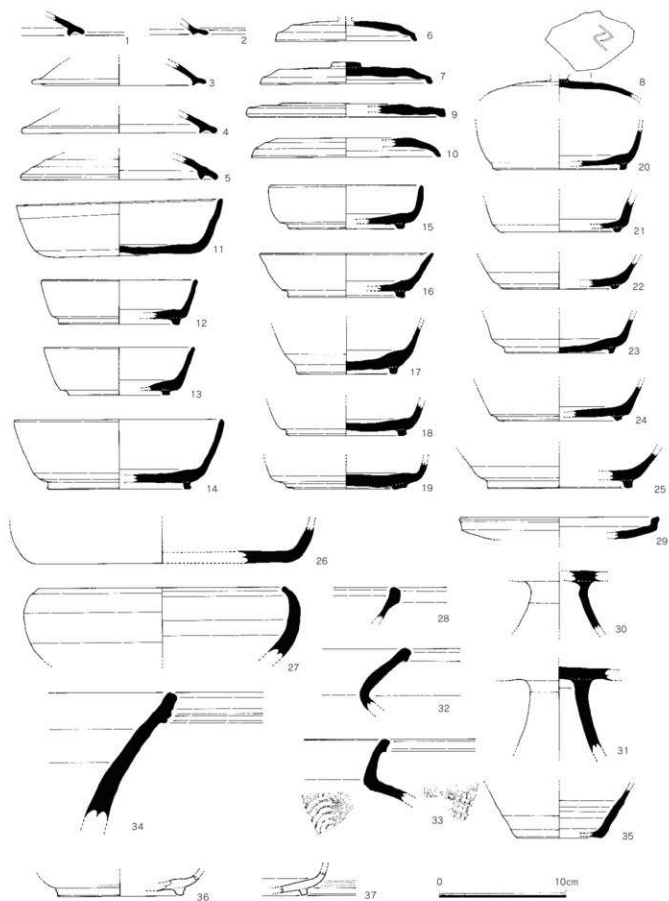


Fig 134 京ノ尾遺跡第6次調査黒灰色土出土遺物実測図1(13)

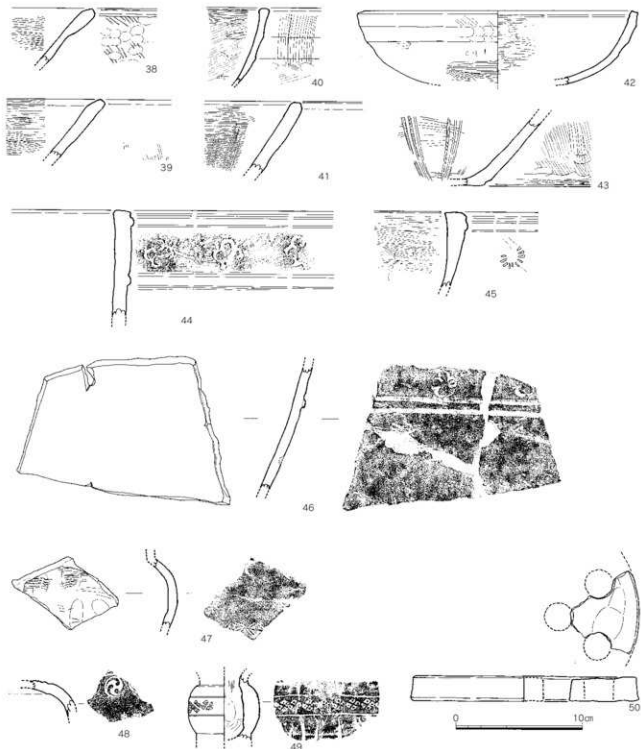


Fig 135 京ノ尾遺跡第6次調査黒灰色土出土遺物実測図2(13)

て磨滅している。外面はタテハケ。

火鉢(44-46) 44は口縁部に2本の突帯を巡らせ、その間に5弁の花文スタンプを施す。口縁部内外面とも磨滅が目立つ。45は口縁部に向かって肥厚させている。内面ヨコハケ、外面ヘラ削り、口縁部外面に突帯を巡らせ、その下に花文スタンプを施す。46は44と同様に突帯を巡らせ、その上に5弁の花文スタンプを施す。内外面ともヨコナデ。外面は黒灰色、内面は淡灰色を呈する。

湯釜(47-48) 47は体部中位に菱形に十字のスタンプを施している。内面はヨコハケのあと指押さえ。破片の一部に把手の立ち上がりが僅かに残っている。48は肩部に巴文のスタンプを施す。

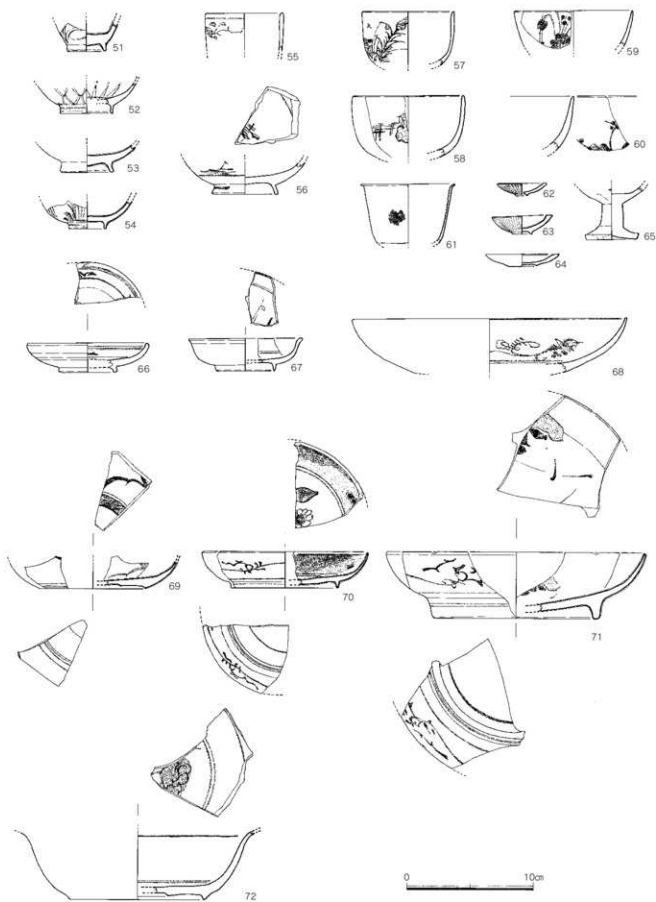


Fig 136 京ノ尾遺跡第6次調査黒灰色土出土遺物実測図3(13)

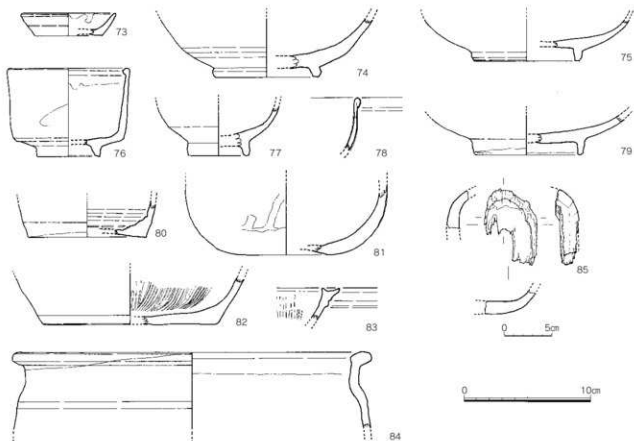


Fig 137 京ノ尾遺跡第6次調査黒灰色土出土遺物実測図4(13 89は 14)

華瓶(49) 体部は直径5.7cmで、外面に捺の沈線の間に、小さな菱形を4つ並べたスタンプを巡らせている。内面はナデで、指紋が残っている。色調は外面黒灰色、内面淡明灰色を呈する。

七輪(50) サンの一部で、厚さ2.0cm、復元径18.0cm、径約2.2cmの円孔が開けられている。

肥前系磁器

椀(51~60) 51は外面に草花文。復元高台径3.0cm、52は復元高台径4.2cm、淡緑青色で外面に二重の網目文、内面に一重の網目文。中央に菊花文を描く。53は乳白色の釉を高台畳付を除く全面に施釉する。復元高台径4.2cm、54は呉須で外面に草花文を描く。復元高台径3.0cm、59は呉須で草花文や圏線を描くが、磨滅している。復元口径6.2cm、58は内面に「壽」と描いている。復元高台径5.2cm、57は呉須で外面に草花文を描く。復元口径7.3cm、58は外面に山水画風の文様を施す。復元口径8.8cm、59は復元口径9.4cm、60は外面に草花文を施す。

皿(66~71) 66は内面口縁部付近の重ねの圏線を施す。内面底部は釉掻き取り。復元口径9.6cm、器高2.35cm、復元高台径4.6cm、67は復元口径9.1cm、器高2.6cm、復元高台径4.8cm、68は内面に草花文。復元口径21.8cm、69は蛇ノ目高台でその周囲の釉を剥ぎ取る。復元底径8.4cm、70は呉須で外面に唐草文、内面は内面底部に花文、その周囲に呉須の濃淡を使い分け、雲のような文様を描く。復元口径13.2cm、器高2.9cm、復元高台径8.6cm、71は呉須で外面に唐草文と圏線を、内面にも文様を施す。復元口径20.6cm、器高5.6cm、復元高台径13.2cm。

鉢(72) 蛇ノ目高台でその周囲の釉を剥ぎ取る。内面底部にやや緑がかった青色釉を用いて文様を描く。復元底径10.6cm。

小坏(61) 外面にコンニャク印が押されている。口縁端部が僅かに外反する。復元口径7.4cm。

紅皿(62~64) 62は復元口径4.0cm、器高1.0cm、63は口径4.8cm、器高1.4cm、64は復元口径5.9cm。

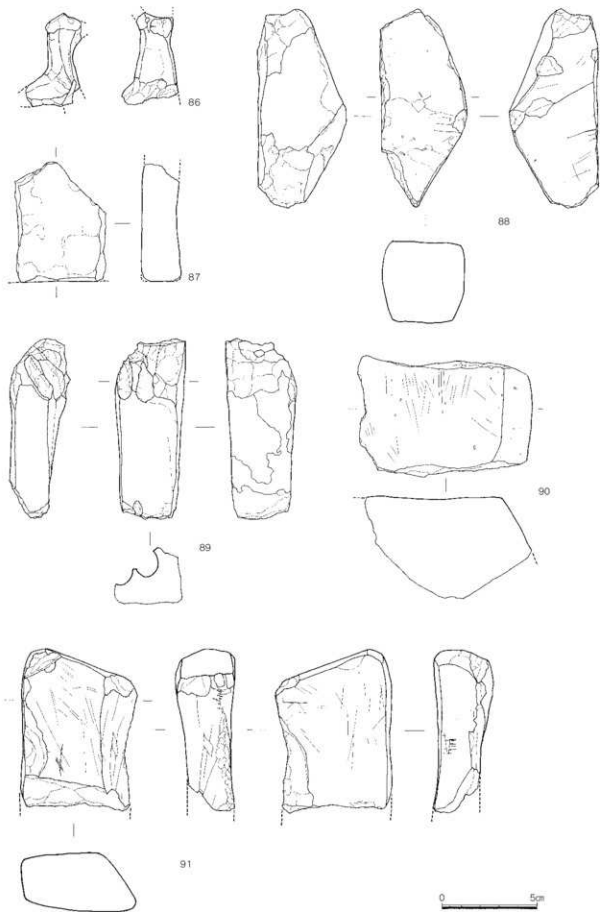


Fig 138 京ノ尾遺跡第6次調査黒灰色土出土遺物実測図5(12)

器高 0.9m

仏飯器 (65) 外面に僅かに薄青色の文様が確認できる。底径 4.0m

国産陶器

皿 (73-75) 73は小皿で、外面底部は霏胎で回転ヘラ削り。その他は緑味の茶褐色釉を施す。復元口径 7.6m、器高 1.8m、復元高台径 5.3m。74は内面に暗茶色釉を薄く施す。外面は茶灰色の霏胎で回転ヘラ削り。内面は使用によってツルツルになっている。復元高台径 8.6m。75は内外面施釉し、白土化粧をかけハケ目状に仕上げ、透明釉をかけている。高台臺付と外面底部は霏胎で回転ヘラ削り。復元高台径 8.8m。

火入 (76) 胎土は灰紫色で体部外面と口縁端部に暗茶緑釉を施す。底部は霏胎。内面は回転ナデ、高台付近は回転ヘラ削り。復元口径 9.7m、器高 7.0m、復元高台径 5.1m。

椀 (77-78) 77は内外面とも淡緑灰色釉を全面施釉。復元高台径 5.8m。78は口縁部を玉縁状に肥厚させる。内外面とも暗緑茶色釉に白土を掛け、ハケ目状に仕上げる。

壺 (79-80) 79は内外面とも黒褐色釉で、内面釉を輪状に拭き取っている。復元高台径 8.6m。80は外面のみ暗茶色釉を施釉。内面は強い回転ナデで明瞭な稜線が付く。外面底部は回転糸切り。復元底径 9.4m。

土瓶 (81) 底部で外面下半は霏胎、上位は黄灰色釉に一部茶緑色釉が線状に掛かっている。内面は暗茶色の釉が掛かる。

播鉢 (82-83) 82は内面に本単位の摺り目を施す。摺り目は使用によって研磨されている。復元底径 13.4m。83は暗褐色の口縁端部で、外面には僅かに突帯が巡り、端部は返りを作り出している。内面には僅かに摺り目が確認できる。

甕 (84) 内外面とも全面施釉。釉は茶色と黒褐色釉が掛けられ、口縁部付近と接合しないものの体部の破片にも白色釉が施されている。復元口径 28.4m。

木製品

皿 (85) 欠損・腐食が目立つが、皿のようなものと推測される。内面には赤褐色の漆が塗られている。

土製品

人形 (86) 犬を形作ったもので、脚部と頭部の一部を欠損する。呪いで使われることが知られ、欠損部は意図的に行われた可能性が高い。高さ 4.9m、横 2.9m、幅 1.2m。

石製品

砥石 (87-91) 87は砂岩製で、2面で研磨痕が認められる。大きさは 48 63 21m。88は3面で明瞭に研磨痕が認められ、その他の面でも僅かに研磨した痕跡がみられる。大きさは 105 45 43m。89は泥岩製とみられ、断面方形状に研磨され、両端部には3ヶ所と1ヶ所の穿孔が開いている。大きさは 95 33 30m。90は砂岩製で、2面で研磨痕が認められる。大きさは 65 90 53m。91は泥岩製で、4面に研磨痕が認められる。大きさは 86 61 31m。

茶灰色土出土遺物 (Fig 139)

土師質土器

鍋 (1) 口縁部で僅かに肥厚させ、内側を斜めに仕上げる。内面は細かいハケ、外面は粗いハケでその後ナデを施す。

播鉢 (2) 片口で、外面はナデ、内面はヨコハケで僅かに摺り目が確認できる。

国産陶器

壺 (3-4) 2点とも薄い器壁で、底部は上げ底風に作られている。体部中位以下は霏胎。3は濃い緑

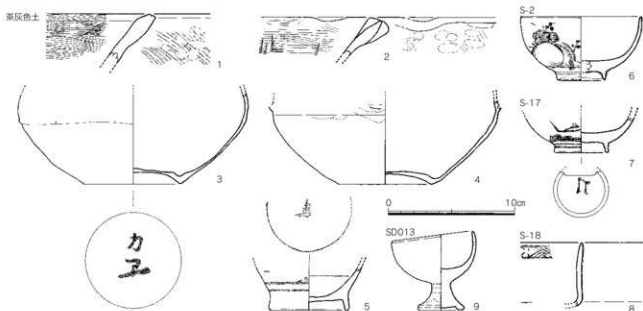


Fig 139 京ノ尾遺跡第6次調査その他の遺構出土遺物実測図(13)

灰色釉を施し、外面底部はヘラ削りの後ナデで、「カエ」という墨書がある。内面は露胎で底部の一部に釉が垂れている。復元底径76cm。4は内面が露胎で回転ナデ。外面下半は回転ナデで、全体的に煤が附着している。復元底径74cm。

肥前系磁器

椀(5) 広東椀で、淡い呉須で内外面に圈線を描き、内面底部に「壽」と描かれている。復元高台径64cm。

その他の遺構出土遺物 (Fig 139)

北側の上段面で出土した主要遺構以外で出土した遺物で、現在の大佐野地区形成を知る手がかりとなる資料を掲載した。

肥前系磁器

椀(6-8) 6は高台置付以外は施釉されている。体部外面に呉須で梅文を施す。底部外面に僅かに銘がみられる。18世紀代。復元口径96cm 器高51cm 高台径38cm S 2出土。7は高台置付以外は施釉されている。外面下半と外面底部に薄い藍色の文様を施す。高台径43cm S 17出土。8は口縁部の内面に淡い呉須で四方禪文を描く。また、内面底部にも僅かに文様が確認できる。S 18出土。

仏飯器(9) 坏部はやや傾いている。釉は淡緑白色で、脚部下半は露胎で赤茶色を呈する。口径64cm 器高63cm 底径36cm SD013出土。

(5) 小結

今回の調査でわかったことは以下の通りである。

- ・ 6世紀末頃と8世紀前半～中頃の時期に埋没した流路 (SX001) を検出。
- ・ 流路 (SX001) の遺物は須恵器や土師器の貯蔵具が多く、土師器の供膳具が極端に少ない。
- ・ 中世末～近世初頭の廃棄土坑 (6SK003) の検出。
- ・ 7世紀後半頃の掘立柱建物の検出。

調査区の半分を占める流路からは、6世紀代の遺物のほかに奈良時代の遺物が多く出土した。また、掘立柱建物 (6SB005) は出土遺物が少なく時期の特定は難しいが、7世紀後半頃と推測される。調査地の西側に所在するカヤノ遺跡では、7世紀末～8世紀初め頃の掘立柱建物群が見つまっているため、大佐

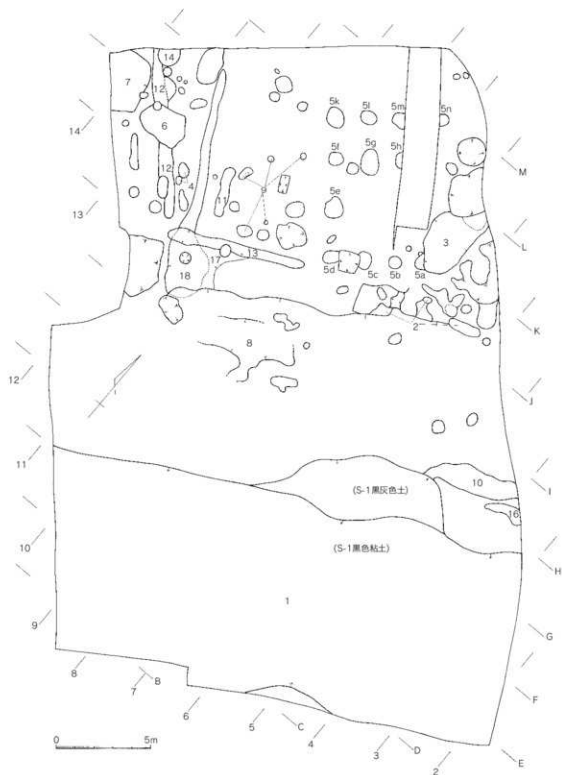


Fig 140 京ノ尾遺跡第6次調査遺構略測図(1200)

野川沿岸は氾濫原も広がっており、遺構の残りは良好とは言えないが、カヤノ遺跡を含む南岸一帯には、奈良時代の集落が展開していた可能性が推測される。

その後は平安時代の遺物が全くなく、中世になって廃棄土坑とみられる6SK003で土師質土器の鍋を中心とした中世末～近世初頭の調理具がまとまって出土している。また、調査地の中段、いわゆる黒灰色土のところでは近世の遺物が多い。このことから、現在の集落の原型は中世になってからできたのではないかと考えられる。

Tab 17 京ノ尾遺跡第6次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	6SX001	竪溝	6世紀末・8世紀前～中頃	
2		土坑	近現代	F7
3	6SK003	土坑 北側の擾乱遺物を含む	中世末～近世初頭	K7
4		ピット群	近現代?	I12
5	6SD005	削立柱遺物	7世紀後半?	
6		土坑	近現代	I12・13
7		1坑 紫茶色粘土と茶灰色土の混合層	近現代	I13
8	6SX008	窪み 淡灰色土	18世紀頃	G8・9
9		ピット群		I10・11
10	6SD010	溝 暗灰色粘土	8世紀前半～中頃	H4
11		溝 灰茶色土		I11
12		溝 S-7と同じ埋土		
13	6SD013	溝 灰茶色土、石炭じり		H10・19
14		土坑	現代	I13
16		溝 暗灰色土		H3
17		土坑		H11
18		土坑 S-17～18		H11

Tab 18 京ノ尾遺跡第6次調査木製品一覧表

S-1黒灰色土

表上番号	種類	タテ	ヨコ(径)	厚さ	状況	遺物番号	地区番号	図版番号
—	木鐸	4.5	3.7		半分欠損。	R-022	F5	129-21
—	加工材	28.7	2.8～3.1	1.3	本文に記載。	R-021	F5	129-22
—	板材	10.4	11.2	2.2	小口は切断。縦によるものか?	—	F5	—

S-1黒色粘土

表上番号	種類	タテ	ヨコ(径)	厚さ	状況	遺物番号	地区番号	図版番号
—	曲物底板	27.5	7.9	0.6	半分欠損。	R-034	E5	132-34
—	曲物底板	12.1	6.4	1.2	半分欠損。	R-035	E5	132-35
—	下駄	15.5	6.9	1.7	腐蝕目立つ。	R-036	—	132-33
—	加工材	7.0	1.5～2.0	1.0	棒状で縁やかな切り込みのようにみえる。	—	—	—

黒灰色土

表上番号	種類	タテ	ヨコ(径)	厚さ	状況	遺物番号	地区番号	図版番号
—	皿	8	5.6	2.5	摩滅り。	R-094	E11	137-85

7. 京ノ尾遺跡 第7次調査

(1) 調査経過

調査地は太宰府市大字大佐野字京ノ尾339-343佐野区画整理事業に伴って、2004平成16年7月2日に試掘調査を実施し遺構を確認した為、継続して本調査を開始した。開発対象面積は635.63㎡、調査面積は395㎡である。

調査は平成16年7月2日から10月6日まで行い、長直信が担当した。調査区は大佐野川右岸の段丘上に位置し、調査区南東部では京ノ尾遺跡第3、4次調査、南西部では第6次調査が行われている。調査前は、調査区東半分側に納屋が建っており、それ以前の昭和30年までは調査区全体が宅地であった。

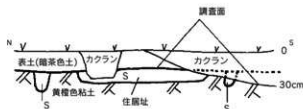


Fig 141 京ノ尾遺跡第7次調査土層模式図

(2) 基本層位 (Fig141)

表土 暗茶色土を20cmほど下げると黄橙色粘土が面的に分布し、これより10数cm下には淡灰色砂質土が堆積していた。遺構は全てこれらの面に切り込む。調査区北半分ではこの黄橙色の粘土が、ややレベルが下がる南半分では淡灰色砂が堆積していた。調査区南側はアスファルトを敷いていたと聞いており、南半分は大きくカクランを受けていた。また、調査区全体にも深いカクランがみられる。古墳時代の遺構は調査区北側でのみ検出した。

(3) 検出遺構

竪穴住居

7SI005 (Fig143)

調査区北東で検出した方形プランをもつ遺構。作り付けカマドの存在と柱位置から竪穴住居と認識した。西側の大部分が削平を受ける。南北4.2m東西2.8mが残るが、カマドを中心に復元すると東西4.0mのほぼ正方形プランとなり推定床面積は16.8㎡。床面までの深さ0.05m、住居掘方の深さは0.15mほどが残る。暗灰色土を除去すると、暗黄色土を検出。暗黄色土検出段階で直径20cmほどの柱穴・イと住居の掘方に沿って直径5cmほどの小ピット群を検出したことから、暗黄色土を床土と判断した。ピットはカマド付近や東側壁面に沿って検出した。住居の掘方の外で検出した小ピットは住居に伴うものかは不明である。0.05~0.15mの厚さで堆積する暗黄色土を除去すると、不整形なピットや40cmほどのやや大きめのピットを検出した。不整形なピット群は配置に規則性は見られなかった。柱穴の直下でSI005aとしたやや大型の円形プランのピットを検出し、貼床以前の柱穴の可能性を考えたが、周囲に展開する状況ではなく柱痕も検出できなかった。その後、住居の北西隅で暗黄色粘土が埋土の深いたまりを検出(「落ち込み」として調査)し、これを取り除いた状態で完掘とした。北壁中央で検出したカマドは、検出段階で焼土と支脚と思われる扁平な花崗岩以下、支脚石が確認できたので、注意して掘り下げた。カマド本体は、住居の床面の上に、しまりのある暗黄色粘質土、暗茶色土を用いて構築している。東袖の内側は被熱し赤く変色していた。カマドに伴うものか不明だが、焼土及び炭片を含む



Fig 142 京ノ尾遺跡第 次調査遺構全体図 (1 150)

10mほどの小ピットがカマド本体に切り込んでいた。カマド焚口部分の底面は北壁に向かって床面より3~4mほど窪む。焼土は、支脚石より手前に分布し、焼土除去後に小ピットを検出した。支脚石は、カマド内埋土を浅く掘り込んで設置する。カマドを除去すると、暗灰色砂を埋土とする20m² 10mほどのピットを検出した。遺物は埋土中より須恵器・土師器片が多く出土したがどれも破片資料である。また、鉄滓と焼土塊が ぼろぼろ出土した。北西部柱穴 7SI05a 付近の床面直上で「暗灰色土」として取り上げた須恵器坏身が出土しており、住居埋没以前の遺物と判断した。特記事項として暗灰色土中に南西隅付近で検出した白色物質がある。南北0.7m、東西0.5mほどの範囲で埋土に張り付いたような状況で出土した(これについてはV 30分析結果参照)。

7SI015 (F 図143)

調査区南東部で検出。南半分が大きく攪乱を受ける。作り付けカマドの存在と柱位置から竪穴住居と認識した。攪乱が多く地山に近似した埋土のため検出手間取ったが、検出時は黄白色土の上に暗茶灰色土が堆積した状態で遺構プランを確認した。暗茶灰色土を除去後、黄白色土を面的に検出。この面で柱穴を東西に2本検出したため、黄白色土上面を床面とした。したがって、プラン検出時点で、埋土の暗茶灰色土と同レベル面で検出した黄白色土部分 西側隅付近は床面が一段高い状態となる。東西4.0m、南北は3.0mほどが残る。7SI05と同様、床面に切り込むピット群がカマド周辺で見られるが、同様のピットが南側でも検出できたことから、根拠は薄いが南北は少なくとも4.6mはあった可能性があり、推定床面積は18.4m²ほどと考える。床面、住居堀方の深さは、それぞれ0.1m、0.15mを測る。西側隅や東側壁は不定形である。黄白色土除去後、不定形のピットを検出したが、規則性は見られなかった。カマドの埋土からは、炭片・焼土ブロックと供に土師器の襷または甔の胴部片が出土した。焚口部は、床面より10mほど掘り下がる。カマドの東袖は甔または甔の口縁部が出土した7SX03に破壊されている。カマドは白色砂礫を多く含んだ土で構築される。カマド除去後、起伏の多い凹凸した面と小ピットを検出した。7SI05と同様、カマド構築の際に埋め殺されている。遺物は非常に少なく破片ばかりで、図化できたのは埋土中で出土した土師器襷、焼土塊のみである。

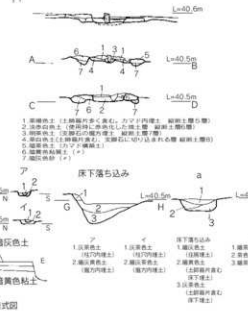
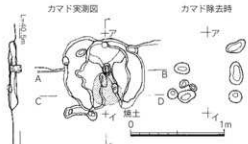
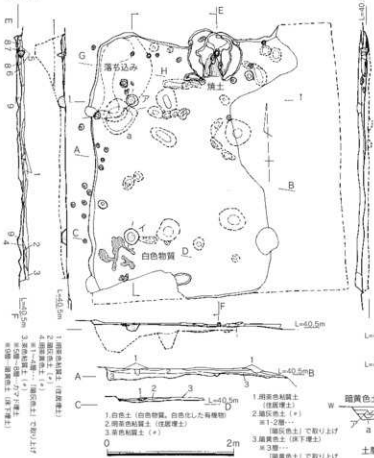
7SI020 (F 図144)

調査区中央部で検出。方形プランをもち、作り付けカマドと柱穴の存在から竪穴住居と認識した。東側壁の一部が7SI019に切られ、西、南側も削平を受ける。東西、南北とも11.0mが残存するが、柱位置などからプランを復元するとおよそ4.8m² 4.8mの正方形プランとなる。推定床面積23.04m²。床面、住居堀方の深さは、それぞれ0.05m、0.15mを測る。プラン検出後埋土の暗茶色土を除去すると、北側で灰緑色土、南側で地山の灰色土を検出した。それぞれ柱穴と思われるピットを確認したのでこの面を床面とした。したがって、床面の貼床は全面にはなく、北側のみに施工したと考えられる。柱穴は4本確認できたが柱間が不揃いである。直径0.1~0.15mの柱痕を確認した。灰緑色土を除去すると、ピットや不定形な遺構を検出した。柱の掘方らしき深めのピットがあるが、周囲に展開しない。最終的に住居の掘方は北側が0.2mほど深くなる。カマドは、焚口と裾の一部を残して大部分が削平される。焚口前方部に焼土が残り、東袖内側に被熱した痕跡がみられる。カマドは床面形成後に黄白色土を用いて構築される。他の住居同様、カマド除去後に小ピットが見られた。遺物は、7SI019同様非常に少なく破片のみであり、住居に直接伴う遺物は皆無である。埋土中の資料だが、唯一時期を推定できる口縁部の立ち上がりの高い須恵器坏身が出土した。5m北側に位置する7SX025「暗茶色土」中の坏身と接合した。

7SI040 (F 図144・145)

調査区北西検出。方形の掘方をもち、作り付けカマドや柱穴の存在から竪穴住居と認識した。南側の

7S1005



7S1015

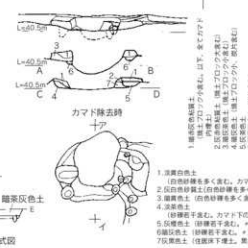
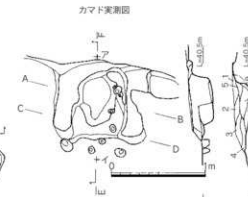
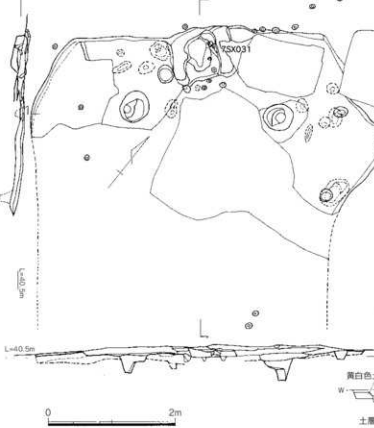
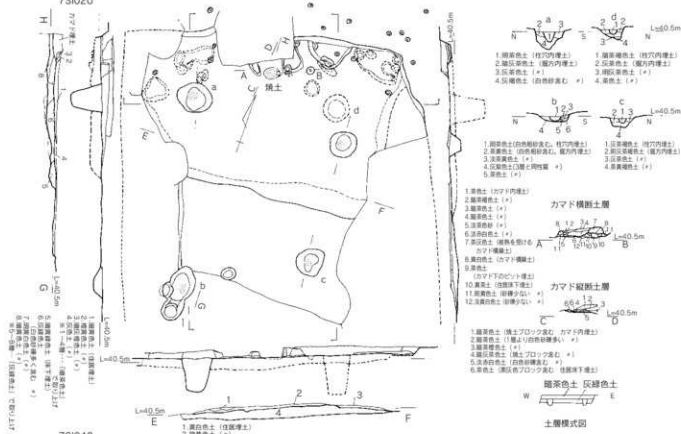


Fig 143 京ノ尾遺跡第 次調査 SID05 015 遺構実測図 (14Q 160)

751020



751040

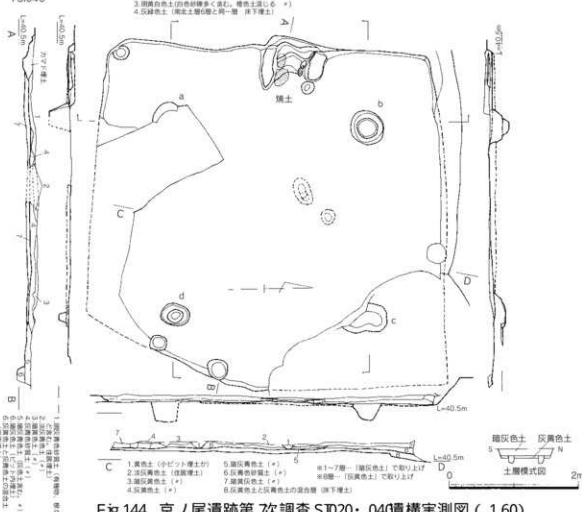


Fig 144 京ノ尾遺跡第 次調査 S1D20・040遺構実測図 (1/60)

一部が現代の攪乱に、東隅付近が7SK049によって削平されるが、比較的残りが良い。南北5.1m 東西5.6mで、床面積は28.56㎡。床面、掘方の深さはそれぞれ0.1m、0.15mを測る。検出時は地山と埋土の区別が難しく、カマドとおもわれる焼土の存在から、住居の存在を想定しつつ検出を行った。結果、暗灰色土が埋土の大型方形プランを確認した。この暗灰色土除去後、灰黄色土と灰青色土の混合土層の面で柱穴 a b を確認した。時間の関係で柱痕の有無の精査を怠り未検出だが、それぞれ3.1m 3.1mの均

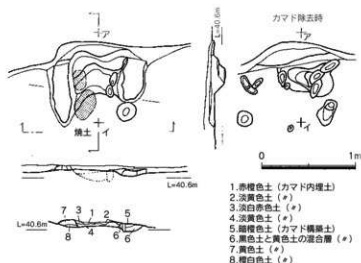


Fig 145 京ノ尾遺跡第4次調査S1040
カマド遺構実測図 (140)

等な柱間となることから、柱穴と考えてよいと思われる。北東隅の柱穴が推定される部分は7SK049が切り込むため削平された可能性があるが、他の3本の柱の間隔を考慮すると、7SK049の底部の深い窪みは柱穴のなごり、もしくは柱穴そのものの可能性が高い。灰黄色土を除去すると0.05m足らずで地山面となり、ピットを2つ検出した。焼土の分布からカマドの存在は早い段階で想定していたが、カマド本体の残りが非常に悪く、住居埋土の掘り下げ時は埋土とカマド本体の積土の峻別し手間取った。焚口付近には、焼土・炭を含む暗茶色土が埋土のピットや焼土が残る。カマド底部は、床面から7~8cmほど窪む。カマド除去後には他の住居と同様に、小ピットを検出した。遺物は、埋土の暗灰色土中から須恵器・土師器片が出土したが住居に直接伴う遺物はない。

掘立柱建物

7SB050 (Fig 146)

調査区北側中央で検出した南北2間、東西2間の掘立柱建物である。主軸の振れはN 30 48 5 W。柱間は約1.65m 柱掘方プランは円形で0.5~0.7m程、深さは0.3~0.4mを測る。柱穴b~d fは掘立柱建物と認識する前に掘り上げてしまったため柱痕は未確認だが、7SB050a・eの見では柱痕の太さは0.13~0.2m程となる。柱穴は6世紀末頃に埋没した7SK029に切られる。時期は掘方より出土した須恵器から6世紀後半か。調査区南東に隣接する第4次調査ではほぼ同規模の2間2間の総柱建物が発出されており、7SB050も調査区外へさらに間分展開する可能性が高い。

土坑

7SK001 (Fig 147)

調査区南西隅で検出した長軸長1.75m 短軸長0.95m 深さ0.18mの隅丸方形の土坑。暗灰黒色砂質土が埋土で、近世の遺物が出土した。埋没は19世紀頃か。

7SK006 (Fig 147)

調査区北東部で検出。調査区外へ伸びるため現状で長軸長0.7m 短軸長0.5m 深さ0.06mを測る浅い土坑。国産磁器片が検出。

7SK008 (Fig 147)

調査区北東隅の攪乱で上面の大部分が削平され長軸長1.1m 短軸長0.5m 深さ0.08mが残る楕円形の土坑。遺構の性格は不明だが、土製人形片が出土した。

7SK023 (Fig 147)

調査区北西部で検出。7SK045の中央を切る長軸長0.85m、短軸長0.6m、深さ0.43mを測る楕円形の土坑。底部は浅い窪みが2ヶ所みられる。検出時は、まず黒色土が薄く堆積しており、これを除くと奈良時代の遺物を包含する暗灰色土が底まで厚く堆積していた。

7SK045 (Fig 147)

調査区北西部の

7SD40の一部を切る略楕円形の大型土坑。北側端部が調査区外へ延びるが、復元長軸長3.4m(現状で3.1m)、短軸長1.8m、深さ0.2~0.5mを測る。堆積状況から自然埋没と思われる。遺構の底部は起伏に富み、明らかにピットに見えるものは肉眼で識別できなかった遺構上面より切り込まれた別遺構の可能性がある。また、7SD40でも記述しているが、遺構の中央西側にある深めの窪みは竪穴住居7SD40の支柱穴の可能性がある。埋土中から須恵器片、滑石製品の破片が出土した。6世紀後半頃埋没か。

溝

7SD003

調査区東端部に位置する南北方向の溝。東端が調査区外へ伸びるため、現存東西幅1.1~1.5mとなる。深さは0.4m、遺構の南北はともに攪乱されているが、元々は調査区の1m疎に流れる現代の水路と平行して南北にのびていたと思われる。19世紀~20世紀に埋没か。

性格不明遺構

7SX010 (Fig 148)

調査区南東部で検出した土坑。東部を攪乱に切られるが、長軸長2.9m、短軸長1.1m、深さ0.1mの南北に細長い遺構。近世の遺物を含む暗灰茶色土を除去すると、床面直上の灰茶色土より赤焼の須恵器高坏の脚部が出土した。遺構は浅く、底面の凹凸は顕著である。西側は比較的平坦で、東側は攪乱の方向へ向って二条の溝状になる。埋土中には近世や奈良時代の遺物の破片を含むが、層位的な前後関係や高坏の残存率を考慮すると6世紀後半頃の形成と考える。

7SX021

調査区中央部付近、7SK045の南で検出したピット。直径0.25m、深さ0.07m、土師器小皿が1点出土した。

7SX025 (Fig 148)

調査区中央北側で検出した不定形の大型の遺構。遺構の大部分が調査区外に延びるため全体のプランは不明。長軸長5.2m、短軸長1.84m、深さ0.25mを測る。検出時は竪穴住居の可能性を考えていたが、南東部隅は直角にならないので住居「棟」が切り合った状態かと考え精査すると、「茶色土」の上に「暗灰茶色土」が堆積した状況を確認した。掘り下げ時点では、これらを同一遺構上の埋土の連いであると認識し、全て除去した後に図化を行った。その後北壁に残る土層の観察から、「暗灰茶色土」の立ち上り

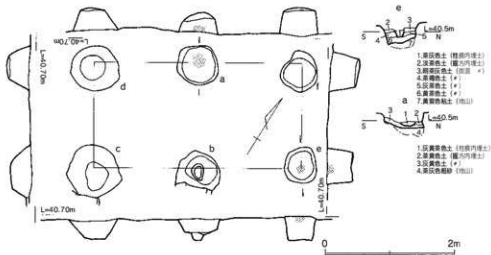


Fig 146 京ノ尾遺跡第7次調査SB050遺構実測図 (160)

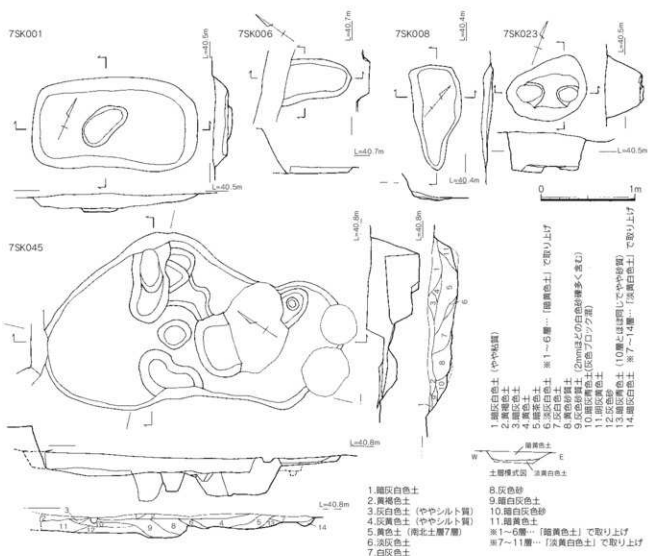


Fig 147 京ノ尾遺跡第 次調査土坑 (SK001・006・008・023・045) 遺構実測図 (140)

りを確認した。よって、これらは別の遺構の可能性がある。ここでは7SX025「茶色土」と7SX025「暗灰茶色土」として報告した。ともに深さのある大型の遺構と思われるが、竪穴住居と認定するだけの情報は得られなかった。7SX025「暗灰茶色土」の掘削中、0.4m 0.8m 0.3m程の方形の自然石（花崗岩）が出土した。また、周囲から土師器甕または甕の破片が出土した。7SX025「茶色土」の遺物は少量だが、立ち上がりの低い坏身が出土しており、遺構は6世紀末頃に埋没か。7SX025「暗灰茶色土」の遺物は一部型的的に古相の属性をもつ坏類が出土しているが、層位的にみて遺構の形成時期は6世紀末頃と考えられる。なお、7SX025「暗灰茶色土」出土の須恵器坏身片と、7SD20「暗茶色土」出土の須恵器坏身片が接合した（Fig 152 13）。両者は近接した時期に埋没した可能性がある。

7SX030 (Fig 148)

調査区中央部で検出した1.0m 1.0m 深さ0.1mの浅い隅丸方形の遺構。0.1m西にも同一規模の類似した遺構7SX039がある。ともに底部は凹凸がある。埋土は7SX030・7SX035ともに同性質であることから、同一時期に埋没した可能性が高い。埋土の上層より須恵器蓋、甕片が出土した。7世紀後半から末頃埋没。

7SX031

7SD15のカマド東裾部分を切る長軸長0.6m 短軸長0.45mの浅い遺構。東側は攪乱で削平される。土師器の甕 甕の破片が出土。

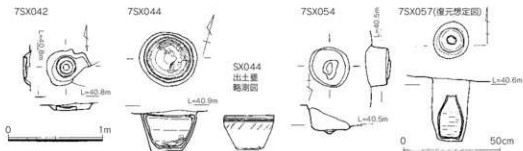


Fig 149 京ノ尾遺跡第7次調査SX042・044・054・057遺構実測図(14Q 7SX057は120)

調査区北西部で検出した甕の埋置遺構。掘方は、直径0.6mで深さ0.4m、埋土を除去しながら掘り進めるとコンクリートブロックと茶灰色砂質土が流入している陶器の甕を検出した。甕の底部には固形化した付着物があり、隙間から銅銭が2枚出土した。地権者の話から、調査地点は昭和初期まで母屋があり、これに付随する便所が7SX044付近にあったとのことであった。したがって、この遺構は1950年代まで使用されていた便所遺構(「便甕」)である。甕の底部に付着していた固形物はカルシウム分か?甕の記録は略測図のみにとどめたが、同型式の甕の口縁部を7SX038で図示している。

7SX054 (Fig 149)

7SX025「茶色土」除去後に検出した直径0.42m、深さ0.25mのビット。底部が一段浅く窪む。埋土を除去中に須恵器蓋片とともに古式土師器の高坏脚部が出土。

7SX057 (Fig 149)

調査区北東付近で検出。直径0.2m、深さ0.33m、陶器の壺が埋められていた。検出時点から上部は欠損していた。図は埋置した状態の復元図である。

7SX058

7SX058を切る直径0.4m、深さ0.65mのビット。埋土中腹より石臼片と思われる石製品が出土した。

(4) 出土遺物

7SI005暗灰色土出土遺物 (Fig 150)

須恵器

坏蓋(1・2) 1は口縁部内面端部と肩部に工具により沈線状の段を設ける古式の属性をもった坏蓋。天井部には回転ヘラ削りを丁寧に施す。内外面ともに淡灰黄色。胎土は砂粒が少なく精製されている。復元口径13.6cm、器高4.8cm。2は1ほど明瞭ではないが、口縁部端を僅かに沈線状に窪ませ、肩部にも浅い沈線を施す。外面黒灰色。内面淡灰白色。

土師器

坏(3・4) 口縁部が内湾する坏。3は復元口径12.8cmで外面を黒色に燻す。外面に粗い刷毛を施した後、横方向の手持ちヘラ磨きを施す。内面は細かい横方向のヘラ磨きの後、一部に暗文を施す。外面茶灰色。内面暗黒茶色～橙白色。4は3と同一形態の坏だが、やや内湾気味の形態である。摩擦のため調整は不明だが、外面に一部燻し痕が確認できる。外面暗灰赤色。内面淡橙白色。

甕(5-6) とともに口縁部片。5は口縁部が厚く短いタイプの甕。内面ヘラ削りで内面くびれ部は明瞭な稜線が入る。6はくびれの少ない薄い甕。外面に粗い叩き痕がある。

甕 鉢(7) 底部片。想定される底部はややレンズ底状となる。外面に細かな刷毛を施し、内面は黒色に燻した後、斜め方向の細かな削りを施す。底部付近はより細かな単位で不定方向に削りを行うが、胎土が精製されているため磨きのように見える。外面暗橙褐色。内面黒色～黒灰色。

把手(8) 甕や甕に接合する把手。内側の器壁が残っており、本体は、1.5cmほどの厚い器壁をもつ

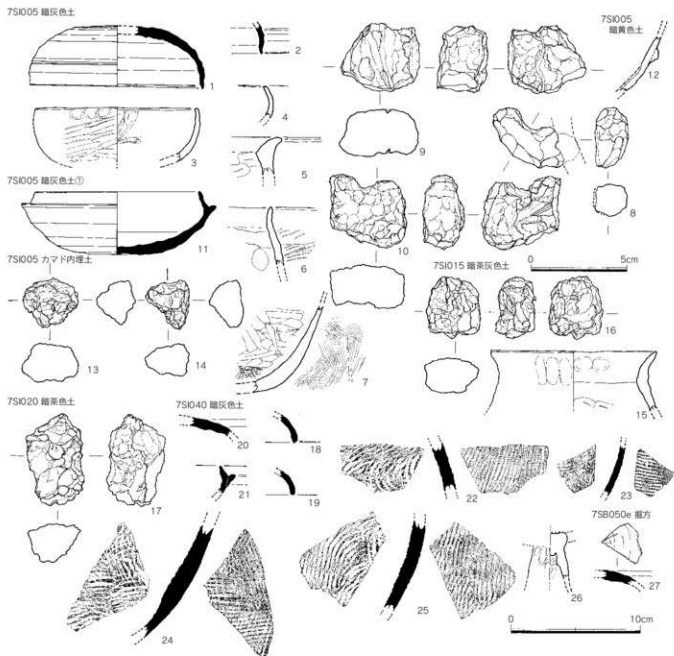


Fig 150 京ノ尾遺跡第7次調査竪穴住居・掘立柱建物出土遺物実測図
(13・9・10・13・14・16・17は12)

模ないし藍が想定できる。

土製品

焼土塊 (9) 残存幅41cm 縦幅36cm 厚さ2.6cm 3mm以下の白色砂粒を多く含むやや粗い胎土である。スサ等の痕跡はみられない。明黄白色～淡黄白色を呈す。一部欠損がみられるが、ほぼ完形と思われる。

鉄製品

鉄滓 (10) 最大幅4.05cm 縦幅3.95cm 厚さ2.2cm 重量は54.4gを測る。大きさに比べ重量のある印象をもつ。凹凸はあまりなく肉眼で見る限り欠損した痕跡はない。

7SI005暗灰色土①出土遺物 (Fig 150)

須恵器

坏身(11) 4分の3ほどが残る口径12.8cm、受け部径15.4cm、器高5.0cmの深手の坏身。口縁部の立ち上がりは高いが、端部は調整のための回転ナデを施すのみで、沈線等は入らない。焼成が悪く未還元状態である。外面、内面ともに淡灰黄色。

7SI005暗黄色土出土遺物 (Fig.150)

弥生土器

甕(12) 残りが悪いため傾きに不安があるが断面三角形の突帯をもつ甕ないし壺の体部片。焼成は甘く胎土も粗い。弥生時代後期から古墳時代前期のものか。外面暗白黄色。内面淡白茶色。

7SI005カマド内埋土出土遺物 (Fig.150)

焼土塊(13・14) とともにスサなどの有機物の混入やその痕跡はみられない。不規則に面をもった胎土の粗い焼土。焼成はやや不良。欠損はみられない。13は橙黄色～暗黄灰色で、2.0mm前後の白色砂粒を多く含み、全体に小さな凹みがみられる。14は橙白色で1.0mm前後の白色砂粒を多く含み全体に粗い胎土である。

7SI015暗茶灰色土出土遺物 (Fig.150)

土師器

甕(15) 「く」の字に屈曲する甕で、内面に斜め方向のヘラ削りを行う。頸部内面には僅かに稜が入る程度でくびれは明瞭ではない。外面は摩滅のため調整不明。復元口径13.1cm。

土製品

焼土塊(16) 全面が凹凸に富み、一部スサ等の棒状の繊維が剥がれたような痕跡がある。欠損した痕跡はなく本来の形状をとどめていると思われる。暗茶白色～橙白色を呈し、1.0mmほどの白色砂粒を多量に含む。

7SI020暗茶色土出土遺物 (Fig.150)

鉄製品

鉄滓(17) 最大幅2.9cm、縦幅4.9cm、厚さ2.0cm、重量は22.6gを測る。断面三角形で、滓が流状化した部分、白色砂粒が付着した部分がある。また、ガラス質化した部位もあり、温度の高い送風部に近接した部分の滓か。

7SI040暗灰色土出土遺物 (Fig.150)

須恵器

蓋(18・19) 口縁部片。2点ともに端部を丸くおさめる型式の蓋。

坏蓋 身(20) 外面に回転ヘラ削りを施す。破片資料のため身か蓋かの判断はできないが、ここでは蓋として図化した。外面暗灰色。内面灰色。断面紫白色を呈す。

坏身(21) 口縁部片。短く内傾したかえりをもつ。焼成が悪く未還元状態である。外面灰緑色～暗赤灰色。内面明灰緑色。

甕(22～25) 体部付近の破片。外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。22は外面叩き後力キ目を施す。

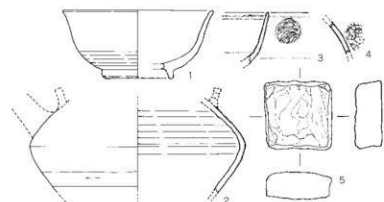
土師器

高坏(26) 小型高坏の脚部。外面に指頭痕が明瞭に残る。白色砂粒を少量含むが精製された胎土である。外面淡黄橙色。内面淡橙色。

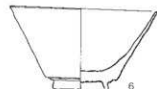
掘立柱建物

7SB050e掘方出土遺物 (Fig.150)

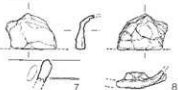
7SK001



7SK006



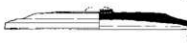
7SK008



7SK023 暗灰色土



7SK045 暗黄色土



7SD003 灰色土



Fig 151 京ノ尾遺跡第7次調査土坑・溝出土遺物実測図 (13 21・22は12 16は11)

須恵器

坏蓋 身(27) 蓋として図化したが、身か蓋かの断定はできない。外面には回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号がみえる。外面暗灰緑色。内面淡灰緑色。

7SB050c出土遺物

須恵器

甕 やや薄手の体部片。外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。

土坑

7SK001出土遺物 (Fig 151)

国産陶器

坏(1) 底部から体部への回転ヘラ削り痕が明瞭に残る坏。全面施釉後、内底部の釉を円弧状に掻き取り、畳付部分の釉の拭き取りを行う。淡く黄味がかった乳白色の釉が掛かる。復元口径 11.8cm 器高 5.4cm 復元底径 5.6cm。

土瓶(2) ソロバン玉形状の体部片。外面下半部は煤が付着する。素地は淡橙茶色で密。釉調は淡緑白色で外面にやや厚く施釉され貫入がみられる。肩部は把手の痕跡が残る。

肥前系陶磁器

小椀(3) 体部片。淡青灰色～淡灰緑色の発色の悪い呉須の絵付けを行う。

瓶(4) 肩部一体部片。外面に蛸唐草文を施文する。

石製品

用途不明石製品 (5) 花崗岩を用いた扁平な方形石製品。研いたような痕跡は明瞭にはみられないが、全面で面取りした痕跡がある。縦5.3cm、横5.5cm、厚み2.15cm。

7SK006出土遺物 (Fig 151)

国産磁器

坏 (6) 体部が直線的に開き、外面腰部に沈線状の段が入る特徴的な型式の坏。白色の素地の上に、やや青みがかかった暗白色の釉を全面に施し、その後畳み付き部分のみ拭き取りを行う。貫入が全面に入る。復元口径11.7cm、器高6.5cm、底径4.3cm。

7SK008出土遺物 (Fig 151)

土師質土器

鍋 (7) 口縁部片。外面から口縁頂部まで煤が付着する。外面には沈線状の細い窪みがみられる。

土製品

土人形 (8) 型整形の人形片。内面裾部は粘土を折り返し厚くする。外面はナデ調整が入り、裾部に一部へら削り痕がみられる。袴などの着物部分の破片か。胎土は精良で、内外面ともに淡橙白色。

7SK023暗灰色土出土遺物 (Fig 151)

須恵器

坏蓋 (9) 端部を丸くおさめた口縁部片。外面暗橙茶色。内面暗茶黒色。復元口径12.9cm。

蓋c 3 (10) ツマミを欠損する蓋片。口縁端部を緩く下方に折曲げる。天井部は回転へら削りを行う。内外面とも暗灰色。復元口径15.0cm。

大坏c (11) 底部片。残存する高台径から復元底部径が12~15cmとなるやや大型の坏。器壁は厚い。焼成はやや不良で内外面とも暗灰白色。

甕 (12) 体部片。外面に平行叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。

7SK045暗黄色土出土遺物 (Fig 151)

須恵器

坏蓋 (13) 端部内面をやや窪ませた口縁部片。外面暗灰黄色。内面灰白色。天井部に回転へら削りが確認できる。復元口径12.9cm。

無蓋高坏 (14) 体部片。外面の凸線直下にやや粗めの波状文を施す。外面は暗黒色だが、一部灰かぶりのため暗灰黒色となる。内面明灰色。破片資料のため法量に不安あり。

甕 (15) 甕の口縁部。外面にはカキ目を施す。内外とも黒灰色~灰白色。

石製品

有孔石製品 (16) 滑石製品。外周を弧状に削り、表面を直径約3mm穿孔する。光沢のある灰緑色~灰色。現存縦幅1.4cm、現存横幅0.8cm、厚さ0.25cm。

溝状遺構

7SD003灰色土出土遺物 (Fig 151)

土師質土器

鍋 (17) 口縁部片。端部を折り曲げ、玉縁状に整形し指頭痕を明瞭に残す。内面は粗い刷毛を施す。外面は煤が付着する。

国産磁器

蓋 (18) 科学呉須で絵付けされた柿蓋。外面はカエデの葉と思われる文様を3方に配する。全面にやや暗い透明釉が掛かるがつまみ部分の頂部は拭き取りを行う。19世紀後半頃。

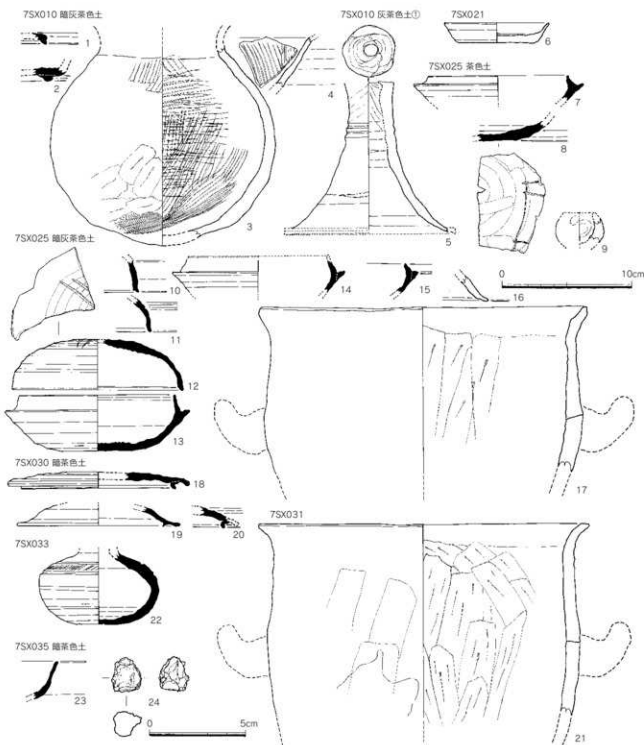


Fig 152 京ノ尾遺跡第 2 次調査その他の遺構出土遺物実測図 1(13 24は 12)

小椀 (19) 素地は灰白色のため、全体に暗い色調となる。呉須の発色は悪く暗灰青色を呈す。

皿 (20) 口縁部片。内面に呉須のにじみが顕著な絵付けを施す。

鉄製品

板状鉄製品 (21) 幅 0.9m、厚さ 0.55m の板状の鉄製品。刀子の茎部または鉄鑿の可能性ある。

銅製品

煙管 (22) 吸口部分。長さ 5.5m で最大径 1.1m。銅板を筒状に巻く。

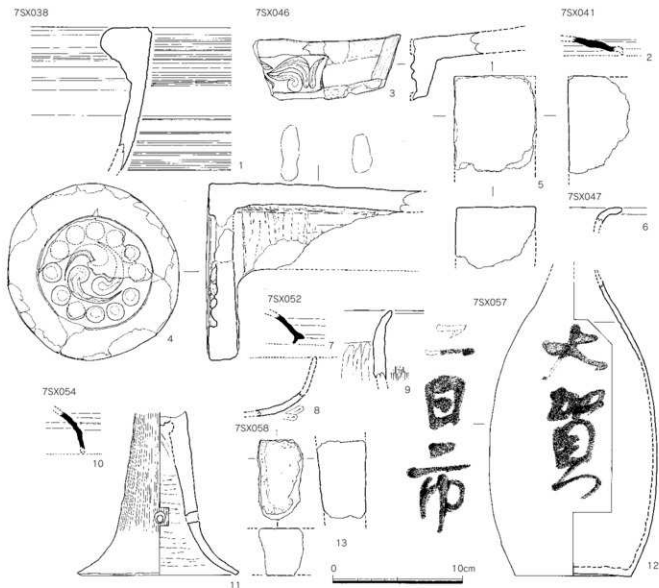


Fig 153 京ノ尾遺跡第7次調査その他の遺構出土遺物実測図2(13)

性格不明遺構

7SX010暗灰茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

蓋 3 (1) 口縁端部片。焼成不良で外面白灰色～灰色を呈す。

坏 c (2) 底部～腰部片。扁平な高台をもつ。外面灰紫色。外面淡灰紫色。

土師器

甕 (3) 球形の形態をもつ体部片。3分の 弱が残る。外面肩部には粗い縦刷毛を、底部付近は斜め方向の細かい刷毛の後、右上がりのヘラ削りを施す。体部内面は横方向の粗い刷毛の後、底部から体部中程にかけて粗い縦方向の刷毛を下から上方向へ施す。頸部付近は斜め方向の刷毛を施す。外面暗赤灰色。内面明橙黄色。

国産陶器

播鉢 (4) 体部片。内面に細かい播目が残る。内外面とも暗茶褐色。

7SX010灰茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

高坏(5) 裾部を欠損するが脚部の大部分が残る。体部に茶の沈線を施す。坏部との接合部分は接合のための沈線を入れるが摩滅のため不明瞭である。内外面とも暗褐色でいわゆる赤焼須恵器である。

7SX021出土遺物 (Fig 152)

土師器

小皿 a(6) 口縁端部を部分的に欠損する。雲母と白色砂粒を多く含み淡白橙色を呈す。復元口径 8.2cm、器高 1.5cm、底径 5.8cmと器高の低い小型の皿。摩滅により底部の調整は不明瞭だが、板状圧痕が確認できる。糸切り底の可能性が高い。大宰府編年 期以降のものか。

7SX025茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

坏身(7) 口縁部片。立ち上がりが低く断面三角形に近い。残存状況から削りの有無は不明。外面灰青色。内面淡灰青色。

坏身 蓋(8) 外面に回転ヘラ削りを施す。破片資料のため身か蓋かの判断はできないが、ここでは身として図化した。胎土や色調は(7)の坏身に近似する。外面にヘラ記号を施す。

土師器

手捏ね土器(9) 底部と口縁部を欠く。反転復元を行っているが、実際は全体に歪みがある。精製された胎土を用いる。外面橙白色。内面暗橙白色。

7SX025暗灰茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

坏蓋(10-12) 10は肩部に突帯がめぐり、口縁端部内面に浅い段を設ける古式の属性をもつ蓋の口縁部。表土出土遺物(Fig 154 1)と同一個体。11は、口縁端部内側に沈線を入れ、肩部に凹状の段の入る古式の属性をもつ蓋。12も口縁端部内面に浅い沈線を入れ、肩部は強い回転ナデを施し、凹状に窪ませる。天井部内面には同心円文の当て具痕が残り、全体にやや古式の属性を残す。外面にヘラ記号を施す。復元口径 13.4cm、器高 4.0cm。

坏身(13-15) 13は 7SD020暗茶色土出土の坏身片と接合したもので、復元口径 12.25cm、器高 4.4cm、底部外面は回転ヘラ削り。口縁部は直線的でシャープに立ち上がり、端部内面を僅かに窪ませる。非常に精製された胎土で、内外ともに灰白色。内面に当て具痕があるが部分的にナデ消している。図示していないが口縁端部には不自然に連続した剥離が見られる。14は端部を欠損する口縁部片。受け部を接合した痕跡がみられる。15は口縁部の立ち上がりが低く断面三角形に近い。焼成不良で調整は不明。

土師器

高坏(16) 脚部の裾片。摩滅のため調整不明瞭である。淡黄白色で精製された胎土を用いる。

甗 甗(17) 底部が欠損するため甗とは断定できないが頸部のしまりがなく、体部中程の器壁が非常に厚い。把手接合の為の体部の穿孔痕が残る。

7SX030暗茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

蓋 2(18-20) 口縁部付近の破片。18は天井部に回転ヘラ削りを施す。焼け歪みのため体部一天井部がやや扁平となる。外面暗灰緑色。内面暗灰色。断面淡紫白色。20は18と同一個体の可能性が高い。内面に焼き膨れの痕跡がある。19は非常に薄くかえりが短い。胎土は精製されており、内外面ともに淡灰黄色。

7SX031出土遺物 (Fig 152)

土師器

甌 甕 (21) 底部が欠損するため甕とは断定できないが頸部のくびれない器形である。把手を欠くが、把手接合の為の穿孔痕が残る。7SX029暗灰茶色土出土のもの (Fig 152 17) と同型式。内面は粗いヘラ削り。外面は摩滅のため調整不明瞭だが、刷毛目の可能性のある長方形に面取りした調整単位が確認できる。

7SX033出土遺物 (Fig 152)

須恵器

甌 (22) 扁平な体部をもつ。胎土は密で、断面灰茶色。回転ヘラ削りが体部下半に及ぶ。3分の2欠損するため体部の穿孔の有無は不明。

7SX035暗茶色土出土遺物 (Fig 152)

須恵器

坏 (23) 焼成不良で酸化焰焼成となった坏の体部。摩滅のため調整は不明瞭だが、体部下半は削りを施した可能性があり、7世紀後半から8世紀初頭頃のものと思われる。

鉄製品

鉄滓 (24) 重量35gと非常に軽い。全体に凹凸が激しく一部に小さな穴が密集してみられる。

7SX038出土遺物 (Fig 153)

国産陶器

甕 (1) 口縁部片。胎土は橙白色で、白色砂粒を多量に含む粗い胎土。口縁部内面を肥厚させる。外面にカキ目、沈線を施す。同型式の甕の完形品が7SX044で出土している (Fig 149参照)。

7SX041出土遺物 (Fig 153)

須恵器

蓋 (2) 天井部片。体部の屈曲具合から口縁が短く折れる型式のものと推測する。天井部は回転ヘラ削り調整。

7SX046出土遺物 (Fig 153)

瓦類

軒平瓦 (3) 瓦当面の3分の1と、体部の一部が残る。瓦当には唐草文を配する。型取りした後に、外区の縁をナデにより平滑に仕上げる。淡灰白色～黒灰色で、均一に瓦質焼成される。

軒丸瓦 (4) 体部と瓦当面の一部が欠損する。瓦当は、外区の幅が2.5cmと狭く、三巴紋の長さは短く珠紋が大きいなど型的に新しい属性をもつ。欠損部分を復元すると、三巴紋の周囲に12の珠紋を配していたと想定できる。丸瓦の内面は長軸方向に板目の痕跡が、短軸方向に縄目痕が観察できる。淡灰色～黒灰色で、均一に瓦質焼成される。瓦の外表面には幅1cm、長さ3～4cmほどの楕円形の摩滅部分がある。道具瓦を載せるなどの何かの設置痕跡と思われる。

土製品

無文磚 (5) 現存縦幅7.6cm、横幅6.4cm、現存の厚み4.8cm、3.0mmほどの白色砂粒を多量に含み、非常に粗い胎土で製作される。焼成はやや不良で、淡灰茶色を呈する。

7SX047出土遺物 (Fig 153)

弥生土器

甕 壺 (6) 口縁端部片。端部は丸みをもち、内面は緩い傾斜面をもつ。焼成は不良で、橙色を呈する。中期中葉から後期初頭か。

7SX052出土遺物 (Fig 153)

須恵器

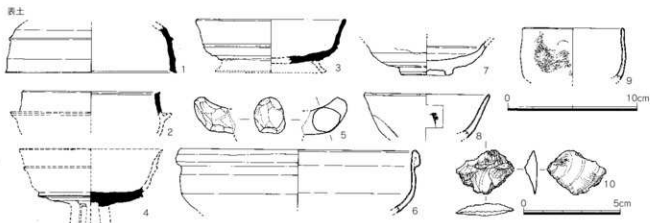


Fig 154 京ノ尾遺跡第7次調査表土出土遺物実測図（10は12 その他は13）

蓋 2(7) 口縁部片。やや器高が高い。口縁部のかえりは貼り付け整形。復元すると12cm以上のやや大型の蓋になる。外面灰黒色、内面暗灰色。

土師器

坏 (8) 丸底の底部片。摩滅のため調整不明瞭だが、内面は僅かに磨きを確認でき、外面は手持ちヘラ削りを施す。7SX00暗灰色土出土の土師器坏 (Fig 150 3・4) と同型式のものと思われる。

甌 瓶 (9) くびれのない口縁部片。外面縦ハケ。内面ヘラ削り調整。

7SX054出土遺物 (Fig 153)

須恵器

坏蓋 (10) 口縁端部を欠損する体部片。天井部の回転ヘラ削りの有無は不明。肩部に強い回転ナデを施し段を設ける。外面灰黒色。内面暗灰色。断面暗紫灰色。

古式土師器

高坏 (11) 脚部片。裾部径 12.9cm、現存器高 12.65cm。体部外面は縦方向の細かなミガキを施す。内面は横方向の削りを施す。坏部との接合部分には円盤充填技法の痕跡が残る。脚部中央部付近には3ヶ所の穿孔が見られる他、中央部に楕円形の小さな黒斑が見られる。白色砂粒 0.5~2.0mmほどを多量に含む粗い胎土で外面橙黄色。内面橙黄色~淡白赤色。

7SX057出土遺物 (Fig 153)

国産陶器

瓶 (12) 厚さ 3~4mmの薄い器壁の瓶で頸部を欠損する。素地は淡赤茶色で密。釉調は頸部付近は緑茶色で体部は淡橙灰色。外面に「大賀」「二日市」の銘がある。同型式のものが宮ノ本 5次調査 5ST03より出土している (太宰府市教育委員会 (2005) 『太宰府・佐野地区遺跡群 19』太宰府市の文化財第7集)。

7SX058出土遺物 (Fig 153)

石製品

石臼? (13) 凝灰岩系の石材で、剥離のない面が平坦に加工される。一方が緩い傾斜をもつ。石材や形状から石臼の破片の可能性が高い。

表土出土遺物 (Fig 154)

須恵器

坏蓋(1) 肩部に突帯を付け口縁端部内面に緩い段を設ける古式の属性をもつ蓋の口縁部。胎土は、20mmほどの大型の砂粒が少量、0.5mm以下の白色砂粒を多量に含む粗い胎土である。やや焼成不良で、断面中央がサンドイッチ状に未還元状態となり暗橙白色を呈す。外面暗緑灰色。内面灰色～暗灰緑色。復元口径13.4cm、現存器高3.9cm、75X02暗灰茶色土出土の蓋と同一個体(Fkg152.10)。

坏身(2) 長く直立する型式の口縁部片で、端部に沈線状の段をもつ。胎土は20mmほどの大型の砂粒が少量、白色砂粒0.5mm以下を少量、黒色砂粒0.5mm以下を少量含むが、全体に密である。内面・外面ともに淡灰黄色。①の蓋と同一時期のものか。復元口径10.9cm。

坏c(3) 腰の張った体部に沈線を施す。また底部外面は、切り離し後回転ヘラ削りが行われ、高台接合部は接合のための同心円状の刻みを入れるなど全体に古い属性をもつ。「八」字状に開く高台が接合すると思われる。底部内面に焼き膨れがみられる。外面灰白色から黒色。内面は黒灰色で断面は暗茶黒色である。復元口径11.8cm。

高坏(4) 坏部の上半が欠損するが、腰部の沈線や底部の平坦面の幅などから無蓋高坏と考える。脚部は現存で蓋所の透かしが確認できるが、配置位置から蓋所が推定できる。外面灰白色。内面は灰かぶりのため黒色から暗黄色を呈する。

土師器

把手(5) 小ぶりの把手。下面には黒斑あり。10～20mm程の砂粒を少量含む胎土は密。淡灰茶色。

国産陶器

鉢(6) 口縁端部を玉縁状に折り曲げる鉢。光沢のある暗黄緑色の釉がかかる。胎土は淡灰黄色できめ細かい。復元口径18.6cm。

坏(7) いわゆる唐津系の坏。内面に目痕の痕跡はみられない。焼成はやや不良で、胎土は赤みを帯びた黄灰色。黄緑色がかった透明釉が内面から体部上半まで薄くかかる。底径3.7cm。

国産磁器

小坏(8・9) 口縁部が開く型式の小坏。やや発色の悪い呉須で絵付けを施す。復元口径10.0cm。9は、体部が直立し口縁がやや内湾気味の坏。発色の悪い呉須で絵付けを施すが、にじみのため文様の意匠は不明。復元口径8.0cm。

石製品

再利用剥片石器(10) 下部に細かな剥離がみられ、使用による歯こぼれの可能性がある剥片。背の一部に後世に由来する剥離や欠損がみられる。縦幅2.3cm、横幅3.0cm、厚さ0.65cm。

(5) 小結

今回の調査でわかったことを以下にまとめる。

- ・京ノ尾遺跡第6次調査で確認した丘陵裾に存在する湿地帯の南側段丘上には京ノ尾遺跡第4次調査をはじめとして古墳時代後期の集落の展開が確認されていたが、今回の調査成果により、湿地帯の北側にも同時期の集落が存在したことを確認することができた。
- ・住居や掘立柱建物の配置から集落は調査区のさらに北側へと展開する可能性が高い。
- ・平安時代から鎌倉時代の遺構はなく、僅かに75X02に中世後期頃の遺構を確認するとどまり、古墳時代から近世までの間の遺構の展開は極めて乏しい。
- ・18世紀後半以降になると、溝や土坑の存在より再び土地利用が始まるようだが、建物等の居住施設は確認できなかった。

次に調査区内の遺構の形成過程を時代を追って述べる。

弥生時代：75X047で出土した弥生時代後期から中期の土器片のみ存在が知られる。京ノ尾周辺ではこの時期の遺構・遺物の出土は乏しい。

古墳時代：前期は高環が出土したピット75X054のみ。後期初頭の6世紀前半代と考えられる遺物が表土や埋土中で確認できるが、遺構の展開はみられない。後期後半の6世紀後半から7世紀初頭になると遺構の展開が顕著となる。調査区北東部に寄って竪穴住居75ID05・015・02Q・04Q 掘立柱建物75B05Q 土坑75K045 性格不明遺構75X01Q・025が展開する。7世紀後半段階の遺物は表土や75X030・039中に見ることができるとみられる。

奈良時代：遺構、遺物は減少するが、75K023や75X010の埋土中に見ることができるとみられる。その後の遺構・遺物の展開は中世後半になるまでみられない。

中世後半期：細かな時代は判別できないが、75X020の埋土中で出土した小皿4の存在によりこの頃の遺構の存在がうかがえる。

江戸時代後期～近代：再び遺構の形成が始まる時期で、75K001や75D00竪土坑や溝の掘削を行う。近代には、75X05の瓶埋納が行われたと考えられる。また、75D00が完全に埋没するものもこの頃である。

昭和初期：調査区全面に家屋が建てられ、地中には便所遺構75X038・044が形成される。

古墳時代後半の遺構について

今回の調査区では4棟の竪穴住居を検出した。それぞれ作り付けカマドをもち居住施設としてよいと思われる。また、掘立柱建物75B05Qは、報告で延べたように2間・2間の総柱建物となる可能性があり、倉庫と目される遺構である。今回の調査では集落の南側の一部を検出したに過ぎず、本来ならば同一段丘上の調査を終えて検討すべきだが、今後の予察を含め現状で指摘できる集落構成について述べる。

出土した遺物や遺構の切り合い関係および住居同士の占有面積等を勘案し、主な遺構を群として峻別すると

A群：75ID05・75B050

B群：75ID15・75ID20(カマドの位置や住居の軸が揃うため75ID20・75ID15へ近接した時期での建て替えか。)

C群：75ID4Q・75X025

となる。次に各遺構から出土した遺物から導き出される帰属時期を大別すると以下ようになる。

期：須恵器坏身および坏蓋の口縁端部内面において、沈線を有するものと丸くおさめるものが混在する A群

期：須恵器坏身および坏蓋の口縁端部内面において、丸くおさめるもののみで構成される C群

B群に関しては時期を推定できる遺物はほとんどないが、75ID09に近接する75ID19は並存しないと考えられる。よって住居跡の変遷を考えると以下ようになる。

期 75ID05・75B005 75ID20・75ID15 期 75ID4Q・75X025または、

期 75ID05・75B005 期 75ID4Q・75X025 75ID20・75ID15となる。

B群の位置付けに苦慮するものの、基本的には各時期に 棟程度の竪穴住居がみられ、ある時期は一棟の掘立柱建物が並存するようだ。今後の調査によって変更の余地はあるが、基本的に他の調査地同様、比較的小規模な集落とみることができよう。

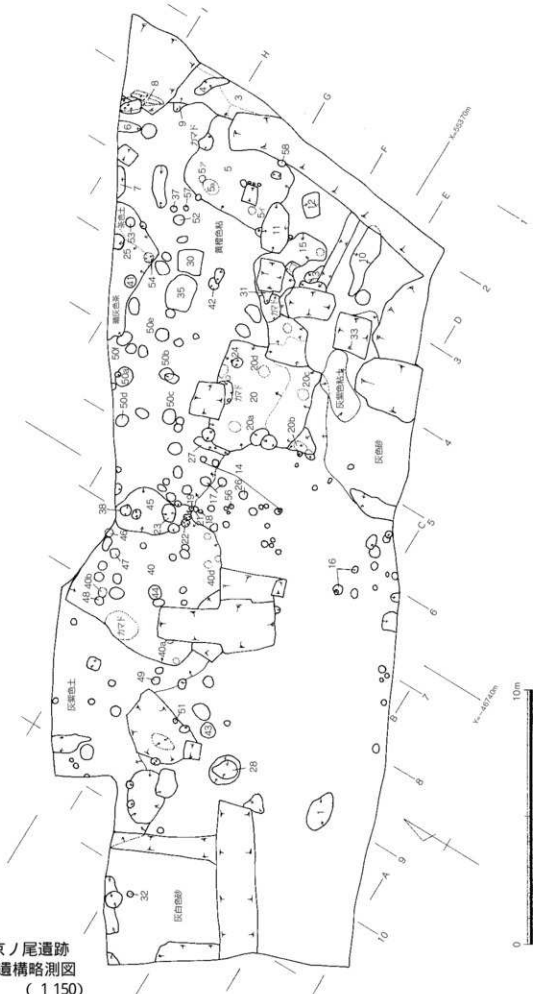


Fig 155 京ノ尾遺跡
第 7 次調査遺構略測図
(1 150)

Tab 20 京ノ尾遺跡第7次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	時期	地区
1	7SK001	土坑	近世	B8
2		欠番		
3	7SD003	溝	近世～近代	H7～G1
4		土坑	近世～近代?	H1
5	7S1005	竪穴住居	古墳時代後期	F1
6	7SX006	土坑	近世?	H2
7		土坑	不明	H3
8	7SK008	土坑	近現代?	H2
9		ピット	近世～	H2
10	7SX10	土坑	古墳時代後期	E2
11		方形土坑	奈良後半	F2
12		方形土坑	近代～現代	F2
13		土坑	不明	E2
14		ピット群	不明	E5・E6
15	7S1015	竪穴住居	古墳時代後期	E2
16		ピット群	古墳時代後期?	G6
17		ピット群	古墳時代後期?	E6
18		ピット	奈良前半頃	E6
19		ピット	S-19→S-21	E6
20	7S1020	竪穴住居	古墳時代後期	E4
21	7SX021	ピット	中世	E6
22		ピット	古墳時代後期?	E6
23	7SK023	土坑	奈良時代中頃	E6
24		土坑	古墳時代後期	F4
25	7SX025	大型不定形遺構	S-25→S-50	G3
26		ピット	古墳時代後期	E5
27		溝	古墳時代後期	E5
28		土坑	不明	G9
29		欠番		
30	7SK030	性格不明遺構	7世紀末	G3
31	7SK031	土坑	S-31→S-15	F3
32		ピット	不明	C11
33	7SK033	攪乱	現代	D3
34		ピット	古墳時代後期	G3
35	7SK035	性格不明遺構	7世紀末	G3
36		ピット	古墳時代後期	G3
37		ピット	古墳時代後期～平安時代	G3
38	7SK038	便所遺構	現代	F6
39		欠番		
40	7S1040	竪穴住居	S-40→S-45	G4
41	7SK041	ピット	奈良時代	G4
42	7SK042	性格不明遺構	近現代か	F3
43		土坑	現代か	C8
44	7SK044	便所遺構	現代	F7
45	7SK045	土坑	S-45→S-23	E6
46	7SX046	ピット	近世～近代	F7
47	7SK047	ピット	S-47→S-40	F7
48		ピット	古墳時代後期～	F8
49		ピット	近代～現代	D8
50	7SB050	竪立柱建物	古墳時代後期	F4
51		ピット	不明	D8
52	7SK052	ピット	古墳時代後期	G3
53		ピット	古墳時代後期	H3
54	7SK054	ピット	古墳時代前期	G3
56		ピット	江戸時代後期～	E6
57	7SK057	瓶埋置遺構	近世～近代	G3
58	7SK058	ピット	S-58→S-5	F1

Tab 21 1 京ノ尾遺跡第7次調査出土遺物一覧表 1

S-1	肥前系陶磁器 小坪、壺 (朝唐墓文)	S-11	須 裏 器 蓋3×、坪c×、 土 師 器 破片 石 製 品 土id
国産陶器 器片、鉢、杯	S-12	国産陶器 壺× 国産磁器 染付襷、染付皿 (ともにプリント染付)	
石 製 品 川産不明石製品	S-13	土 師 器 襷×鉢片	
S-3 灰茶色土	S-14	土 師 器 破片	
土 師 器 杯 (古墳時代)、壺	S-15	土 師 器 破片	
S-3 灰色土	S-15 暗茶灰色土	土 師 器 襷、破片 土 製 品 模土塊	
須 裏 器 坪c、蓋3、杯身、杯蓋 坪a×坪口縁破片	S-15 黄白色土	土 師 器 襷片	
土 師 器 杯 (古墳)、襷片 (古墳)、甌片、鍋	S-15 カマド下ビット	土 師 器 破片	
瓦質土器 播鉢、鉢×鉢	S-15 カマド内	須 裏 器 坪×蓋片 土 師 器 甌×塊	
国産陶器 壺片	S-16	土 師 器 破片	
国産磁器 染付桶 (プリント染付)、小甌、皿、蓋	S-17	土 師 器 鉢×襷、破片 土 製 品 模土塊	
鉄 製 品 板状鉄製品	S-18	須 裏 器 杯蓋片	
銅 製 品 漆管	S-19	須 裏 器 杯蓋×杯身片 土 師 器 杯片 国産磁器 染付片	
そ の 他 コンクリート片	S-20 暗茶色土	須 裏 器 杯身 土 師 器 襷片 鉄 製 品 鉄棒	
S-4	S-20 カマド内埋土	土 師 器 破片	
土 師 器 供養瓦片	S-20a 甌方	土 師 器 破片	
国産陶器 襷片 (古世～近代) 肥前系土	S-20 床下	土 師 器 襷片	
S-5 暗灰色土	S-22	須 裏 器 坪a×坪c 土 師 器 小皿a (イト?)	
須 裏 器 杯身、杯蓋、襷片	S-22	土 師 器 破片 (古墳)	
土 師 器 杯、坪 (内黒)、襷片、把手			
土 製 品 模土塊			
鉄 製 品 鉄棒			
S-5 カマド内埋土			
土 師 器 破片			
土 製 品 模土塊			
S-5 カマド内			
石製品 支脚石			
S-5 暗黄色粘土			
土 師 器 破片 (古墳)			
S-5 暗黄色土			
土 師 器 襷片 (古墳)、壺×壺 (寄生×古墳)			
S-5a			
土 師 器 襷片			
S-6			
須 裏 器 鉢×壺 国産陶器 杯			
S-7			
土 師 器 破片			
S-8			
土 師 器 破片 土 製 品 人形片			
S-9			
国産陶器 壺片			
S-10 灰茶土①			
須 裏 器 高坪 (彫部) 土 師 器 破片			
S-10 暗灰色土			
須 裏 器 坪c、蓋3、坪×蓋 土 師 器 襷 国産陶器 播鉢			

Tab 2 京ノ尾遺跡第 7 次調査出土遺物一覧表 2

S-23 暗灰色土	S-45 淡黄白色土
須 惠 器 坏c、大坏a、蓋×坏片、蓋、甕片	土 師 器 煮炊具片
土 師 器 蓋a、坏、甕片	
S-24	S-46
須 惠 器 坏蓋×坏身	須 惠 器 供饗具片
S-25 茶色土	瓦 類 軒瓦丸、軒平瓦（ともに焼瓦）
須 惠 器 坏身	鉄 製 品 金輪
土 師 器 供饗具片、煮炊具片、ミニチュア土器	土 製 品 埴
S-26 暗灰茶色土	S-47
須 惠 器 坏蓋、坏蓋、坏身、破片	弥 生 土 器 蓋×甕
土 師 器 甕×甕、甕片	
S-26	S-48
須 惠 器 蓋	須 惠 器 高坏×蓋
S-27	鉄 製 品 釘
土 師 器 甕×甕片	S-49
S-30 暗茶色土	そ の 他 木炭
須 惠 器 蓋1、甕片	S-50c
土 師 器 煮炊具片、供饗具片	須 惠 器 甕片
S-31	土 師 器 供饗具片、破片
土 師 器 甕×甕	S-50e 榎方
S-32	須 惠 器 坏身×坏蓋
土 師 器 破片	S-50e
S-33	須 惠 器 坏片
須 惠 器 甕	S-50f
S-34	土 師 器 甕片、坏片
須 惠 器 甕片、破片	S-51
土 師 器 破片	土 師 器 破片
S-35 暗茶色土	S-52
土 師 器 煮炊具片	須 惠 器 坏身
須 惠 器 坏	土 師 器 甕×甕、坏
鉄 製 品 鉄帯	S-53
S-36	土 師 器 甕片
須 惠 器 供饗具片	S-54
土 師 器 甕片	土 師 器 煮坏脚部
S-37	S-56
土 師 器 供饗具片	国 産 磁 器 塗付片
S-38	S-57
国 産 陶 器 甕片	土 師 器 高坏脚部片×
S-40 暗灰色土	国 産 陶 器 甕
須 惠 器 坏蓋、坏身	S-58
土 師 器 煮炊具片、甕片、高坏脚部片	石 製 品 石臼？
S-41	表土
須 惠 器 甕片	須 惠 器 坏c、坏蓋、坏身、高坏、坏×蓋、供饗具片
S-43	土 師 器 甕片、煮炊具片、把手、甕
鉄 製 品 バケツの把手	瓦 類 平瓦（焼瓦）
S-45 暗黄色土	石 製 品 打碁再生割片、ob
須 惠 器 坏蓋、甕片	土 師 實 土 器 榎木鉢？
土 師 器 煮炊具片	肥前系陶磁器 瓦口？、甕、蓋（科学系須）
石 製 品 有孔石製品（滑石製）	国 産 陶 器 甕×、甕片、鉢×、坏
	国 産 磁 器 破片（ブリンド染付）、小坏
	土 製 品 焼土塊
	鉄 製 品 板状鉄製品、釘
	そ の 他 コンクリート、トタン（石輪製）

1. 畑中遺跡 第 1 次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野 157 1、157 5、157 6で、標高約 39m の大佐野川の南岸に位置する。

佐野土地区画整理事業に伴い、1997年 7月 2日に試掘調査を行い、遺構は確認できなかったが流路を確認した。そこで、流路中で遺物を多く包含している部分について、流路の性格と時期の把握するため、1997(平成 9)年 10月 4日から 10月 2日にかけて発掘調査を実施した。調査は宮崎亮一が担当した。調査対象面積は 2416㎡、調査面積は 51㎡である。

(2) 基本層位 (Fig 156・158)

灰色の耕作土の下には、厚さ約 0.6m の灰茶色土が全面に広がり、多量の遺物を含む灰色や茶色の粘質土を厚く覆っている。その下の地山については重機によって掘削したところ、南東丘陵部から断続的な土砂堆積が確認された。

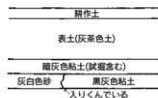


Fig 156 畑中遺跡第 1 次調査
土層模式図

(3) 検出遺構

流路

1SX001 (Fig 157)

調査段階では遺構番号は付けていなかったが、調査区そのものが流路であることから、SX001として報告する。

調査区東側では、流路の東岸付近を検出した。黒茶灰色土には完形の須恵器をはじめ、流木や木製品が多く出土した。須恵器は若干磨減しているが、遠方から流されたような状況ではない。黒茶灰色土を取り除くと青灰色粘質土や灰白色砂になり、東側に立ち上がりが検出された。青灰色粘質土や灰白色砂から出土する遺物は極端に少ない。

(4) 出土遺物

1SX001暗灰色粘土出土遺物 (Fig 159)

須恵器

坏蓋 (1・2) 口径 12.8cm、13.0cm、器高 4.0cm、4.4cm、口縁部は丸く仕上げる。1の内面頂部は同心円当て具のあとヨコナデ。

坏身 (3・4) 口径 11.5cm、11.6cm、器高 3.6cm、4.5cm、立ち上がりは 1m 以下で低い。外面下半は回転ヘラ削り、それ以外は回転ナデで、内面底部は 3が平行叩き、4が同心円叩きのあと一部ナデ。

高坏 (5) 脚部で脚部高 11.2cm、内外面回転ナデ。

壺 (6) 体部径 13.3cm、口縁部は欠損するが直口する壺と推測される。体部外面はカキ目、外面底部はヘラ削りの後回転ナデ。

甕 (7) 復元口径 16.4cm、復元器高 53.1cm、口縁部はやや内傾した直口縁で、肩部に等間隔で 4ヶ所耳を貼付する。底部には須恵器片が付着し、焼成時の置き台の残存とみられる。また、肩部にも小さな須恵器片が付着している。口縁部から体部下半にかけて淡黄色の釉が垂れている。

土師器

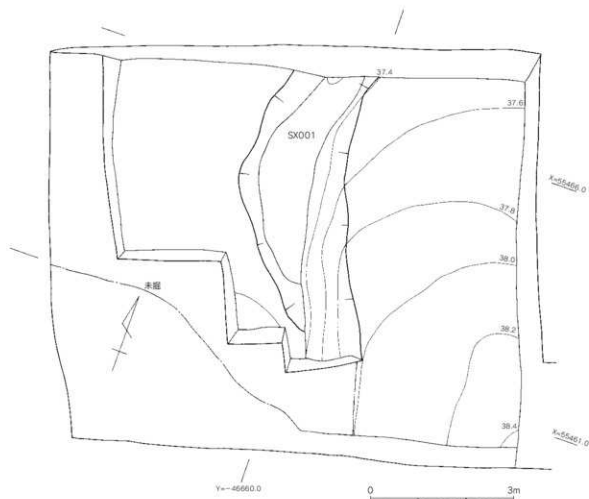


Fig 157 畑中遺跡第 2 次調査遺構全体図 (180)

坏身 (8・9) この器種は今回の報告現場での出土が少ない。復元口径 11.4m と 10.8m、内面と口縁部外面は細かいミガキが施され、外面下半は手持ちヘラ削り。内外面とも黒漆が塗られている。

1SX001黒灰色粘土出土遺物 (Fig 160~164)

須恵器

坏蓋 (1~19) 1~9は体部外面中位に浅い沈線を巡らす。口径 13.4~15.0m、器高 4.2~5.4m。20は口縁端部内面に浅い沈線を巡らす。4は口縁端部内面を斜めに作る。口径 13.0m、器高 4.3m。7~9は体部上面が平坦に仕上げられ、全体として扁平をなしている。復元口径 12.3~13.8m、器高 3.0~3.8m。9には外面にヘラ記号を施す。10~14は体部外面中位に沈線の名残りのような凹みが見られるものもあるが、全体として丸く仕上げる。口径 13.2~13.8m、器高 4.2~4.7m。15~19は小型するとともに粗雑な形状となり、やや歪に仕上げる。15の外面は雑なヘラ削り。18・19については外面上部全てに回転ヘラ削りが行われてなく、最上部が未調整のままである。口径 11.6~13.5m、器高 3.8~4.5m。

高坏蓋 (20~24) 20・21は外面上部にカキ目を施す。20はツマミ接合のための工具痕が文様のようにならぎに規則的に施されている。22・23は高いツマミが残り、体部に沈線もしくは沈線の名残りのような凹みが巡っている。24は口径 12.8mの小型で形状も変形している。

坏身 (25~54) 口唇部は 25のみ僅かに浅い沈線が巡るほかは丸く仕上げられ、体部外面上部は回転ヘ

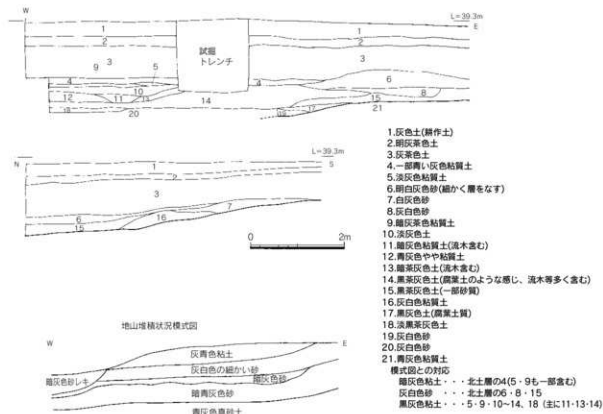


Fig 158 畑中遺跡第 2 次調査壁土層実測図 (180) および地山堆積状況

ラ削り調整で、体部中位に沈線等はみられない。内面底には当て具痕が殆どあり、一部不定方向にナデ消しているものもある。25～29は立ち上がりが1mを越えやや高い。口径12.2～12.9cm、器高4.6～5.5m、30～52は立ち上がりが短く、器形もやや粗雑になる。口径11.2～13.3cm、器高3.0～4.9m、37の内面は平行当て具。41は下半の一部が回転ヘラ削りが行われていない。49の内面は格子状にナデが行われている。53・54は立ち上がりが極端に短く内傾し、体部が深い。口径10.3・10.2cm、器高4.6・4.4m、53は歪んでいる。

有蓋高坏 (55～57) 3点とも脚部中位、もしくは下位で屈曲し、稜線を作り出している。59は復元口径13.6cm、器高10.8cmで、坏部にヘラ削りの痕跡は確認できない。口縁部の立ち上がりは低い。58は脚部が低く小型で、口径11.2cm、器高7.2cmである。坏部外面中位まで回転ヘラ削りが確認できる。57は坏上部が欠損しているが脚部の形状から有蓋高坏と推測される。

無蓋高坏 (58～60) 58は坏部外面中位に沈線が巡る。脚部は欠損するが2つの透かし窓が開けられている。口径13.2cm、59は脚部に細長い三角形の透かし窓が2個開けられている。内面底部は同心円当て具をナデ消している。外面中位には僅かに段を有する。復元口径14.6cm、器高17.0cm、60は坏部外面中位に段を有している。また坏部は脚部に対しやや傾いている。内外面とも回転ナデ、坏部内面は焼成によって器面が荒れている。口径11.0cm、器高13.8cm。

高坏 (61・64～66) 高坏の脚部で坏部は欠損している。61は大型で高さ14.9cm、底径15.6cm、脚部は絞った後に回転ナデを施しているが、絞り痕の凸凹が残っている。64～66は同一の器形で、脚部下半と内面は回転ナデ、上部には7～8cm単位の力カ目が施されている。脚部高8.4～8.6cm、底径10.0～11.2cm。

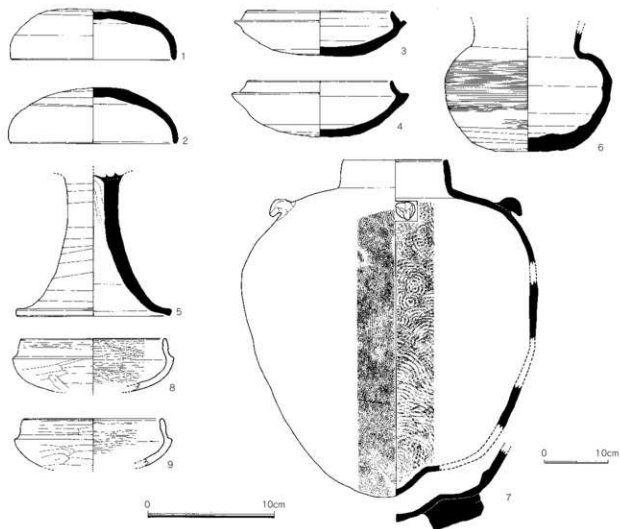


Fig 159 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 暗灰色粘土出土遺物実測図 (13 7 は 16)

高坏 (62 63) 62 は坏部途中で僅かに屈曲し口縁部に向かってさらに外開きしている。内面底部は当て具のあとを不定方向にナデている。その他は回転ナデ調整。坏部下半に僅かにカキ目を残す。63 の坏部は深い碗型で口径 9.4cm、脚部が欠損するため高さは不明。体部に浅い沈線が茶巡る。

脚付壺 (67) 口径 10.4cm、壺部分の高さ 9.3cm で、口径と体部径はほぼ同じである。肩部にカキ目を施す。脚部は欠損するがすぐに外開きする様子が窺える。

碗 (68・69) 68 は面底部は手持ちへら削り、内面底部は当て具を回転ナデで消している。その他も回転ナデ。口径 10.5cm、器高 4.5cm。69 は破片のため全形を知りたいが、口径 10.2cm の深い碗になるものと推測される。内外面とも焼成時に荒れているが、回転ナデを行っている。

壺 (70) 体部外面中位まで回転へら削り。その他は回転ナデ。

甕 (71-73) 内外面とも回転ナデで仕上げる。71・72 は口縁部を肥厚させるが、73 は直口である。

土師器

坏 (74-85) 74-81 は丸味のある器形で、胎土は目立った砂粒が少なく精製されている。口径 11.6-14.1cm、器高 5.4-6.5cm。74・75 は内面ナデの後ミガキ、外面はへら削りの後ミガキ。75 は内外面とも黒漆を塗っている。76・77 は内面に細かいミガキ、外面は底部を中心に手持ちへら削り。78 は内面不定方向のナデ、外面ハケ目のような手持ちへら削り。79・80 は外面手持ちへら削り、内面はへら工具によるミガキで工具の当り痕が明瞭に残る。81 は外面底部にハケ、中位がへら削り、内面はへら工具によるミガキ。82-85 は外面底部を平坦に作り出している。器壁がやや厚く、胎土も 0.2cm 前後の白色砂粒

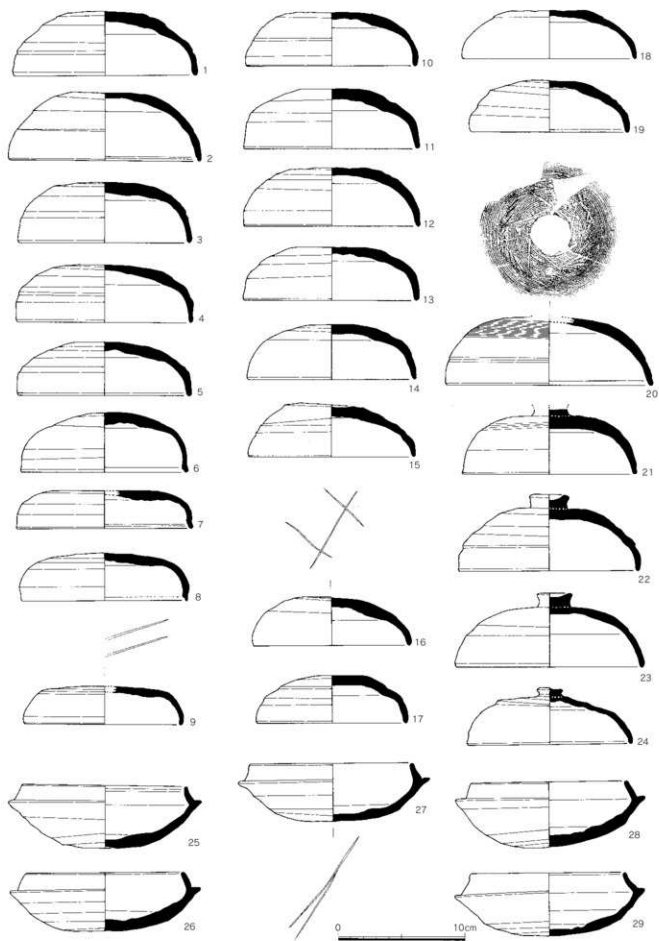


Fig 160 畑中遺跡第 2 次調査 SX00黒灰色粘土出土遺物実測図 1(13)

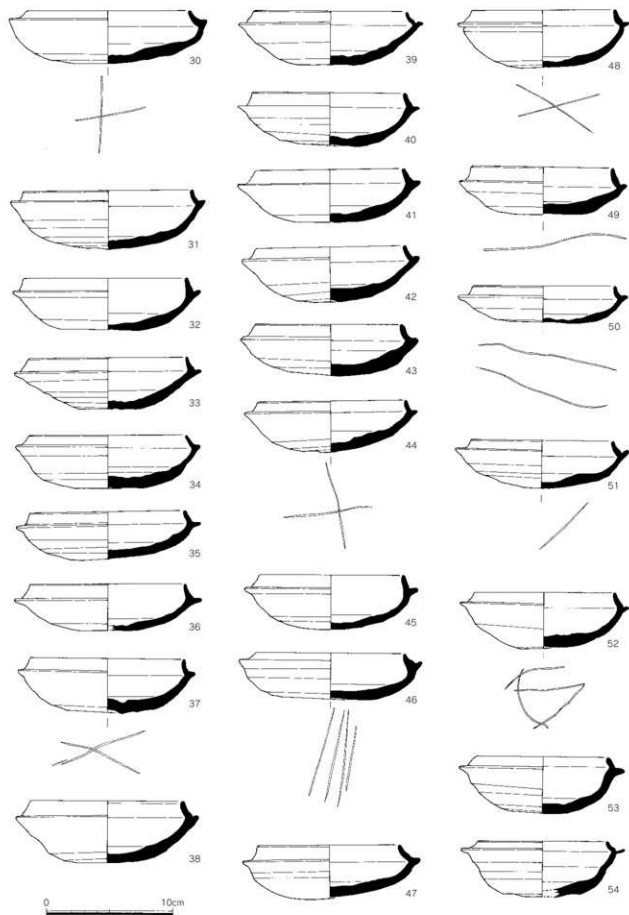


Fig 161 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 黒灰色粘土出土遺物実測図 2(13)

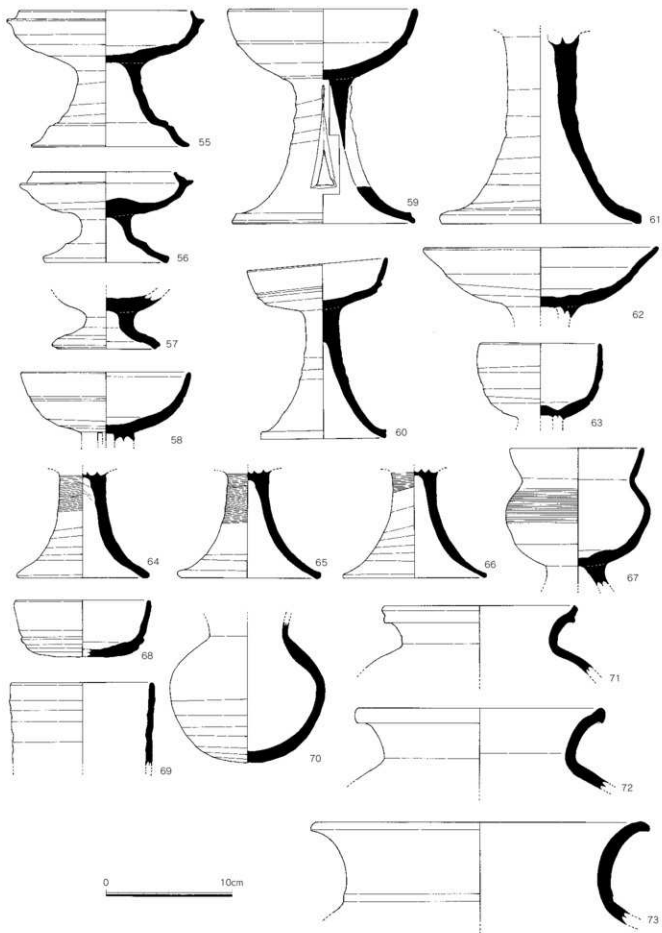


Fig 162 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 黒灰色粘土出土遺物実測図 3(13)

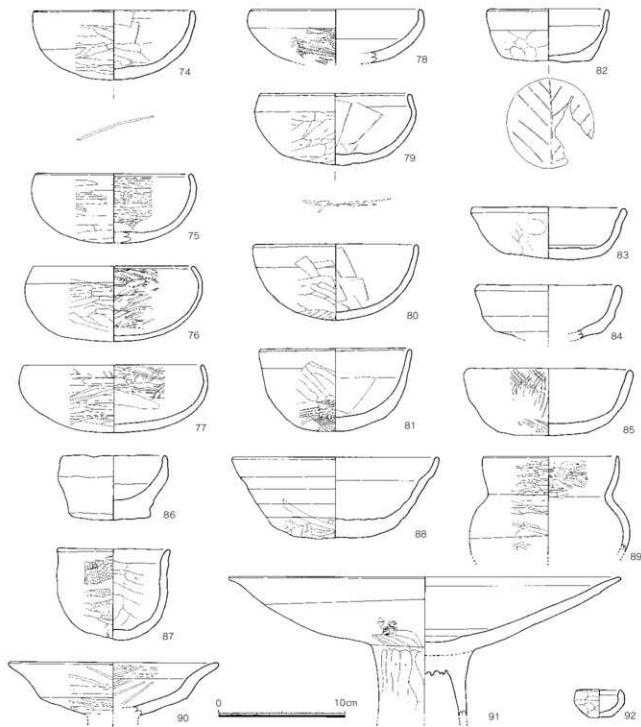


Fig 163 畑中遺跡第 1 次調査 SX00 黒灰色粘土出土遺物実測図 4(13)

を多く含み、前述の坏と性格が全く異なっている。口径 9.3~12.8cm 器高 4.1~5.3cm。82~84 は外面ナデ、内面底部は不定方向のナデ。82 の外面底には葉脈の圧痕が明瞭に残る。89 は外面ハケ調整が明瞭に残る。

小鉢 (86・87) 86 は手捏ね土器で、口縁部は内湾する。内外面ともナデ。外面底部に葉脈痕跡が残る。復元口径 8.1cm 器高 5.1cm 底径 5.0cm。87 は外面タテハケ、内面ヘラ削り、口縁部はほぼ直口だが、内面をやや斜めに作っている。口径 8.5cm 器高 7.3cm。

鉢 (88) 体部は口縁近くで僅かに外反する。外面底部は手持ちヘラ削り。その他は回転ナデ。口径 16.1cm 器高 6.5cm。

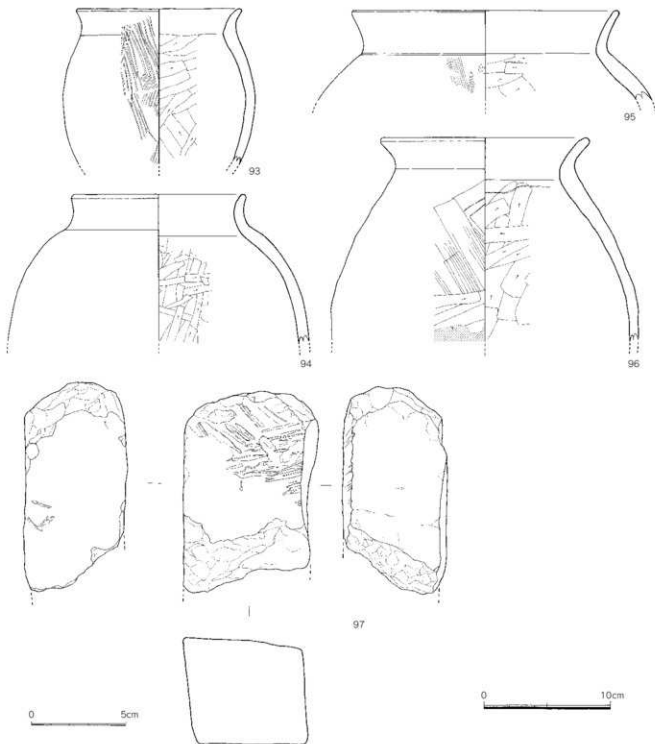


Fig 164 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 黒灰色粘土出土遺物実測図 5 (13 97は 12)

壺 (89) 小型の壺で、口径 10.6cm。口縁部は直口するが、僅かに内湾する。胎土は精製され、断面茶色だが内外面は灰褐色を呈する。外面はミガキ、内面頸部はヨコハケの後ミガキ、体部内面はヨコナデ。

高坏 (90・91) 90は復元口径 16.2cm。坏部は中位で屈曲後さらに外反する。内外面ともヨコナデの後ミガキを施す。91は口径 30.7cm。坏の深さ 5.2cm。坏部は屈曲することなく口縁部に向かって真っ直ぐ外開きしている。内面底部は当て具の後ミガキ以外は不定方向のナデ。坏の底部付近には部分的に叩きのような痕跡とヘラ削りが僅かに残る。脚部は縦方向のヘラ削りが明瞭に残る。脚部の内面も同様にヘラ削りである。一部に黒斑がある。

手捏ね土器 (92) 全て雑なナデ調整。復元口径 3.4cm。器高 2.2cm。

甕(93-96) 93は復元口径12.8cm、外面タテハケ、内面は不定方向のヘラ削り。94は復元口径13.3cm、丸味を持った胴部である。内面は細かいヘラ削り、外面は不定方向のナデ。口縁部はヨコナデ。95は復元口径20.8cm、頸部は比較的明確に屈曲している。体部内面はヘラ削り、外面はタテハケ。口縁部内面は使用によって摩滅している。96は口径16.0cm、体部は胴があまり張らず長い。内面ヘラ削り、外面タテハケのようであるが、ハケ目が浅く工具によるナデの可能性が考えられる。

石製品

砥石(97) 方形で片方を欠損している。4面とも研磨されているが、面だけ2方向の条痕が細かくみられる。

1SX001灰白色砂出土遺物(F図165・166)

須恵器

坏蓋(1-10) 口径13-15.0cm、器高4.1-5.1cm、1-4は外面に沈線状の段が巡る。9-10は形がやや歪になり、小型化している。1と4は口縁部内面に僅かに斜めに作られている。1・2・4・5・9は内面の当て具痕を簡単にナデ消している。10の内面には指先で器面をツンツン突いている。

坏身(11-22) 口径10.8-13.1cm、器高4.0-5.5cm、外面下半は回転ヘラ削り、内面底部は当て具を不定方向にナデ消している。立ち上がりは高さが1cm未満のものが多く、口縁部は全て丸く仕上げられている。11-14は立ち上がりがやや長い。15-18は立ち上がりが短くなった上に内傾度が増している。19-22は立ち上がりが短いもの、あまり内傾しない。

甕(23) 口径12.8cm、頸部径3.7cm、胴部径9.5cm、器高15.2cm、頸部中央に沈線を巡らし、その上部に浅い波状文が巡らせる。胴部は2本の沈線を巡らせ、その間に径1.6cmの円孔を開けている。胴部下半が回転ヘラ削り、それ以外は全て回転ナデ。

高坏(24-26) 24の坏部は坏蓋を裏返して使用したもの。復元口径14.3cm、24は口縁部を僅かに外反させる。内面は回転ナデのあと底部付近のみ不定方向のナデを施す。外面下半は刷毛状のナデを施している。復元口径14.3cm、26は脚部で方形の透かし窓を有する。透かし窓の下には沈線を巡らす。

土師器

坏(27・28) 27は口径11.5cm、器高5.0cm、口縁部は僅かに外反する。外面底部は手持ちヘラ削り、それ以外はナデ。28は口径13.4cm、器高5.5cm、外面底部は手持ちヘラ削り、内面は工具によるナデで、工具の当たり痕跡が残っている。

高坏(29) 坏部で中央部分で屈曲し、口縁部は大きく開いている。内面底部は放射状のミガキが施されている。外面上部はヨコナデで一部ミガキを施し、下半は手持ちヘラ削りを施す。

鉢(30) 口径16.4cm、器高7.1cm、体部中位で屈曲し、口縁部は外側に開いている。外面底部は手持ちヘラ削り以外は回転ナデ。胎土は0.2-0.3cmの白色砂粒を多く含む黄茶色土である。

甕(31-34) 31は体部中位に把手を付けた丸味のある器形で、口縁部を外反させる。内面は上方への手持ちヘラ削り、外面は工具によるナデのようなものを施す。復元口径20.6cm、器高約21cm、32は内面不定方向のヘラ削り、口縁部には僅かに煤が付着する。33は体部から口縁部にかけて屈曲しながら薄くなる。口縁部と外面はヨコナデ、内面はヘラ削りのあとに不定方向にナデ。34は体部から口縁部に向かって窄まり、口縁部は外反する。口縁部回転ナデ、外面タテハケ、内面ヘラ削り。

甕 甕(35) 直線的な体部で僅かに口縁部を外反させる。内面はヘラ削り、外面はタテハケ。口縁部はヨコナデ。

手捏ね土器(36) 口縁部は歪であるが、口径2.1cm、器高2.4cmを測り、内外面とも指押さえの痕跡が明瞭に残る。

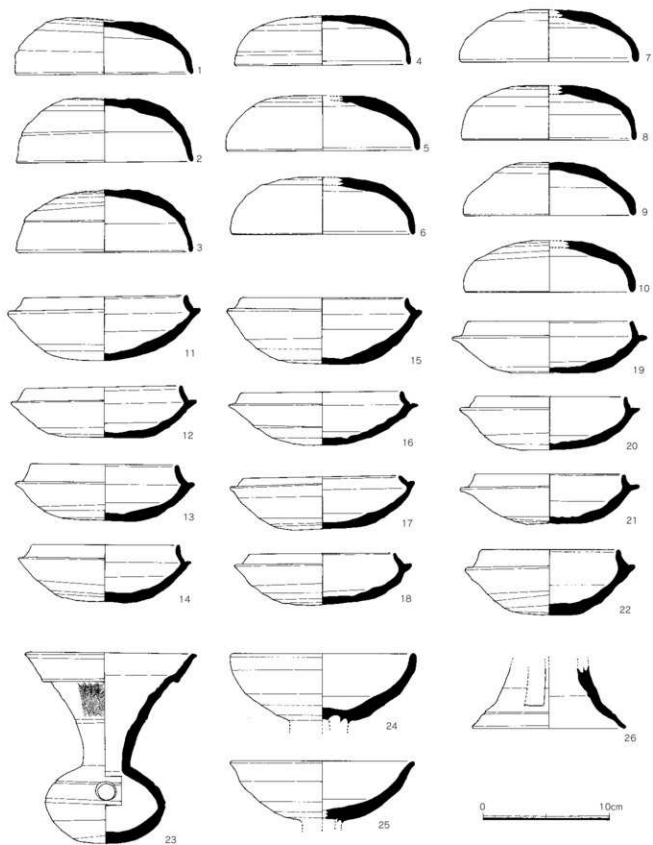


Fig 165 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 灰白色砂出土遺物実測図 1(13)

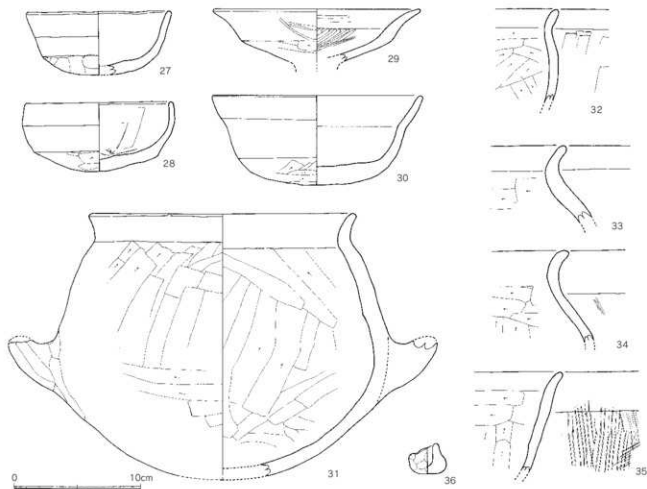


Fig 166 畑中遺跡第 2 次調査 SX00 灰白色砂出土遺物実測図 2(13)

Tab 22 畑中遺跡第 2 次調査出土遺物一覧表

黒灰色粘土	
須 磨 鉢	鉢身、鉢底、つまみ付蓋、割、草形、煎蓋高鉢
須 磨 鉢	煎蓋高鉢、煎蓋高鉢、草形高鉢、草形高鉢、草形高鉢
土 師 鉢	鉢、高鉢、草形、鉢、小鉢、手取お土器、小磨、磨?
白	煎蓋片
陶 土 器	煎蓋片
石	高砂石
緑灰色粘土	
須 磨 鉢	鉢身、鉢底、煎蓋高鉢、高、磨
土 師 鉢	鉢身、鉢、鉢、鉢、小鉢、高鉢、煎蓋、磨?、磨
白	煎蓋片

緑灰色粘土(複製)	
須 磨 鉢	煎蓋高鉢、鉢身、高鉢?、煎蓋高鉢、磨
土 師 鉢	鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢
灰白色砂	
須 磨 鉢	鉢身、鉢底、煎蓋高鉢、鉢底?、つまみ、高鉢
土 師 鉢	鉢身、鉢底、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢
白	煎蓋片、鉢底、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢、鉢

(5) 小 結

今回の調査によって、わかったことは以下のとおりである。

- ・ SX00 の堆積土層を見ると、流水を含む腐植土である黒灰色粘土が厚く堆積していることから、この地は土砂堆積による埋没というより、沼地に近い状態で最終的に埋没したものと推測される。
- ・ 埋没時期は出土する須磨器から九州須磨器編年の IIIB~IV 期（6世紀後半~末頃）に限られる。
- ・ 土器の摩滅が少ないことから近隣から投棄されたものと推測される。

2. 畑中遺跡 第2次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市大字大佐野 164で、標高約 40mの大佐野川の南岸の自然堤防上に位置する。

佐野士地区画整理事業の新規道路建設に伴い、2000年 6月 12・13日に発掘調査を実施した。調査は山村信榮と佐藤道文が行い、整理報告は山村が担当した。調査面積は 95m²である。調査区は工事用地の形状に合わせて任意に設定したため調査区グリッド北は真北より 53度 55分東に振っている。

(2) 基本層位

調査地は少なくとも近代以降現在に至るまで大佐野集落中の屋敷地として利用され続けた土地であり、調査区はその中庭および畑地にかかる部位（南側）に当たる。堆積環境と遺構検出状況は、表土とした近現代の瓦などの遺物を含む黒灰色の有機質層の下約 20～70cmで、灰白色、茶褐色を呈す砂質の地山が確認され、それに切り込む形で土坑、溝跡などが遺物を伴って確認されたため、上位の表土については重機によって掘削し、地山面において遺構検出を行った。

(3) 検出遺構

土坑

2SK001 (Fig 168)

調査区の北東部 C9区で検出された遺構で、長辺 15m 短辺 10m 深さ 0.4mを測る。遺構内の土壌の堆積状況は底に淡茶色の砂質の土壌が薄く溜まり、後に淡茶色の土壌が全体を埋め尽くす様相が断面より観察された。出土した遺物は弥生時代前期後半から中期後半の土器小片が多く、袋状口縁蓋は遺構中央部上位に逆さの状態で頸部以上が残存した形となっていた。遺物はその出土状況から流れ込みによるものと判断される。

2SK002 (Fig 168)

調査区の中央部 B4区で検出された遺構で、長辺 11m 短辺 0.9m 深さ 0.4mを測り、底の南側に 0.2mの窪みがある。古墳時代中期までの遺物片が出土している。

2SK003 (Fig 168)

調査区の中央部 B4区で 2SK002を切る形で検出された遺構で、長辺 15m 短辺 0.8m 深さ 0.2mを測り、底の南側に 0.1mの窪みがある。江戸時代終末から明治時代初期までの遺物が出土している。

2SK007 (Fig 168)

調査区の中央部 C4区の調査区壁際で S 37を切る形で検出された遺構で、長辺 10m 短辺 0.3m 深さ 0.3mを測る。遺構の北半分は調査区外に延びる。江戸時代終末から明治時代初期までの遺物が出土している。

2SK011

調査区の北側 C8区の調査区壁際で検出された遺構で、長辺 21m 短辺 0.8m 深さ 0.5mを測る。弥生時代後期までの遺物片が出土している。

2SK013 (Fig 168)

調査区の北側 C8区で検出された遺構で、長辺 0.8m 短辺 0.8m 深さ 0.3mを測る。北側に一段下がる床構造を持つ。弥生時代後期までの遺物片が出土している。

2SK014 (Fig 168)

調査区の北側C区で調査区壁際で検出された遺構で、長辺1.1m、短辺0.7m、深さ0.2mを測る。弥生時代中期までの遺物片が出土している。

2SK016 (Fig 168)

調査区の中央B区で検出された遺構で、長辺0.7m、短辺0.6m、深さ0.5mを測る。古墳時代中期までの遺物片が出土している。

2SK019 (Fig 168)

調査区の南側のB区で検出された遺構で2SX027を切り、長辺1.4m、短辺0.8m、深さ0.2mを測る。顕著な遺物は出土していない。

2SK027 (Fig 168)

調査区の南側のA区で検出された遺構で、長辺2.3m以上、短辺1.3m、深さ0.1mを測る。江戸時代後期の白磁の紅皿が出土している。

溝

2SD032 (Fig 169)

調査区の南側のC区で検出された遺構で、長辺2.3m以上、短辺0.8m、深さ0.4mを測る。江戸後期までの遺物が出土している。検出時はS31以南を灰色系土壌が溜まった遺構S33と認識して掘ったが、後の掘り下げで2条以上の溝と認識されたため、遺構番号が混乱する恐れが出たため番号を判ってS32 S34 S36として掘り下げた。屋敷地以南の耕作地の水回りに係る遺構と考えられる。

2SD034・036 (Fig 169)

調査区の南側のC区で検出された遺構で、長辺1.5m以上、短辺0.8m、深さ0.5mを測る。江戸時代後期から明治時代初期までの遺物が出土している。

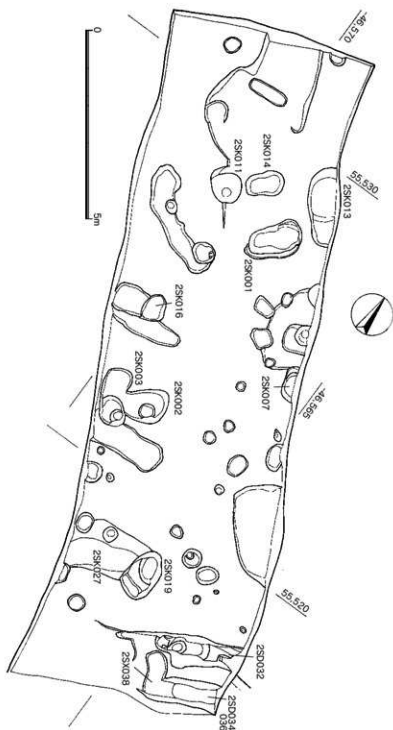


Fig 167 畑中遺跡第2次調査全体図 (1 100)

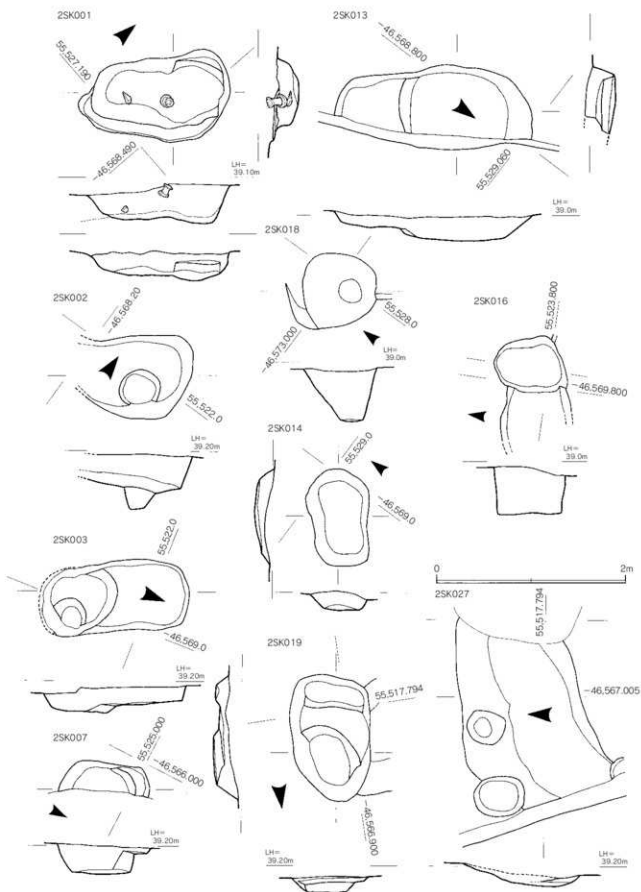


Fig 168 畑中遺跡第2次調査土坑・溝状遺構実測図(140)

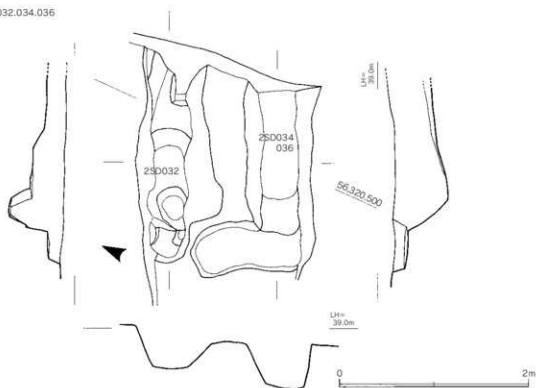


Fig 169 畑中遺跡第2次調査溝状 (SD032・034・036) 遺構実測図 (1/40)

(4) 出土遺物

2SK001淡茶色土出土遺物 (Fig 170)

弥生土器

壺 (1) 外口径 10.7m、内口径 7.3m、器高 12.3mを測る。口縁部はやや扁平な袋状を呈す。外面は頸部に縦方向のハケが残り、ミガキは施されない。赤色顔料が袋状部外面の一部に残るが、全面に施されたかは疑わしい。ミガキや彩色の省略が見られ弥生時代中期でも終末の段階のものか。

甕 (2・3) 2は口縁端部がゆるくカーブするもので、端部には刻み目が施されず、内外面にはハケ目が顕著に残る。弥生時代前期の板付Ⅱ式でも新相になるものか。3は口縁がL字に曲がる形状を呈し、弥生時代中期の須玖Ⅱ式の特徴を有す。

器台 (5) 鼓形の脚裾部で脚部高 5.6mが残存する。内外面にハケを施す。

2SK002出土遺物 (Fig 170)

須恵器

甕 (1) 口縁部片であり残存する器高は 1.5mを測る。胎土は混入物が少なく精良で、端部はシャープに仕上げられ古式の様相を呈す。九州須恵器編年のⅡ期以前のものか。

2SK003出土遺物 (Fig 170)

土師器

小皿 a (1) 橙褐色を呈し口径 6.5m、器高 1.0m、底径 5.4mを測る。底部には回転糸切りの痕跡がある。内底部と胴部境に明瞭なナデが施される。焼きは良好で胎土は純って土壌化しておらず近世の所産か。

肥前系染付

椀 (2) 口径 10.3m、器高 5.9m、底径 3.9mに復元される。蓋の付く丸椀の系統であるが口縁端部

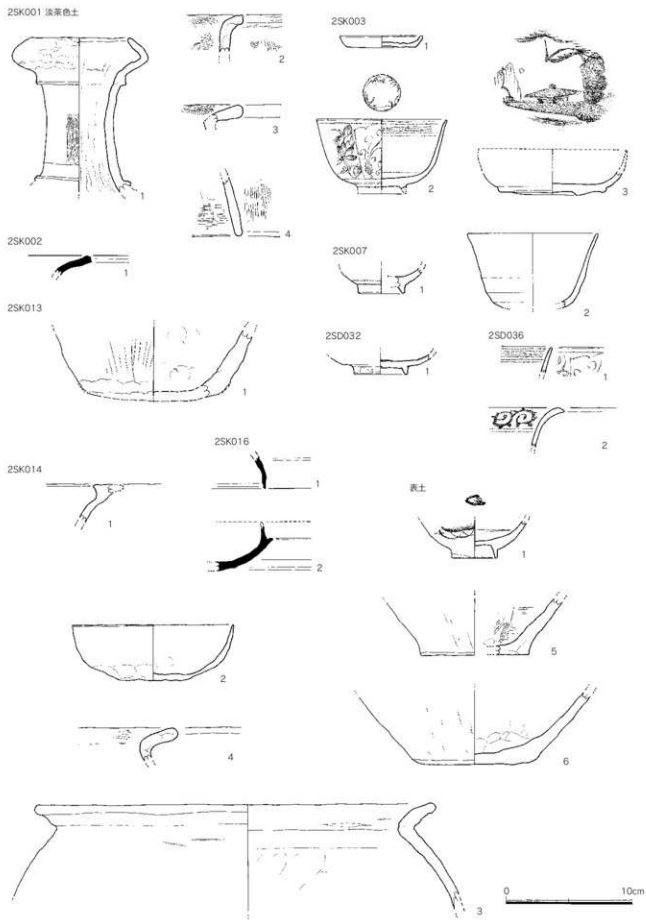


Fig 170 畑中遺跡第 2 次調査出土遺物実測図 (13)

は若干外反り気味。内底部に円草文、口縁端部内側に雷文帯、外面は6分割された草花文を明青色の呉須で描く。江戸時代後期の所産。

皿(3) 器高19cm以上、底径8.6cmを測る。底部は凹型高台で内底部 蓮所にハリの目跡が残る。鮮やかな青紺色の呉須で山水を描く。江戸時代後期の所産。

2SK007出土遺物 (Fig.170)

肥前系染付

椀(1) 器高2.1cm以上、底径3.7cmに復元される。外面高台付け根部に 奈の呉須による圏線が施される。呉須は発色の悪い青灰色で、畳付けはあいまいに釉が拭き取られ、端部に砂が多く付着する。「くらわんか」段階の江戸時代後期の所産か。

国産磁器

椀(2) 白磁で口径10.4cm、器高5.9cmに復元される。口縁が端反りのタイプであり、江戸時代後期幕末頃の所産か。

2SK013出土遺物 (Fig.170)

弥生土器

甕(1) 橙褐色を呈し、器高4.9cm以上、底径10.4cmに復元される。体部外面には幅広のハケ目が残され、底部は凸レンズ状を呈す。後期中葉から後半の下大隈式の所産か。

2SK014出土遺物 (Fig.170)

弥生土器

高坏(1) 口縁から体部にかけての器高3.0cmが残る。胎土は黄茶褐色を呈し、赤色顔料が残る。中期須玖 Ⅱ式に位置づけられる中小型のものである。

2SK016出土遺物 (Fig.170)

須恵器

坏蓋(1) 口縁から体部にかけての器高2.5cmが残る。胎土は0.5mm大の大き目の白色砂粒が多く含まれ、明灰色を呈す。体部外面と口縁端部内側に緩い沈線を有す。ⅢA期の所産か。

坏身(2) 口縁から体部にかけての器高3.4cmが残る。胎土は砂粒をあまり含まない精良なもので暗灰色を呈す。体部外面に安定した回転ヘラ削りを有す。体部はやや箱型の形状を遺しておりⅡ期の所産か。

2SD032出土遺物 (Fig.170)

国産磁器

椀(1) 器高1.6cm、底径4.3cmを測る。削り出しによる外面が直線的な短い高台を持ち、内底面は施釉後にドーナツ状に釉剥ぎした後に白色の剥離剤を刷毛で塗布している。18世紀以降の所産。

2SD036出土遺物 (Fig.170)

肥前系染付

椀(1) 器高2.1cmを測る。蓋の付く丸椀の系統であるが口縁端部は若干外反り気味。口縁端部内側に雷文帯、外面は割された草花文を明青色の呉須で描く。江戸時代後期の所産か。直接接合しないが文様や形状から2SK003D(2(R.001))と同一品か。

鉢(2) 器高3.2cmを測る。外に大きく反る口縁が特徴で、「洗坏」のような用途のものが。内側口縁端部の横方向に銷唐草があしらわれる。江戸時代後期の所産か。

表土出土遺物 (Fig.170)

肥前系染付

椀(1) 器高30cm 底径37cmを測る。削り出しによる細身の高台を持つ丸椀で、見込みに圏線と荒礫文らしいサイン、外面に松葉文とおぼしき文様を発色の悪い黒紺色の呉須で描く。透明釉も焼成温度が低かったためか白濁している。「くらわんか」手になる18世紀後半以降の所産である。

弥生土器

甕(4-6) 4は口縁がJ字に曲がる形状を呈す弥生時代中期の須玖Ⅱ式の特徴を有す。5は平底、6はやや凸形傾向の底部を有す弥生時代後期の高三瀆式期の所産のもので、6は底部外面が下から上に引き上げる動作の削り気味のナデを施す後期独特の器面調整法が残される。

土師器

坏(2) 2は丸底の形状を呈し、口径12.8cm 器高4.4cmを測る。内面にはわずかにコビ押さえ後のナデがあり、外面底付近には手持ちのヘラ削りが施される。焼成は均一な酸化雰囲気中で明るい赤褐色を呈す。

甕(3) く字形に屈曲する口縁部を持ち、口径29.8cm 器高8.5cm測る。口縁の開きが大きく頸部径が広く、布留式傾向から完全に違のいた形状で5・6世紀の所産ではなかろうか。顕著なハケの施された痕跡は見られない。

(5) 小結

今回の調査によって、判明した所見は以下のとおりである。

- ・大佐野川の自然堤防上に弥生時代中期須玖Ⅱ式段階以降に遺構が形成されだしたことが判明した。その年代は1世紀頃か。また、前期末、中期初頭頃の遺物も見られることから、この頃が本地域における自然堤防が安定して利用される黎明期に当たるものと想定される。
- ・6世紀段階の小規模遺構が見られたが、本地点は住居などの集落の主体域からは多少外れた場所にあったと想定される。
- ・18世紀から19世紀前半にかけての遺構形成が顕著であり、現代まであった屋敷地としての地所の固定化はこの頃に遡るものと想定される。南側にある京ノ尾遺跡は16世紀後半ないし17世紀前半には集村化に関する遺構・遺物が出土することから、当該地は近世村落としては遅れて手が付けられたものと考えられる。特に2SD032・034・036は現代の土地利用形態に合致する位置で検出され、屋敷地と耕作地を画し、かつ利水のために穿たれた江戸時代後期の溝であると考えられる。

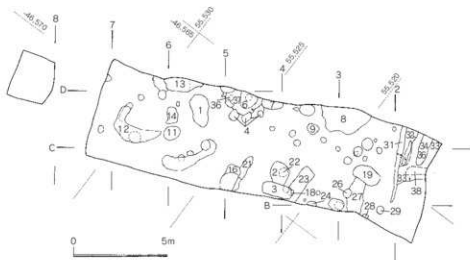


Fig 171 畑中遺跡第2次調査遺構略測図(1/200)

V、自然科学分析

1. 京ノ尾遺跡第3次調査出土漆器の樹種鑑定

財団法人 元興寺文化財研究所

京ノ尾遺跡第3次調査より出土した漆器のうち2点について、木地の種類を調べるための樹種鑑定を行った。以下に結果を報告する。

(1) 樹種鑑定遺物

鑑定を行った遺物は、次の2点である。

- ・ W 14 S 109暗灰色土出土 漆椀 点
- ・ T13 S 109暗灰色砂質土 漆椀 点

(2) 方法

樹種の鑑定に必要な木口面（横断面）、板目面（接線断面）、柁目面（放射断面）の3方向の切片を、カミソリを用いて作製した。切片はサフランで染色後、水分をエチルアルコール、nブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤を用いて永久プレパラートとした後、生物顕微鏡で観察した。

針葉樹では、早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等を観察し同定をおこなった。

広葉樹では、道管の大きさや配列状態およびせん孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を観察し同定をおこなった。

顕微鏡写真は、木口面については30倍、柁目面は100倍、板目面は50倍で撮影した。

(3) 結果

いずれもブナ材である。また、各遺物の木材組織は別紙の顕微鏡図10通りである。

・ブナ科ブナ (*Fagus crenata* Blume)

木口面：広葉散孔材で道管は多数分布する。道管の複合は4個以下である。放射組織は幅の狭いものと幅の広いものがみられる。

柁目面：道管の穿孔は単穿孔と階段穿孔である。

板目面：放射組織は単列のもの、2~数列のもの、幅の広い広放射線がみられる。

分布：北海道（南部）、本州、四国、九州（温帯）

性質・用途：日本特産の落葉広木で、通常樹高は20~25m、胸高直径は60~70cmである。辺・心ともに淡紅色である。

材は堅硬、緻密、靱性があるが保存性は低い。

器具、家具、土木、ろくろ細工、漆器などに利用される。

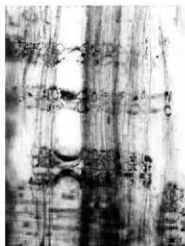
引用文献

- 1、島地 謙、伊東隆夫 「図説 木材組織」地球社（1996）
- 2、日本材料学会木質材料部門委員会 「木材工学辞典」泰流社（1982）

S-109 暗灰色土出土 漆椀 ブナ



木口面 30倍



柁目面 100倍



板目面 50倍

S-109 暗灰色砂質土出土 漆椀 ブナ



木口面 30倍



柁目面 100倍



板目面 50倍

図1 樹種鑑定結果

2. 京ノ尾遺跡出土漆器の塗膜分析

京ノ尾遺跡より出土した漆器4点について、その技法や使用材料を明らかにする事を目的として、顕微鏡による漆塗膜断面の観察と、蛍光X線分析を実施したので報告する。

(1) 対象資料

Tab 25に示したとおりである。個々の詳細については本文を参照されたい。

調査次数	資料No.	造機	器種	試料No.	試料採取部分	備考	図版番号
3	1	S-109 黄茶色土	椀	1-a	外面 (暗茶色、文様部分)	乾燥資料	Fig.57-10
				1-b	内面 (赤色)		
	2	S-109 暗灰色砂質土	椀	2-a	外面 (黒色)	本地はブナ材	
				2-b	内面 (赤色)		
	3	S-109 暗灰色土	椀	3-a	外面 (黒色)	本地はブナ材	Fig.57-30
				3-b	内面 (黒地に赤色の文様部分)		
6	4	黒灰色土	椀	4-a	外面 (黒色)		Fig.137-85
				4-b	内面 (赤色)		

Tab 25 分析対象資料一覧表

(2) 分析の方法

各資料を肉眼及び実体顕微鏡で観察したあと、外面、内面よりそれぞれ微小な塗膜片を切り取り、エポキシ樹脂 (アラルダイト CY 23Q HY 837) に包埋し、透過光による顕微鏡観察が可能な薄さまで研磨してプレパラートを作成した。蛍光X線分析については、当館設置のエネルギー分散型蛍光X線分析装置 TREX650 (テクノス社製) を用いて実施した。分析条件は、X線管電圧: 20~40kV、X線管電流 100mA、コリメーター: 0.03mm、フィルター: なし、測定時間: 300秒、測定雰囲気: 真空、である。

(3) 分析結果 (Tab 26 図 2・3)

Tab 26に分析結果の一覧を示す。

試料No.	下地	塗膜の状態 (作業工程)	備考
1-a	柿渋+炭粉	透明漆 1層→透明漆+錫粉で文様?	蛍光X線で錫の他、水銀が検出
1-b	柿渋+炭粉	透明漆+水銀朱 1層	
2-a	柿渋+炭粉	透明漆 1層	
2-b	柿渋+炭粉	透明漆+ベンガラ 1層	
3-a	柿渋+炭粉	透明漆 1層	
3-b	柿渋+炭粉	透明漆 1層→透明漆+ベンガラ 1層	
4-a	柿渋+炭粉	透明漆 1層	本地に漆液状のものがしみ込んでいる
4-b	柿渋+炭粉	透明漆+ベンガラ 1層	

Tab 26 塗膜断面の顕微鏡観察結果

特徴的なものについて以下に詳述する。

まず下地だが、全ての試料で炭粉が認められた。それらは茶褐色を呈する膠着材で混ぜられており、炭粉間の充填が密でない様子などから、柿渋を用いた洗下地であると判断した。

1 aの外面の塗り構造は、下地の上に透明の漆を塗り、さらにその上に透明漆で文様をかいたのち、錫粉を蒔き付けたものと見られるが判然としなない。また 1 bでは、下地のすぐ上に朱を混ぜた漆を 層塗っている。(蛍光 X線分析では外面文様部分から錫が、内面赤色漆部分から水銀と硫黄が検出されている)

る。なお外面文様部分の分析では鉄や水銀も検出されており、鉄は土壌成分由来のものと考えられるが、水銀の由来に関しては、たまたま混じてしまったものかあるいは人為的なものかは不明である。）

2b 3b 4bの赤色の漆膜は、蛍光X線分析により鉄が顕著に検出されたことから、酸化第二鉄（ベンガラ）を混ぜて使用した事がわかった。いずれの試料も最上層では劣化が進行しており、変色やV字状の亀裂が生じていた。

(4) まとめ

今回分析した漆器4点はいずれも資料1が16世紀のものである以外は近世以降の資料である。資料1以外のほとんどの資料が下地の上に漆を層しか塗っていない事、柿渋やベンガラなど、高価な漆や水銀朱の代用品とみられる材料が使用されている事など、材料も工程も簡素なものである事がわかった。また、木地にはブナ材を用いており（資料2 3）加工や入手し易い材料として江戸時代を通じて広く多用された材である事からも、大量生産され、日常生活に使用された什器類と考えられる。資料1に関しては、出土した層位が他の資料に比べてやや時代が遡り、赤色漆の材料に朱を使用し、錫を用いて草文をあしらう点などに違いがあるものの、簡素な作りであることは共通する。

いずれの漆器も、日常的に使用されたものが割れるなどの理由で廃棄されたものであろう。

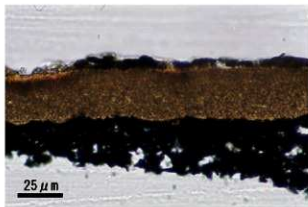
謝辞

漆塗膜の蛍光X線分析結果については、北野信彦氏（くらしき作陽大学助教授）にいろいろとご教示いただいた。記して感謝致します。

引用・参考文献

小松大秀・加藤寛（199年）『漆製品の鑑賞基礎知識』至文堂

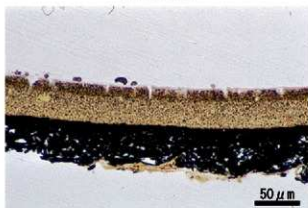
北野信彦（2009年）『愛知大学総合郷土研究所ブックレット10 漆器の考古学 出土漆器からみた近世という社会』あるむ



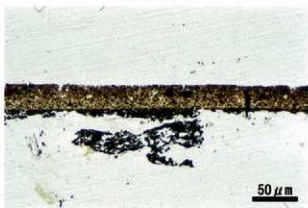
試料 No 1 a



試料 No 1 b



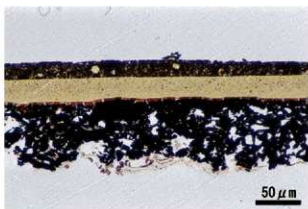
試料 No 2 a



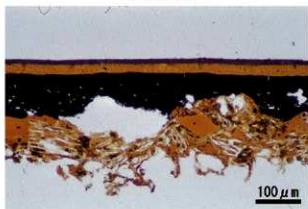
試料 No 2 b



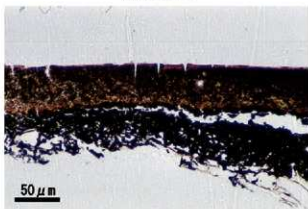
試料 No 3 a



試料 No 3 b



試料 No 4 a



試料 No 4 b

図 2 漆塗膜断面写真

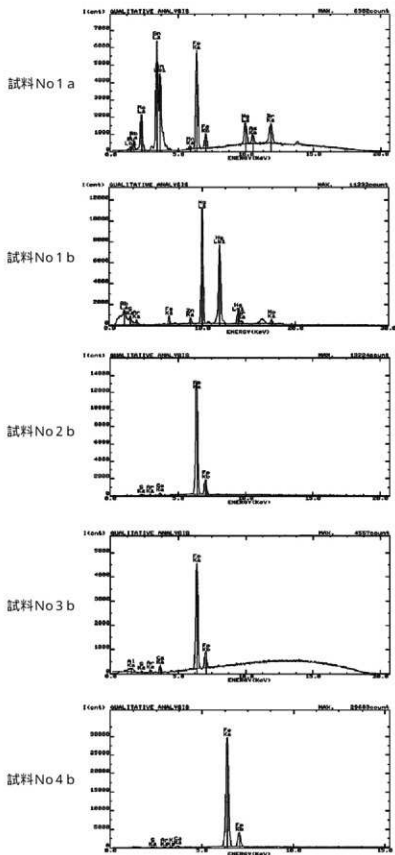


図3 漆膜の蛍光X線分析結果

3. 京ノ尾遺跡第7次調査出土白色物質の鑑定

バリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

京ノ尾遺跡第7次調査において検出された白色物質の材質調査を目的とし、自然科学分析を実施する。なお、本調査では白色物質を対象として、X線回折分析を用いた結晶構造の特徴から結晶性の鉱物あるいは化合物を同定するほか、スミアスライドによる灰像分析により珪化組織片の産状を観察する。

2. 試料

試料は京ノ尾遺跡第7次調査において検出された白色物質1点である。以下に、検出状況を記載する。

発掘調査では古墳時代後半の住居4棟、掘立柱建物棟、土坑墓、8世紀の土坑墓が検出されており、住居址は全て埴付カマドを設置し、貼床が行われている。調査対象となる遺構は埋土内から精錬滓の可能性が指摘される鉄滓が出土したS105の竪穴住居であり、試料として供する白色物質は床面よりやや浮いた地点において面的な広がりを持って検出されたものである。

3. 分析方法

(1) X線回折分析

土塊表面に面状に付着した白色物質をスパテルで採取し、メノウ乳鉢で微粉砕した後、アセトンを用いて無反射試料板に塗布し、測定試料とする。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施する。

検出された物質の同定解析は、Materials Data Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

装置：理学電気製MultiFlex Divergency Slit: 1

Target: Cu (K) Scattering Slit: 1

Monochromator: Graphite曲曲 Receiving Slit: 0.3mm

Voltage: 40KV Scanning Speed: 2 min

Current: 40Ma Scanning Mode: 連続法

Detector: SC Sampling Range: 0.02

Calculation Mode: cps Scanning Range: 2~45

(2) 灰像分析

今回の調査では、珪化組織片の産状に注目する。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い(例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社 1993)。また、イネ科草本類が燃えた後の灰は繊維状の白色物質として認識される場合が多い。

今回の試料では、室内での肉眼観察の際に白色物質が土壌に混じらずに認識でき、試料として微細片が容易に分離可能であった。そのため、微細片を分離し、400倍の光学顕微鏡下で観察し、イネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を含む珪化組織片について、近藤(2004)の分類に基づいて同定する。

4. 結果

(1) X線回折分析

検出された鉱物は石英 (quartz)、灰長石 (anorthite) のほか、粘土鉱物であるハロイサイト (halloysite) である (図4)。ただし、これらの検出鉱物の回折強度は弱いものであることから、量的にも少ないものと推察され、白色物質の本質をなす物質とは考えにくい。一方、回折図において 22 (2) を中心に非常に幅広い弱い散乱が認められていることから、上記の結晶鉱物以外に非晶質物質が相当含まれていることが指摘される。

(2) 灰像分析

土塊に付着する白色物質には、栽培植物であるイネ属の初殻に形成される珪酸体、葉部に形成される短細胞列が認められる。(図5)

5. 考察

X線回折分析により白色物質には、石英 (quartz)、灰長石 (anorthite)、ハロイサイト (halloysite) が少量含まれるものの、その主体は非晶質物質である可能性が高いことが指摘された。なお、灰像分析によって白色物質にはイネ属の初殻および葉部の珪化組織片が認められている。また、顕微鏡視野下で観察されたそのほとんどが珪化組織片であったことから、白色物質中には相当量の珪化組織片が含まれていることが指摘される。したがって、X線回折分析によって示唆された非晶質物質はこれら珪化組織片からなるオパールが存在によると考えるのが妥当であろう。

これらのことから白色物質は稲藁や初殻が燃焼した後の灰である可能性が高いと考えられる。ところで、S1005では同遺構埋土内から鉄滓が出土するなど、白色物質との関係が取り沙汰される。ただし、灰像分析で確認された珪化組織片を見る限りでは短時間の火力は得られるであろうが、長時間火力を維持するためには木炭などの利用が必要であることから、両者の直接的な因果関係を推し量ることは難しい。したがって、白色物質の由来、用途などの詳細については今後、精錬炉や鍛冶遺構などと関係する遺物の出土状況、各遺跡の概要を含め、改めて検討する必要がある。

引用文献

- 近藤 謙三 2004植物ケイ酸体研究 ベドログスト 48-64
バリノ・サーヴェイ株式会社 1993自然科学分析からみた人々の生活 (1) 慶應義塾藤沢校地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第 巻 総論」慶應義塾 347-370

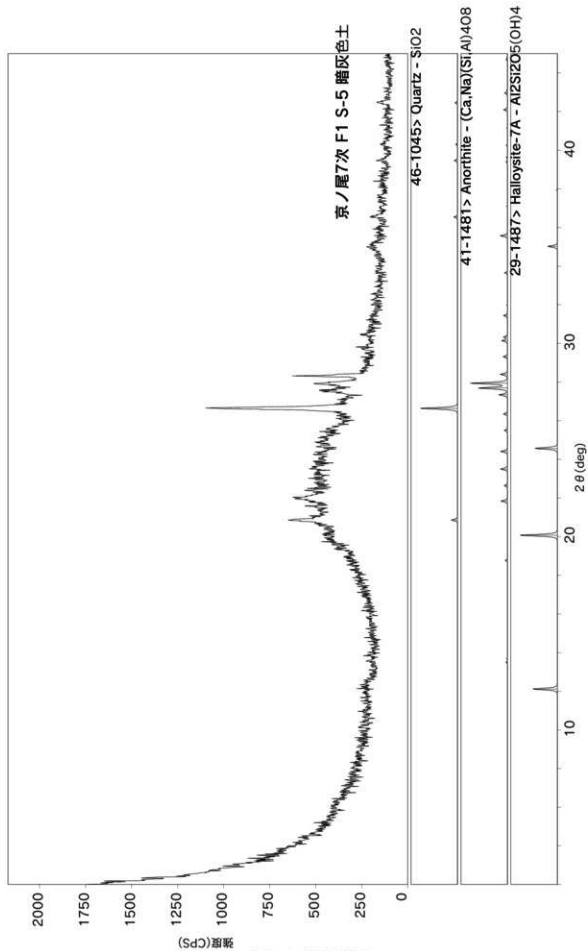
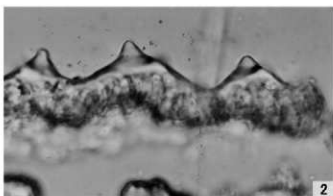
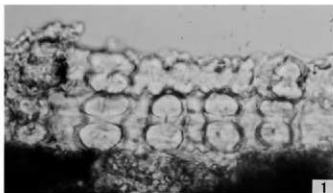


図4 X線回折図



50 μ m

1. イネ属短細胞列(京ノ尾7次F1;S-5暗灰土)
2. イネ属穎珪酸体(京ノ尾7次F1;S-5暗灰土)

図5 灰像写真

VI まとめ

今回の調査で確認された主な遺構・遺物は6世紀、8世紀、中世後期、18世紀のものである。今回の調査から分かる各時代の様子をまとめると以下のとおりである。

6世紀

竪穴住居と掘立柱建物を中心とした集落が形成されていたことがわかった。各時期の集落構成と建物の面積をまとめるとFig. 173 Tab.27のとおりである。

集落は6世紀前半（Ⅰ期）に始まり、竪穴住居が最も多い6世紀後半～末（ⅡB～Ⅳ期）にかけてピークを迎える。Ⅰ期の竪穴住居は京ノ尾遺跡の東側に集中し、その後全体に竪穴住居が広がっている。当然遺物量が最も多いのも6世紀後半～末（ⅡB～Ⅳ期）である。各時期に掘立柱建物は最低1～2棟は存在したとみられ、流路からネズミ返しが出土していることや床面積が竪穴住居と変わらないことから、食料貯蔵用の倉庫であったと推測される。

竪穴住居の方位は、流路（6SX001・4SX001）や丘陵の位置を意識して建築されたとみられる。カマドの位置は住居の北もしくは西に設置していることが多く、南側に丘陵があることによるものかと考えてしまうが、大佐野川を挟んだ対岸の宮ノ本遺跡第10次調査では、宮ノ本丘陵のある北側にカマドが設置されていることを考えると立地とは無関係と考えた方がいいたろう。竪穴住居の面積はⅠ期のものが大きい傾向にはあるが、それ以外は時期差による特徴は看取できない。しかし、床面積が10mに満たないもしくは10mに近い数値の竪穴住居では柱穴が検出されない例が多かった。他の竪穴住居が4本柱とカマド（焼土）が確認されている状況から主柱穴の有無によって用途が異なる可能性が高く、報告では竪穴住居としたものの小屋など別の用途であった可能性が考えられる。

京ノ尾遺跡の集落の初現である6世紀前半（Ⅰ期）には、1S10Sのように丘陵上にも住居が営まれており、当初から広い範囲を開削していた可能性が考えられる。京ノ尾遺跡第1次調査で見られた段造成は竪穴住居の立地から6世紀後半には存在していたことが明瞭で、住居が密集していない当時に居住空間確保のために丘陵を造成していることは注目すべきことである。

畑中遺跡第1次調査で検出した流路の埋没時期が、6世紀後半～末頃（ⅡB～Ⅳ期）に限られる。土器の摩滅が少ないことから近隣から投棄されたものと推測され、ほとんど京ノ尾集落から投棄されたとして問題ないであろう。

その後は7世紀末になって第6次調査の掘立柱建物（SB005）が見え始め、第4次調査の生産遺構をはじめとする8世紀代の遺構へと繋がっていく。西側のカヤノ遺跡で遺構が広く展開する時期である。つまり、8世紀末の段階でこの京ノ尾地区の集落は終焉を迎えることになり、生活用具類をまとめて流路に廃棄したと考えられる。

また、大佐野川を挟んで対岸にあたる宮ノ本丘陵裾でも竪穴住居が検出されているが、6世紀代の住居は僅かで、殆どが大佐野川の南側に集落が広がっていたことがわかった。

この集落の近くに所在する同時期の古墳として、東に700m付近に6世紀代の前方後円墳である刺塚古墳があった。若干丘陵が張り出しているため直接見えないが、近い位置関係である。周辺の調査例が少ないため、関連する集落の存在の有無が不明瞭であるが、京ノ尾地区の集落とこの古墳に埋葬された盟主とは無関係ではなかったであろう。

発掘調査でわかった6世紀代の地形であるが、京ノ尾遺跡第3次調査の西側では古墳時代の遺構は極めて少ない。第5次調査でも同じ様子が窺える。区画整理前は地祿神社付近は周囲よりやや高く、北側道

Tab 27 竪穴住居・掘立柱建物面積一覽

京ノ尾遺跡第1次調査

遺構番号	面積(m ²)	北向き	カマド・焼土の位置
JSB180	19.1	2×2掘柱	—
JS1001	(21.6)	?	—
JS1005	11.5	?	—
JS1015	(57.7)	4	南
JS1020	17.4	4	北西
JS1025	10.9	0	中央
JS1030	—	—	西
JS1040	(50.3)	4	—
JS1050	(17.6)	?	—
JS1080	10.6	4	西
JS1095	14.1	?	西
JS1100	(16.8)	?	—
JS1105	(32.5)	4	南
JS1115	12.5	4	西
JS1120	6.0	0	—
JS1125	(27.0)	4	西
JS1135	(20—)	?	—
JS1145	8.9	0	東
JS1150	(14.3)	4	北
JS1155	(32.5)	4	—
JS1160	15.2	4	東
JS1165	—	—	—
JS1175	(27.0)	(4)	—

京ノ尾遺跡第2次調査

遺構番号	面積(m ²)	北向き	カマド・焼土の位置
2S1010	(26.0)	(4)	—
2S1015	(14.0)	(4)	—
2S1020	(16.8)	(4)	—

京ノ尾遺跡第3次調査

遺構番号	面積(m ²)	北向き	カマド・焼土の位置
3S1030	19.36	4	北
3S1045	11.32 ²	2	—
3S1055	13.811	4	北西
3S1060	34.01	4	北西
3S1090	—	—	—
3S1095	11.67	4	北西

京ノ尾遺跡第4次調査

遺構番号	面積(m ²)	北向き	カマド・焼土の位置
7S0050	?	?	?
7S1005	(16.8)	(4)	北
7S1015	(18.4)	(4)	北
7S1020	(23.0)	4	北
7S1040	28.56	?	北西

京ノ尾遺跡第5次調査

遺構番号	面積(m ²)	北向き	カマド・焼土の位置
4S0040	7.7	2×2掘柱	—
4S0080	10.1	1掘柱2壁	—
4S0130	13.4	2×2掘柱	—
4S0150	11.5	2×2掘柱	—
4S0185	10.5	1掘柱2壁	—
4S1035	(10.9)	4	北西
4S1045	(12.2)	4	西
4S1050	33.1	?	—
4S1055	25.2	4	西
4S1060	17.5	4	—
4S1070	19.1	4	北西
4S1075	7.9	0	西
4S1085	—	—	—
4S1090	(36.0)	4?	—
4S1115	(15.2)	4?	西
4S1120	(11.1)	4	北
4S1140	(12.2)	?	北
4S1145	16.4	4	南西
4S1155	(14.0)	4	北
4S1190	(19.5)	4	北
4S1195	—	—	—
4S1200	(16.8)	?	西
4S1205	(9.6)	0	—
4S1210	(9.2)	0	—
4S1215	(24.5)	4	南西

路際までその高まりは続いていた。その高まりの試掘調査でも、地山が削平されてような状態で確認されている。このことから神社周囲は中世もしくは古代には削平されていた可能性が高く、竪穴住居が造られなかったとは言い切れない。そして、報告書作成時に神社の北東側で行われた第10次調査で、京ノ尾遺跡を東西に蛇行していた流路の始まりが確認され、流路は大佐野川に接続しないことがわかった。神社の東隣の京ノ尾遺跡第3次調査西端で砂質地盤が検出されていることから、流路の源流は現在の神社の南東方向と推測される。それを実証するように東西の流路に沿ってあった現代の水路の流水は、神社の東側から流れている。以上のことから、京ノ尾遺跡で検出されたいくつかの流路や谷(6SX001・畑中1SX001・3SX109・4SX100・105・110)は、その長さが短かったため、水量が少なく腐植土が厚く堆積する状況に陥ったと推測される。この地は氾濫などの土砂堆積による埋没というより、沼地に近い状態で最終的に埋没したものと推測される。

周辺一帯は区画整理事業に伴って広く調査されているが、集落の変遷が明瞭で、京ノ尾遺跡が6世紀代の集落、これの下流に位置する殿城戸・尾崎遺跡では4～5世紀代の集落、逆に上流に位置するカヤノ遺跡では7世紀代の集落が確認されている。時代を追うごとに大佐野川の下流から上流に向かって集落が展開されている。この現象を集落の移動と考えた場合、その要因として農耕や水利は全く無関係ではないだろう。

8世紀

奈良時代の遺物は京ノ尾遺跡全体で包含層として確認され、まとまった遺物量が出土している。しかし、遺構については第4次調査で検出された流路(SX100)の東岸で多く検出されている。注目すべきは氾濫が埋没する溝(4SD183・188)で、小規模ながら鉄生産が行われたと推測され、掘立柱建物も確認されていることからその関連施設もあったと考えられる。(6世紀末頃に大量の土器や木製品が廃棄された流路(SX100)の上面に8世紀の遺物が覆い、流路に平行する溝も掘られていることから、8世紀前半に至っても流路は湿地として認識できる状態が残っていたと考えられ、大佐野川と丘陵との間に挟まれたこの地に湿地があり、その横の丘に生産施設があったことになる。氾濫が出土する4SD183・188は

上部を大きく削平されているとはいえ、鉱滓量が多量でないことから、鉄生産は小規模で一過性のものではあった可能性が考えられる。

京ノ尾遺跡の南に存在する丘陵が終わる付近、つまり、京ノ尾遺跡から東へ200m付近で行われた脇道遺跡や殿城戸遺跡でも奈良時代の遺構や遺物が確認され、特に脇道遺跡第2次調査では木簡が出土している。また、カヤノ遺跡では7世紀末頃～8世紀初頭にかけて大きな掘立柱建物群が建てられているなど古墳時代の偏った集落形成とは異なって大佐野川流域全体に遺構が及んでいる。これは、この付近が官道に程近く、須臾器窯群が広がる牛頸への通り道にあたる交通の要衝として、大宰府政庁第1期初頭の太宰府にとって重要な場所であったと推測される。

中世後期

京ノ尾遺跡第3・6次調査を中心に中世後期の遺物が出土し、遺構は第3次調査で多くみられる。遺物は谷や流路の岸辺など遺構検出面より低い位置で出土しており、近世以降の集落による削平を踏まえると、他に多くの遺構が存在していた可能性が考えられる。

調査地の字京ノ尾には小字に上城戸、中城戸、下城戸をはじめ城に関係した地名があり、周辺の丘陵地にはわくど城（和久堂城）薩摩谷、古野添などで中世山城の存在を窺わせる段造成や伝承がみられる。特に薩摩谷は調査地の南方山中に位置し、天正14（1586）年に岩屋城の戦いの際に島津軍が陣を置いたといわれる所である。第3次調査の谷（SX109）が中世後期から現代にかけて埋没しており、この谷は中世山城の堀切としての機能を有していた可能性も考えられる。

平安時代から室町時代に至る700年の間、墳墓以外に遺構・遺物が殆ど出土しないというのは、大宰府条坊から1kmも離れていないこの地が平安時代の太宰府にとって、宮ノ本丘陵と同じく葬送の地であったことが窺える。その沈黙を破るがごとく遺物と遺構が確認できるのは1世紀に入ってからである。遺物の時期と山城の伝承が一致していることは、大佐野集落の始まりと山城の築造が何らかの関係があるように思える。

18世紀～現代

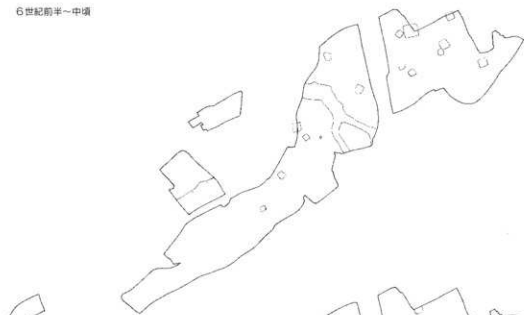
近世初期から大佐野村の存在は文献等（『慶長年中調各村別石高帳』）で確認され、それ以後も地誌類に登場する。18世紀に記された『筑陽記』や『筑前国続風土記拾遺』などに京ノ尾地区に所在する地祿神社の記述がみえる。19世紀には地祿神社が大佐野集落の守護神として鎮座していたことになる。今回の調査で出土した遺物はちょうどこの頃のものである。遺構は京ノ尾遺跡第3次調査で溝を中心に確認されている。また、明治時代初期に編纂された『福岡縣地理全誌』には西名（にしのみょう）に地祿神社が存在することが書かれているが、現在その地名は聞かれない。

江戸時代の大佐野村の戸数は元禄期から享和2（1802）年にかけて僅かに増加するが、大きな変動もなく明治を迎えている（市史近世資料編）。戦後すぐの景観（太宰府市の文化財第1集）には近世集落の景観を残していたものと推測される。

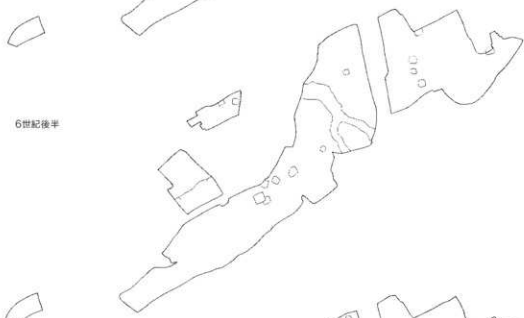


Fig 172 遺構位置図 (周辺地図は昭和2年、上が東、1:1700)

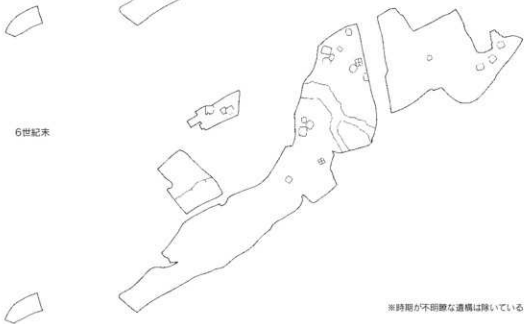
6世紀前半～中頃



6世紀後半



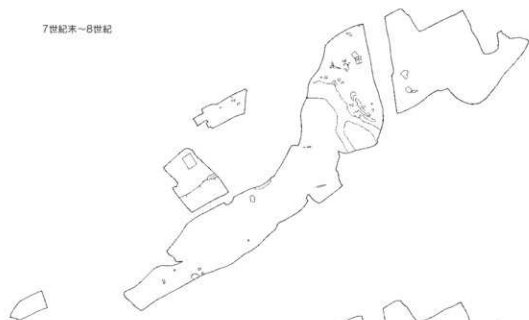
6世紀末



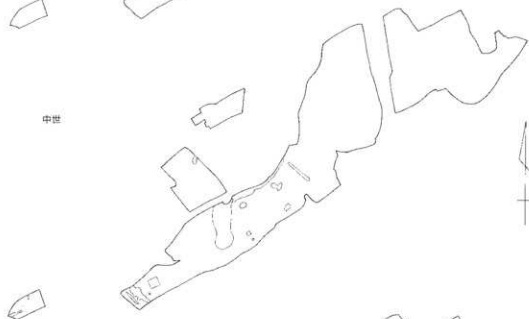
※時期が不明瞭な遺構は除いている

Fig 173 京ノ尾遺跡時期別遺構分布図1

7世紀末～8世紀



中世



近世



Fig 174 京ノ尾遺跡時期別遺構分布図2

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真（118枚）はカラー情報でCDに収録している。



京ノ尾遺跡第1次調査合成写真(上が東)



京ノ尾遺跡第 2 次調査北側全景



京ノ尾遺跡第 2 次調査 1・2 次全景 (北から)



京ノ尾遺跡第2次調査 殺西・殺全景 北から



京ノ尾遺跡第2次調査全景（西から）



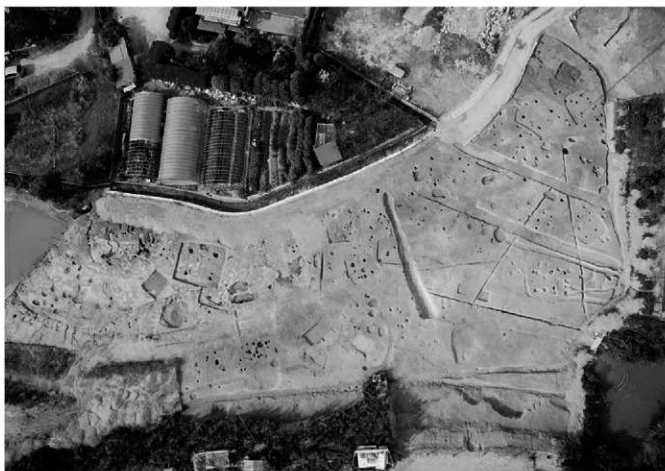
京ノ尾遺跡第3次調査調査区南半部全景（上が北）



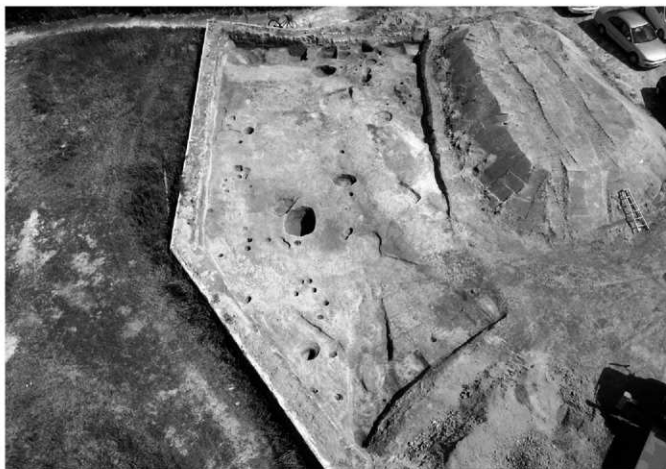
京ノ尾遺跡第3次調査調査区北半部全景（西から）



京ノ尾遺跡第4次調査流路 SX001)と東側全景(上が西)



京ノ尾遺跡第4次調査西側全景(上が北)



京ノ尾遺跡第5次調査全景（西から）



京ノ尾遺跡第6次調査全景（上が東）



京ノ尾遺跡第7次調査全景（南から）



畑中遺跡第1次調査全景（南から）



畑中遺跡第2次調査全景（南から）



1S10出土土器（F.ig.25）



1S10出土三稜尖頭器
（F.ig.25）



3S1080茶褐色土出土須恵器
坏蓋（F.ig.52.13）



3SK.025茶褐色土出土
土師器甕（F.ig.54.16）



4S1080茶褐色土出土須恵器
坏蓋（F.ig.96.10）



京ノ尾4吹茶色土出土須恵器
墨土器（F.ig.112.19）



4SX.100黒茶色土出土梯子
（F.ig.103.150）



4SX.109出土ねずみ返し
（F.ig.108.38）



6SK.003出土瓦質土器
湯蓋（F.ig.127.3）



6SK.003出土土師質土器鍋
（F.ig.127.2）



畑中吹SX.00出土
須恵器壺（F.ig.159.7）



畑中吹出土須恵器
壺（F.ig.165.23）

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん									
番名	太宰府・佐野地区遺跡群 21									
副番名	京ノ尾遺跡第1～7次調査、畑中遺跡第1・2次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	8巻									
編著者	宮崎亮一、中島信次郎、山村信隆、長直信、下川可智子、野 元興寺文化財研究所、株 巴ノノ・サーヴェイ									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号									
発行年月日	2006(平成18)年 第3期									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 [積山積定家]	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査理由
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第1次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 1	55380 0	46600 0	19990803	20000111	2780	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第2次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 2	55680 0	46560 0	19991220	20000111	250	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第3次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 3	55300 0	46750 0	20010611	20020626	2763	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第4次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 4	55330 0	46681 0	20020722	20021129	3840	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第5次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 5	55246 0	46860 0	20020921	20021016	206	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第6次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 6	55330 0	46750 0	20030602	20030805	767	区画整理
きょうのちくいせき 京ノ尾遺跡 第7次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214	210088 7	55372 0	46735 0	20040723	20041006	395	区画整理
はたけなかいせき 畑中遺跡 第1次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214		55461 0	46660 0	19971006	19971022	51	区画整理
はたけなかいせき 畑中遺跡 第2次	条坊外	太宰府市 大字大佐野	402214		55525 0	46570 0	20000612	20000613	95	区画整理
所収遺跡名	遺跡種類	時代	主要遺構			主要遺物			特記事項	
京ノ尾遺跡 第1次	集落	古墳	野穴住居、庫とし穴 竪立柱建物			須奈器、土師器 旧石器				
京ノ尾遺跡 第2次	集落	古墳	野穴住居			須奈器、土師器				
京ノ尾遺跡 第3次	集落	古墳、中世 江戸	野穴住居、谷 竪立柱建物			須奈器、土師器 肥前系磁器				
京ノ尾遺跡 第4次	集落	古墳、奈良	野穴住居、流路 竪立柱建物			須奈器、土師器、唐津土器 ねずみ返し、埴子、旧石器			木製品多数出土	
京ノ尾遺跡 第5次	集落	中世	土坑、溝			土師器土器、瓦質土器				
京ノ尾遺跡 第6次	集落	古墳、古代 江戸	竪立柱建物、流路			須奈器、土師器 肥前系磁器				
京ノ尾遺跡 第7次	集落	古墳	野穴住居 竪立柱建物			須奈器、土師器 肥前系磁器、鉄滓				
畑中遺跡 第1次	集落	古墳	流路			須奈器、土師器				
畑中遺跡 第2次	集落	弥生、江戸	土坑			須奈器、弥生土器 肥前系磁器				

太宰府市の文化財 第85集

太宰府・佐野地区遺跡群 21

京ノ尾遺跡第1～7次調査

畑中遺跡第1・2次調査

平成18年 3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺111

印刷 (株)三光 福岡営業所
福岡市博多区山王114 4